

平成 25 年度 奈良教育大学

地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

報 告 書



平成 26 年 3 月

国立大学法人奈良教育大学



まえがき

この報告書は、前年度の平成24年度から始まりました「学ぶ喜び」プロジェクト（概算要求特別経費（プロジェクト分）事業）の平成25年度の実施報告書です。フルネームは、「地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト」という大変長いものなので、いつしか、「学ぶ喜び」プロジェクトと呼ばれ、みなさまとともに歩んでまいりました。実は、平成24年度と25年度と微妙に名称が異なります。24年度は、「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト」というものでしたが、25年度は、先頭に「地域と連携した」がつき、「地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト」というフルネームになりました。さらに長くなってしまったわけですが、私たちの「地域と連携」への思いは強いものがありました。また、教職大学院との連携ということも目指しました。本報告書の「あとがき」にそのことが触れられています。

地域の教育大学として、地域の教育にとって必要とされる人材を送り出すこと。それが大きな役割です。本プロジェクトは、その機能を強化する取り組みのひとつであります。そのために、大学と附属校園との連携の強化、地域のみなさまとの連携の深化が、強く望まれました。それは、「奈良ESD子どもキャンプ」や「学ぶ喜び・ESD連続公開講座」での取り組みで、本学の学生や院生が、附属校園や奈良の小中学校の子どもたちとキャンプをしたり、そのご指導に附属校園や地域の学校の先生方が加わっていただいたり、私たちが「ころがるテトラモデル」と呼ぶ学びの方法も実践を通じ確立して来ました。教育方法の研究や開発には学びの実践が不可欠ということも見えてきました。

また、このプロジェクトのベースには、ESD（持続可能な開発のための教育）があります。ESDの学びは、行動の変革、自尊心、価値観の創造、現地主義、クリティカルシンキング、総合的な社会の発展、といったことが、その特質としてあげられます。そこには、教科の学びや学力の向上につながる要素も見え始めて来ました。

ここまで、ご指導いただきました地域のみなさま、学校、教育委員会のみなさまに、あらためてお礼申しあげます。「石の上にも三年」、「学ぶ喜び」プロジェクトは、次年度も継続されます。引き続き、「学ぶ喜び」プロジェクトにご参加ください。さらに、参加していただく方が増え、学びの充実が得られるよう、計画を立てはじめております。今後とも、ご指導のほどよろしくお願い申しあげます。

プロジェクト 座長

加藤 久雄

（国際交流・地域連携担当 副学長）

テーマ 1

総合的な連携・協働による実践的指導力を育成する「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」
教員養成カリキュラムの開発等、教員養成の
高度化

「アール」

育ちの事計田遊笑るも二謝謝・謝感の所合織
しるれ熱心学は自し映るむ喜ん学しるを期
の如美員始、答読讀の上で上るが代如美員始

出題高

一般社団法人 教育支援人材認証協会「こどもサポーター (ESD)」認証

1. プログラムの趣旨・概要

- ・「こどもサポーター (ESD)」は、一般社団法人 教育支援人材認証協会によって認定される認証です。この認証制度は、学校及び地域において子どもを対象とした ESD（持続可能な開発のための教育）の指導に携わる教育支援人材を育成するためのものです。
- ・奈良教育大学で実施している実施している「こどもパートナー」養成講座の4つの講義と、教養科目「持続可能な開発のための教育 (ESD) 概論」を履修することによって、「こどもサポーター (ESD)」の認証の申請をすることができます。
- ・「こどもパートナー」養成講座は、「教育支援原論」「こどもへの接し方」「こども理解論」「現代こども・教育事情論」から構成されています。教養科目「持続可能な開発のための教育 (ESD) 概論」を履修することによって、「持続発展教育概論Ⅰ」「持続発展教育概論Ⅱ」の講座を受講したことと見なします。講義概要については、別表を参照して下さい。

2. 履修条件

- ・当該授業科目の単位を履修し、「こどもパートナー」養成講座に出席した本学学生であれば、誰でも教育人材認証協会に申請することができます。人数制限はありません。

3. オリエンテーション

- ・この認証制度の概要については、担当教員が個別にオリエンテーションを行いますので、教務課修学指導担当に申し出てください。教養科目「持続可能な開発のための教育 (ESD) 概論」受講者については、授業の初回に説明します。

4. 申請手続き

- ・当該学生は、奈良教育大学次世代教員養成センターで申請書を受け取り、必要事項を記入した申請書と認定料 2,000 円を同センターに提出して下さい。同センターにおいて、申請者の「こどもパートナー」養成講座の受講確認と教養科目「持続可能な開発のための教育 (ESD) 概論」の履修確認をした上で、申請書と認証料を教育支援人材認証協会に提出します。
- ・更新期間は3年間です。認証を取得した年を初年度とします。

講義名	時間	形態	内 容	担当者
教育支援原論	60分	講義	人権、個人情報、守秘義務等をはじめ、支援者（サポーター）としての基本的な倫理や、スクールサポーター認証制度の意義・概要について理解する。	林 美輝
こどもへの接し方	90分	講義	子どもの人権・個性を尊重しつつ、豊かなコミュニケーションを生み出し、子どもと共に育ち・愉しむための方法についての理解を深める。	中島 純
こども理解論	80分	講義	具体的な事例を通じて、発達障害のある子どもの行動傾向や学びに困難を持つ子どもたちの指導方法と理解・対応について指導する。	大久保 千恵
現代のこども・教育事情論	90分	講義	現代の子どもや学校をとりまく環境の変化について概観し、教育支援の意義や実践上の位置づけについて考えさせる。とりわけ学校現場で見られる生徒指導等の具体的な事例を通じて、現代の子どもが抱えている成長・発達課題を、個人の問題のみならず家族や地域といった個人を取り巻く周囲が内包する環境課題の両側面から、多角的に把握し促え直す。	立石 麻衣子 宮廻 をなみ
持続発展教育概論 I（持続可能性に関わる地球的諸課題）	90分 ×3	講義	大量採取—大量生産—大量消費—大量廃棄に支えられた現代社会が、天然資源やエネルギー資源の枯渇や廃棄物を無害化する環境容量の限界から、持続不可能な社会であることを明らかにする。また、食料問題や森林環境破壊の問題、失われる生物多様性や文化多様性など、身近な問題から、持続可能な社会づくりへの関心を高める。	中澤 静男
持続発展教育概論 II（ESD教材開発概論）	90分 ×5	講義	ESDは、持続可能な社会づくりの担い手を育む教育である。一人一人が持続可能な未来づくりの主体であるという当事者意識をもち、自らのライフスタイルの変革や地域での活動を促すといった、持続可能な社会づくりに関わる価値観と行動の変革を目標とする。当事者意識を持つためには地域意識を知ることが重要であり、地域人材を活用し、地域を教材化する能力が求められる。実際の授業事例の分析を通じて、ESDの授業内容や方法、教材開発に関する理解を深める。	中澤 静男

1. 目的

奈良教育大学は 2007 年 11 月に日本の大学として最初にユネスコスクールへの加盟が認められた。2005 年から始まっている国連 E S D の 10 年において、E S D の普及・推進が求められ、特にユネスコスクールは E S D の推進役として期待されている。また、新学習指導要領に E S D の理念が反映されたことから、これからの教員養成においても E S D の指導力養成が重要となる。

そこで本学では、平成 24 年度から「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクトを実施しており、その一環として今年度も学生及び大学院生、近隣の教職員等を対象に学ぶ喜び・E S D に関わる連続公開講座を開催する。

2. 後援 奈良市教育委員会・奈良県教育委員会

3. 開催概要

第 1 回 5 月 23 日 (木) 39 名参加

「日本一ハッピーな学校をつくろう」 大阪市立千本小学校教諭 金 大竜 氏

第 2 回 6 月 20 日 (木) 36 名参加

「子どもが互いの良さを生かしあい高めあう学級づくり」

奈良県教育委員会学校教育課指導主事 北浦 義弘 氏

第 3 回 7 月 25 日 (木) 27 名参加

「若い教員への大声援」 元奈良県立奈良情報高等学校教頭 小枝 猛 氏

第 4 回 8 月 22 日 (木) 37 名参加

「知る喜びを体験する授業づくり」 福山市立大学教授 田淵 五十生 氏

第 5 回 9 月 12 日 (木) 29 名参加

「私の学びと E S D」 奈良市教育委員会学校教育課指導主事 中川 克則 氏

第 6 回 10 月 10 日 (木) 33 名参加

「人のやる気を育てたい ―メンタリングと学級づくり―」

奈良市立飛鳥小学校教頭 木村 旬一朗 氏

第 7 回 11 月 7 日 (木) 28 名参加

「「あい」から始まるクラス作り～クラスのお・も・て・な・し～」

奈良市立飛鳥小学校教諭 上田 尚史 氏

第 8 回 12 月 12 日 (木) 31 名参加

「人権教育としての E S D ―七転び八起きの教師生活―」

奈良市立三笠中学校教諭 九鬼 淳子 氏

第 9 回 1 月 23 日 (木) 30 名参加

「学校教育全体で取り組む E S D」 東京都江東区立八名川小学校校長 手島 利夫 氏

第 10 回 2 月 13 日 (木) 25 名参加

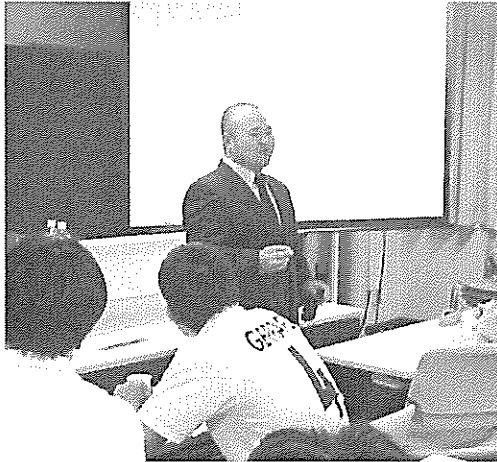
「理科の学習指導で大切にしたいこと」

奈良県教育委員会学校教育課指導主事 勝谷 征彦 氏

1. 開催日時 平成 25 年 5 月 23 日 (木) 19 時 - 20 時 30 分
2. 会場 奈良教育大学教職大学院 つばさ
3. 参加者数 39 名
4. 講演内容

演題「日本一ハッピーな学校をつくろう」

講師：大阪市立千本小学校教諭 金大竜 氏



(1) 見方を変えると問題も推進力となる

- ・ 子どもたちにケンカも問題もいっぱい起こしてほしいと思っている。ケンカも問題も心をすりあわせる契機となる。問題が起きれば起きるほど、よくなっていく。大きければ大きいほどわくわくする。
- ・ 人にストップをかけられたときは、他のことを試してみるチャンスだ。少欲を捨てて大欲をとる。
- ・ 若い人へ。うまくいかないことがあったら、それを楽しんでほしい。人に聞くチャンスだと思えばいい。すてきな人に出会ったら、考えがガラッとかわる。出会いを楽しんでほしい。

(2) 子どもに教えたこと

- ・ 「先から今を見る」ということ。一步先を見て、次の行動を考えることができる人に育てる。一步先を見ていたら、注意も受けなくなる。指示を待って行動するか、支持される前に考えて、動くことができるかの違いがある。
- ・ 論理的に説明する方法、論理的に話すことを意識させてほしい。説明のパターンは「抽象 - 具体 - 抽象」だ。まず、抽象的な概念を述べ、それを理解してもらうために具体的なものを取り上げて紹介し、最後にもう一度抽象的な概念でしめる。
- ・ 様々なことをまとめる思考訓練として「言い換えると～」 「まとめてみると～」といった言葉の訓練をさせる。
- ・ 今、目の前のことに懸命になれる子を育てる。
- ・ よいことも悪いこともしてほしい。それが子どもらしさだ。(いたずら週間)

(3) 子どもになって考えることの大切さ

- ・ 子どもになってみると、色々なことがわかってくる。例えば、周りの人が賢く見えて手が上げられない。高学年の女兒は、もうこれまでに色々な「できない」経験を経てきていて、もうこれ以上「できない自分に会いたくない」という気持ちがある。だから、前向きになれない、やろうとしないことがある。でもそれだと成長しない。そんな思いで学校にきているから、それを何とかしてあ



げるのは教員の役割だ。

- ・ ビリになる覚悟で、マラソンにでる。するとビリになる心の苦しさが理解できるようになる。

(4) 教師としての姿勢

- ・ こうやったら子どもが動く、よくなっていくと書いてあるものをよく見るが、全部ウソだと思っ
ていい。ずっとずっと考えて、どろどろになって子どもとやっていくしかない。うまいことしよう
と思わずに、子どもと泥臭くやっていく。
- ・ 意味なく、なんとなく、そういうものと思って行動していることが多くはないか。一つ一つの行
動に意味を持たせて、言葉にできる（子どもに説明できる）ようになりたい。
- ・ 教師は我がままだ。自分の思い通りに子どもを動かそうとする。
- ・ ややこしいと思い込んでいるとややこしい。先入観にとらわれてしまっている。
- ・ 教室で起きたことの半分は教師の責任（指導しきれていないという意味で）。必ず一緒に謝りに
行く。
- ・ 子どもに視線を合わせる。子どもの方がチャレンジ精神（熱）がある。子どもには、言っている
わりに、教師は苦手なことにチャレンジしていない。もっと熱を上げていく。頼まれたことは、す
ぐに返事をする。それが自分のカラを打ち破るきっかけになる。
- ・ 子どもに求めるなら、自分もする。自分ができていないのに子どもにだけ求めるからしんどくな
る。
- ・ 知覚動考（ともかくうごこう）：人はできない理由ばかり考えがち。やりながら考える。ミスし
たら謝ったらいい。
- ・ 気持ちは体から出ている。子どもを愛していることが体から出ている。逆に、子どもに対する文
句を言っていると、それが体から出てしまう。やることはまちがっているかもしれないが、愛して
いることは真実だし、それは子どもに伝わる。
- ・ 今、教師に対する風当たりが強い。だから、色々なことにビビっているのじゃないか。
- ・ 子どもに夢や目標を持つようにいうが、子どもを急かす必要はない。安心して自分をさらけ出せ
る環境をつくる。
- ・ 感情的に怒っても、子どもは変わらない。どうするのがいいかはわからないが、感情的になっ
ていいことは何もない。例えば、私は子どもの忘れ物をしからない。何でも貸してあげるようにして
いる。忘れ物ぐらい、たいしたことない。子どもは、この人のためと思うと忘れ物がなくなるもの
だ。
- ・ 授業力・学級経営力の土台は人間力だ。人間力のある人はぶれない。野球少年にとっての「イチ
ロー」のような存在になる。今の自分が子どもにとってどんな存在なのかを考える。子どもに伝わ
るような「誰か」になるためには、人一倍努力して考えないと成れない。
- ・ 子どものいないところで、子どもの名前を言うようにしている。「下、3日にして上を知る。上、
3年にして下を知る」というが、教師は子どもを見ているようで、本当のところは見えていない。

1. 開催日時 平成 25 年 6 月 20 日 (木) 19 時 - 20 時 30 分
2. 会場 奈良教育大学教職大学院 つばさ
3. 参加者数 36 名
4. 講演内容

演題「子どもが互いの良さを生かしあい高めあう学級づくり」

講師：奈良県教育委員会学校教育課 指導主事 北浦 義弘 氏



(1) ゴールを明確にする

目指す子ども像をはっきりさせ、決めたことは徹底する。目指す子ども像とは、教師自身がなりたい人間像でもある。

- ・ 話し合いを通じてよりよく判断できる子
- ・ 人のよさを見つけられる子
- ・ 目標に向かって行動できる子

(2) 指導指針を立てる

・ 適材適所

一年間の学校行事や学級活動を見通して、すべての子どもに自信や居場所を感じることができるような機会と場を用意する。

・ ゴールの具体化

ゴールを具体的に描き、原則として妥協しない。

・ 具体的にほめる

達成できた時に、どこがどのようによかったかを具体的にほめる。

(3) 戦略と戦術

① 学級目標

- ・ 教師の理念を子どもの言葉でよりわかりやすく示したもの。
- ・ 教師の理想とするものと子どもが目標とするものを融合させたものが学級目標であり、担任と子どもの信頼関係を土台としてつくっていくものである。だから、必ずしも年度当初につくる必要はない。
- ・ 学級のシンボル。折に触れ、子どもと達成状況を確認する。
- ・ 「見通し」 - 「計画」 - 「実行」 - 「挑戦」を一つのサイクルとして、様々なことに取り組みせの中で子どもとの信頼関係を築いていく。
- ・ 体験したことを表現させることで、実感となる。体験・表現・実感はセットである。
- ・ 思考を可視化 (表現) することで、子どもの思考は整理される。

【事例紹介】

「運動会で学んだ『友達を大切にすること』を国語の意見文として書かせた。(可視化) 各自が運動会の過程で自分がしたことやされたことを通して、「このようなことが友達を大切にすることだ」ということを文章でまとめさせた (思考の整理) 上で、卒業までの自分たちの生活に大切なことは

何かについて具体的に考えさせ、目標を設定した。

○見て：困っている友達や不都合はないか、心がけて周囲をよく見る。

○気づいて：一人一人の良いところをよく知る。

○相手の気持ちを考えて：今、友達がどんな気持ちでその場にいるのかを考える。

○積極的に行動する：できないことは努力する。いいことは自分もしていく。悪いことはやめるよう注意する。



◎学級目標「見て、気づいて、相手の気持ちを考えて、積極的に行動するクラス」

② 学校行事と学級経営のリンク

- ・ 学校行事は年間を通して決まっている。適材適所に子どもの活躍できる場を考える際に、学校行事を視野に入れて計画する。

③ 話し合い

- ・ 担任が決定して指導すべきことと、子どもの判断に任せることを区別する（決めることは決めて任すことは任す）。
- ・ 準備が大切：内容と進め方は事前に指導する。
- ・ 話型について、定着するまで教員がモデルを示して指導する。

④ 朝の会・帰りの会

毎日するので、有効な指導の手段となる。

- ・ 定着するまでは教師がはりついて指導するとともに、その価値を説明し、前向きに取り組む意欲をもたせる。

⑤ 席替え

2週間ごとに席替えを行った。

- ・ 同じグループだった友達のよさをワークシートに書かせる。
- ・ よさの見つけ方や書き方も教師がモデルを示して指導する。

⑥ 誕生日会

- ・ みんなで創るという意識をもたせる。
- ・ 一人一役で準備に必要な係を担当させる。
- ・ みんなからの誕生部プレゼント（「いいとこカード」）

⑦ みんなで考えを深める授業

学級経営は、授業でつくっていく。

◇ 授業構成

- ・ 起 課題を共有する
- ・ 承 課題解決にむけての調査活動（情報・一定認識の共有）
- ・ 転 課題の解決に向け考えを深める（子どもの考えを揺さぶる発問）
表などを使って、整理・比較・分析する
- ・ 結 深めた考えをまとめ課題の解決を図る



(4) フロアとの協議から

質問：できる教員になったきっかけを教えてください。

北浦氏「初任者として赴任した学校が理科の全国大会の会場校だった。いい授業をたくさん見て、また見るだけでなく自分もやってみて、他の先生方からのアドバイスを受けることが大切だと思う。」

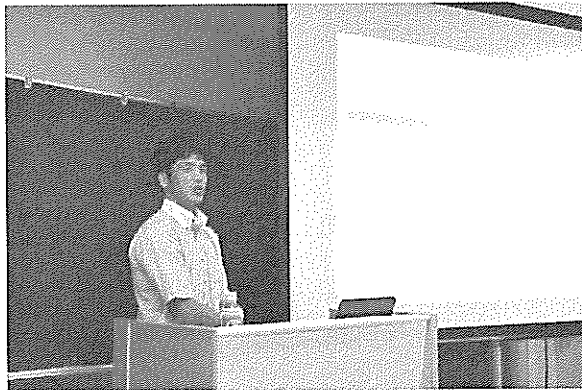


質問：子どもの考えをゆさぶる発問のつくりかたは？

北浦氏「しっかり教材研究することで、自分が感動したり、思考が変換されたりすることがある。そういう教員の感動を発問にすることで、子どもの意欲も高まる。すばらしい授業というのは、その時間内に子どもの認識が変換する授業だと思う。だから、特に「転」は大切だ。」

質問：子どもとの日常の関わり方のコツを教えてください。

北浦氏「簡単に言うと、子どもをおそれないということ。指導するときには、平等に指導する。そのことが信頼感につながる。」



(5) その他

北浦氏の学級経営の特色

① 子どもの課題を各自でランキングさせる

例えばある児童の課題が「宿題を毎日きちんとする」「人の話を最後まで聞く」「チャイムを守る」であったとき、どれを最優先にするか子どもには決められない。そこでA「自分に必要なこと：自分が大切にしたいこと」とB「みんなに必要なこと：クラスがよくなるために必要なこと」の2つの視点から捉えさせ、グラフ化して優先順位を考えさせている。

② 授業構成の転における手法

児童が集めてきた調査資料を表や、十字分析などで整理することで思考の切り口を可視化し、考えを深める手段とする。

1. 開催日時 平成 25 年 7 月 25 日 (木) 19 時—20 時 30 分
2. 会場 奈良教育大学教職大学院 つばさ
3. 参加者数 27 名
4. 講演内容

演題「若い教員への大声援」

講師：元奈良県立奈良情報高等学校 教頭 小枝 猛 氏

- 夢を抱いて教員になった若い教員が教壇を去っていくという現実がある。これは、教育に関わる問題を先送りし、後回しにしてきた我々の責任でもある。
- これからの教員は、子どもが好きだけではダメだ。タフでなければならない。そのためには、生の人間の付き合いを大切にし、多くの趣味を持ち、多くの仲間を作るネットワークを大切にしてほしい。

【生徒指導について】

- ・ 生徒指導の大部分は生活指導だ。私が教員になった昭和 48 年頃の高校生と今の高校生を比べると、何でも懇切丁寧に教えてやらなければならないようになって、幼くなっているように思う。
- ・ 子どもに事情を聞くと、必ずウソから始まる。なかなか本当のことを言わなくなっており、出来事を明らかにするのに時間がかかる。その途中でボタンのかけ違いが発生して、保護者とトラブルになることもしばしばある。
- ・ 親にも子どもにもウソを言わないことが大切だ。ウソは信頼を損ねる。
- ・ 生徒との信頼関係をつくる。下の世話から就職・進学、めんどろ見るのはきりが無い。しかし、子どもにいくら手間をかけても、見返りを求めないことが重要だ。十分にめんどろをみて、そして「先生ありがとう」と言える場面をつくるのが、信頼関係をつくる。信頼関係があれば、子どもは正直に言ってくれる。
- ・ 母親に言われた言葉：「母親は子どもを一生懸命育てるが、子どもに見返りを求めない。教員もそれと同じ。おまえは一生懸命やっただけというつもりでいるが、えらいのはおまえやない。おまえについてくる生徒がえらい。」
- ・ 子どもは家庭の問題をひきずって学校にくるものだ。教員は子どもの背景をどこまで見抜くことができるかが問われる。子どもは一日の中でも色々な姿を見せる。そこをしっかりと見てみると、それまで気がつかなかった生徒のいい面を見つけ、それが人間関係をつくるもとになることもある。目を行き届かせ、あたたかく、そして厳しく指導してほしい。
- ・ 信頼関係ができる前には、その本気さや、粘り強さ、人間性など、子どもは教員をためすものだ。どんなことがあっても、あきらめない、指導をしつづけることが、子どもは教員の姿勢を見抜き、やがて変わっていく。少しぐらいのことであきらめないことが大切だ。
- ・ 指導方法はいろいろある。色々経験し、先輩教員に教わりながら、自分らしい指導方法を身に付けていってほしい。大切なことは、実情に合わせて教えることだ。子どもには見返りを求めないこと、正面切ってつきあうことだ。

【保護者対応】

- ・ 保護者にも決して引かない。ウソやごまかしはなし。正面からぶつかっていく。いずれ分かりあ

える時もくる。

- ・ 家庭での不満が学校で出ているときもある。子どもの様子からくみとってほしい。家庭を指導しなければならない時もある。

【地域とのつきあい】

- ・ 子どもが地域ですること、いちいち学校に文句を言ってくる。その場で注意してくれればいいのにとすることも。対応が難しい。
- ・ 無理難題は聞くことはないが、地域の人に悪意はない。地域の学校によい学校になってほしいという思いがあるということを忘れないこと。

【教員という仕事】

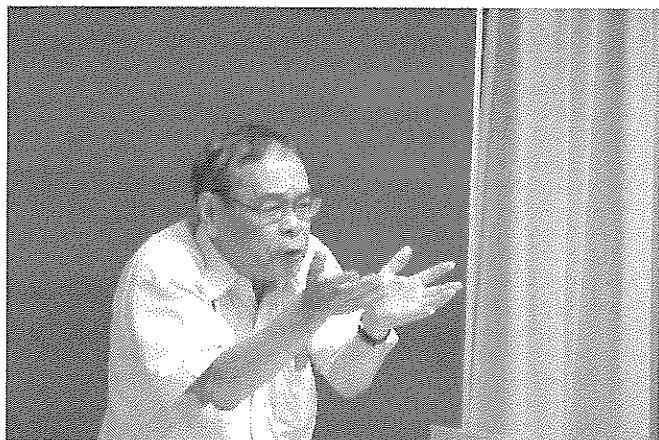
- ・ 忙しくしている教員と最低限の仕事量しかこなしていない教員があるように見えるかもしれない。しかし、そんなことはない。校長が適材適所を考えて役割を与えている。校長を信頼して仕事をやる。
- ・ 教員の仕事の対象は「子ども」だ。子どもの対してどのような手立てができるか、目の前の子どもにどう対するかが仕事の中心だ。子どもはしっかりと見ている。
- ・ 対応を失敗することにはある。日ごろから子どものことを考えて一所懸命取り組む教員に対しては、少々の失敗があっても子どもはだまっているものだ。
- ・ 子どもを中心に据え、よいことはよい、悪いことは悪いと、どの教員もきちんと指導したいと思っている。しかし、ひとりではやっていけないこともある。教員同士で仲間を作って助け合う。
- ・ 自分とフィーリングが合う仲間を見つけてほしい。人間関係が一番大切だ。
- ・ 始めから名医がないのと同様に、始めからできる教員はいない。若い時はいくら聞いてもいい。誰に聞いたらいいかわからないときは、教頭に尋ねれば紹介してくれる。先輩教員にいろいろ聞いて、経験を積んでいってほしい。

1. 開催日時 平成 25 年 8 月 22 日 (木) 19 時 - 20 時 30 分
2. 会場 奈良教育大学教職大学院 つばさ
3. 参加者数 37 名
4. 講演内容

演題「知る喜びを体験する授業づくり」

講師：福山市立大学 教授 田淵 五十生 氏

キーワード：教師の伝えたい内容を、学習者の課題（学びたいこと）にいかに関化させるか



(1) グループワークの意義

- ・ ピア効果が期待できる。：意識や能力の高い集団の中で、切磋琢磨し、お互いを高め合う。
- ・ 決まった流れで説明しては、生徒は受け身のまま。グループになって「どれが聞きたいかを理由をつけて話し合わせることで、能動的になる。
- ・ グループを構成しているメンバーは、それまでの生活経験が異なるため、基盤と

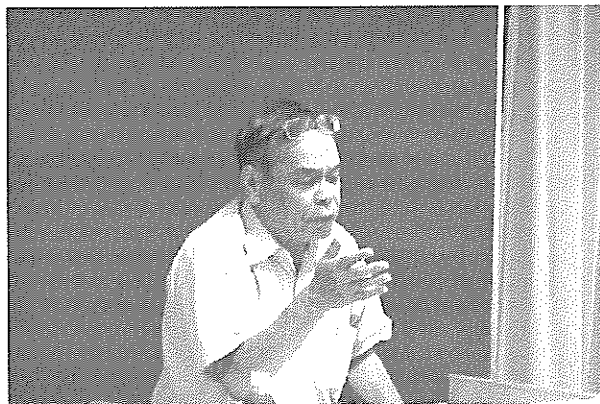
なる見方や考え方の傾向に差があるのが当たり前であり、同じものに対しても、感じ方や受け取り方が異なる。そのような異なる意見を交流することで、より成員が納得できる意見に収斂されていく。

- ・ 学級全体で話し合おうとしても、なかなか意見は言いにくいもの。小グループにすると、アットホームな雰囲気作りが可能となり、いい意見が出やすくなる。
- ・ グループ討議におけるコメントの仕方の指導
 - ・ Numbering：言いたいことは*点です。
 - ・ Labeling：言いたいことをキーワードで要約して提示する
 - ・ Reasoning：なぜ、そう思うのか、理由付け、理屈付け、事実と意見を分ける
- ・ 発言をするときに人は考えている。
- ・ 仲間がいると、エンカレッジ（勇気づけること、励ますこと）できる。

(2) 対話カードの活用

- ・ 授業の終わりに、自分の考えなどを 5 分間程度で簡単に記述させる対話カードを使う。教員はそれに目を通すことで、発言が少ない生徒の意見も把握できる。また、カードにコメントすることで、教員と生徒の一对一の対話が開かれる。
- ・ 内容的にすぐれたカードを選んで、次の時間にフィードバックすると、それに刺激され、それまで書かなかった生徒も書くようになる。
- ・ よい書き方のモデルとなり、それが学級全体に波及する。
- ・ しかつても子どもは伸びない。ほめることで子どもは伸びる。対話カードを学級通信などに載せる

ことで、子どもの意欲は向上する。自分のカードが載らなかった子も、友達のよい意見にふれることができ、よい影響を受ける。



(3) レポート指導について

田淵先生の実践例

後期の授業であるが、10月ではなく夏休みから始める（夏休みの課題を出す）。今までに自分がもっとも感銘を受けた、あるいは影響を受けた先生にインタビューしてレポートを作成させる。

インタビューポイント

「なぜ、教員になろうとしたのか。」「教員になってよかったこと。」「教員になって嫌なこと。」「メッセージ」

後期の授業で仲間で読み合い、良いと思った2つのレポートを選んでコメントを書かせる。（相互評価）

- 教員はレポートの書き方を見せるために、モデルを示す必要がある。（参照：「私を教育実践に駆り立てているもの」）
 - ・ 小見出しをつけることで、一つ一つの論が明確になり、組立が見えることで、理解の手助けになる。
 - ・ 具体的な事実の中から根拠を示すようにすると説得力がある。

(4) 生徒の指導について

- ・ 発言に対して、とにかく褒める。人は自分の意見を認めてくれる人の言うことしか聞かないもの。いいところを探してほめる。ほめられたことは必ず覚えている。意欲化につながる。
- ・ どうやってほめるか。カウンセリング・マインドで「あなたが言いたかったことは*****ですよ」とその人が言えなかったこともカバーして要約する。それを話し合いの前後関係の中に位置づけ、意味を活かし、授業への貢献を評価する。
- ・ 価値ある体験をさせる。そのときに大切なのが「振り返り」。人は体験から学ぶのではなく、体験への振り返りから学ぶ。
- ・ そのことに向かってやり続けていくんだという熱意が伝われば、生徒は変わっていく。



1. 開催日時 平成 25 年 9 月 12 日 (木) 19 時 - 20 時 30 分
2. 会場 奈良教育大学教職大学院 つばさ
3. 参加者数 29 名
4. 講演内容

演題「私の学びと E S D」

講師：奈良市教育委員会学校教育課 指導主事 中川 克則 氏

(1) E S Dに関するグローバルアクションプログラム(2015-) [案] の紹介

第 4 回国連 E S D の 10 年最終年會合に向けたワーキンググループ (7 月 11 日) 配付資料

【目的】

グローバルアクションプログラムは、持続可能な開発を加速するために、教育・学習の全ての段階・分野で行動を起こし強化するためのものである。この目的は、二つの下位目的がある。

- ① 全ての人々が知識、技能、価値観、態度を得る機会を持つために、教育・学習を再方向付けし、持続可能な開発に貢献するよう能力向上すること。
- ② 持続可能な開発を促進する全ての関連アジェンダ・プログラム・活動において、教育・学習の役割を強化すること。

【優先分野】

① 政策的支援

E S D を教育と持続可能な開発の国際及び国内政策に反映する。持続可能な開発のための教育・学習に動員し、E S D 行動をフォーマル・ノンフォーマルな教育・学習で強化するためには、それを可能にするような政治環境が重要である。

② 機関包括型アプローチ

全ての段階と場において E S D の機関包括型アプローチを促進する。全校的もしくは、学校全体のアプローチは、教授内容や方法論の再方向付けだけではなく、キャンパスや施設管理においても求められるものである。

③ 教育者

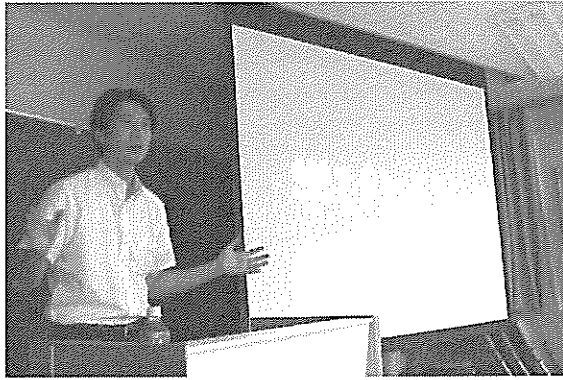
E S D に関する教員、トレーナー等を強化する。教育者は、教育的変化や持続可能な開発の学習を手助けすることを育むための最も重要な「てこ」の一つである。

④ ユース

E S D を通じた持続可能な開発のための変化の主体としてのユースの役割を支援する。ユースは、彼ら自身またこれからの世代のためのよりよい将来を形作るため、高い関心がある。さらにユースは、今日、一層の教育的プロセスの駆動輪である。

⑤ ローカルコミュニティ

E S D を通じた地域レベルでの持続可能な開発の解決の探求を加速する。持続可能な開発の効率的・革新的解決は、しばしば地域レベルで開発されている。マルチステークホルダーの対話と協力は重要な役割である (例えば、地方政府、非政府組織、民間セクター、メディア、教育と研究機関、市民)。



(2) これまでのこと

① プロローグ

- ・ 優秀な靴の販売員の海外転勤
ピンチはチャンスと捉え、発想の切り替えが大切。
- ・ 奈良との出会い（小学6年生）
世界一古い木造建造物、世界一大きい木造建造物
→ 実物を見てみたい

- ・ 宇宙との出会い 1977年ボイジャー探査機の打ち上げとカール・セーガンへの憧れ
宇宙カレンダーでの人類の文明は12月31日の最後の10秒程度。宇宙のスケールで見ると時間が変わって感じられる
- ・ 環境への関心 1秒間にテニスコート一面程度のアマゾンの熱帯雨林が消失している事実を知り、衝撃を受ける。

② 群馬県庁への就職（教員は自分にとってハードルが高いと感じていた）

自然保護課鳥獣保護係（保護区の設定、狩猟免許状の交付、野鳥の森の管理、狩猟者の登録、有害鳥獣の駆除（シカ、イノシシ、サルなど））

松岡補佐の言葉「動物は言葉を話せない」

有害鳥獣とは何かを考えさせられるきっかけとなる。根本的な解決を考える。

中山間地では過疎の進行と狩猟人口の減少により、野生動物が増えすぎている。

植林により自然林が減少し、野生動物のエサが不足している。

増えすぎて、エサ不足に陥った野生動物が有害鳥獣になっている。

→ 人と自然の共生には教育が大切だと思う。

3年目に東京事務所へ転勤（連絡調整・情報収集）結婚

高崎の農政事務所に転勤：持続不可能な新幹線通勤

知事の言葉「法令は県民のためになるように解釈しなさい」

県民のためになるように働くことを教わった。

退職して奈良に

③ 小学校教員となる「子どもたちの笑顔のためにがんばろう」

衝撃の一年目

教科指導のことは考えていたが、生徒指導の観点が抜け落ちていた。学級経営とは何かがわからず、うまくいかないと悩む毎日だった。

学級経営・生徒指導について学びたいと思い、学級集団づくりのサークルに入り、だんだんと教員と子ども、子どもと子ども、教員と教員の間関係づくりができてきた。勉強会への参加は、人との出会いがある。自分の世界が広がる。

転勤（2校目）

着任式で

前日に、隣の学級の教員に頼んで、自己紹介を記載した学級通信を配布してもらっておいた。これが功を奏して、初対面でつながりができた。

・ これまで担当したこと

小学校:国際理解教育、世界遺産学習、教科学習、
幼小連携等

市教委:世界遺産学習、理科

勉強の内容によっては、すぐに使えるものとストックして、後で使えるものがあるが、勉強するともっと知りたくなる、やってみたくなる。任されることが多くなり、忙しくなったが、それだけ期待されていると感じて取り組む。初めから無理だと断っていたのでは、自分の世界が広がらない。



・ 地域連携について

教員一人ではできることは限られている。地域を巻き込むことで、幅が広がる。また、子どもに自分の地域のよさを感じてもらうのは大切だと思っている。

④ 今、考えていること

・ 主体的な学びには無駄なものはない。

必ず後で自分のためになっていく。全部、そこにつながっていくと感じている。

・ キャリアの扉にドアノブはない。

仕事は向こうからやってくる。「できません」ではなく、まずやってみる。断らない。

・ 時には必要に迫られることも

声をかけられると言うことは期待されているということ。他人の評価が高いということ。

・ これからも大切にしていきたいこと

「ホームの試合では連勝する力をキープしていきたい。」(専門分野)

「アウェイの試合でも1勝を、といった学びをしていく。」(専門外・不得意分野)

・ 苦手なところも勉強していく。学び続ける意味は大きい。今の自分がある。

⑤ エピローグ

水はすべての生物にとってなくてはならないもの。その水が液体で存在できるのは、0度から100度までといった限られた温度であることを考えると、地球の存在は奇跡的であると感じる。その地球に、我々人類は、宇宙カレンダー数十秒というわずかな間に悪い影響を与えてしまっている。

地球のために、事実を伝えていく、自分ができることを行動していくことが大切だと思う。



1. 開催日時 平成 25 年 10 月 10 日 (木) 19 時 - 20 時 30 分
2. 会場 奈良教育大学教職大学院 つばさ
3. 参加者数 33 名
4. 講演内容

演題「人のやる気を育てたい - メンタリングと学級づくり -」

講師：奈良市立飛鳥小学校 教頭 木村 旬一朗 氏

(1) やる気を育てる理論的背景

ミクロ経済学：働いている人に視点をあてた経済学

① 人はなぜ働くのか

- ・ ダグラス・マクレガーの X Y 理論

X 理論：人はそもそも怠けるもの

命令と強制による管理が必要

Y 理論：人はそもそも働きたがるもの

自主性を尊重するによる経営

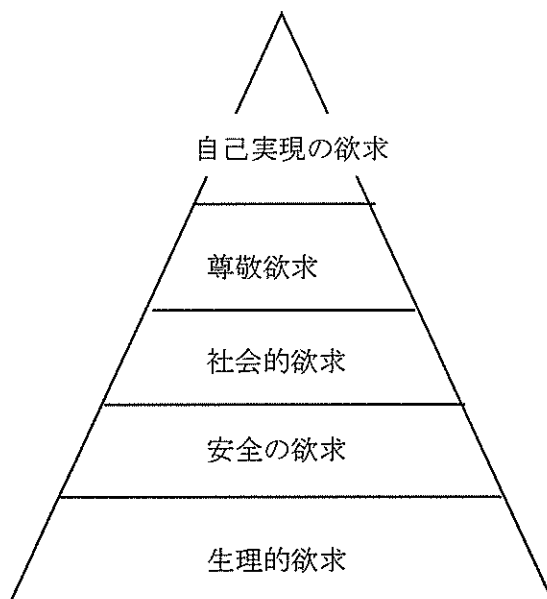
- ・ 三隅二不二の PM 理論 (リーダーシップ論)

P：パフォーマンス・目標達成能力・管理者行動

M：メンテナンス・集団維持力・配慮行動

優れた指導者は PM：目標を明確に示し、成果を上げられると共に集団をまとめる力もある

- ・ 人はどのようなリーダーのもとで働きたいのか M 理論：ほめて伸ばすことができるリーダー
- ・ マズローの 5 段階欲求説



生理的・安全欲求：衣・食・住に関わる欲求
社会的欲求：所属したい
尊敬欲求：認められたい
自己実現の欲求：← 希有

- ・ 一度レベルが上がると下らない。
- ・ 金銭は一時的なモチベーションにしかない。(獲得した金銭に慣れてしまう。えんえんと上がり続けなければモチベーションにはならない)

- ・ ニート (働けない)、フリーター (働かない) の原因

人とつきあいたくないのが本当の原因

・ ホーソンの実験工場

労働条件が良い方が生産性が高いという結果にはならなかった。

組織の人間関係が生産性に大きく影響する。

② メンタリングの研究

メンタリング：人材育成、指導法の一つ

設定した課題：「初任者や教員のやる気をどのようにして引き出すか」

・ 出世の研究（若林：1987）

初めて出会った上司との関係によって、その後の昇進に大きな影響を与える

初任から3～5年の若者にどのような支援を与えるかが重要：メンタリング

上司（メンター）－部下（メンティー）

公的な関係でもあり私的な関係でもある。師匠と弟子のような徒弟制度の関係でもある

メンタリングはキャリア機能（能力開発）、社会的機能（社会的承認）に有効に作用する。

しかも、与える側にも与えられる側にもプラスの効果を発揮する。

・ 学校にもメンタリングは有効か（アンケート調査の実施）

初任時にすばらしい主任とであった教員とそうでなかった教員には大きな差があることから、組織文化が教員の能力形成に大きな影響があると考えられる。

すばらしいメンターと出会わすことが大切だが、実際の出会いは偶然的である。しかし、各学校には1人～2人はメンターがいる。そのメンターにいかに出会わすことができるかが重要となる。

（2）教員の仕事に関して

① 教員に求められる力

- ・ 人間関係を築く力（子ども、保護者、同僚）
- ・ 人間力（背中で語る力）
- ・ 教科等に関する指導力
- ・ 雑務を効率よくこなす力

一般に、教科等に関する指導力に重点が置かれがちだが、

「雑務を効率よくこなす力」が弱いと時間がとられ、教材研究ができなくなり、それはつまらない授業を生み、学級が荒れ・保護者対応に追われ、さらに雑務が増える、という悪循環に陥る。

② 必要とされる力

今の子どもたち（若者）は、何も決められずに先送りする傾向が強い。

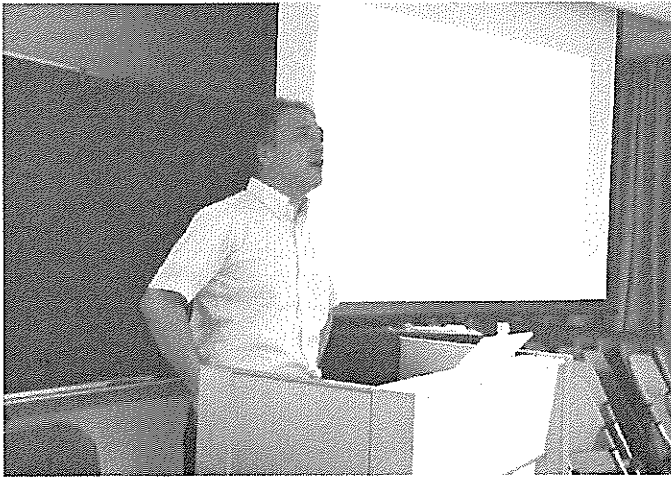
どんな世の中でも時代に対応し、生き抜く力が必要であり、それを学校教育で養うのが特別活動。

③ 学級活動について

学級活動とは「学級の子ども全員が知恵を出し合い、よりよい生活をつくり上げるために一人一人の思いや願いを生かし合って問題解決を図るための話し合いの時間。」

- ・ 学級活動（1）：学級や学校の生活の充実と向上に関すること
- ・ 学級活動（2）：日常の生活や学習への適応及び健康や安全に関すること

○ 自分たちで問題を決め、集団思考により最後に集団で決定する活動。



(3) 体験から学んだこと

・ 鼓隊の指導から

わかさ国体を前に、何の指導経験もなく自信もなかったが、とにかく夢中で取り組んだ。最初は練習を嫌がっていた子どもたちが、2年目には「おんまつり」の時代行列の先導ができるようになるまで変わっていた。

○ 子どもの力はすごい。子どもの力を信じて取り組むことが大切。

・ 堅穴式住居作りから

子どもの意欲を高めるために何か大きなことをしようと考え、初めは秘密基地づくりをしようと思ったが、6年生の社会科学習と関連づけて堅穴式住居を作る。

○ 目標がはっきりすると、子どもは自分から動くようになる。明確な目標を示すことが大切。

・ 「ごみのしまつ」の学習から

教員自身がパッカー車に同乗し、ごみの収集を体験する。子どもたちもパッカー車の後を追いかけるようになる。

○ 苦勞を乗り越えた本物の体験をすることで、子どもの行動は変わる。

(4) まとめ

・ 一つでもいい、卒業した後も子どもの心に残る取組をすることに挑戦してほしい。

・ 子ども（人）のやる気を育てるには

◎ 子どもを認めること 寄り添い、共感する

◎ ほめて、ほめて、ほめまくること

(日常の取組として、1日1本は保護者に電話して子どもの良かったことを伝える、短冊に良かったことを書き、廊下に掲示して他の教員からも認められるようにする、学級通信に掲載する)

◎ 目標を持たせ、動機づけする。

木村教頭先生からは、子どものやる気を引き出す教員の指導の背景にある理論と、それを実際の学校での指導に生かした体験をご紹介いただきました。経験則だけでなく、理論的背景を身につけることで、指導が確実なものとなるということをご教示いただいたと思います。

できるかどうかかわからないこと、結果が明らかでないものに対して消極的になりがちですが、鼓隊、堅穴式住居など、どんなことにも前向きにチャレンジすることの大切さ、そこには子どもも教員も伸びるチャンスがあることを、体験を通して示していただいたことは大きいと思います。

1. 開催日時 平成 25 年 11 月 07 日 (木) 19 時～20 時 30 分
2. 会場 奈良教育大学教職大学院 つばさ
3. 参加者数 28 名
4. 講演内容

演題「「あい」から始まるクラス作り～クラスのお・も・て・な・し～」

講師：奈良市立飛鳥小学校 教諭 上田 尚史 氏



- (1) 教師は支援者であり指導者でもある
 - ・ 上から目線で指導するだけではだめ。子どもが指示通り動いていたとしても、そこには学びはない。見守るだけでもだめ。適切な言葉かけが大切である。
 - ・ 指導がいる場面もあれば、見守る（支援）場面もある。教員になったときは、指導に入るべきか、もう少し見守るべきかの判断が難しく感じるだろう。難しく感じたときは、先輩教員に気軽に尋ねるとよい。どちらかに偏ることなく、バランスよく、適切に行うことで、

子どもからも保護者からも信頼される教員になる。

(2) 教師は五者であれ

- ・ 役者：しんどいときでも、笑顔で学級の雰囲気盛り上げる。
 - ・ 医者：子どもの体調を管理する。
 - ・ 易者：子どもの次の動きを予測して、危険回避する。適切な指示を出す。
 - ・ 芸者：子どもを引きつける芸をもて。
 - ・ 学者：教材研究、指導方法の研究
- ・ 今や七者だという人もいるくらい、教師は何でも屋だ。その合間をぬって教材研究している。
 - ・ 特に保護者に対して丁寧な対応をしておくことが、後々役に立つ。学校では様々なことが起き、保護者との対応が迫られるが、始めに丁寧な対応を心がけ、信頼関係ができていると、解決も速い。

(3) 自己研修について

- ・ 日常は、とても忙しく、教材研究する時間がなかなかとれない。小学校はほとんどの時間を自分で授業するため、そのすべてについて教材研究するのは不可能だ。
- ・ ひとつの授業で、これだけは教えたいというものを明確にして授業に臨むことは大切だ。
- ・ 一年間を見通して、「今年はこの教科を中心に研究しよう」という自己研修が財産になる。

(4) 学級開きでの心得

- ・ 学級開きの最初の 3 日間は黄金の三日間とも言われ、そこでの取組が一年間を左右するという教員もある。しかし、一日目は、配布物がありすぎて、子どもに話しかける余裕もないのが本当だ。でも、子どもはそんな教員の様子を観察している。家に帰ると、必ず保護者は「今度の担任の先生はどんな先生？」と尋ねる。そのときに「おもしろい先生やで」と子どもに言わせることが重要だ。

子どもの後ろには保護者がいることを常に意識する。

- ・ 子どもが何かを言ったときに（試しているところもある）、ユーモアで面白く返す。もちろん命に関わることや友達をきずつけることは一切許さないという姿勢を見せつつ、厳しいだけではなく、「今年の先生はちょっと違うぞ」と思わせ、家に帰ってそう言わせることで、保護者の心をつかむ。



- ・ また、職員に配慮する。初めての学校で、自分のことで精一杯かもしれないが、職員にも気配りを忘れない。良好な人間関係を築いておくことで、わからないことを教えてもらったり、助けてもらったりできる。

(5) 学級活動での工夫

- ・ 通常、どこの学級でも学級目標を決めるが、学級目標はぼんやりしていてわかりにくいものだ。クラスの合い言葉を考えることにしている。そのクラスの子どもにだけは意味がわかる合い言葉があることで、学級の仲間作りにも効果がある。

KCY29

「このクラスでよかった29人」

- ・ 子どもとのやりとり、保護者とのやりとりは「間合い」が大切。吉本新喜劇が参考になる。その役者が登場すると、必ず言うギャグがわかっているのに笑ってしまう。担任が目指していること、この場面ならこう指導するだろうという、担任独特の間合いを伝えるよう心がける。
- ・ 仲間作りのために、アイスブレイキングなどよくされているが、思いつきでやっても効果はない。なぜ、そのアイスブレイキングを取り入れるのか、アイスブレイキングでどのような結果を想定しているのかなど、考える。

RPDCAサイクル

R : Research

P : Plan

D : Do

C : Check

A : Action

目の前の子どもに欠けているものを考える。
アイスブレイキングのタイミングを考える。
アイスブレイキングの内容を考える。

- ・ 子どもを把握すること。
遊びを通して、子どもの人間関係を把握して、気がついたらすぐに修正をかける。
- ・ 子どもはもめるもの。もめさせることも大切。そうやって人と折り合いをつけることを覚えていく。子どもの対立を解決するには、教員が完全に子どもの人間関係を掌握していること。

(6) 最初の参観日ネタ：スパイ大作戦

- ① 一週間、友達のよいところを見つけるよう観察させる。



- ② それを参観日の授業で発表させる。発表した子と発表された子の両方をほめる。
- ③ 授業後の懇談会の様子(保護者の様子)で、学級経営がうまくいっているかがわかる。

(7) 家庭に伝えること

- ・ 課題を一つ伝えたら3つはほめる。
- ・ 自分は保護者の味方であることを伝え(喜びも辛さも共有する姿勢)、一緒に子どもを育てていく姿勢(一緒に解決したい)を見せる。

(8) 保護者との関係づくり

- ・ 保護者も巻き込んだ楽しい授業参観をする。
- ・ 知的な楽しみがあり、カチツとした授業を見せることで、保護者を安心させる。(子どもが話し合ったり、活動したりといったときには、自由度を高め、聞かすときは聞かす、まとめるときはまとめる、というメリハリのある授業。)
- ・ 学級通信や家庭訪問、連絡帳を通してコミュニケーションを図る。(家庭訪問は、5月当初にある行事的なものだけでなく、日常的に行うもの)
- ・ 地域の行事にも積極的に参加し、地域の人にも知ってもらう。

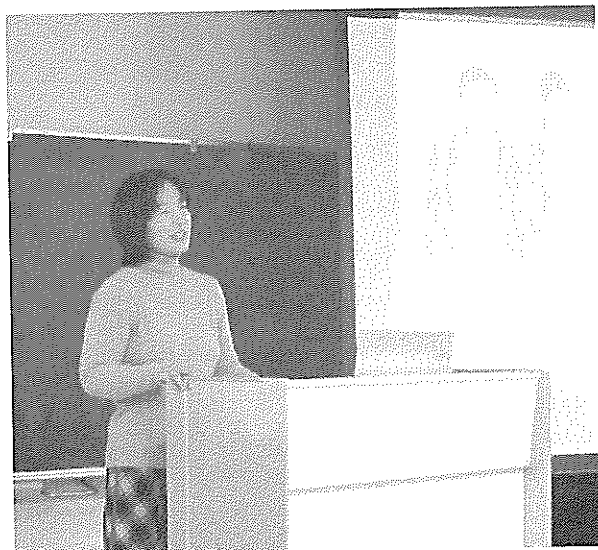
1. 開催日時 平成 25 年 12 月 12 日 (木) 19 時 - 20 時 30 分
2. 会場 奈良教育大学教職大学院 つばさ
3. 参加者数 31 名
4. 講演内容

演題「人権教育としての E S D ー七転び八起きの教師生活ー」

講師：奈良市立三笠中学校 教諭 九鬼 淳子 氏

(1) 教員になったきっかけ

- ・ 教員になるつもりはなかった。友達の誘いで教職課程を受ける。
- ・ バブル全盛期で企業の内定も決まっていたが、教育実習でやりがいを感じて、はじめて教員になりたいと思った。
- ・ 担当教官に相談したところ、「キミは教師に向いている。天職だと思う。」と言われその気になる。
- ・ 教員採用試験に失敗し、悔しいし、教員になりたい気持ちが強まる。
- ・ 担当教官は、「キミが本当に行きたい道に行きなさい。でも、ぼくはキミは教員に向いていると思うよ。」



(2) 赴任して

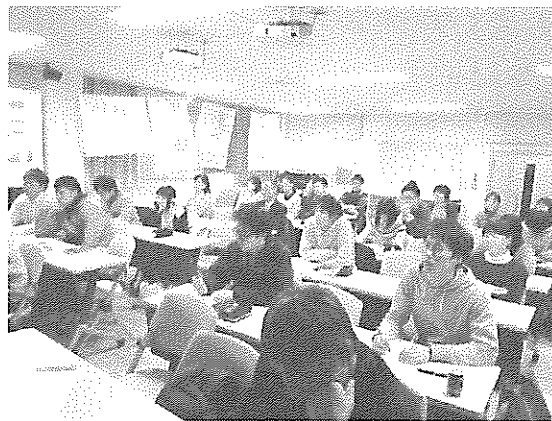
- ・ 大学を卒業し、常勤講師としての教員生活が始まることでわくわくしていたが、赴任する学校がどんな学校か誰も言ってくれない。「大変ですががんばってください。」との言葉に不安を感じる。
- ・ 想像以上に「荒れ」た子どもたちの姿に、大好きだったブルーハーツとイメージが重なる。やっていけるのかなあと不安になる。

(3) 教員生活をスタートして

- ・ 入学後の生徒の作文を見て驚く。
「私は本当はこの中学校に来たくなかった。」
「怖い中学だと聞いていたが、やっぱり怖いところだ。」
- ・ 1 年担任の言葉
「子どもたちはみんな、こんな学校に来たくなかったと思っているかもしれない。でも、私はこの子たちを 1000 日間担任したい。そして、卒業するときには、この学校に来てよかったと思わせたいと思っている。」
- ・ 授業中に 2・3 年生が邪魔をしに入ってくる。2・3 年生に対応できない。なめられている。授業ができず、なんのために教員になったのかと情けなくなる。
- ・ 教員間の話し合いでは、「授業が大事だ。きっちり授業していこう」という話になるが、私にはできない。生徒には毎日あいさつ代わりに蹴られる。いやでいやでたまらない。誰か助けてほしい。

・ 生徒が怖くて怖くてしかたなかった。やめたくてしかたなかった。講師だから 365 日間だけ我慢すればいいんだ。

・ 生徒と人間関係もつくれず、相変わらず授業もできず、情けない。



(4) 変わり目

・ チョークを全て窓から捨てられる。プリントを配っても火をつけられる。その生徒が外に連れ出されたので、安心して黒板に文字を書いているときに、

戻ってきた生徒に髪の毛に火をつけられた。学年主任が下に降ろしてくれた。「もうできません。」

・ 学年主任の言葉

「学校での姿見てたら、ろくでもない子ばかりやと思ってやる。でもそうじゃないねん。全然、違う面もある。もっともっと深いものがあるねん。」

・ 翌日、大学に行くと、指導教官が「でも、みんなそんな生徒なの？」

「たいていの子はまじめです。」「キミはキミの生徒を捨てるのか？キミは逃げられるけど、キミの生徒は逃げられるのか？」

・ 今まで、自分のことしか考えていなかったことに気がついた。自分のためにしか泣いたことがなかったことに気がついた。1 回でも子どものことを考えたことがあったのかと、自問し、子どもの見方が変わった。

・ 翌日、学校に行く

「よかった。先生、あんなことあったからやめるんちゃうかと思った。」

この子らのこと見なあかんやんと思ひ、「先生はやめへんよ」と、つい答えてしまう。

・ それ以来やんちゃな子にも声をかけられるようになっていき、子どもとの人間関係もできてきた。

(5) 学級集団づくり

・ 放課後の部活では、やんちゃな子どもたちの、違う姿もあることに気がついた。

・ 学校に来ると、まわりの目が気になって、やんちゃな自分をつくらないといけない面もある。でも、地域に帰ると枠が外れ、素の姿に戻ること気がついた。

・ 集団の力の影響力に気づき、質の高い集団づくりに取り組むようになる。午前中 4 時間の校外学活で生徒と一緒に遊び、学級集団づくりに取り組む。

・ 4 月に新規採用教員として、同じ学校に着任したときには、「この子らと一緒にいられる。」と思えるようになっていた。

(6) 同和（人権）教育推進教員に

・ 「差別はいけません。」「いじめは間違っています。」等、聖人君子のように話さなければならない道徳の授業をするのは嫌いだった。

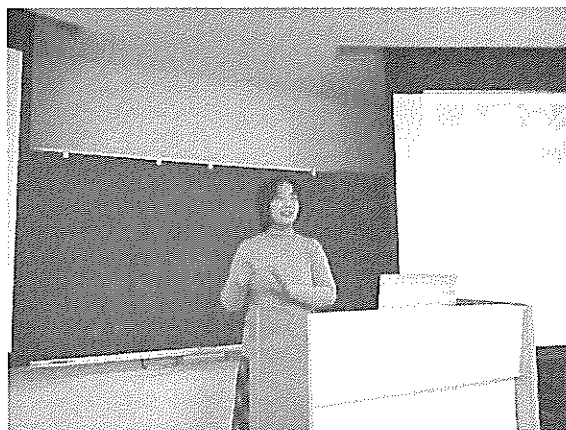
・ 早弁事件—部落問題との真の出会い。

運動会を抜け出し、早弁をしていた生徒の指導をめぐって、運動体から呼び出しがかかる。すごく情けなかったし、やっぱり部落は怖いと思った。

・ 生徒には「部落差別は間違っている」と言っているのに、部落の人を怖がっている自分がある。「自分は差別者だ」自分の差別性にはじめて気づかされた。教師をする資格がないと思ひ悩み、1 週間休んだ。すると、子どもたちが部屋までお見舞いに来てくれた。いい子たちだ。やっぱりやめ

たかないと思った。

- ・ 私は教員だけど、差別をする危険性がある。だからもっと人権について勉強しなければと思い、同和（人権）教育推進教員を希望した。
- ・ 何度も地区に足を運ぶようになり、見方が変わっていき「地域の大人たちは本当に子どもたちを大切にしている」ことがわかり、人間関係もできていき、同推教員としての喜びも感じた。
- ・ ふるさとを誇りに思う子どもたちを育てたいと思い、部落史の見直しの勉強を始めた。
- ・ 自分もなかまも大切にできる、心豊かな人間になろう。自分が好きだ、なかまが好きだ、A中が好きだ



(7) 2つのアプローチの重要性

- ・ 普遍的な視点からのアプローチ 自尊感情の育成を目標に
- ・ 個別の視点からのアプローチ 個が抱える問題の解決やその力の育成を目標に

【普遍的な視点からのアプローチ】

- ・ 日本の青少年は、自分自身に価値を感じている生徒が少ないという現状があり、それはいじめに関係している。自尊感情を高めることで、人権意識も高まり、人と接することも上手になる。
- ・ 自尊感情を高めること、人権意識を高めることが、他者と温かくつながりあうための基盤となる。
- ・ 若い先生の強みは、子どもとの距離が近いこと。子どもの声が聞けること。
- ・ 自尊感情が低い生徒は、いじめに会っても誰にも相談しないことが多く、危険だ。
- ・ まわりにいる大人・教員が子どもの声を聞き取れることが大切だ。

◎ いじめ被害者に届く言葉

- ・ つらかったね（共感）
- ・ よく話してくれたね（信頼してくれてありがとう）
- ・ 一緒に考えていこう（よりそう）

【個別の視点からのアプローチ】

- ・ 年齢、経験とともに教員の役割も変わっていくように思う。最近では、保護者の相談を受けるようになった。
- ・ 教員はチームワークが大切。それぞれの教員に果たすべき役割がある。
- ・ 色々な子どもがいる。子どもの声が聞ける教員になりたい。

(8) ESDとの接点

- ・ ESDはよりよい未来を、誰もが幸せになる未来を創る教育。

(9) 教師に必要な3つの条件（私見）

- ① 子どもが好きであること（受け入れることができる）
- ② アドバイザーをもつこと（特に若い間はしんどいことだらけ。相談できる人をもつこと）
- ③ 学校の外へ出て、色々な人とつながること
 - ・ 家庭訪問をすると、子どもの違う面を見ることができる。
 - ・ 地域の行事に参加することで、色々な子どもの姿を見ることができる。

- 他の学校のことを知ることも大切。



1. 目的

平成 23 年 6 月 3 日付で「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」関係省庁連絡会議において「我が国における『国連持続可能な開発のための教育の 10 年』実施計画（ESD 実施計画）」が改訂され、ESD の普及、特に教育機関における推進が求められている。

本学においては、文化遺産を切り口とした ESD である「世界遺産教育」の実践的研究に取り組み、地域の E S D センター校としての自覚のもとに、ユネスコスクール研修会として、世界遺産教育講演会を開催する。

2. 開催日時 平成 26 年 1 月 26 日（日）14 時～17 時

3. 会場 奈良教育大学大会議室

4. 参加者数 30 名

5. 演題 「学校教育全体で取り組む ESD」

講師 東京都江東区立八名川小学校 校長 手島 利夫 氏

6. 内容

（1）ユネスコと ESD

- ・ ユネスコは諸国民の教育、科学、文化の協力と交流 を通じて、国際平和と人類の福祉の促進を目的とした国際連合の専門機関であり、ユネスコの重要課題が E S D だ。
- ・ 地球規模の課題があり、その解決のためにユネスコとして何ができるか。そこから生まれたのが ESD だ。ESD は未来をつくる教育だ。
- ・ ユネスコスクールは現在、世界 180 か国に 9000 校あり、日本には 647 校ある。ESD の推進拠点として期待されている。



（2）ESD に取り組む意味

- ・ 何のために学ぶのかを考える。自分が安泰な暮らしをするために学ぶという答えがよくあるが、それだけ終わってしまっていていいのか。子どもたちがどういう時代に生き、どんな課題をかかえているのかから、学ぶ意味を考える必要がある。
- ・ 課題
 - ① 大震災：東京や関西でも巨大地震の発生が予想されているが、実際に発生した時どうすればいいのか。解決できていない。
 - ② 福島第一発電所のような原発事故は、日本中の原発で発生する可能性がある。原発事故を防ぐ方法も解決できていない
 - ③ 温暖化が、地球全体で生じている。年々ひどくなっていくと予想されており、事実、そうなっ

てきている。

- ・ 皆が安心して暮らすことができる世の中であってほしい。教育だけで解決できないのかもしれないけれど、教育でも考えていかなければならない。
- ・ 子どもたちは、厳しい地球環境、激変する不安定な世界で生きていかななくてはならない。
- ・ 日本の子どもたちがかかえる課題
 - ・ 自らに自信をもてない みんなと一緒に行動したがる
 - ・ 人間関係をうまく築けない
 - ・ 目立つことを極端に恐れる（挙手・発言すらしない）「しゃしゃってると言われたくない」
 - ・ 厳しいことから逃避しがち（ネットゲームに逃げ込んで・・・）
- ・ 必ずしも明るい未来ではないが、厳しい時代を生き抜いていく力をつけていきたい。

① 厳しい就職戦線

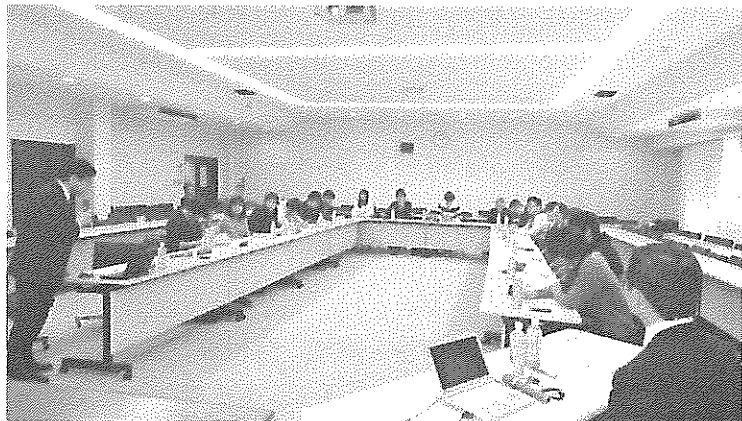
② グローバルな労働市場

- ・ 外国語で意志疎通する力
- ・ 相手の文化や人柄を理解する力
- ・ 協力して、新しいものを創っていく力 → 高い能力が求められている

③ 多文化共生社会

④ 厳しい地球環境、激変する不安定な世界

- ・ 厳しい時代を生きる子どもたちに求められる能力は、①新しい問題を見つけチャレンジできる問題解決能力、②創造的なコミュニケーション能力であり、それを支える健康や体力である。それはつまり文科省の言う「生きる力」であり、ESD でめざす子ども像と同じだ。
- ・ 「生きる力」の教育はすべての学校で取り組まなければならない緊急の課題であるが、どのように進めたらいいのかが明らかでない。だからこそ、ESD の理念や手法が重要だ。
- ・ ESD に取り組む理由は、困難な時代をたくましく生き抜く日本人を育てるため。



(3) ESD に取り組むことで生まれる価値

① 学校にとって（アンケート結果より）

- ・ 学校教育方針が明確化（85%）
- ・ 活動の活発化（55%）
- ・ 開かれた学校に（35%）
- ・ 教育方法の改善（26%）
- ・ 学校の教育方針が明確化されることはとても重要だ。学校教育全体で取り組むべき「生きる力」をどこで育てるのがはっきりしていないのでは、それは実現できない。全体で取り組むというボンヤリしたものが、ESD カレンダーを作成することで明らかになっていく。
- ・ 教育方法の改善が26%しかないのは問題だ。

② 教師にとって：教育観・指導観が変わり、教師としての資質向上

- ・ 持続可能な世界のための4つの視点で教科領域の学びをつなぎ、ESDカレンダーに表現する。
 - i 環境の教育
 - ii 国際的な協力
 - iii 多文化の理解
 - iv 人権・命の教育

環境問題解決には国際的な協力が必要。協力するためには、互いの文化を尊重し人間として尊重し合う信頼関係が大切。そして人が人として生きていくには環境が重要というように、4つの視点は相互に関連しあっている。

- ・ 1年間の各教科の単元をつないでイメージマップをつくる。各教科をつないでいく。その際、4つの視点で色分けする。生活科や総合的な学習の時間は、各教科をつないでいく時間、教科で学んだ内容を「活用」する場となる。「活用」にあたるものは白枠にして表す。
- ・ さらに総合的な学習の時間の学習指導要領から、4つの視点を改善し、①環境の教育、②国際理解や協力、③人権・命の教育、④学習スキルとした。

環境：環境の諸問題、水、ごみ、動植物や生態系、災害、エネルギー、放射能、食料生産

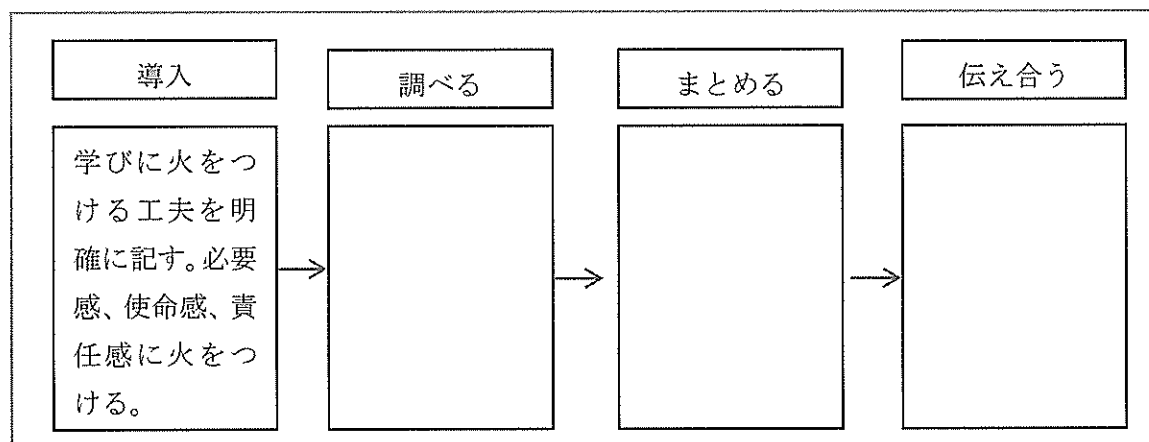
国際理解や協力：多文化理解、国際協力、地域の人々の暮らし、伝統や文化、異質への寛容

人権や命：福祉、健康、バリアフリー、生命、人権、災害

学習スキル：情報、表やグラフ、新聞づくり、論文・説明文の書き方、インタビューの仕方

- ・ ESDカレンダーはみんなで創ることに意味がある。人は体験をとおして納得する。発想だけで納得させるのは難しい。体験させて、そこから転換の芽を育てる。
- ・ 地域人材との連携を通して、教員に学習コーディネーターとしての力が付く。
- ・ 地域人材との連携をカリキュラムに明示することで、誰とつながればいいのか分かる。
- ・ カレンダーがあると、カリキュラム内で軽重をつける計画を立てることができる。あるレベル以上の取組が可能となる。
- ・ フォルダ内に指導資料を蓄積・活用する。ただし単に模倣するのではなく、これを乗り越えていく土台として使うこと。(システムが重要。一人でできることは限りがある)
- ・ 問題解決型の学習の充実を図ることができる。

指導計画案の様式



火をつけるには、もっている知識にあれっ、これでいいのかなと思わせ、調べてみようという意

欲を喚起する。知識のつめこみは明治の教育。

③ 児童にとっての価値

- ・ 総合的な学習の時間をしっかり取り組んでいる学校の児童生徒は学力も高い傾向が見られる（特にB問題）。
- ・ 正答のない問題を考えることで、中身でものを考え、アイデアを出し合える雰囲気づくり。

④ 保護者・地域にとって

- ・ 保護者が変わっていく。参観していた人が参画するようになっていく。

【質疑】

① ESD の研修のしかた

- ・ 校内研究組織。学年部会において年間1つの研究授業をつくる。その指導計画の中に「ESDの視点」を書き込むことにしておくことで、学年内でESDの話し合いがされる。

② ESDにおける小中の連携

- ・ 模索中です。

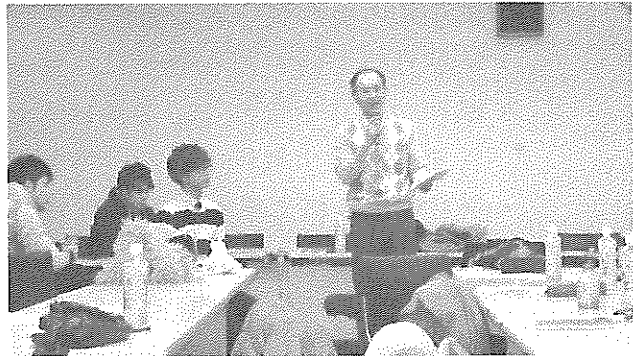
③ 学生のために勉強しておいた方がいいこと

- ・ 若手教員が増えて、先輩に頼れなくなってきている（レベルの低下、頼りにならない）。視野を広く持って、色々な研究の場に自分から参加する。学会にも所属する。未来の自分に投資する。

【グループディスカッション】

仲間や教員にESDの火をつける

- ・ 教員は誰でもいい授業がしたいと思っているもの。やって見せて、子どもの変化を見せること教員は動き出す。遠回りでも、本質を追究していくことが結局は近道になる。



1. 開催日時 平成 26 年 2 月 13 日 (木) 19:00~20:30
2. 会場 奈良教育大学教職大学院 つばさ教室
3. 参加者数 25 名
4. 講演内容

演題「理科の学習指導で大切にしたいこと」

講師：奈良県教育委員会事務局学校教育課 指導主事 勝谷征彦 氏



- (1) 考えること・発見することが面白いと思うことから始める
 - ・理科の指導に関して苦手意識をもつ教員が多いが、特別な能力が必要というわけではない。まず、教員自身が身近な草花や自然現象などに興味をもつことが大切。
- (2) 学級経営の視点から考える
 - ・子どものよいところや発想の豊かさをほめる。
 - ・様々な発言や考えなどを受け入れる学級の雰囲気をつくる。(子どもの発想や発言を引き出す教員の心がけや気配り)
 - ・子どもが自由に発言できるための話合いのルールを作る。
- (3) 授業展開の構想をもつ
 - ・問題の把握 (子ども自身が解決したいと思える問題)
 - ・予想・仮説 (今までの経験を思い出させる)
 - ・実験・観察 (予想や仮説を証明するための体験活動)
 - ・子どもの考えを生かした結論の導出 (予想・仮説の検証)
- (4) 学習問題の設定の重要性
 - ・「？」で終わる問題を設定する
 - 例) 「アオムシの育ち方のひみつを調べよう」ではなく、
「アオムシはどのように育ってモンシロチョウになるのだろうか？」

(5) 学び合う学習のために

- ・誰がどのように考えているのか、自分の考えは何かを意識させるため、発言者の名前を黒板に示す。(マグネット等)
- ・「～だと思える人？」と質問して、子どもに挙手させたときは、人数を数えるとよい。子どもは自分の考えを意識でき、教員は子どもの考えを把握できる。

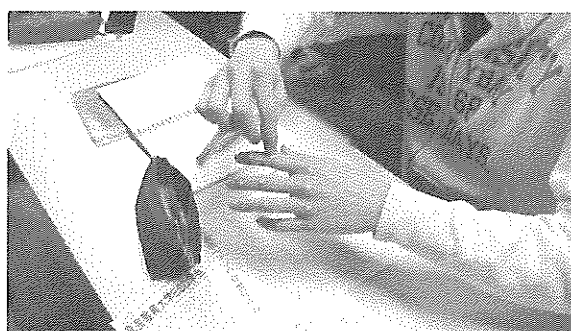
(6) 実感を伴った理解を図る授業例

単元名 人の体のつくりと運動 (第4学年)

問題例

- ・人の体は、どのようなつくりになっているのだろうか？
- ・自分の手で、曲がる場所は、どれくらいあるのだろうか？等

① 自分の手にシールを貼ることで、目に見える形で関節を発見する。



② 手に貼ったシールをワークシートに貼り替え、手のひらの関節を記録する。

③ 関節の間には骨があることに気付く。

④ 体を曲げられるところは、骨と骨のつなぎ目(関節)であることが分かる。

(7) 本時の学びを振り返ることの大切さ

- ・振り返りをさせるには、本時のめあて(問題)を明確に示しておく。
- ・板書を大切にす。(学習の流れが分かりやすく書かれているか、子どもの発言が効果的に記されているか)
- ・振り返りは本時のねらいに沿ってさせる。(理科の学習としての振り返り)
- ・教員は、子どものがんばりやよかった点(考え、学び方)をほめる。→今後の習への取り組みせ方を見通す。

5. フロアからの質問

質問：どのような導入をすれば子どもが興味をもつのか。

勝谷氏：この導入をすれば子どもは必ず興味をもつかというと、そうとは限らないが、実際に体験させて、驚いたり、不思議に思ったり、発見したりする時間を子どもと共有してもらいたい。自分自身、うまくいかずに反省することもあった。教員を目指している方々が多く来られているが、教材との出会いを大切にして授業を行っていただきたい。

平成25年度森林環境教育体験

洞川中学校との連携によるESDの授業づくり体験 実施要項

1. 目的

本学では、歴史文化遺産を通じたESDを研究しており、世界遺産に登録されている建造物や伝統行事等の教材開発を行っている。一方、天川村立洞川中学校は、ユネスコスクールへの申請を目標に地域の文化遺産を活用した総合的な学習の時間の授業づくりに取り組んでおられる。この取組への協力を通して、歴史文化遺産の教材化の経験、さらに実際の授業化の経験、また生徒や教員とのふれあいを通して現場体験などが期待できる。また、洞川中学校は山間に位置する僻地校であり、僻地教育や森林環境教育に接する機会でもある。洞川中学校での地域遺産を活用した授業づくりと本学学生にとって有意義な教育体験に資することを目的に、本事業を展開する。

2. 主催

平成25年度奈良教育大学「地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化」プロジェクト

テーマ1 総合的な連携・協働による実践的指導力を育成する「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員養成カリキュラムの開発・試行的実施等、教員養成の高度化

3. 協力

天川村立洞川中学校

4. 内容

世界遺産である「紀伊山地の霊場と参詣道」の教材化、修験道の祖である役行者の教材化
行者祭りなど、地域の伝統行事の教材化

5. 活動の実際

- 第1回 6月6日 生徒との交流、総合的な学習の時間の展開を検討
- 第2回 6月19日 総合的な学習の時間参加（龍泉寺での研修）
- 第3回 7月5日 地域でのボランティア活動を通じた地域人材との交流
- 第4回 7月10日 校外学習支援（吉祥草寺訪問・葛城山登山）
- 第5回 7月17日 ESD教材開発についての協議
- 第6回 8月2-3日 行者祭りの鬼踊り支援
- 第7回 9月14日 中学校区ふれあい体育祭支援

6. これまでの学びと今後の方向性

- ・ 僻地校ならではの課題や教員の努力を学んだ。
- ・ 中山間地が抱える課題・林業の現状を知ることができた。
- ・ 地域遺産の教材化や授業での活かし方を目の当たりにすることができたが、ふるさと学習としてではなく、ESDとしての授業化に課題がある。地域を愛する心の育成と共に、持続可能な地域づくりへと生徒の関心を高め、行動化につなげる方策を検討していきたい。

天川村立洞川中学校交流企画

～学校訪問～

日程 : 2013.5.26

場所 : 天川村立洞川中学校

支援者 : 中澤哲也

内容

今回初めて天川村立洞川中学校に訪問させてもらった。訪問目的は森脇校長先生とお会いし、ユネスコクラブがどのように関わっていくかの確認であった。洞川中学校では今年度から、教諭である川内先生が主体となって、学校にESDを取り入れる動きが見られるほか、ユネスコスクールとして申請する動きも見られた。今年1年かけて、ユネスコクラブも洞川中学校の総合学習に関わりながら、その2つの動きを手助けできればと考えている。

変更点

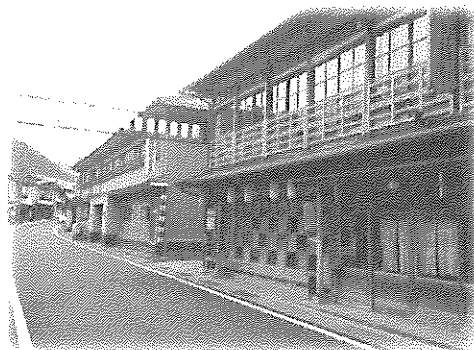
1年生の総合学習の内容が『行者祭り』から洞川村では大変崇められている『役の行者』になろうとしている。行事から人物に視点が変わったのだ。

学校の特徴

ここの中学校は奈良県で最も地域が密着している学校であると森脇校長先生がおっしゃっていた。普通、へき地の中学校はスクールバス利用のため、放課後は帰宅してから友達と会うことはできないが、ここは地域の子も通っていないので、放課後、休日はいつでも一緒に遊べる。また、昔から人も代わらず住んでいるため、近所の人たちはみんな知り合いであり、地域で子どもを見ることができるといふ。これは都会の学校が目指す姿ではないだろうか。村の学校ならではの利点である。私が訪問した時も、中学生が部活動しているグラウンドで帰宅した小学生がみんなで遊んでいる光景がうかがえた。

川内先生に地域を案内していただいた。洞川村は旅館街であり、老舗の立派な旅館が立ち並んでいた。温泉もあり、シーズンには大変なにぎわいであることが予想される。道のところどころに村のマスコット(?)である鬼の石造や、地域に伝わる昔話が書かれた看板が立てかけられており、地域全体で村をにぎやかにしている様子であった。

村の子どもは昔からの生活に慣れているのでこういったことがあたり前であると感じているらしい。そうではなく、自分たちはこんなにすばらしい地域でくらしているということを、外からの視点を教えながら気づいてもらいたい。



第1回 天川村立洞川中学校への訪問交流報告書

日時 : 2013年6月6日(木)

場所 : 天川村立洞川中学校

支援者 : 中澤哲也 横井まどか

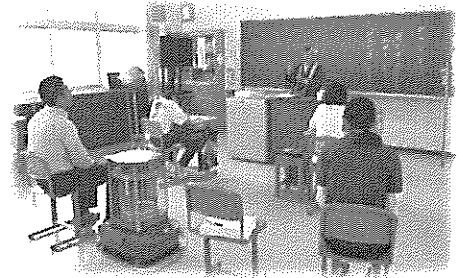
活動内容 : ①全校生徒へのあいさつ ②1年生の授業参加 ③昼食会 ④清掃活動

①全校生徒へのあいさつ

業間休みに、集会室にて全校生徒へのあいさつの場を設けていただいた。生徒とは初めての対面であり、これから交流するにあたり、早く顔を覚えてもらうために貴重な時間となった。

②1年生の授業参加

今回初めて1年生の総合学習の授業に参加させていただいた。総合学習のテーマは世界遺産である大峯山を開いた「役行者様」について。今回は1年生の生徒の祖父である増谷孝司さんがゲストティーチャーとして「役行者さんについて」お話していただいた。増谷さんは実際に修験道の衣装を着てこられるなどインパクトある登場であった。お話の内容は役行者様の話だけでなく、天川村で育った増谷さんのお話や、修験道の衣装や道具の説明など、これからの学習をさらに深めるものであった。

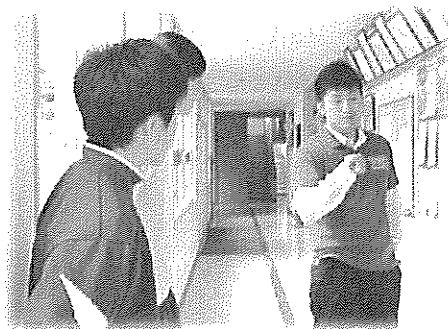


③昼食会

洞川中学校の給食はランチルームにて全校生徒だけでなく、先生方とも一緒に食べており、私たちユネスコクラブ員も一緒に机を囲んで昼食をいただいた。やはり、小さい頃から同じ地域で暮らしているのもあり、1年生から3年生、男子女子も仲良が良かったように感じた。また、一番驚いたことは生徒と先生との距離が近く信頼感も強いように見えた。同じ空間で過ごす時間が長い分、人と人のつながりも深くなるということを実感した。

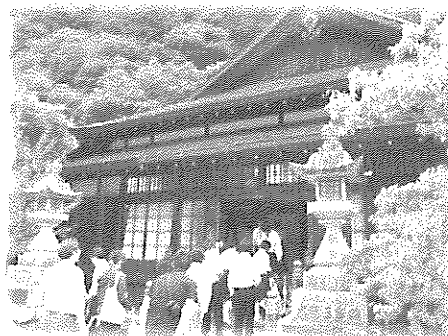
④清掃活動

給食後の清掃活動にも参加。生徒数が少ないため、毎日すべての教室が清掃しきれないというのが課題であったが、自分の清掃場所がしっかりと決まっている分、責任感を持って日々の清掃に取り組めるのではと感じた。普段から先生方も一緒に教室清掃に取り組まれており、そういった中でも何気ない会話を通して、生徒との距離を縮めておられるのではないかと感じた。



第2回 天川村立洞川中学校への訪問交流報告書

日時 : 2013年6月19日(水)
場所 : 天川村立洞川中学校・龍泉寺
支援者 : 中澤哲也 横井まどか
活動内容 : ①龍泉寺での研修 ②終わりの会
③今後の授業展開の打ち合わせ



① 龍泉寺での研修

今回は天川村立洞川中学校から少し歩いた龍泉寺で岡田住職さんの役行者にまつわるお話を聞く活動であった。生徒は総合的な活動の時間の中の「ふるさと学習」、教員にとっては職員研修といった、生徒と教員が地域と一緒に学ぶ機会を設けられていた。岡田さんのお話を熱心に聞く生徒の後ろで、さらに熱心にお話を聞かれている先生方の学ぶ姿勢を見て、私自身大変刺激になった。



課題に対して、生徒だけが学びの対象者になるのではなく、教員も同じ、もしくは生徒よりは少しだけ知識をもったベテラン研究者として取り組むことがESD的な学習方法であると言われており、まさしくそれが実践化されている現場であると感じた。内容に関しては、以前増谷さんから聞くことができなかった、行者祭りの起源を聞くことができたことが大きな収穫であった。やはり行者祭りの神髄には鬼踊りがあり、それが今でも

地域全体で大切に受け継がれていることがまさしく世代間の公正でありESDである。これをさらに世代内の公正にしていくために、「発信」ということに重点を置いて活動していくことが持続可能な社会を築いていくことにつながるのではないかと考える。

② 終わりの会

1年生の終わりの会に参加さしてもらった。一つの机を囲み、教員も生徒も顔が向き合える空間を創られていた。1日の最後に生徒の表情をしっかりと見ることができ、何かいつもと体調や顔つきが違うかといった些細なことに気づけるので、少人数学級ならではの素晴らしいところであると感じた。

③ 今後の授業展開の打ち合わせ

最後に1年生の先生方と今後の打ち合わせを行なった。発表の内容や今後の学習で何に重点を置いていくかといった方向性を明確にしていった。こういった打ち合わせを密に行ない、時間をかけることがすべて子どもにかえていくのだと感じた。しかし、現場の先生方、特に中学校では、なかなか学年で打ち合わせをする機会もとれず、学年としてのビジョンがあいまいなままになってしまうことも多々あると言うことを聞いていた。やはり、子どもにとって、意味があり、次につながるができる学習にしていくために、教員同士の時間をしっかりと確保していきたいと今回の打ち合わせに参加さしてもらい感じることができた。今後も打ち合わせを行なう中で、子どもにとって、役行者の学習を通して最高のかたちで地域を愛する心を育めるようにしていきたい。

第3回 天川村立洞川中学校への訪問交流報告書

日時 : 2013年7月5日(金)

場所 : 天川村立洞川中学校

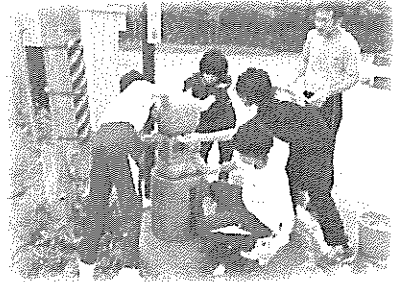
支援者 : 中澤哲也

活動内容 : ①地域のボランティア清掃 ②バーベキュー親睦会

① 地域のボランティア清掃

今回は全校生徒と先生方といった学校全体で地域の清掃活動に取り組んだ。私の班は洞川村の旅館が立ち並ぶ「行者さん通り」のあちこちに設置されている鬼の石像と、カーブミラーの清掃であった。実際、一緒に参加させていただいて私自身気がついたことが三点ある。

一つ目は、地域を「見つめる」ということである。一番始めの石像とカーブミラーを見たとき、生徒たちは口をそろえて「こんなに汚いのか」と言っていた。石像もカーブミラーも普段から当たり前のように前を通り過ぎていたのに、このときまでその汚れに気がついていなかったのである。このように今回は「清掃する」という視点をもって地域を見つめたことで、いつも「見ていたつもり」になってしまっていたことに気づいたのではないかと考える。



二つ目に、自分ごととして考えるということである。自分たちの地域を自分たちの手できれいにしたことで、自分は地域の一部であるということを実感したのではないだろうか。清掃後に一人の生徒が「こんな大変な掃除を村の人は毎日しているねんなあ」と改めて地域の人々への尊敬のまなざしが向けられるようになっていた。今回は清掃活動であったが、現在、総合的な学習で行なわれている地域学習を通して、さらに地域を大切に思う心を育ててほしいと考える。

三つ目に、洞川村のつながりのすばらしさについてである。行者通りの清掃を行なっているとき、旅館の人や道行く人が「ご苦労さん」「ありがとう」といったように、ねぎらいの言葉をかけてくださるのであった。そのうえ、新しい雑巾や、ジュースの差し入れをしてくださる方もおられた。今回のボランティア清掃は学校行事の一環として取り組んだことであったが、生徒たちはねぎらいの声をかけてもらったり、差し入れをもらったりなど、自分たちの活動が地域の人たちに感謝の気持ちとして受け入れられているということを実感したとを感じる。こういった実感は、後に自らボランティア活動に参加しようという心起こしのきっかけになると考える。

以上のように地域の清掃活動一つにおいても生徒自身が成長するチャンスがたくさんあることに一緒に活動に参加して気づくことができた。

② バーベキュー親睦会

地域のボランティア清掃のあとに全校生徒と教員とでバーベキューが行なわれた。お肉や野菜だけでなく、洞川村の郷土料理である「いもぼた」を食べることができた。バーベキュー中も先生方は生徒た



ちにいくつかの配慮をされていたが、とくに私の中で印象に残ったことは、強風を防ぐために、車をテントに横付けしたことである。生徒たちが安全に生活できるように、常にアンテナを張りめぐらし、心遣いをされていた洞川中学校の先生方の動きや働きかけはこれから教員を目指す私にとって、たいへん勉強になる空間であった。

第4回 天川村立洞川中学校への訪問交流報告書

日時 : 2013年7月10日(水)

場所 : 吉祥草寺(茅原)、葛城山

支援者 : 中澤哲也

活動内容 : ①校外学習について ②吉祥草寺訪問 ③葛城山登山



①校外学習について

今回、1年生の総合校外学習に参加させてもらった。中学校の校外学習に参加するのは初めてのことであり、私にとっても役行者に関すること以外でもたくさん学ぶものがあった。校外学習において一番のキーワードは「現地」であると思う。これまで役行者について、学校にゲストティーチャーを招いたり、龍泉寺で住職さんのお話を聞いたり主として座学を中心に行なってきた。しかし今回は自分が外に出て、実際に役行者が生まれた吉祥草寺や、役行者が修行されたと言われている葛城山へ訪れるなど、自分の五感を通して、役行者を感じ取ることができたのではと考える。また、1年生は校外学習に行く前に国語の授業で、インタビューのメモの取り方を学習していた。このように、教科や行事を独立させて学んでいくのではなく、総合学習のテーマを中心に、教科を超えて学んでいける「教科横断型のカリキュラム」がESDを進めていくにあたって求められてくると思う。

②吉祥草寺訪問

吉祥草寺では「行者産湯の井戸」や「腰掛け石」など、役行者にまつわるものがたくさん残されていた。「腰掛け石」は今でも修行前に修験さんが腰を掛けに来るらしい。今回私たちも腰を掛けてみたが、不思議なことに石に腰掛けたみんなが笑顔になったのである。また、予想以上に座り心地がよく、地域の方々がここで健康を祈りに来るという話も納得できた。



住職さんのお話では、吉祥草寺の大とんどは、洞川の行者祭りとの起源が似ており、役行者が冤罪で伊豆に流され、その罪がはれて奈良に帰ってきた時に茅原の地域の方々が喜んではじめられたのだという。そのお話からわかることは役行者がそれほど人々に愛されていたことである。そこまで人々に愛されていた背景に、いかに役行者が人々がどうすれば幸せに暮らせることができるかを常に考え、行動していたからであることが読み取れる。総合学習を通して、ただ「役行者についての学び」だけでなく、「役行者を通しての学び」の部分も生徒たちに学んでほしい。

③葛城山登山



中学校は教科担任制のため、普段は授業以外に生徒と関わる時間が限られている。しかし校外学習では生徒と1日中同行するため、今まで見えなかった生徒の一面を見られる機会でもある。私も1日同行させてもらい、生徒の新たな一面に出会うことができた。

葛城山の頂上は大変気持ちよく、生徒は寝転がったり、看板の上に登ったりとさらに自然を感じようとしているようだった。頂上からの眺めもすばらしく、この景色を眺めながら人々の幸せを考えていたのだと、役行者について想いを馳せることができたと思う。

第5回 天川村立洞川中学校への訪問交流報告書

日時 : 2013年7月17日(水)

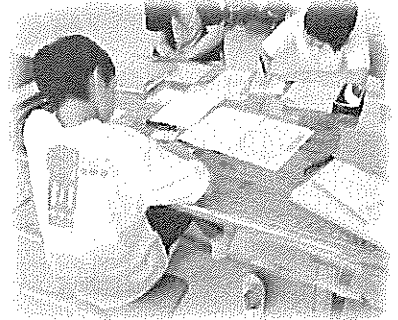
場所 : 天川村立洞川中学校

支援者 : 中澤哲也

活動内容 : ①お礼状書き ②ESDの教材化について ③今後の方向性

① お礼状書き

今回は校外学習で役行者についてのお話をしてくださった吉祥草寺の山田住職さんへのお礼状書きを中心に授業が行なわれた。生徒たちはお礼状を書くことが初めてだったらしく、何から書きはじめるか、何を書けば良いのかなど、始めは困惑していたが、自分の言葉で書くということを心がけながら丁寧に書いている様子であった。また、8月の行者祭りや、11月の報告会にもぜひ来てほしいという声もあった。



「役行者」について調べていく中で、1学期の間だけでも、たくさんの人と生徒たちは出会ったのではないかと考える。ゲストティーチャーの増谷さんや、龍泉寺の住職さんなどは普段お会いしているが、授業を通して新しい一面を見ることができたのではないだろうか。夏休みは行者祭りや2学期からの取組で地域の方とさらに関わっていくことになっている。このように「役行者」を通してたくさんの人と出会い、つながることができた。これは今後の学習がより良いものになっていくだけでなく、生徒たちが学校生活以外でも必ずいい形として返ってくると考える。

② ESDの教材化

ESD教材を考える際、「3つのつながり」をふまえることが大切であると考え。一つ目は「教科とのつながり」である。ESDの教科だけが単独で進められていくのではなく、教科を横断して取組が進められていくことが大切である。二つ目は「人とのつながり」である。今回の役行者のようにその単元を通して、ゲストティーチャーなど子ども達が普段は出会うことのない人とつながれるきっかけを取り入れていく。また、同じ教室でも、グループワークなどを通して自分とは違う考えの友達の意見を知ること、立派な出会いであると考え。三つ目は「能力・態度のつながり」である。その単元を通して、子どもが持続可能な社会の担い手になる能力・態度を身につくのかを十分考慮していくことが大切であると考え。

③ 今後の方向性



放課後は1学期を終え、夏休み、2学期に向けての方向性の確認が行なわれた。洞川村の子どもたちのほとんどの家は家業を営んでおられるため、夏休みはそのお手伝いで大忙しである。今年の行者祭りも例年通り家のお手伝いや、祭りの行列などで、落ち着いてはられないが、1学期間行者祭りの起源である役行者について学んできたこともあって、普段とは違う視点を持って祭りを見て楽しんでほしい。例えば、その祭りを受け継いできている地域の方々の祭りに対する姿勢やまなざし、祭りに込める想いなどを感じ取ってほしい。その経験が2学期からの学習にも大きく関わってくるだろう。

第6回 天川村立洞川中学校への訪問交流報告書

日時 : 2013年8月3日(土)

場所 : 天川村立洞川

支援者 : 中澤哲也 横井まどか 島俊彦 竹田隼也

後藤田洋介 糸あやか 古谷悠貴

活動内容 : ①行者祭りの鬼踊りサポート

②行者祭りを通して



① 行者祭り鬼踊り学生リーダー

冤罪の罪をきせられた役行者が伊豆に流され、後に罪がはれて洞川に帰ってきたときに、役行者の手下である前鬼、後鬼が喜んで踊り始めたことが起源といわれている行者祭り。以来毎年、洞川村で伝統的な行事として行なわれているこの祭りに、私たち奈良教育大学ユネスコクラブは参画者として関わらせてもらうことができた。行者祭りでは洞川村の旅館街をひょっこり踊りや、和太鼓などの行列が渡り歩き、地域の人だけでなく、観光客もそれを見て昔ながらの祭りの良さを感じ取っているように思えた。その中で奈良教育大学ユネスコクラブの学生は、前鬼と後鬼が踊ったと言われる鬼踊りのサポートをさせてもらった。今年の鬼踊りは主に小学生から中学生の子ども達が参加し、ユネスコクラブ員はその学生リーダーとなり、子どもたちの心起こし役として抜擢された。本番でははっぴを着て、鬼の面をつけ、太鼓や鈴を持ちながら『わっしょい、わっしょい』と声を掛け合い、にぎやかに旅館街を渡り歩いた。

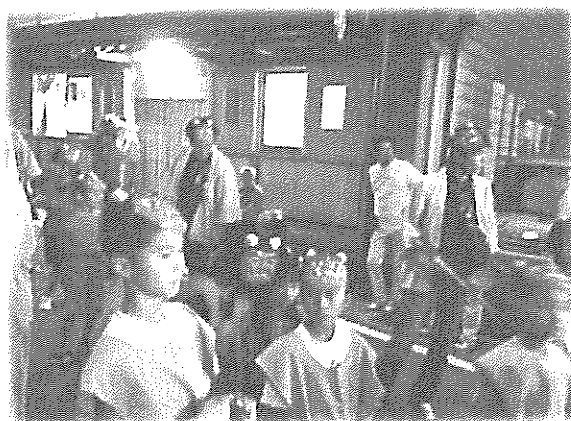
学生リーダーとして心がけたことは2つある。1つ目は学生リーダーが祭りをおもいきり楽しむということである。祭りの楽しさを全身で表現し、かけ声を出すことで、それが子どもたちの見本になるだけでなく、子どもも恥ずかしがらずに大きな声を出せる空間ができるからである。2つ目は本番前や休憩中に子どもたちの中に積極的に入り、声をかけていたことである。子どもたちとの心の距離をだんだんと縮めていくなかで、お互いの中に一緒に祭りを創り上げていくという意識を高めあえたのではないかと考える。

② 行者祭りを通して

行者祭りを通して、私が感じたことは次の3つである。1つ目が地域について、2つ目に持続性についてである。

まず1つ目の地域についてである。洞川村では行者祭りが近づいてくると、それぞれ地域内団体ごとに踊りの練習頻度が高くなっていく。中学校1年生の2人もそれぞれひょっこり踊りと和太鼓の団体に所属し、毎晩遅くまで練習を行っていると聞いていた。その熱の入った練習の源は、地域の方々の行者祭りに対する想いであると考えられる。これまで受け継がれてきた伝統ある祭りを次は自分たちで受け継いでいくのであるという当事者意識によって素晴らしい祭りが創り上げていくのであろう。また、洞川村は観光資源によって成り立ってきたということもあり、祭りの時期には村のあちらこちらに提灯を飾って、観光客をおもてなししていた。このように、洞川村では行者祭りを中心として、自分たちの地域を大切に守っているのではないかと感じた。

2つ目に持続性についてである。洞川村では現在少子化の問題が深刻化している。2007年には天川村立洞川中学校に隣接していた天川村立洞川小学校が少子化のため隣村の天川村立天川小学校と統合している。洞川村では高校に入るとほとんどの子どもが登校距離の問題のため村を出ての寮生活をしいられるため、村の元気がますます失われてしまう恐れがあるのである。したがって、行者祭りに参加する子どもの数が減っていき、行者祭りは持続不可能になるのではないかとすることも考えられるのである。そういった重大な問題を抱えている一方、私は祭りを通してある驚きを発見した。鬼踊りの参加者の中に洞川村の子ども以外に、他府県からの子どもが多数参加していたことである。合宿で来ていた中学生や、祖父母に会いに里帰りに来た子ども、家族でキャンプに来ていた子どもなど、それぞれの理由で洞川村を訪れていた子どもたちも行者祭りの参列に参加していたのである。このように地域の子どもたちだけでなく、他の地域の子どもも伝統ある祭りに参加することで、伝統が受け継がれていく素晴らしさや、地域のつながりを感じとり、自分の地域にも関心が高まるのではないかと考える。



【地域をこえてつながる子どもたち】



【伝統ある踊りに誇りをもつ子どもたち】

第7回 天川村立洞川中学校への訪問交流報告書

日時 : 2013年9月14日(土)

場所 : 天川村立洞川

支援者: 中澤哲也 横井まどか 島俊彦

活動内容: ①洞川中学校ふれあい体育祭

②洞川中学校を通して

① 洞川中学校ふれあい体育祭

9月14日に天川村立洞川中学校の体育祭に参加させていただいた。8月の行者祭以来だったが、洞川村にはすでに秋が訪れており、大変心地よい環境で体育祭を行なうことができた。今回洞川中学校の体育祭に参加させていただき、自分の中で大きな学びであったことを2つあげて述べたい。1つは地域について、もう1つは教員の動きについてである。

まず1つ目の地域についてである。洞川中学校の体育祭は今まで私が経験してきたような学校の行事ではなく、洞川の地域全体の行事に感じられた。村中の人々が運動場に訪れており、なにより小学生が低学年から高学年まで揃って訪れていたことが印象的であった。普通中学校の体育祭は小学校6年生が体験として中学生の種目に少し出場する場面は見たことがあったが、低学年の子どもたちも一緒に種目に出場しているのを見たのは初めてであった。また、地域のお年寄り、保護者、教員など全員が参加できるプログラムが組まれており、村の大運動会と表すことができると感じた。毎年この機会に地域全体が子どもたちの成長を見守っている様子がうかがえた。洞川中学校の生徒の礼儀正しさの背景には、こういった地域に見守られているという空間を認識できる環境があるおかげでと感じた。

2つ目に教員の動きについてである。これは今年の夏に行なわれたASPキャンプでも自分の課題となったことだが、現場の教員の「先を読む力」を今回は間近で見ることができた。野外活動と同じように体育大会も特に教員の「先を読む力」が求められるのではないだろうか。生徒の体調管理はもちろん、円滑にプログラムを進めるための準備、保護者席や本部席といった運動場内の設置など、盛りだくさんである。しかし、そこを教員だけで動くのではなく、当日は生徒に的確な指示をだし、生徒と共に体育祭を創っていくように心がけておられたことが印象的であった。

②洞川中学校体育祭を通して

洞川中学校の生徒たちは大変礼儀正しく、素直であり、友達思いであると、5月からの関わりで感じられたことであった。また、今回の体育祭でもそういったことを強く感じさせる場面があった。1年生の男の子が自分の色団が負けたことに落ち込んでいたので、「来年また頑張ろう」といった声かけをすると、「3年生を勝たしてあげたかったです」という返事が返ってきた。これは洞川中学校の1年生から3年生のつながりがどれだけ強いかを感じさせてくれる言葉であった。彼はこの中学校でのつながりを一生大切にすると感じた。

体育祭終了後、片付けや終わりの会が済み、下校の時間になって校庭を見ると、3年生が校門前の遊具に集まって、一向に帰らず話していた様子に大変心を打たれた。なんとなく過ぎていく中学校や村での生活が、体育祭という行事を通じて、自分たちの中でその大切さ、すばらしさ、そして地域に対する愛

着に気づいてきたのではないだろうか。よく学校現場では行事を通じて学級の団結力を強めようと教員が意図的に計画を立てると聞いたことがあるが、この中学校にはそれは必要ないのではと感じる。それだけ地域という空間が彼らを支え、愛していることを彼ら自身が感じとることができているからではないだろうか。体育祭を通じて、地域の中に学校が根付いているということを改めて感じられることができた。

奈良ASPネットワーク第2回ESD子どもキャンプ 概要報告

地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクトの一環として、8月6日・7日に本学のキャンパスにテントを設営し、第2回ESD子どもキャンプを実施した。児童生徒57名、学生33名、近隣のユネスコスクールの教員27名の参加の下、大学に隣接する奈良公園での環境学習、ものづくり、ならまちでのフィールドワークや銭湯体験など、他では体験できないキャンプである。テントが初めてという子も多く、グループで試行錯誤しながらのキャンプ生活を通して互いに仲間意識も育っていき、キャンプの目的である「人と環境との関わり」「人と人の関わり」について、体感を通して学ぶ機会となった。また、キャンプを企画・運営した学生にとっても、子どもとの関わり方や先読みの大切さを学ぶ機会となるとともに、教員を目指す気持ちも強くするものとなった。猛暑や夕立など、困難があった分だけ、思い出も深まったと思われる。



ESD キャンプに参加して

奈良教育大学教職大学院 M1 竹田 隼也

第2回 ESD キャンプに参加した。今年で2回目の参加ということもあり、昨年できなかった、自分から意見を発信することなどを自分自身のテーマとして取り組んだ。2日間、子ども達とフィールドワークやキャンプファイヤーを通して向き合うなかで、多くのことを学んだ。

今回の ESD キャンプで学んだことは三つある。第一に先を読む力、第二に子どもの学びを設定すること、第三に学生同士でのコミュニケーションである。

第一の先を読む力は、教師になった時に必ず必要な力である。子どもがどのような行動をするか、どのような発言をするか予想をしながら、声かけや準備をしなければならない。特に、フィールドワークは大学に戻るまでの時間を考慮して行動しなければならない。また、暑さや、寝不足の子どもが多かったこともあり、熱中症の恐れもあったため、あちらこちらに行くよりも近場で様々なものを見ることを重視した。このような判断はその日の子どもの様子を見なければできない。教師になればそのような判断が求められる場面の連続なのだろう。そのため、今回のキャンプで経験できたことは現場で活かすことができると思う。

第二の子どもの学びの設定は、全ての場面で必要である。キャンプといっても遊びだけではない。子どもたちがキャンプを通して学びを持ち帰ることが重要である。今回のキャンプでは夕食・銭湯班として企画をした。子どもにどのような学びをしてもらいたいと考えた結果、普段訪れることのない銭湯でのマナーを重視した。このマナーは、学校や公共の場でどのように過ごさなければならないかを考える上で重要である。今回は劇の形式でマナーについて伝えたが、完全に伝えることができたとは言えない場面も見られた。学びをどのように伝えることで定着するのか、今後も考えていきたい。

第三の学生同士のコミュニケーションは、班内でのコミュニケーション、本部とのコミュニケーションが挙げられるが、特に班内でのコミュニケーションについて考察を加えたい。今回は初日の午前中に授業の関係で抜けなければならず、班の学生には迷惑をかけてしまった。戻ってから、不在であった間の様子を学生から聞いておくことで、子どもとどのように関わっていくか、誰がどの場面で活躍できるか考えることができた。このように、自分が直接見ることができなかった部分を人から教えてもらって補っていくことは、教師になっても重要である。一人で考えるのではなく、仲間と情報交換、意見交流

をすることでよりよい対応ができるようになるのだろう。

以上のように、今回の ESD キャンプでは多くのことを学び、多くの人とつながることができた。また、教師になるために必要な、先を読む力、子どもの学びを設定すること、仲間とのコミュニケーションを経験することができた。今後も様々な経験を通して教師になった時に活かすことができる力を身に付けていきたい。



いい湯だな！

子どもキャンプを通して学んだこと

教職大学院1回生 関川 絵里

8月6、7日の二日間、奈良教育大学で行われた「第2回ESD子どもキャンプ」に参加した。昨年に引き続いて2回目の参加であった。今回参加を決めた背景に、5月の教育実習で一緒に引率させていただいた5年生の野外活動での経験がある。学校から行くキャンプを初めて見せていただき、その時の子ども達の姿を見て、キャンプで子ども達は変わると改めて感じ、学生の中に少しでも関わりたいと考えたため、今回のキャンプの参加を決めた。去年とはまた少し違う仲間、子ども達と一緒に二日間過ごす中で学んだことが三つある。一つ目はキャンプはみんなで作るということ、二つ目はチームワーク作り、三つ目はキャンプファイヤーの素晴らしさである。

一つ目のキャンプはみんなで作るということについてだが、今年のキャンプは8月の初旬ということもあって、大学の試験や勉強の隙間をぬって準備を行っていた。みんなと話をする中で、それぞれ自信や不安があることを知った。そして私も同じく、自分の担当するプログラムが上手くいくか、班の子ども達に「この班でよかった！」と思ってもらえるか不安があった。当日はキャンプを盛り上げるために、学生リーダー全員が声を掛け合い、支え合い、足りない部分は補い合っていた。みんなで作るものを作り上げているということを強く感じた。

二つ目のチームワーク作りの難しさというのは、班での活動を通して学んだ。今回受け持たせてもらった1班では、男の子と女の子の関係の隙間がなかなか埋まらなかった。どうしたらよいのか、一日目の夜のミーティングでは学生リーダー4人で思案した。二日目、前日の反省点を常に意識して行動した。そのような中で、チームワークをつくっていくために、所属感を感じられるような掛け声やポーズ、子ども達とのファーストコンタクトはとても重要であるということも学んだ。

三つ目のキャンプファイヤーの素晴らしさは、雨のため体育館で行ったキャンドルサービスの中で学んだ。室内でのキャンドルサービスは私自身初めての経験であったのだが、ものすごく楽しく、素晴らしかった。ファイヤーがなくても、みんなと一緒に思い切りあの雰囲気、空間を楽しむことが大切なことであり、あの時キャンプのメンバー全体に一体感が生まれていたと感じる。

今回のキャンプの中に、テーマである「あい」がたくさんあった。皆がよいキャンプにしようと一生懸命で、一瞬一瞬が輝いていた。同じ時間を過ごせたことに感謝の気持ちでいっぱいである。キャンプの中で自分自身の課題も見つかった。「もっとこうできたのではないか」「もっとこうしてみたい」という思いが生まれた。きっと来年は今年よりもさらにパワーアップしたキャンプにできるはずである。来年も参加の機会があれば、ぜひ参加したいと考える。

ESDキャンプを終えて

理科教育専修 4回生 春日 光

はじめに

8月6、7日に行われた、『奈良 ASP ネットワーク ESD 子どもキャンプ 2013』は奈良市内のユネスコスクールの小中学生が集まり、学生、先生方と一緒に作りあげたキャンプであった。このキャンプを通して、私は多くのことを学ぶことができた。キャンプの2日間はあっという間だったが本当に中身の濃い2日間であった。また、このキャンプを行うに当たっては、たくさんの人の協力と準備があった。今回は、特に実感したことを三つに絞って述べたい。一つ目は「先を読む力」について、二つ目は子ども達に学んでほしい内容について、三つ目はたくさんの人とのコミュニケーションについて、である。

子ども達の嬉しそうな顔

一つ目は、先を読む力についてである。事前準備になかなか参加できず、担当グループの役割分担もほとんど把握できないまま当日を迎えてしまった。しかし、当日は自分たちにできることを考え、短い時間の中でプログラムの流れとその段取りについて打ち合わせを行うことで、計画通りに取り組むことができた。DVD作成は1日目の夜に準備をしておいたおかげで、2日目の限られた時間の中でスムーズに行うことができた。DVDを渡した時の子ども達の嬉しそうな顔が今でも心に残っている。ハプニングも多々あったが、それでもグループの人と協力しながら活動できたことは私にとって、大きな自信となった。確かに、もう少し早めに準備をしておくべきだったという反省点もあるが、今後は計画的に準備できるように改善していきたい。

大きな自信になってほしい

二つ目に子ども達に学んでほしい内容である。DVD作成にあたって、大切にすることは多くの子ども達を載せるようにしたことと、生き生きとした写真を載せるようにしたこととである。このDVDを見たときに、子ども達が今回のキャンプを思い出し、テーマである「あい」や人と人とのつながりを感じてほしいと考えている。そして、この2日間の体験が大きな自信となって、これからの生活に生かしてほしいと考えている。

教員に必要な力「コミュニケーション」

三つ目にたくさんの人とのコミュニケーションである。今回のキャンプでは、子ども達はもちろん、教員、学生など多くの人とのかかわりがあった。初めて会う人も多く、最初は不安であった。しかし、同じ班の人をはじめ、多くの人に支えてもらったおかげで、積極的に自分を出して人と関わることができたと思う。誰とでも話ができることは、教員になっても必要不可欠な力である。そうした力を付けることができた点は今回のキャンプでも大きな自信となった。また、初めて「学生リーダー」をする人もいたが、初めてとは思えないくらいしっかりコミュニケーションをとっていた。班の活動でも率先してリーダーシップをとってくれることも多く、安心して任せることができた。そうした姿を見て私も頑張ろうと思った。

最後に

以上の三つが今回のASP子どもキャンプを通して私が実感したことである。今年初めて参加したが、コミュニケーションの大切さや、子ども達、教員、学生が一丸となって作り上げる楽しさや喜びを感じることができた。また、2日間を通して、まわりの人のいいところをたくさん見つけることができた。悪天候の中でも機転を利かせて対応していたり、子ども達の体調に合わせてプランを変更していたりと子ども達の安全を考えて行動していた。来年度は、状況をきちんと把握して最善の対応をとれるようになりたい。そのためには、普段から意識して行動し、先のことを考えて行動するようにしたい。

ESD 子供キャンプをふりかえって

社会科教育専修 1 回生 仲 孝昌

「あい」というスローガンと、①ESD についてみんな学びあう、②奈良公園などのフィールドワークを通じて自然環境への関心を高める、③みんなで仲良く活動し、友情を育てる、という 3 つのねらいのもとに第 2 回 ESD 子供キャンプを行った。その内容としては大学内のキャンパスフィールドワーク、チャレンジタイム（ならまち散策）、キャンプファイヤー、テント宿泊、奈良公園とその近辺のフィールドワーク、ものづくり体験があった。準備過程を含め、これらを通じて、私は危機管理と先を考えて行動することについて学ぶことができた。

1 つ目に危機管理についてであるが、私は班でお金の管理を担当した。中には参加費とは別にお金を持ってきていた子どももいたが、同じ班のリーダーに報告し、別で管理するなどの適切な対応ができたと思う。しかし、危機管理に課題が残ることもあった。2 日目の大学生協での昼食時のことだ。班の子どもの中にそばアレルギーの子どもがいたことを忘れていた。同じ班の他のリーダーが気づき、何とか対処できたわけだが、事前にわかっていたことなので最初に注意喚起すべきであった。そばアレルギー対策を事前にしていなかったこと、他の班員に目が行っていて全体に目が届いていなかったことが原因であった。学校給食においても、アレルギー対策は重要で、毎年のように事故も発生している。子どもたちが楽しむためには安全であることが大前提だ。そのことに活動の最後に気づかされた。

2 つ目に先を考えて行動することについてだが、私はこのことへの意識が薄かったと反省している。例えば、チャレンジタイムの間に豪雨にみまわれた。私の班では運よく食事中や入浴中に雨が降り、移動中にゲリラ豪雨にあわなかったが、折りたたみ傘をカバンの中に入れていなかった子どももいた。これも出発前に予測し、声掛けができたはずだ。また、集合時間には遅れることはなかったが、あと何分で次のプログラムだから子ども達にこれを伝えて…といった先を考えて、今すべきことを実行するということができていなかった。子どもと共に今の活動を楽しんだり、今の危機管理を行うことはもちろん重要だが、指導する立場としては次の場面を意識したスケジュール管理や危機管理も大切だということを知ることができたと思う。

このキャンプを通じて学んだこの 2 つのことは今後教師になっても大きく活かされるもので、非常に大きな経験となった。この反省を活かしてまた次の活動、そして来年のキャンプにつなげ、講義だけでは培えない経験を積み、今後活かしていきたい。



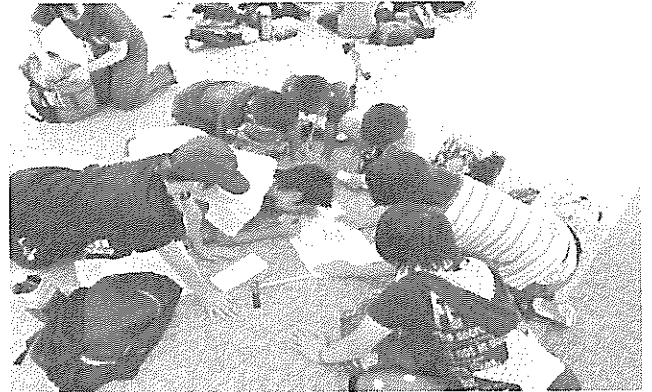
奈良公園フィールドワーク時の様子

第2回 ESD子どもキャンプ 振り返りレポート

特別支援専修一回生 堤 由衣

ユネスコクラブにおける夏休みの活動の一つとして、8月6、7日にESD子どもキャンプが奈良教育大学キャンパスとその周辺で行われた。近隣のユネスコスクールから、小学校高学年～中学生児童約60人が参加し、学生スタッフらとともに奈良教育大学のキャンパスや奈良公園、奈良町などでの探索を通して、自然環境への関心を高めるとともに、協力しつつESDについて学びあった。

この活動の中心として、2つの大きな目標が学生側(運営側)に示された。1つは、プログラムの制作などを通して、子どもに学んでもらいたい内容をつくること、2つ目は、子どもとの関わり、教員との関わり、学生同士の関わりなど、様々な対象との積極的な関わりを通して、子どもとのコミュニケーション能力、ひいては指導力を身につけることである。



みんなで班の旗づくり

1つ目の子どもに学んでもらいたい内容をつくることだが、私は1日目の夕食・銭湯体験をプロデュースした。主な活動としては、奈良町にある銭湯や飲食店を班ごとに選んで利用することである。学んで欲しい内容としては、班で話し合い、相手の意見も受け入れて譲り合うこと、時間内におさまる計画を立てること、奈良町に慣れ親しんでもらうこと、そして店でのマナーも勉強することなどがあげられる。店でのマナーについてはコントを利用して面白おかしく、記憶に残る説明ができたと思う。話し合いについては、店を決めるのが先着順のため急いで決めなければならず、多数決で決めてしまった班が多かったのが残念だった。次回は第2、第3希望まで出させることで、お互いの意見を聞き、尊重しあえる機会をつくれたらいいと思う。

2つ目の、子どもとのコミュニケーションに基づく指導力を身につけることだが、同じ班の子でも、興味の対象も、意見も全く違う。その度に話し合いを持つことで、相手の気持ちにたって考える力をつける事ができるのだと思う。同じ子ども同士でさえそうなのだから、学生スタッフと子どもの価値観は大きくずれており、例えば、「危ないから列になって歩こう」といっても、「沢ガニを見つけない」といって列の反対側を歩く子がいる。命の危険があるような場合はしっかり叱ることも必要だが、緊急性がない場合は、子どもがどういう考えでそうしたいのかを、まず学生スタッフの方から聞き、子どもの意見に耳を傾けるとともに、こちらの指導の意図をわかりやすく説明することで、信頼関係を築いていくことが重要だと思った。また、私の班は意見が対立したときには子どもたちの気が済むまで話し合いさせる、というスタンスを取っていた。そのためしばしば行動が遅れがちになる。折衷案を提案する、選択肢を示すなどといった具体的なアドバイスや、子ども自身が時間を意識するような声かけが必要だと思った。

この2つの観点以外にも、ESD子どもキャンプは発見や驚きの連続だった。特に、多くの子どもと長時間ふれあえ、先輩の指導も目にする事ができたのは「自分には指導者としてなになが足りないか」が分かってよかったと思う。このような学びの機会を与えてくれたユネスコスクールの先生方、参加してくれた子ども達には非常に感謝している。今後この体験を生かしつつ、様々な活動を通して、もっと沢山の人と関わっていきたいと思っている。

子どもキャンプを振り返って

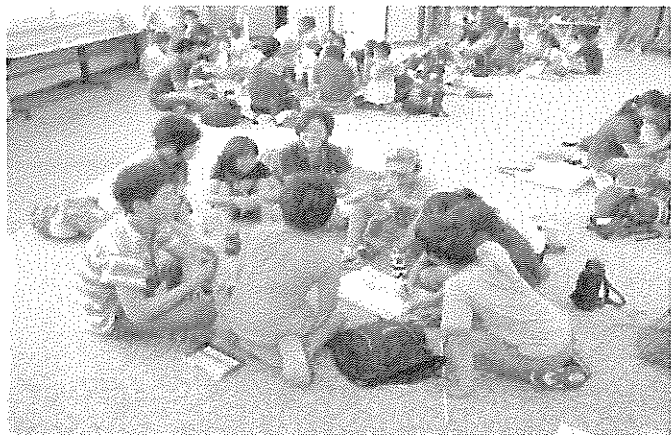
社会科教育専修 1回生 藤澤 華愛

8月6日・7日に大学のキャンパスにテントを張ってのESD子どもキャンプがあり、近隣の小中学校から60名ほどの児童生徒が集まった。8月初旬というとても暑い時期だったが、前日の準備、6日の夕食・銭湯体験、7日の後片付けと、3日続けて夕立が降った。日中はとても暑かったが、おかげで夜は涼しくテントで過ごすことができた。

今回のキャンプに学生スタッフとして参加して考えたことが2つある。一つ目が先を読む力、二つ目にコミュニケーション能力を身につけることである。

一つ目の先を読む力について。このキャンプを通して、先を読む力は、教員になっても求められる力だと実感したと同時に、子どものことを一番に考えていなければ常に先を読み続けることはできないと思った。「先を読む」こととしてキャンプリーダーが具体的に実践したことは、例えば、「子どもが熱中症になる」ということを先読みして、そうならないようにこまめに水分補給をさせるということだ。常に先を読み、避けるべき事態を招かないようにすることが、教師や、将来の教師である私達に必要なことなのだと学んだ。

二つ目にコミュニケーション能力についてである。私は、キャンプファイヤー班に所属していた。プログラム作りとして、子どもを含めて全員で楽しめるスタンプを考えました。私達キャンプファイヤー班は、体全体を使って歌うスタンプをした。これによって班のなかまの枠を超えて、キャンプに参加している全員と交流することができたと思う。話をするのが苦手な子ども、このときは周りの子と手を取り合っ歌っていたのを見て、コミュニケーションとは話すことだけではないのだと改めて感じた。スタンプを



班の旗にそれぞれが名前を書いているようす

を通して、体を思いっきり動かすことを通しても周りの人と交流し合うことができるということが子どもたちに伝わったと思う。コミュニケーションをとるというのは、教員を目指す今でも、教員になってからでも非常に大切なことである。コミュニケーションとは何も堅苦しいことばかりではなく、一つのことを決めるために相談し合うこともコミュニケーションだと思った。班の旗を作るときに、班のみんなが自分の意見を述べているのを目にする場面があった。名前を書く大きさや色といった小さなことではあるが、自分の意見を出し合うことで、互いにわかりあえると思う。また、コミュニケーションとして私が具体的に印象に残っているのが、一回生で行ったキャンプファイヤーの劇だ。それぞれの役のセリフや話し方を何度も入念に話し合い練習して一つのものを作り上げた。「私は、ここはこうの方が良いと思う。」「でも、〇〇だからこっちの方が良いと思う。」というようにひたすら意見を交わし、考え、劇を作り上げた。

キャンプを通して私は、「先を読む力をつけること」、「コミュニケーション能力をつけること」の必要性和重要性を学んだ。教師は、子どものことを一番に考えて先を読み、コミュニケーションをとることの大切さを教えていかなければいけない。自分は将来、子どものことを一番に考え、どんなささいなことでも周りとのコミュニケーションをとることの大切さを伝えていける教師になりたい。

ふりかえりレポート

社会科教育専修 1 回生 藤田 明希

ESD 子どもキャンプでは本当に様々な体験をしました。子どもの個々の性格が強く表れていて、大人の立場としてまとめることはなかなか難しいと感じました。今回のように、大人数の子どもたちと接するのは初めての経験でしたが、思っていたより子どもたちが自主性を持っていたので、こちら側が上手に促してあげることで、協調性をますます伸ばしてあげられるような気がします。私たちの班は学生 4 人 + 中学生 2 人 + 小学生 5 人でした。小学生の中には去年のキャンプに参加していた子もいて、中学生の子もしっかりしている子ばかりで比較的やりやすい班だったのでとじています。

今回のキャンプを通して考えたことが 2 つあります。1 つ目に子どもの身体面に配慮するということが、2 つ目に皆で作りに上げることの意義です。

1 つ目の子どもの身体面に配慮することについてです。教師になった時に気をつけなければならぬと感じた点は、一番に子どもの身体的な面だと感じました。今回私たちの班にはアレルギー体質の子がいたにも関わらず、子どもの安全を十分に配慮できなかったところもありました。また、夕食・銭湯に向かうときなど、列が若干横に広がりすぎたり、前の方と後ろの方の列の距離の差が埋められなかった点が、危険だったのではないかと思います。何度か注意しましたが直ぐに元に戻ってしまう状態が続きました。学校現場でも遠足や修学旅行などで役に立つ場面があると思います。効果的な指導力を身につけておく必要があると感じました。

2 つ目の皆でつくり上げることの意義です。

今回のキャンプで私が一番印象に残っていることは、スタンプ・歌などみんなでつくり上げることができたことです。準備段階ではユネスコクラブでのまだ話したことのない人と接することができました。関わりの中で、皆がこの ESD 子どもキャンプを成功させようという気持ちが伝わってきて、私も本気で頑張ることができました。最初はキャンプといっても漠然としていてイメージが湧かなかったけれど、スタンプや歌やダンス、班の準備をしていって本当に子どもたちの為に。という熱意が伝わってきました。プログラムなども子どもが無理なく楽しめるもので溢れていたと感じます。



ESD 子どもキャンプで、私が得られたものは、まず子どもの性格のとらえ方だと思います。普段子どもと接する機会がなく不安もありましたが、子どもの良さを改めて感じるすることができました。皆が楽しんでいたら、自分も楽しめたのだと思います。自分が楽しむことが人を楽しい気持ちにさせるから、次のキャンプはずっと笑顔でいられるよう心掛けます。

学生リーダーとは

社会科教育専修 1回生 米澤 瑞綺

1. はじめに

最初、ユネスコクラブの代表的な行事であるこの ESD 子どもキャンプには、1 回生のカリキュラムでは普段なかなか触れ合うことのできない子どもたちとキャンプができるということを期待して参加した。学童保育で子どもの相手をしたり、年の離れた兄弟と遊んでいたときのように子どもと接すればよいと、キャンプの準備が本格的に始まるまでは考えていた。しかしキャンプの前の綿密な準備・打ち合わせ、実際にキャンプで動いてみて、今まで子どもと接していたような動き方では学生リーダーは務まらないと考えを改めた。特にキャンプ前の会議、1 日目のチャレンジタイム、一日目の反省を生かして行動した 2 日目には、学生リーダーというものについて深く考えさせられた。

2. キャンプの準備で

オリエンテーション班などでの企画などの話し合いはこのキャンプでの「ねらい」や企画の目的を意識して行われていた。ただ楽しい企画を用意するのではなく、目的を設定することによってキャンプが学びの場になっているということがわかった。また、キャンプが学びの場であることを理解したことによって、キャンプが始まる前から学生リーダーは子どもとただ遊ぶスタッフではないということも意識することができた。



奈良公園で朝食

3. チャレンジタイム

子どもたちとうち解け始め楽しい雰囲気だったチャレンジタイムだが、子どもと触れ合うことに専念してしまい、子どもたちと一緒にしゃぎすぎてしまうことがあった。結果、リーダーの指示が瞬時に班全員に伝わらず、移動時の列の乱れなど班行動に遅れが出てしまうことがあった。学生リーダーは子どもの様子だけではなく、周囲の状況や計画にそって行動できているかを常に意識しなければならないと反省した。

4. 1 日目の反省を生かして

一日目のキャンドルファイヤーでの振り返りの時に「学生リーダーとは広い視野を持った人間で、ただの子どもの遊び相手ではなく子どもの身近な指導者ではないか」と考えた。そして二日目はその考えを意識して行動した。朝の起床時間を守らせること、フィールドワークで班行動に乱れが出ないようにリーダーの指示を子どもにすぐ伝えることなどである。ただ工作タイムののこぎりなどの指導は残念ながらぼろぼろで、子ども三人を相手に途中で心が折れそうになりながらも協力してくれた先生とともになんとか乗り切ったという不甲斐ない結果となってしまった。ただこののこぎり指導で先生が子どもに指導しているのを見て、指導者は常に落ち着いていなければならないことを学ぶことができた。

5. おわりに

1泊2日という短い時間であったがこのキャンプを通して学生リーダーとは何か、指導者とは何かほんの少しだが理解することができた。楽しい二日間だったが厳しい二日間でもあった。学ぶことばかりの貴重な二日間だった。このキャンプで学んだことを生かして今後もユネスコクラブで積極的に活動していきたいと思う。

キャンプ振り返りレポート

数学科教育専修1回生 田中 亮輔



キャンプとはどのようなものなのか、それは野外にてテントなどを張って一時的な生活をし、自然と触れ合い、大人から子どもまで楽しめる活動です。また、キャンプには様々な楽しみが待っています。一番メジャーなところでキャンプファイヤー、飯盒炊爨があります。しかし絶対に型にはまらないといけないわけではありません。ユネスコのキャンプでは学校探検・テント張り・銭湯体験・自分たちでお金の計算をしての夕食・朝のお散歩・

奈良公園フィールドワーク・モノづくりなど奈良教育大学ならではのプログラムで行いました。

このキャンプではたくさんの失敗による学びがありました。1つは状況把握、2つ目はシミュレーション不足、3つ目は子どもを連れるという大変さです。

第一の状況把握ですが、私の班は時間にすごくルーズな班になってしまい、適切な誘導ができませんでした。歩き疲れ、遅れがちの子がいるため先々行く子を止めることもあったし、また時間が迫っているから急がせることもありました。僕たちの年だと集団行動ぐらいはできますがやはり子どもたちにとっては難しいことなのかなと思いました。そのため時間制限がある場では、子どもたちと行動する中でルールを決め、また時間を逆算し、しっかり誘導するようにしなければならぬと思いました。

第二のシミュレーション不足についてです。私はフィールドワーク班に所属していたのですが、子どもたちにたくさんのことを学んで欲しいあまり、チェックポイントの量が多すぎ、その結果全ての班が全部回りきれないという結果になってしまいました。事前に2回も予行を行ったにもかかわらず、いざ本番になると、道を歩くのにも、休憩にも、チェックポイントでも思いの外に時間がかかってしまいました。これはやはりシミュレーション不足だと思いました。今回は子ども対象だったので、私たち大人だけで予行を行い、私たちのペースで物事を考えては、やはり子どもの関心や時間にズレができてしまうので、今度の機会は予行に身内の子どもなどを連れ、様子を見ながら調整したいと考えました。

第三に子どもを連れるという大変さです。私たちは子どもを引き受けた側であって命を預かっているのですごく大変な役目でした。命を預かるというのは思っているほど簡単でなく、今回は学生一人に対して3~4人でしたが、学校現場では先生一人に対して何十人の生徒も預かるわけですからとても大変だろうと思いました。このことに関しては、今から地道にユネスコクラブ等の子どもと関わる経験を積んで、成長しなければならないと思います。

以上の3点を踏まえて将来先生となる身として、やはり現場または今回のような現場に近いものに参加して経験を増やしておかないといけないと思いました。来年もキャンプがあるのなら今回の反省を生かしてより良いキャンプにしたいと思います。

ESD子どもキャンプレポート

社会科専修三回生 二階堂 泰樹

ESD子どもキャンプを終え、自分ができなかったこと、できたこと、子どもたちにさせてあげられたこと、させてあげられなかったこと、良かったことも悪かったことも含め反省しなければならない点が多く感じられる。それら反省点を含め、次に活かせるようにするために、「先を読む力」について、子どもに学んでもらいたい内容を作ることに、積極的な関わりを通してコミュニケーション力をつけることについて、以上3つの観点から振り返りをしていきたい。

まず初めに、「先を読む力」についてであるが、今までに、子どもたちとサポーターではなくリーダーとして関わることがあまりなかったため、深く反省しなければならない点が多々あった。特に、子どもたちに自由にさせる場面と、多少強く言っても言うことを聞かせなければならない場面の見極めに関しては力不足であったと感じた。見極めが難しいと思ってしまうと指示を待ったり、他の班の行動を見ながら動いたりと要所要所で鈍さが目立った。しかし、先を読むとすることに関しては意識したので、今回失敗してしまったと思う場面については、次どう活かすかについて考えていきたい。

二つ目の、子どもに学んでもらいたい内容を作ることに、私はオリエンテーション等の企画に携わってこなかったもので、班行動をする過程での話しをしたいと思う。私の班は、班長である私がしっかりできていなかったがために、スタートダッシュが少し遅く、子どもたちのエンジンがかかるのにも時間がかかった。そんな中で目立っていたのが、学



銭湯体験後集合写真

生リーダーと子どもたちの1対1の会話はあっても、子どもたち同士の会話がほとんどないことだった。集団行動の中で、初めて会う人と仲良くなり、絆を深め合うことは非常に重要なことである。そのことを学ばしてあげたいと思い、子どもたち同士が関わりを深めることができるような遊びや会話に挑戦した。そのことが功を奏したのか、子どもたちの素晴らしいポテンシャルなのか、班の雰囲気は徐々に温まっていった。子どもに、これだけはわかってもらいたいというものに出会った時に、実現させることができる行動力を常に教師は持ち合わせておかなければならないのだと感じた。

そして最後に、コミュニケーション力をつけることであるが、この点に関しては、今回のキャンプを通して一番学ぶことができたと自分自身感じている。子どもたちとの関わりはとても新鮮で、教員の方々との関わりは刺激となり、学生同士の関わりはひとつのことをやり遂げる同じ仲間として互いに高めあえた。それらすべてを通して、どの世代からも人は影響を受けて成長してゆくものだと強く感じた。人と関わることで、相手のことを思ったり、逆に思われたり、時には衝突をしたりすることによって、感謝や反省や自分に対する誇りが生まれてくる。コミュニケーション力を身につけることの最大の目的は、そこなのではないかと私は思う。

二日間助けられればなしかった私も、キャンプを通し、皆に対する“ありがとう”と自分に対する“お疲れ様”でいっぱいになれた。このことが、子どもたちにも伝わっていれば、それ以上のことはないと思っている。キャンプを通し、学んだことは多かったけれど、それを活かし、子どもたちにもっと学ばせてあげられるようになりたい。

平成25年度ASPキャンプ

文化財専修講座3回生 島川 織恵

今回のキャンプの目標でもあった「先を読む力」の重要性がわかるとともに、自分にはまだまだ備わっていないことを痛感した。今後のユネスコクラブの活動とともに身につけられるよう、一層の努力をしていきたい。

私は学生のコミュニケーションという観点にしぼって振り返ることにする。その中でも、子どもとの関わり、教員との関わり、学生同士での関わりの三つに分けて考える。

まず一つ目の子どもたちとの関わりについて。私は今回で3回目の参加であったが、回を重ねるごとに、自分自身で少しずつ成長できていることを実感している。1回生の頃は、子どもたちが怖くて、積極的になれなかった。それが、子どもたちにも伝わっていたようで、非常にぎこちなかったことを覚えている。今年のキャンプでは、やはり緊張はするものの、会話の入り方、切り返し方、受け入れてもらえるような注意の仕方、子どもの個性や性格に合わせた接し方などを考えることができる心の余裕があった。驚いたことは、同じ班の1回生の子はとても明るい性格の子で、1回生でありながら、おそらく一番子どもたちに積極的に関わっていた。来年からは、大人として関わっていける学生として、ほかの学生を引っ張っていけるような存在になってほしいと思う。

二つ目の教員との関わりについて。2年前とは異なり、学生の主体性がより強調された今回のキャンプでは、教員との関わりの方がかなり減ったのではないかとはいえ、学校の先生方のバックアップは不可欠であり、非常にありがたいものである。学部生にとっては、どう接していいのかわからない子もいたようだが、ここは、教職大学院の人たちや、大学の先生方がうまく橋渡ししてくれたように思う。しかし、学生から積極的に教員に関わっていった場面が少なかった。せっかく先輩である教員の方々と関われる機会である。会議においても、ただ一緒にいるのではなく、話しかけてみる努力をしたい。

最後に学生同士での関わりについてだが、最も反省すべき点であり、評価すべき点でもある。キャンプの時期が早まったことや試験・課題に加えて学生主体になったことで学生一人ひとりの負担が増えた。結果として、それぞれの仕事や準備に追われることになり、少なくとも私は、準備段階での学生同士の密な連携が取れない状況であった。しかし、最終的には、これも教職大学院の人たちが主体となって、うまく学部生を引っ張り、協力することができていた。また、私にとっては1回生と初めてまともに関わる機会であったため、少し不安はあったが、初対面どうして声を掛け合うのはもちろん、互いを知っているメンバーが間に立ってくれた。ユネスコクラブ員のコミュニケーション能力の高さをみることができた。

全体的に感じたことは、やはり教職大学院の人たちの働きが非常に大きかったことである。今回、主要なメンバーとして活躍された方々は、来年にはいらっしやらないのかと思うと不安である。しかし、現在の学部1・2回生、特に2回生の働きも大きかったことを考えると、心配はしていない。私を含めた学部生や院1回生は、先輩方から時間が許す限り学び続けていかなければならない。

第2回 ESD 子どもキャンプに参加して

数学教育専修2回生 濱崎 千華



8月6日-7日、奈良教育大学において第2回 ESD 子どもキャンプが行われた。今回のテーマは「あい」だ。みんなで仲良く活動し、友情を育てるとともに、ESD について学び合い、フィールドワークを通して自然環境への関心を高めることがねらいであった。

さて、私は今回のキャンプで学んだことが2つある。1つは学生リーダーの役割、もう1つは感謝だ。

1つ目の学生リーダーの役割である。私たち学生ばかりが目立つのではなく、主役は子ども

たちであり、その子どもたちが思いきり輝ける場所を作ることが学生リーダーの役割だと学んだ。初めは班の誰もが緊張していて発言をためらっていたけれど、プログラムを通してふれあうことで1人1人の個性が見えてきた。フィールドワークで地図を見てくれる子、ワークシートを持って誰よりも早く発見してくれる子、仲間の体調を気遣う子など、1人1人表彰してあげたいくらい素晴らしい子どもたちだと気づくことができ、本当に良かった。しかし、学生リーダーの役割は全てが簡単にできることではなかった。班のポーズや班旗のデザイン、キャンプファイヤーのスタンスなど、子どものアイデアを最優先して大切にすべきだとは分かっているが、限られた時間の中で子どものアイデアを引き出し、膨らませることは難しかった。私は今回班長を任されていたが、班長として今何をすればいいのか、子どもたちにどんな声掛けをしたらいいのか分からない場面が多くあった。そんな時はいつも仲間の学生リーダーが助けてくれた。学生リーダー内の絆がなければとても班をまとめることはできないことも学ぶことができた。

2つ目の感謝である。誰もが当たり前だと思うことかもしれないが、今回のキャンプでは感謝の気持ちを大事にしよう決めていた。なぜなら去年のキャンプの振り返りの時、同じ班だった先輩が学生含め班員みんなの最後のコメントに対して1人1人「ありがとう。」と言っていたことが印象深かったからだ。感謝を意識すると、2日間という短い時間でも数えきれないほどの感謝の気持ちが生まれた。暑い日差しの中、フィールドワークをしていると、ある子どもが「家に帰ってゲームしたい。」と呟いた。そんな言葉にも、本音を聞かせてくれてありがとうと思った。DVD 作成の係だったが、事前準備が不十分でキャンプ前からキャンプ中まで多くの人に迷惑をかけてしまった。自分のパソコンを貸してくれた部員の皆、当日 DVD 作成作業をギリギリまで手伝ってくれた先輩方、本当にありがとうございました。

この他にもキャンプを通して学んだことは多くある。それと同時に得られた反省を自分の中で整理し、次回に活かしていきたい。教員を目指す私にとって非常に学びの多い有意義なキャンプだった。参加できたことを嬉しく思う。キャンプに関わったすべての人へ伝えたい。本当にありがとうございました。

2013. ESD 子どもキャンプを終えて

数学教育専修 2 回生 幸田 早苗

2013 年 8 月 6～7 日に ESD 子どもキャンプが行われた。今回は環境教育をテーマに奈良公園をフィールドワークすることを通して、ESD を学ぶ内容となっていた。また、キャンプ当日はもとより、キャンプを創り上げる中でも、昨年よりも学生が主体となった。

私が今回のキャンプを通して学んだことは 3 つある。1 つ目は、リーダーという立場の難しさ、2 つ目は仲間のありがたさ、3 つ目は子どもをプラスの視点で見ることの大切さである。

1 つ目のリーダーという立場の難しさについてだが、今回のキャンプでは夕食銭湯班のリーダー、活動班のリーダーという 2 つの場面においてリーダーという立場を与えられた。夕食銭湯班は、1 回生が 9 人、私を含む経験者が 2 人の 11 人で、プログラム班では 1 番人数の多い班のリーダーを任された。今までリーダーというみんなを引っ張っていく立場をあまり経験したことがなかったので、いつ集まるか、どうやって活動を進めていくか、たくさんのささいな場面で何度も戸惑った。できるだけ一人一人が活動に参加できるように、仕事をやってもらうようにしたが、仕事によって軽重の差があったり、一度に全員が集まることができないためにみんなが活動についてどう思っているのか、同じ方向を向いているのかわからなかったりといった戸惑いの連続だった。そのため、意見を聞く機会もないまま、経験者 2 人でほとんど活動方針を決めてしまったところもあった。当日の活動班でも、8 人の子どもたちを 3 人の学生リーダーでどのようにまとめていくか、さまざまなプログラムの中で何度も戸惑った。1 つのプログラムの中で、班全体でやらなくてはいけないことや、子ども一人一人を見守ること、自分自身がやらなくてはいけないことなど、考えることがたくさんあり、今何が 1 番大切か、今 1 番やらなくてはいけないことは何か、など判断するのが難しかった。どちらの場面でも、全体と一人一人のどちらをも考えること、今の状況を把握して、何が 1 番大切かを考えることがリーダーとして重要で、それを果たすのはとても難しいということを経験した。キャンプを創り上げる過程の中で、身をもって学んだ。

2 つ目の仲間のありがたさとは、慣れない立場に何度も立ち止まることがあったが、その度に、同じ班の仲間にアドバイスをもらったり、フォローしてもらったり、他の班の仲間に悩みを聞いてもらったり、さまざまな場面で仲間に助けってもらったことだ。リーダーという立場に立っても、仲間であることは変わらないし、一人で背負い込むことはないということ、仲間に助けってもらう中で学んだ。また、自分が気づくことができなかつたことに仲間が気づいてくれたり、一人ではできないことに協力してくれたり、仲間がいるからこそできることがあるということを経験した。

3 つ目の子どもをプラスの視点で見ることの大切さとは、1 日目に班の子どもたちを、あまりいうことを聞いてくれない、わがままな子と感じてしまったり、まとまりがないなど他の班と比べてしまったりすることがあり、一人一人に対してあまり良く思えない場面があった。しかし、その夜のミーティング後の班での反省で「できるだけプラスの視点でみてあげよう。」という他の学生リーダーの意見を聞き、2 日目のフィールドワークでそのことを意識すると、言うことを聞いてくれない、わがままと感じてしまっていた子は、ゴミを拾う役目を与えると、自分の役割をしっかりと果たしてくれたり、班を引っ張ってくれたり、それぞれのいいところをたくさん発見できた。子どもをプラスの視点で見ること、その子のいいところが見えてくることを学んだ。

今回のキャンプでは、反省するところがたくさんあるが、そこから学べたこともまた、たくさんあった。学んだことをこれからは活かしていきたい。



キャンプでの集合写真

ESD 子どもキャンプを終えて

英語教育専修 2回生 糸 綾香

8月6、7日、奈良教育大学で第2回 ESD 子どもキャンプが行われた。今回のテーマは、「自然」と「あい」を感じるキャンプで、2日間の中で行われた様々なプログラムを通して、子どもたち、そしてスタッフたちもそれらを感じることができた。

さて、今回のキャンプを通して私が感じたことを3つ紹介したい。第一に子どもと過ごすうえでの先を読む力の重要性、第二に担当のプログラムの計画力、第三に様々な世代との関わりにおけるコミュニケーション能力だ。

第一の先を読む力の重要性だ。私はこの重要性を、班活動を通して感じるが多かった。例えば、2日目の学生食堂での昼食である。私の班にはそば、大豆アレルギーのある子どもがいた。事前に食堂のそばやうどんは食べてはいけないと心得てはいたが、いざ注文しようとするほとんどのメニューに大豆が含まれていたのだ。食事をとることはできたのだが、時間がかかってしまい、子どもを不安にさせてしまった。事前にメニューに関する情報収集をしておけばと反省する。他にも、フィールドワークで、しっかり時間配分ができず、班全体を急がせてしまい、十分な活動ができなかったこともあった。時間やプログラムから、先を読み、進めていくことがどれほど重要か実感した。

第二のプログラムの計画力についてである。私は、今回キャンプファイヤーを担当した。このプログラムでは去年と同じように、プログラムのフローチャートが作られていた。こうすることでプログラムの流れが分かり、どこに力を入れて準備していかなければならないかを把握しやすくなった。私の担当は、最初のゲームと学生スタンプだった。ゲームはキャンプファイヤーの導入であり、参加者の心をひきつけるとても重要なものだ。また学生スタンプは子どもたちからさすがだなと思ってもらえるような内容にしなければならない。通常の授業でもそうであるが、目で見える形にすることで、改めて心得ることや、新たに気づくことがたくさんあるのだと感じた。当日は雨のため、外でのキャンプファイヤーができなくなり、急遽変更になった部分もたくさんあったが、何とか対処できたのは綿密に計画をしていたおかげだった。先輩方の計画力の凄さを強く実感した。

第三のコミュニケーション能力についてである。今回のキャンプでは子どもとそして学生同士のコミュニケーションをとることを重視した。子どもとは、プログラムと一緒に全力で楽しむと同時にだめなことはだめと言えるような、メリハリのある関係が重要だ。たくさん話しかけたり、子どもから話してきてくれたりを繰り返すことで、名前をしっかり覚えてもらうことができ、とても嬉しかった。しかし時間などの見通しを立てられていなかったことや、少し厳しく接したことで、子どもから「帰りたい」という言葉が出てしまった。ただ単に子どもと話すことはできたが、子どもにとって居心地の良い空間を提供することはできなかった。次回へ向けての大きな反省点である。

学生同士では、今回初めて参加する1回生との関係づくりに時間をかけた。去年よりもキャンプまでのクラブ活動が少なく、キャンプ間際まであまり良い関係を構築できていなかった。個別に話し、プログラムや学生スタンプなどで関わることで、少しずつ打ち解けていくことができたと思う。

以上の3つがこのキャンプを通して、私が感じたことである。去年のキャンプと比べて、身についた力と、まだまだ十分でない力があると分かった。来年は先輩方が抜けられ、私たちの学年が前に出る機会も増えるだろう。今回学んだことを、来年に必ず活かせるようにしていきたい。

ASPキャンプを通して学んだこと

国語教育専修2回生 児島 佑美子

8月6日から7日にかけて、奈良教育大学でASP子どもキャンプが行われた。私にとっては2回目の参加となるASPキャンプであった。奈良市のユネスコスクールから小学校5・6年生と中学生およそ60人の参加があった。初日の夕食・銭湯体験の際に激しい雨に見舞われ、キャンプファイヤーもできなくなるハプニングが起きたが、学生リーダーの機転で子どもたちにとっては、それもよい思い出とすることができたと感じている。

私が今回のキャンプで学んだことは3つある。1つ目は多くの人前で説明する難しさ、2つ目は中心となって企画することの大変さと大切さ、そして3つ目は学生同士が協力することの大切さである。

まず1つ目の多くの人前で説明をする難しさについてである。今回私はオリエンテーション班として全員の前で説明をしたり、ゲームをしたりする機会を何度か与えられた。私は人前で大きな声で話すことに関しては抵抗がなかったので、昨年よりはみんなに聞き取りやすく話すように意識する余裕もあった。しかし実際にやってみると思ったより難しく、先輩方にアドバイスをいただきながら何度も練習した。身振り手振りを大げさにする、歌に合わせてダンスの説明をするときはワテンポ前に声掛けするなど、今後の様々な活動に活かすことのできる細かいけれど大切な知識を教えていただいた。

次に中心となって企画することの大変さと大切さである。キャンプ全体の企画に関わらせていただき、当日も何度か裏方で動く機会もあった。今年は先輩方の仕事を見て、指示通り動くことしかできなかったが、先輩方のやっていることを見ているだけでも、大変勉強になった。個人のタイムスケジュール管理から、他の企画班の動きの把握、物品の管理まで驚くほどやることがあった。様々なパターンを予想し、それに備えて準備することもやっておられて、先を読む力も必要なのだと思った。初めは少し細かくやりすぎではないのかと思ったこともあったが、そうしなければ当日スムーズに回らないとわかった。昨年までは自分の企画と班のことで精一杯でわからなかったが、このように裏で動いてくれている存在があったから、自分の活動に専念できていたのだとわかった。これは来年以降に大いに活かすことのできる貴重な体験であった。

3つ目は学生同士が協力することの大切さである。これは昨年感じたことであったが、今年も自分一人では解決できなかったことがキャンプ中何度もあった。また私の所属していた4班の学生リーダーは今までに一緒に活動したことの無い者ばかりだったので、事前に会って話し合いをしたのはよかったと思った。ただ1つ残念だったのは、キャンプまでに多人数での活動が少なかったため、他班の1回生と交流を深められないままキャンプを迎えてしまった点である。交流をしていればもっと協力してよいものができたのではないかと感じる。来年への課題としたいと思う。

昨年とは大きくキャンプの関わり方が変わって迎えた今年のキャンプであるが、今年は主に企画するという点について学べたのが大きかったと思う。昨年は大きく成長できたキャンプであったが、今年



は成長するだけでなく自信のついたキャンプであったと感じる。来年のキャンプはもちろんだが、他の活動にも活かせることばかり学ぶことができた。来年度は言われたことだけでなく、もっと自分から積極的に動いていきたいと思う。キャンプ2日目の午後に撮った全体での集合写真。「あい」の弾幕や各班の班旗など企画班のメンバーで考えたものを子どもたちが持って写っている。そして何より疲れているはずのキャンプ終盤の場面で全員が笑顔のこの写真が、今年のキャンプの成功を表していると思う。

第2回ESD子どもキャンプに参加して

数学教育専修 1回生 堀口 大地

平成25年8月6日(火)～7日(水)に奈良市内の小中学生を募集して大学内でESD子どもキャンプが行われました。このキャンプの、スローガンは、「あい」(～であい ふれあい ささえあい～)です。いろんな「あい」を見つけるべく奈良教育大学とその周辺で様々な活動をしました。前日のギリギリまで準備して臨んだ大きく心に残るキャンプとなりました。

このキャンプを通じて考えたことが3つあります。一つ目が子どもへのアドバイスの仕方とその量について、二つ目が発見について、三つ目にハウレンソウについてです。

一つ目が子どもたちへのアドバイスへの仕方やその量に関するものです。このキャンプはしおりに書いてあるタイムテーブルにそって進行していきます。私は常に現在の時刻と次に集合する時刻を把握するように心掛けていました。そして、時間に余裕があるときは子どもたちだけで考えさせる。または、アドバイスを少なめにして行動させて、逆に、時間に余裕がないときは学生リーダーがアドバイスの量を多めにして行動させるように心掛けました。決められた時間は大人の都合ですが、決められた時間の中でいっば



5班の旗作成時の子どもたち

い活動させることができればよいなと思っていました。しかし、活動の最後の方になると時間が無くなっていき、アドバイスの量が多くなり最後は学生が主体になる場面もみられました。また、子どもに理解してもらえないアドバイスをしていることもありました。今後も適切なアドバイスの仕方や量を学んでいきたいなと思います。

二つ目は身近な自然にも発見があることです。私はフィールドワーク班に所属していました。2日目のテーマ別フィールドワークの準備のために奈良公園に何回も足を運びました。そして、運んでいるうちに市内循環バスで見える何気ない奈良公園の光景からも発見があることに気づき感心しました。そして、子どもたちに興味をもって理解してもらえるように準備しました。当日は子どもたちにたくさんを知ってもらえるよう働きかけました。

三つ目はハウレンソウを徹底することです。ハウレンソウとは報告・連絡・相談の略ですがこれがないと集合時間が違っていたり、ほかの班とやっていることが違ったりしてしまいます。私は、学生と子供たちで情報の共有をしてもらうようにしました。子どもがテントに荷物を忘れてしまったときもほかの学生リーダーに相談しレクリエーションの間に取り寄ってもらいました。これは私一人ではできないことだったので助かりました。そして、これは今後も続けなければならないことだと感じました。

以上の3点がキャンプで学んだことです。子どもと関わってただ楽しいだけではなく今後につながるいい経験ができた機会だと思いました。この経験を次の活動に生かしていきたいです。

私は今回のキャンプが子どもと関わる初めての体験でした。このキャンプのテーマが「あい」であり、私自身で掲げた目標は、「ふれあい」でした。子どもとの距離の縮め方、話し方、注意の仕方などを子どもたちとの「ふれあい」によって学びたいという意図のうえで決めました。さらに、今回は夕食・銭湯班としてキャンプの準備に参加しました。学校現場では遠足、修学旅行などの計画を立て、下見をすることは教師の役目です。先輩の指示の下でしたが、今回のキャンプで心がけることなどを学びました。

このキャンプで学んだことが三つあります。一つ目は子どもとの触れ合いです。子どもと初めて会話するときや、子ども同士の仲の深め方、指示を聞いてくれない時の注意の仕方です。二つ目は、キャンプの下準備のときに、この段階から子どもたちが楽しめるものを作ることです。三つめはキャンプファイアのときに学生スタントとして参加したときのことで

一つ目の子どもとの触れ合い方について、初めて話したときに少し緊張して話題を探すときの沈黙は反省するべき点です。班の先輩を見ていると子どもからの返答からさらに話題を掘り下げて聞いていてコミュニケーションの取り方を学びました。他に、子どもと話すときに、とりあえず子どもの話は肯定してあげることが大切だよ、という先輩の助言通りに接してみると、子どもがどんどん話を続けてくれました。これは自身で評価できる点です。しかし、好き勝手している子たちをまとめることや、子どもに注意するときはずまくできませんでした。子どもに注意をするときは



真剣に話を聞く子どもたち

理由と一緒に言うことと言われていましたが、理由を言っているときに子どもは行動を起こしていました。自分の反省点は手短かに説明できるようにすることです。高校の時の担任にこの話をしたときに、繰り返し注意することが大切であるというアドバイスをいただきました。繰り返し説明する過程において、その行為がいけない理由を子どもたちが理解していき、同じことで怒られても理由を説明する前に指示を聞くようになってくれるそうです。時間のかかることだけれども、実践したいと思っています。

二つ目は、このキャンプは子どもが主体であることをもとに下準備をしました。アレルギーの子を意識してお店を選んだり、コントで注意事項を伝え子どもがただ注意を聞くのではなくて面白いと感じてもらえる工夫をしました。この経験は教師になったとき、遠足や修学旅行などの行事の下準備の時に生かしたいです。

三つ目のスタントにおいては、同じ一回生の人たちとやり遂げることの楽しさを学びました。アイデアを出し合い、工夫できるところを話し合うことはやりがいがありました。さらに、スタントの後に班の子どもたちからおもしろかったなどの感想を貰ったときがすごく嬉しく感じました。今までの学生時代にスタントなどは経験したことがなかったのですが、助け合い、支え合いによって完成できました。

最後に、子どもたちが楽しめるものを企画することは初めてでしたが、学べるが多かったです。反省点であったり、子ども同士が仲を深めてもらえる遊びや話題などの工夫は経験を通したり、他の人の経験談を聞くことでさらに自身のスキルを磨くことができるものです。一年後、成長した自分でこの企画に参加できることがこれからの目標として掲げ、日々努力します。

ESD子どもキャンプ レポート

数学教育専修1回生 阪井 築

私は今まで子どもと関わったことがあまりなく、せいぜい従兄弟や友達の兄弟としか関わっていなかったもので、とてもこのキャンプを楽しみにしていた。「どんな子どもたちが私の班なのだろう」「仲良くなれるかな」など期待で満ちていた。しかし、いざキャンプが始まり子どもたちが身近な存在になると、自分の考えの甘さに気づかされた。

このキャンプを通して学んだことが3つある、一つ目に子どもへの関わり方、二つ目子どもへの指導の仕方、三つ目に教材開発についてである。

一つ目子どもへの関わり方についてである。今回のキャンプで子どもと長い時間関わったことで、子どもたちは良くも悪くも素直であるということを感じさせられた。2日目のテーマ別フィールドワークの時にゴミ拾いもあり、皆しっかりゴミ拾いをしてくれた。しかし、危険な場所にまで拾いに行くことがあるため、何度か注意することがあった。このように子どもたちは私たち学生リーダーが言ったことをまじめに実行しようと一生懸命なのだが、度が過ぎると危険なことに巻き込まれることがある。しかし、素直な面を抑え込むわけではなく、あくまでも良いところは精一杯引き出すとともにバランスが大切だと感じた。

二つ目の子どもへの指導についてである。今回のキャンプで特に気になったことは線引きである。私は子どもを叱る線引きが全くと言っていいほどわからなかった。子どもを叱るべきなのか、もう少し我慢して次の展開に期待すべきなのか、迷う場面がいくつもあった。叱ることはその場の空気や子どものモチベーションにも関わってくる。また、今の子どもの行動は、一見テーマと関係ないように思えるが、その後の展開次第では、よい学びになっていくかもしれない。そのようなことを全てクリアできるスキルがまだ私には皆無だと痛感した。大切なことは、成り行きまかせにするのではなく、子どもの行動がテーマの方向に進んでいくように、アドバイスすることだ。グループ全員が同じ目標に向かって、協力しながら進んでいこうという雰囲気を作ることが重要である。子どもたちの行動を予測して動き、言葉による説明だけではなく文字で書き示してみるなど、上回生や院生の先輩方を見て素直に真似たいところだと思った。たくさん周りの方々に助けていただき、そこから吸収できたことはとても素晴らしいものだった。



2班のみんなと

三つ目の教材開発についてである。今回は「先を読む力」「子どもに学んでもらいたい内容を作る」「様々な関わりを通してコミュニケーション能力を身につける」が目標であったが、2つ目は特に難しいと感じた。これは教師を目指すうえでずっと付きまとう悩みだと思うので、たくさんの人を見習い独自のものを作り上げたい。

様々なこと、様々な経験、しんどいと思った瞬間も確かにあったが、終わってみるととても寂しい気持ちに包まれた。もっともっと成長したいと心から願った。2日間本当にありがとうございました。

キャンプレポート

音楽教育専修 1回生 渡部 綾華

大学のキャンパス内とその周辺の奈良公園、附属小学校を主な活動場所として8月6日、7日に奈良教育大学でESD子どもキャンプが行われた。奈良ASPネットワークが主催し、約60人の小学5年生から中学3年生までの子どもが参加し奈良教育大生約30人が学生スタッフとして参加した。

2日間を通して、2つの変化を見ることができた。1つ目は自分の中の変化、2つ目は子どもたちの変化である。



1つ目の自分の中の変化についてである。今回のキャンプで自分が今までついていく側の立場にいたということを実感した。しかし、子どもたちと関わっているうちに、視点が変わり、引っ張っていく側の立場に立たなければいけないことを自覚した。それは例えば、授業を受ける側から授業をする側への立ち位置の変更と似ている。私たちは高等学校までは授業を受ける側であり、それが当たり前になっている。しかし、大学卒業後は、授業をする側として

の行動が期待されている。今回のキャンプで、視点を変換するということが非常に困難であることを学んだ。ついて行く側に比べて、引っ張っていく側は、先の見通しやリスク回避、時間の管理や求められる成果など、考えて行動しなければならない。視点を変えるという意識を持ちながら、この4年間の間に何度もこのような経験を繰り返すことが必要であると思う。

2つ目の子どもたちの変化についてである。最初の顔合わせの時点から最後の挨拶をするまでの間に、徐々に子どもたちの表情が変わっていく過程を見ることができた。最初は緊張で固かった表情は、2日間かけて柔らかい表情になった。キャンプで経験した自然との関わりや仲間とのつながりは、子どもたちが成長するきっかけとなった。その成長は充実感や満足感となり表情の変化がみられたのだろう。学生スタッフの立場でこの子どもたちの表情に気付けたということは、これから先、子どもと関わる際に

精神的な成長を見つける手がかりになる。

2日間の経験が私の財産になることは、間違いないと言い切れるほど、良い経験をすることができた。小学生と関わることで自体が、しばらくの間なかったため、接し方に困ることもあった。しかし、それ以上に得ることが多く、些細なことから大きなことまで、たくさんの気づきや学びがあった。先輩方から学ぶことも多く、これからの参考になった。



2013 奈良 ASP ネットワーク 第 2 回 ESD 子どもキャンプ から学んだこと

社会科教育専修 1 回生 坂野 紘太

2013 年 8 月 6 日～7 日に奈良教育大学ユネスコクラブ主催の“2013ASP ネットワーク 第 2 回 ESD 子どもキャンプ”が行われた。小中学生 58 人、学生リーダー 33 人、小中学校の現職の先生方の参加があった。「自然と『あい』を感じるキャンプ」をテーマに、たくさんの自然や人と「であい・ふれあい・ささえあい」ながら、フィールドワークや銭湯体験、キャンドルサービスなどを行った。

私がこのキャンプで学んだこと・感じたことは 2 点ある。1 点目は子どもと関わるにはもっといろいろなことについて知っておく必要があるということ、2 点目は子どもの自発的な行動を促すということの難しさである。

1 点目の子どもと関わる上で求められる知識についてだが、特に 2 日目に行われたフィールドワークでは、子どもの心を掴むため、あるいは子どもから出る様々な疑問に対応するためには、たくさんの知識が必要だと思知らされた。いろいろな植物の名前やそれらに関することや、春日大社の歴史的な位置づけ、奈良の鹿における環境問題など、たくさんの分野に関する疑問が子どもたちから出された。子どもたちの素朴な疑問に答えるためには、教員としてできるだけ多くのことにアンテナを張り、知識として身に付けておく必要があると実感した。

2 点目の子どもの自発的な行動を促すことについてだが、子どもたちにすべてを任せては、なかなか時間内に物事を決めることができなかったが、私たちが押し付けて決めていくべきでもない。私たち学生リーダーがすべきことは、いかにして子どもたちが物事を決めやすいような環境を作り、子どもたちの積極性や自発性を支えていくかということである。そのため子どもたちへの声のかけ方などをこのキャンプを通して学んだ。このキャンプでは班ごとにスタンプを決めるという場面があったが、



「扇湯」にて銭湯体験

そのような漠然とした物事を決めるときには、たくさん

の例を示して、子どもたちのイメージを膨らませたり、単純な質問に区切って積み上げることで、子どもたちにとって具体的で扱いやすいものとなり、学生リーダーの意見を押し付けることなく、子どもたちを上手く引っ張っていけると感じた。

今回の子どもキャンプ全体を通して感じたことは、私自身まだまだ未熟であり、たくさんのことを学ぶ必要があるということだ。子どもと関わる際の経験があまりにも少なすぎるということを痛いほど思い知らされた。もっとたくさんのことについて、もっと深く学び、知り、そしてもっと子どもと関わるという経験を積まないといけないと感じた。

キャンプの振り返り

国語教育専修1回生 吉門 歩実

8月6日、7日にESD子どもキャンプに参加しました。私にとっては初めてのキャンプであると同時に、多くの小中学生や現職の先生方と関わる貴重な経験でした。今回、このキャンプを通して多くのことを学ぶことができましたが、その中でも次の3つについて振り返りたいと思います。第1に周囲に気を配ること、第2にメリハリをつけること、第3に楽しむことの大切さです。

第1の周囲に気を配ることというのは、大学生として子どもたちが怪我をしたり危険な目にあったりしないように注意して、常に子どもたちの次の行動や周りの状況を把握することの大切さです。キャンプで同じ班だった小学生の男の子たちは、とても元気が良く走り回ったり、思いきり遊んだりしていました。時には集中して全力で楽しむあまり、危険な状況だということに気付かないこともありました。せっかく夢中で楽しんでいる子どもたちがキャンプ中に怪我をして嫌な思いをしないように、自分たちが十分に配慮しなければいけないと思いました。このままの状況だと危ないなと思ったら、すぐに指導することが大切です。

第2のメリハリをつけることですが、換言すれば、楽しむところは思い切り楽しみ気を引き締めなければいけない時はしっかり緊張感を持つということです。子どもたちに楽しんでほしいと思えば、自分はその以上に楽しむことが大切です。しかし、まじめな場面で気を抜いていると思わぬ失敗をしてしまうかもしれません。また、子どもたちが気を抜いて危ない場面でふざけているときは、叱ることも必要だと思いました。そして同時に叱ることの難しさも感じました。私は、きつく叱ることでせっかく楽しんでいる子どもに嫌な思いをさせてしまうことを恐れて、叱るべきところではっきりと「これはいけないことだ」と言って叱ることができませんでした。キャンプが終わって一番に浮かんだ反省点がそれです。子どもたちが気分を害するのを恐れて叱らないと、子どもたちが危険な目にあい、もっと嫌な思いをするかもしれません。叱ることはとても難しいですが、その大切さを学びました。子どもたちにどういふことを感じてほしいか、楽しんでほしいかを前もってゲームや企画を考えるときに思い浮かべておくメリハリをつけやすいと思います。

第3の楽しむことは、前にも書きましたが、子どもたちに楽しんでほしいければまず自分が楽しむことができなければいけないということです。キャンプに来る子どもたちは最初、とても緊張しています。同じ班になるのは知らない人ばかりで、子どもたちはキャンプの1日目の朝、固くなっていました。私自身も不安や緊張がありましたが、仲良くしたいという気持ちを表して積極的に話しかけ、ゲームや企画を思い切り楽しんでいると、徐々に同じ班の子どもたちと親しくなっていました。今回、小中学生のみんなとたくさん話をするのができたのはとても良かったと思います。誰かとコミュニケーションをとり、親しくなるためには、自分が心を開いて接することが大切だと感じました。

以上のように、今回初めてキャンプに参加して色々と学ぶことができました。ここで挙げたことのほかにも多くのことを学び、得ることができたと思います。キャンプでの経験をこれからの大学生活や、もし将来教師になった場合は教師生活の中でも生かしていきたいです。また、これからも多くの人と交流して新しいことを吸収していきたいです。



班のみんなで楽しくテント設営

ESD 子どもキャンプを終えて

社会科教育専修 1 回生 黒木 純

8月6、7日の2日間にかけて奈良教育大学で「第3回 ESD 子どもキャンプ」が行われた。私は、今までキャンプというものに参加したことはなかったが、初めて学生スタッフとして参加させていただいた。

初めてのキャンプが終了し、振り返ってみると気付かされたことが3つある。1つ目はまず私たちが一番楽しむということ、2つ目に場面に応じた行動力の必要性、3つ目に身近なことであっても知らないことがたくさんあるということだ。

1つ目のまず私たちが一番楽しむということだが、子どもたちが楽しめるようにするには自分たちが一番楽しまなければいけない。特にそう感じられたのはキャンプファイアーや2日目の朝からのフィールドワークの中でであった。夕食・銭湯タイムで大雨が降り、キャンプファイアーの時には疲れて眠そうになっている子が何人か見られた。しかし、先輩方が楽しそうに場を盛り上げていい雰囲気づくりをされたので、キャンドルサービスに変更したものの体育館の中で楽しくスタンプやゲームに取り組むことができたのを近くで見て、とても勉強になった。先生になったときに、子どもが楽しめるような授業をするためにはまず、自分自身が楽しく授業をしていかなければならないのだなと感じた。

2つ目の場面に応じた行動力の必要性についてだが、夕食・銭湯タイムで大雨が降った時に同じ班の先輩の場面に応じた行動力を目の当たりにした。子どもの安全面を第一に考えてどう行動するのかを素早かつ的確に子どもたちに指示していた。私は、その時どうしていいのかもわからず、何もすることができずに先輩の指示に従うだけになってしまった。先生になった時には、校外学習などで学校から外に出ていく機会もあるだろう。いろいろな場面に応じた対応する力をもっと養っていかなければいけないと思った。そして、先のことや、もしものこと



円窓前にて集合写真

なども考えながら子どもたちをリードしていくように行動していけたらと考える。

3つ目の身近なことであっても知らないことがたくさんということだが、奈良公園でのフィールドワーク班を担当させてもらい、身近なことでも知らないことばかりだなと改めて感じられた。また、そのような身近なことにおいても、興味持ち調べることはとても大事だと思った。当たり前と思えるものであっても、立ち止まって調べてみてそれが正しい知識であったならば、自信をもって子どもたちに伝えることができるし、仮に誤ったものであればそこで間違いを発見することができる。このようなことを、繰り返して知識を増やしていくことが教師になるまでの期間でできたらいいなと思った。

今回のキャンプのスローガンであった「あい」を子どもたちと出会い、ふれあい、そして学生同士で支えあい、助け合いなど多くの「あい」を感じる事ができた。そして何よりも多くのことを経験させてもらい子どもがやっぱり好きだなと改めて思うことができてとてもよかった。また、先生方や先輩、同級生から子どもたちとの触れ合い方やその姿勢なども学ぶことができた。これからもユネスコクラブで多くのことに参加し、貴重な経験を積み重ねていけたらいいなと思う。

ESD 子どもキャンプを振り返って

奈良教育大学 社会科教育専修1回生 浅野 優子

ユネスコクラブに入って初めて参加した大きな行事が、この ESD 子どもキャンプであった。私は大学生の間でしか出来ないことがしたい、自分に足りないものをどんどん身につけたい、と思い入部した。今回のキャンプを通して、自分に足りないと感じたことが2つある。1つ目は、コミュニケーション能力、2つ目は子どもを指導するということだ。

まず、1つ目のコミュニケーション能力についてである。もともと私は人見知りをする傾向がある。主催者側として子どもとどんどん触れ合い、子どもの緊張を和らげるべきであるにもかかわらず、なかなか子どもたちとコミュニケーションをとることが出来なかった。「好きな食べ物は何？」など質問することで会話を広げようと取り組んだところ、2日目になってやっと、子どもたちから自分に話しかけてくれるようになり、子どもたち同士でも楽しそうに会話をしている姿が見受けられるようになった。また、中学2年生の子どもが班を引っ張ってくれるようになり、2日目のテーマ別フィールドワークでは班のみんなで協力出来た。ただ、最後まで男女間で気楽に話をしている姿が見られなかったのが残念である。男女を交えた会話をもっと積極的にしていけていたらよかったと思う。男女が互いに気にすることなく会話できるようなグループをつくっていくためには、リーダーとしてどのような声かけをすればよいのか、またどのようなゲームをとりいれればよいのか等を、先輩に教わりながら実力をつけていきたい。



2つ目の子どもへの指導についてである。子どもたちの仲間も様々な活動を通して深まり、夜を迎え、テントで就寝する時間となった。スタッフミーティングを終えたあとテントに行くと、私の班は静かであり、感心した。しかし、その分朝早すぎるくらい早い時間に男の子たちが起きだしてしまい、まだ寝たい人たちのことを考えず騒ぎだしてしまった。もちろん隣のテントにいた自分も起き、彼らに注意をしたがなかなか静かにならず、ユネスコクラブの先輩に注意をしてもらった始末であった。子どもたちを納得させ、適切な行動を取らせるにはどういう声かけが必要であるのか。そんなことを考えさせられた出来事であった。厳しさと優しさのメリハリのある指導、決まりを守らせるだけでなく、どのように行動すべきかを考えさせる指導など、学校現場で必要なことだと思う。

このキャンプで関わったのは子どもたちだけではない。小中学校や大学の先生方、大学外の活動で出会った地域の方、そして、ユネスコクラブの部員。キャンプの準備や当日一緒にコントしたりすることで、学生内での交流が生まれた。このクラブに入らなければ、出会わなかったはずの人たち。これからももっと交流し、共に自分を高めていけるような仲間になりたい。

第2回ESD子どもキャンプに参加して

教職大学院1回生 島 俊彦

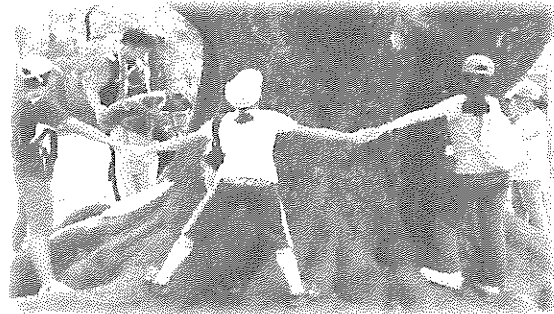
8月6-7日の二日間、「2013奈良ASPネットワーク第2回ESD子どもキャンプ」が開催されました。昨年度に引き続き今年も学生スタッフとして、このキャンプに企画段階から携わらせて頂きました。

キャンプを終えた今、振り返ってみると、私は大きく3つの学びを得ることが出来たと考えています。1つ目は挑戦する事の大切さ、2つ目は連携する事の大切さ、3つ目はビジョンを描くことの大切さです。

1つ目の挑戦する事の大切さですが、私は今回キャンプファイヤー担当班でした。子ども達の心に何かを遺したい、自分の成長の為に何かをしたいという願いから、トーチトワリングを行う事を決めました。なかなか上手くトーチを回すことが出来ず、直前まで先輩に教えてもらいながら本番に臨みました。

子ども達の心に何かを遺せるトワリングになったかは分かりませんが、新しいことに挑戦したことで、自身の可能性を広げ、成長する事が出来ました。

2つ目の連携する事の大切さですが、このキャンプを子どもにとって良いものとする為に、大学の先生方、学校現場の先生方、学生、多くの人々が何カ月も前から連携・協力しました。学生である私たちにとっては、大学や学校現場の先生方がキャンプをどのように企



画・運営するのかを学ぶ絶好の機会でもあります。誰か一人の力だけでキャンプを成功に導くことは不可能です。キャンプに携わる全員が密に連携して創り上げたキャンプだからこそ、皆にとって学びのある良いキャンプになりました。

3つ目のビジョンを描くことの大切さですが、これは今回のキャンプで私が一番学んだことです。今年のテーマは『自然』と『あい』を感じるキャンプでした。このようにテーマ(ビジョン)を明確にすることで、テーマを達成するために個々人がどのような行動をとるべきかを明確に出来ました。私はキャンプを通して、『あい』の中でも「つながり『あい』」を子どもたちに感じてほしいと考えたうえで、子どもたちと関わり、キャンプファイヤーを行いました。子ども達同士をつなげるというビジョンを描き、その目標の達成を目指して思考錯誤しながら行動したことで、子ども達同士の関係づくりに寄与する事が出来ました。

以上が、「2013奈良ASPネットワーク第三回ESD子どもキャンプ」を通して、特に学んだ3つのことです。昨年もこのキャンプに参加して、様々な事を学び成長する事が出来ました。今年は去年に比べて自身が成長していることを実感出来ました。来年も参加して、将来学校現場で即戦力となりうる力を身に付けたいと思います。

「つながる」「つなげる」活動にするために

教職大学院2回生 土海 稚奈

はじめに

8月6日と7日の1泊2日で行われた、夏休みのお楽しみ企画であるESD子どもキャンプに参加した。前回に引き続き、2回目の参加である。前回のキャンプでは、「事前準備の大切さ」に気づくことができた。今回のキャンプでは特に準備段階での取り組みを見直し、全体がスムーズに活動するためには何をしたらいいのかを意識しながらスケジュールを組んだ。そして参加してくれる子どもはもちろん、企画に携わる学生がひとりひとりが「きらりと輝くことができる場を整えること」を自身のテーマにした。このテーマを実現するために、以下の3つを行動目標として設定した。

- 1 グループのメンバーの細かなタイムスケジュールを作成すること
- 2 ギターでテーマソングなどが弾けるようになること
- 3 引き継ぎメモを作成すること

時間の管理はゆとりをつくる

1つ目のテーマについてだが、いつ誰がどこで何をしているのかが一覧となったタイムスケジュール表を作成することによって、全体の動きと個人の動きの把握が容易になった。各々の状況を知ることは、組織で動く上で重要であり、当日の活動では、このタイムスケジュール表があることによって備品の移動や連絡を取る相手がどこで何をしているのかが一目でわかり、会場の準備等を円滑に行うことができた。今回夕立にあった経験を生かして、次回には雨の日用のタイムスケジュール表も作成しておく必要があると感じた。

タイムスケジュール表を作成し、個人や全体の時間の管理をすることは当日の動きを事前に把握することができると同時にキャンプのような野外活動を組み立てることだけではなく、子どもの行動を想定し組み立てるという点で、授業を組み立てることにも繋がっていると考える。すべての活動が自身の職務能力を高める活動になっていると感じている。

音の切れ目で気持ちの転換

2つ目のテーマについてだが、今まで参加してきたキャンプでテーマソングなどの音の役割について考える機会があったこと、また今回のキャンプの計画段階でギターを弾くことのできる学生が一人しかいなかったことの2点が行動目標設定の要因である。さらに、音を使うことによってその場の雰囲気をつくったり、注目を集めたりという「場を整える」ためにギターを利用することに興味があったことにも後押しされ、ギターの練習を始めた。今回ギターに触るのは初めてで、時間も一カ月しかないという厳しい状況であったが、本番までにはなんとか弾けるようになった。実際、ギターが2つあることによって、どちらかが止まってしまっても音が絶えることなく進行できたので、拙いながらも当日弾くことができてよかった。



歌で場の雰囲気を盛り上げる

音が切れると、良くも悪くも子どもたちの注意が音源に一点集中する。この顕著な効果をどうプログラムに生かすのかが、子どもたちの心に残る活動になる要因の一つになるのではないかと思う。今回は各プログラムの切り替えの場面では、テーマソングを歌うという活動を繰り返し実施した。キャンプ開始時、子どもたちはきょとんとした表情を浮かべていたが、学生が進んで歌を歌ったり、踊ったりしている姿を見て、徐々に子どもたちも歌うようになり、キャンプ終了時には歌ったり、踊ったりすることはもちろん、音が鳴ると歌い手である進行役に自然と注目するようになっていた。このような様子から、「場を整える」という意味で、音で子どもたちの気持ちを転換することができたと思う。

今と未来をつなぐ言葉

来年そして再来年、さらに未来にこの活動をつなぐための取り組みとして、「引き継ぎメモ」の作成を行動目標の3に挙げた。私たちは活動を学びの深化に活用する手段として、報告書を作成しているが、作業の引き継ぎは口頭や共有体験に留まっているように思う。また、今回を越える次回のキャンプをつくるためには情報の共有が必要不可欠であると感じ、作業面での引き継ぎは意義あるものであると考え、3つ目のテーマを設定した。私たちは今年度で大学院を修了し、学生としてキャンプに関わることもできなくなるが、「引き継ぎメモ」に残した言葉をとおした経験は後輩たちに残る。この「引き継ぎメモ」を通したつながりが、次回のキャンプの「場を整える」ことにもつながることを期待している。この引き継ぎ活動は、学校現場に出たときにも必要とされていることから、学生のうちから経験できたことは有意義であった。

おわりに

以上の3つの行動目標を軸にし、「きらりと輝くことができる場を整えること」の実現に向けて取り組んだ今回のキャンプのキーワードは「あい」であった。その言葉通り人や奈良、自然などたくさんのもとの出あい、触れあい、支え合うことができた。また多くの人に支えられていること、環境に恵まれていることを再度実感することができた。そして今ある環境が当たり前ではなく、多くの人の想いに支えられ、成り立っていることが実感できた。このように感じることもできたのも、このキャンプに関わっ



てくださった先生方、地域の方、参加してくれた子どもたちと出会えたからである。さらに想いは行動にのって、言葉にのって、表情にのって相手に伝わること、同じ目標に向かい切磋し合えることを体感できたのは、仲間がいたからである。このキャンプを通して出会った人すべてに感謝の気持ちを伝えたい。次回からは学生リーダーとしては関わることはできないが、このキャンプが子どもや学生にとって新しい自分に出会い、自らの成長につながる活動であり続けるために、これからも共に学び、共に成長する仲間として関わり続けていきたい。

ASP 子どもキャンプに参加して

奈良教育大学教職大学院 1回生 大宮 愛

今年も昨年に引き続き、ASP 子どもキャンプに参加させていただいた。この ASP 子どもキャンプは、奈良市のユネスコスクールの小学生・中学生が集まり、大学の構内にテントを張ってキャンプを行う。対象となる子どもたちは、小学校5年生から中学校3年生である。グループには、さまざまな学年の子どもがおり、異学年交流を行うことができる。キャンプのプログラムは、学生が中心となり多くの先生方に協力をしていただいで作成し、実行した。先生方と学生による手作りのキャンプである。

このキャンプで、私は多くのことを経験し、様々なことを学んだ。そして、様々なことを考えながらグループの子どもたちと接したり、プログラムを実行したりした。私がこのキャンプで得たものや考えたことは3点ある。1点目は先を予想して行動する力、2点目が朝さんぽのプログラムの目的、3点目が子どもとの関わり方である。

1点目の先を予想して行動する力であるが、私はこの点ではかなり出来ていたと思える。このキャンプでは、何回かゲリラ豪雨にあったが、私のグループの子どもたちも学生はほとんど雨に濡れることがなかった。なぜならば、雨の降り方から豪雨になることを予想して建物の中に避難していたからである。銭湯から出てきた後に雨が降ったが、夕食を食べ終わった後にもゲリラ豪雨にあった。夕食後、雨がぱらぱらと降り出していた。少量の雨であったため移動することもできたが、最近の天気や銭湯の後の雨の降り方を踏まえて、ゲリラ豪雨になることを予想ししばらく店に留まるようにした。その結果、ほとんど雨に濡れることなく行動することができた。



夕食は団へ

2点目の朝さんぽの目的について述べる。この朝さんぽのプログラムは、関川さんと私の2人で考えたプログラムである。このプログラムの目的は2つある。1つは次のプログラムに向けて体と頭を起こす、1つはグループの人以外と接して仲良くなることである。この2つの目的を達成するために、



朝さんぽの開始

まずは奈良教育大学から奈良公園まで歩き、その後奈良公園で何人かの仲間で集まるゲームを行った。その後、朝ご飯を食べ次のプログラムに移る、この3つの活動を入れることにより、目的を達成しようと考えた。頭と体を起こす目的は、3つの活動を通して達成することができた。しかし、グループの人以外と接して仲良くなるという目的は、達成することができなかった。集まること

に子どもの意識が集中し、他のグループの子ともと交流している姿はあまり見受けられなかった。同時に、プログラムを進めた私たち2人がゲームの進行や、時間配分などに気を取られてしまい、本来の目的を意識する余裕がなかったからである。授業でも同じであるが、常に目的を意識して進行していかなければならない。目的を意識していなければ、活動あつて学びなしになってしまう。この朝さんぼの経験より、目的が何であったか確認し活動を進めていくことの大切さが再認識できた。

3点目の子どもとの関わり方であるが、私はキャンプが始まる前に自分は、サポート役として子どもに関わっていこうと考えていた。私と子どもが密に関わることも重要であるが、最終的には子ども同士が密に関わって欲しいと考えたからである。実際にキャンプでは、初めは子どもに積極的に話しかけにいき、まず子どもと学生スタッフとの関係づくりを心がけた。そして学生スタッフが仲介する形で子どもと子どもが関わり合う場面をつくり、一人一人をつないでいった。子ども同士が仲良くなり関わりだしてからは、サポート役に回るようにしていた。

グループリーダーの学生が不在の時には、副リーダーである私がグループを引っ張っていかなければいけなかったが、他の学生スタッフに任せてしまったところがあった。サポート役に徹するといっても、必要な場面では、臨機応変に前に立ってグループを引率していかなければならないと改めて感じた。副リーダーであることをもう少し意識し、考えて行動することがとても重要であった。次のキャンプや学校現場に出た際には、自分の立場や求められる役割を考えて子どもと関わるようにしたい。

以上の経験より、様々なことを考えて得たものや学んだものは多い。このキャンプでは、前回と異なるプログラムを考えさせていただいたことにより、別の視点でものを考えることができ、成長することができた。自分も成長したが、数々の場面で子どもが成長する姿を見ることができて、本当に幸せである。この幸せを味わい、子どもと関わるのがとても楽しいことなどより教師になりたいという思いが一層強くなった。このキャンプでの反省や得たものなどを活かしていきたい。来年もこのASPキャンプに参加し、自分のキャリアアップにつなげたい。そして、来年もまたたくさんの人と出会い、たくさんの子どもの笑顔を見ることを楽しみにしている。



学生代表として臨んだユネスコ子どもキャンプ

教職大学院 2 回生 新宮 済

はじめに

ユネスコ子どもキャンプは本年度で4回目を迎えた。私は入学してからこのキャンプへの参加は三度目となり今年が最後の機会であった。1年目は奈良教育大ユネスコクラブ(5名)の一員として先生方の企画会議に立ち合わせていただいた。2年目のキャンプではクラブ員(26名)が先生方と一緒にプログラムを企画し運営した。そして今年度の3年目はクラブ員(33名)が昨年度のプログラムにかかわったメンバーを中心に、各プログラムをクラブ員だけの力で企画した。その意味で3年目はまさに挑戦のキャンプであった。本年度は子ども58名、教員22名、学生33名が参加して8月6日と7日の二日間、奈良教育大学キャンパスを会場にキャンプがおこなわれた。



今回のキャンプを「活動あって学びなし」で終わらせてはならないことを話し合い、ユネスコクラブ員として3つの目標を設定した。目標は以下の3つである。

- ① 教員になってからも重要な力となる「先を読む力」をつけること
- ② 子どもに学んでもらいたい内容をつくること
- ③ 子どもの関わり、教員との関わり、学生同士の関わりからコミュニケーションを身につけること

私は学生代表としてプログラムリーダーに所属した。以下目標にそって3つの反省をしていく。

組織のリーダーとしての「先を読む力」

今年度のキャンプは昨年度のキャンプとは大きく異なり、企画運営の大部分を先生ではなくユネスコクラブ員が創るという挑戦のキャンプであった。だからこそ、このキャンプをつくるにあたり組織で動くということを大切にしてきた。リーダーである私には、誰よりも早く、組織のために先を読んで動くことが求められていた。リーダーとして私がすべき役割は「情報の共有」であり、自らが動いてすばやく情報を集めること、集めたものを的確に処理することを心がけた。昨年経験も踏まえてキャンプが近づくにつれて、各プログラムから物品やタイムスケジュール、他のプログラムとのつながりなどの質問が山のように出てくるのが予想された。そこで、自分が持っている情報をプログラムリーダー4人と共有し、窓口を増やした。さらにタイムスケジュールや議事録、物品表をまとめてもらったことで、文字資料として情報を広く確実に伝えることができた。

子どもの心に火をつけること

学生代表である私の仕事は、せっかくクラブ員が汗水垂らしてつくってくれたプログラムを、単なるプログラム消化の活動として終わさないことであった。プログラム消化に終わってしまうとは、子どもたちがキャンプのなかで自分を出し切れず終わってしまうということである。自分を出し切るようにするために、子どもたちの心起こしが必要であることをこれまでのキャンプ経験から学んでいた。ASPキャンプの特徴は、年齢の異なるはじめての仲間とはじめてのリーダーと過ごすところにある。そのような環境の中でも子どもたちは不安を解消し、自分を出しきることができる環境をつくるために、プログラムリーダー班はキャンプのテーマ「あい」を提案した。このキャンプでたくさんの人、自然と出会い、そして触れ合う活動をして、支え合える関係を築いていこうという目標をゴールに子どもたちに意識化させることで、子どもたちが安心して自分を出せる環境をつくることができると考えたからである。オリエンテーションでは子どもたちとの出会いの場をドラマチックに輝かせるために、テーマソング

「あい」からスタートした。「あい」をみんなで歌う活動と、テーマカードに見つけない「あい」を探す活動、見つけた「あい」をふりかえる活動から意識化を目指した。子どもたちに意識化が伝わったと感じたのはスタンツを考えている場面である。8班では子どもたちは、「ささえあい」の場面を探して考えていた。子どもたちがテーマを声に出しながら、話あう空間は一瞬たりとも見逃せないくらい子どもが輝いて見えた。彼らの心に火がともされているなど実感できた瞬間であった。

私達はこの「あい」のテーマをクラブ員に何度も伝えることを心がけ目指したい子どもたちの姿をつくり、各々のプログラムが同じベクトルを向くようにした。企画会議で「この活動でぼくたちが出会ってふれあいたいものは？」というような声で話しあう学生の姿があった。私たちは、昨年にはなかったねらいにそったプログラムの企画と運営をしようとする意識を持つことができたのだ。

私たちはキャンプへの思いを歌にこめて伝えた。キャンプの始まりと終わりをテーマソング「あい」で締めくくったのも、そのためであった。歌に思いをこめる活動が、これほどまでも子どもの心に響くとは思ってもいかなかった。最後の歌う場面で、一生懸命歌っている子どもたちの全力の笑顔と歌声が、二日間で創りあげた「あい」の大きさを物語っていたように感じている。

チームになるために

このキャンプで私はユネスコクラブとしてのチームづくりに努力した。ユネスコクラブではチームとして足りないものがあつた。それは当事者意識である。なぜなら、これまでのユネスコクラブの活動のほとんどを部長、副部長が前に出て活動してしまつたからだ。部長、副部長が考えて動いてくれるからではなく、1人ひとりがチームのために動ける意識が必要であつた。それを強制するのではなく、チームのために自ら気がついて動ける環境をユネスコクラブのなかでつくるために、私は大きく2つのことを行つた。1つ目は部長、副部長のワンマン経営的な企画・運営スタイルから、みんなが責任感を分け合つて運営していくスタイルに変更を目指したこと。そのために子どもキャンプで一番大切なフィールドワークの担当や総合司会、それに加えて各プログラムや学生スタンツの運営を後輩に任せることにしたのである。2つ目は、ただ任せるのではなく、リーダーとして見守ることである。適度にリーダーと会話する機会を設け、班員をまとめるうえでの悩みを聞いてアドバイス(仕事の意味付けの変更、課題の再設定)をしたり、自らも会議に参画したりした。このキャンプを通じて当事者意識が育つてくたかわからない。しかしながら、キャンプ終了時に3年間ユネスコクラブの活動を見守ってくれた現場の先生に「毎年キャンプを進化させてくれたね、今年はクラブ員がイキイキしていて成長が感じ取れました。」と言葉をかけていただいたことで評価したい。

終わりに

以上のことから、ユネスコ子どもキャンプを通じて、私は「先読む力」、子どもに学んでもらいたい内容をつくる力、そしてコミュニケーション能力を磨くことができたと考える。このような力は、大学の講義や座学では磨くことが難しいと考える。責任感をもって企画し、それを実践し、反省する場を経験するからこそ、結果として教師に必要な力が磨かれるのである。教師を目指す学生にとって意義のあるユネスコ子どもキャンプがこれからも持続していくことを心から願っている。

教職に就きたいとより強く思った、2日間のキャンプ

大学院教育学研究科 理科教育専修 1回生 渡邊 憲

「奈良 ASP ネットワーク ESD 子どもキャンプ (以後、キャンプ)」の参加は、一昨年(2019年)の御杖村・曾爾村でのキャンプから本年度で2度目となり、1度目以上に大きな経験をさせていただいた。なぜかという、一つ目に、このキャンプではすべての学生がプログラムの企画段階から主体となるから、二つ目に本年度のキャンプにおいて私は、2班の学生リーダーとテーマ別フィールドワークの担当だけでなく、「地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト」のプロジェクト会議から参加させていただき、全体を俯瞰する立場からキャンプに携わらせていただいたからである。

キャンプへの参加は2度目であるが、子どものリーダーとして行動できるか、学生の企画した活動を子どもの目線に立った学びへと実現できるかなど不安点も多々あった。しかし結果として、2日間にわたる子どもたちとの全力で濃密な活動を通して、2班のさよならの集いでは自然と涙がこぼれ、すばらしい時間を子どもたちと共有できた。また、ユネスコクラブ全員でキャンプを企画・運営した達成感も得られた。

キャンプの振り返りとして、1点目に本年度のキャンプを通して得られた私自身の学びを、2点目に班の子どもたちについて、班活動の中で見ることができた仲間をみとめあう・支えあう姿から感じたことを、3点目に今後の活動へ向けての課題を述べていきたいと思う。

本年度のキャンプを通して得られた私自身の学び

1点目のキャンプを通して得られた私自身の学びであるが、さらに企画・運営していく中で感じた多くの人の支え、学生リーダーとして子どもを導く姿勢と責任感、プログラムを学びへと実現させていくことの難しさの3点に分けて考えていきたい。

まず、企画・運営していく中で感じた多くの人の支えであるが、様々な場面で様々な人に支えられていたことを実感している。テーマ別フィールドワークの企画で何度も話し合いを重ね、目の前の事しか見えていない私のへ軌道修正や、より広い視野でものを見ることを示してくれた仲間。キャンプ2日目は全て任せてしまった2班のリーダー。企画案に煮詰まった私たちにアイデアをくださった中澤先生。忙しい中プレ(予行演習)に参加してくれたユネスコクラブのみんな。暑い中ポイントに立ってくださった先生方。まだまだ未熟な学生が企画したキャンプであるのに、子どもを参加させてくださった保護者の方々。教員としての力を高めている途上の私の学びに、これほど多くの人の支えがあることによりやく気づくことができた。

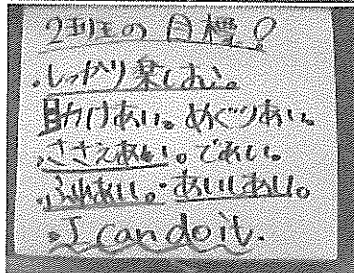
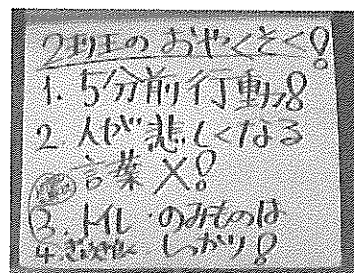
次に、学生リーダーとして子どもを導く姿勢と責任感である。子どもをどう導くかという点に関しては、ある程度ビジョンを持ってキャンプに望んだが、導かれた子どもはどう考え・どう行動するかというところまで思いが到らず、私は金銭と時間の管理で大きな失敗をしてしまった。私の一言に子どもが何の疑いもなくついてきた事から、大人や教員の言動が子どもに強く影響することを実感したとともに、一時が万事、自分の言動を普段から改めなければと気づいた。先を読んで行動することは、安全・危機管理につながるだけではなく、私たち大人の行動を見て成長していく子どもを正しく導くことにつながるのである。

先を読むことは、プログラムを学びへと実現させることにもつながるのではないかと考える。というのも、子どもが楽しめる活動→自然の中を探し知ろうとする活動→つながりを考えることのできる活動の一連の流れの中に、子どもが何を見て・何を感じ・何を学ぶかを、私たち企画者は先を読みながら組み立てていると気づいたからである。今回のテーマ別フィールドワークでも、先を読み、なんとか学びへと実現できたのではないと思う。しかし、ねらいや活動が子どもの発達段階や子どもの実情に応じたものかを先読みすることで、さらに深い学びへと深化していくことができる可能性が大いにあるように思う。次に機会があれば、さらに深い学習へと実現できる取り組みを考えたいと思う。難しいことではあると思うが、チャレンジしていきたい。

班活動の中で見ることができた仲間をみとめあう・支えあう姿から感じたこと

2日目はテーマ別フィールドワークの巡回などで班を離れることになったが、2班の子どもたち（中学生2名、小学生5名）の学生リーダーとして2日間行動を共にさせていただいた。2班の小学生の男の子数人は、はじめ、仲間の話を聞かず、わがままな様子も感じられた。そこで私たち学生リーダーは、仲間をみとめ支え合えるような班をつくることを目標に「2班のやくそく」や「2班の目標」

を子どもたちと決めることにした。（図。）しかし、活動の中で子どもたち一人ひとりを見ると、キャンパスフィールドワーク中、各ポイントで話していただいたスタッフや先生方に対し、「ありがとう」のあいさつの掛け声（せ～の）」を自主的に言い出す姿や、チャレンジタイムで店を決める際に自分の意見を重視するのではなく、みんなが行きたいと思う店を決めるために、まとめ役を買って出た姿が見られた。中学生の2人は本当にしっかり者で、私たちに代わり小学生や班全体を常にまとめてくれていた。「やくそく」や「目標」を意図的に定めなくても、



図。「班のやくそく」「班の目標」

子どもたちが目標に考えた I can do it. を自然に実践していた。さらに、2日目のテーマ別フィールドワークでは、1日目は班で歩く際に後ろを振り返らず我先に行動していた子どもが、遅れてしまう子どもを気遣うようになっていた。また、はじめは打ち解けられていなかった小学生の女の子も、いきいきと私たちに話をしてくれるようになった。その女の子が爬虫類を家で飼育していて、見つけたトカゲ（ニホントカゲ）に詳しくったこと、コオロギを餌にするため平気で触ることができるというエピソードを、今秋の虫の声を聞くたびに思い出す。子どもたちは、私が思っていた以上に様々な方向にアンテナを伸ばしていて、I can do it. の機会を待っていることに気づかされた。後になって、班のまとまりを重視するために「やくそく」や「目標」で子どもたちを管理し、窮屈な思いをさせてしまったのではと反省している。

今後の活動へ向けての課題

反省は上に述べたもの以外にまだまだあるが、今後の活動に向けての課題を挙げていきたい。

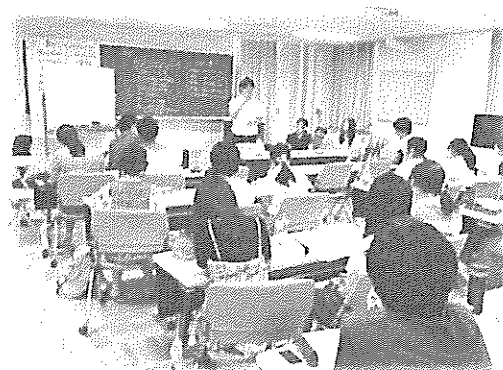
まず、キャンプ中に先生方に指摘された子どもへのメリハリのある関わり方である。加藤先生もおっしゃっていたが、一見厳しいこの指摘には、私たちの活動を単に学生の活動という視点ではなく、教員としてこれから成長してほしいという先生方のあたたかい眼差しがあるように思う。このことに関して、ケーススタディーという形で学ぶことができるそうである。学年も考え方も多様なユネスコクラブ部員がそれぞれ考えたことを発言する機会となれば、部員間の理解とともに、今後の活動への自信となるのではないだろうか。

もう一点、今後このキャンプのように様々なプログラムに分かれて活動をおこなうときの、定期的な話し合いについてである。今回のキャンプは各プログラム間・内で情報や考えの共有が十分ではなかったと思う。キャンプの準備期間がテスト期間と重なっていた事があるかもしれないが、ある程度定期的に共有の時間が持てていれば混乱は少なかったのではないかと思う。この話し合いの機会を定期的に持つというモデルは、忙しいながら、時間をつくって話し合いをされていた加藤先生のワーキンググループ会議が手本になると思う。

生意気なまとめとなってしまったが、私自身にとって、気づきと学びに満ちたキャンプであった。このような貴重な経験となったのも、私たちの学びのために尽力してくださった奈良教育大学の先生方、奈良 ASP ネットの先生方、そして一緒に全力で頑張ったユネスコクラブ部員のみんなのおかげである。また、キャンプ後の奈良 ASP ネットワーク連絡会議で、キャンプに参加してくれた子どもたちの各学校での成長を聞くことができ、こんな私でも子どもの成長に関わることができたことが嬉しかった。教職に就きたいとより強く思った2日間のキャンプであった。ありがとうございました。

はじめに

奈良教育大学内にテントを張り、ユネスコスクールの子どもたちと ESD に関することを学びながらキャンプをするという前代未聞の素晴らしい活動も今年で無事 2 回目を終了した。今回は学生リーダーとして関わる最後のキャンプであったため、自分の中でもこのキャンプで得られるものをすべて吸収したいという強い気持ちがあった。実際にキャンプ当日だけでなく、キャンプを創っていくという段階を含め本当に多くのことを学び、身につけることができたと感じている。その中でも特に身に



【いざ出陣】

つけたことを三つあげて述べたい。一つ目にできる教員として必要な力について、二つ目にファイヤープログラムの創造段階で心がけたことについて、三つ目に関わりとつながりについてである。

先を見抜く力

まず一つ目にできる教員として必要な力についてである。できる教員になるために必要な力、それは先を読む力である。私がこれまで出会ったできる教員は授業だけでなく、学級経営、学校行事など、これまで起きたことと、今起きていることから、先を予想し、判断し、実行されていた。私自身このキャンプでもこの力を少しでも身につけるようにキャンプの準備段階から気をつけていた。私は去年に引き続き今年もキャンプファイヤーの企画・運営を担当させてもらった。当日はあいにくの雨で急遽体育館でのキャンドルサービスとなったため、ファイヤーの落としどころと決めていた、子どもたち一人一人に感謝の気持ちを伝えるトーチトワリングの実施が危ぶまれる状況になってしまった。そこで、短い時間であったが、事前にパターンを二通り準備した。キャンドルサービスで子どもと一緒に創り上げた空間を壊すことなくどのパターンでも成功するように、ファイヤー班で変更した役割や流れを共有するよう心がけた。最後は天気が味方をし、トワリングができるパターンを決行し、見事成功を収めることができた。このように予測できない天気に対応するために、先を予想することができ、またその大切さも切実に感じることができた。

ぶれない中心を創る

二つ目にファイヤープログラムの創造段階で心がけたことについてである。私はキャンプファイヤーは子ども、学生、教員といった、キャンプ参加者全員が一緒になって活動し、つながれる場になるのではないかと考えている。また、参加してくれた子どもたち一人一人がみんなからの注目を浴び、輝ける場を創りたいとも考えていた。そのために、今回学生リーダーを初めて務める 1 回生を中心に、どのようなスタンスを当日班の子どもたちと組み立てるべきか事前に勉強会を行なった。また、キャンプファイヤー班のスタッフ会議では今回のファイヤーではどのような空間を創り、子ども達に感じ取って欲しいかといった、ファイヤーの幹の部分話し合い共有した。はじめに全員の構想を共有しておいたこと

で、途中ぶれることなくファイヤーの流れを組み立てることができ、当日もスタッフ全員がそれぞれの役割をこなすことができたと感じている。

誇り

三つ目に関わりとつながりについてである。ASP キャンプの素晴らしいところは参加してくれた子どもだけでなく、学校現場の先生方とも深い関わりができることであると考えている。今回のキャンプでもたくさんの場面で助けていただいたり、学ばせてもらったりしたことがあった。特に一つ目にも述べた先を見抜く力を持った教員の動きを間近で見ることができたことである。夕方の突如のゲリラ豪雨で、プログラムの大きな遅れが生じてしまい、キャンプファイヤーの開始時間にも影響が出た。



【やっぱり今年も大成功でした】

キャンプファイヤーからキャンドルサービスになり、もう一度流れを確認していた時に、ある先生から、ファイヤーが終わる時間を最初の設定から極力変えず、かつ子どもの出番を大切にするアドバイスをいただいた。それは、午前中の天気や急な雨で疲れが出ている子どものことを考慮しながらも、私たちが幹にしていたこともふまえられた案であった。大幅な計画変更であったが、実際にはあの状況では一番良い形であったと思う。こういった、土壇場でも子どもを中心に置きながら同時に再考し、その状況でのベストを選択できることが、現場教員と学生との差であると感じ、改めて尊敬の念を感じた。こういったできる先生方とも一緒になってキャンプを創れ、つながれたことが嬉しく、誇りにも思っている。

最後に

以上の三つがキャンプの準備段階も含め、全体を通して学び、吸収したことである。今思えばこのキャンプのすべてが学びであった。学ぶ喜びを体で感じられた。このキャンプとキャンプを創りあげた仲間に出会えて本当に感謝している。来年から学生リーダーとして関わることはできないが、奈良の子どもたちのために、またこれから教員を目指す学生のために、このキャンプが持続できるようにこれからも関わり続けたい。

第2回 ESD 子どもキャンプを終えて

物質科学専修 三回生 後藤田 洋介

8月6・7日の日程で、本学と奈良公園をフィールドに ESD 子どもキャンプが開催しました。ESD の中でも環境教育に焦点を合わせ、キャンプの構想を練りました。二日間のキャンプテーマは「あいー生きるよこび湧いてくる」で、様々な「あい」を子どもたちにキャンプを通じて感じてもらおうと考えました。

このキャンプを通じて私は三つの大きな学びを得ました。それは、一つ目に班経営・班活動による支え合い。二つ目にフィールドワークの設計について。三つ目に今後の自分に対する課題についてです。

一つ目の班経営・班活動による支え合いについてです。

昨年度のキャンプでは、私の班はよい班経営ができたとは言えず、どちらかというならばばらの行動をとるような班でした。そこでの自分の思いもあり、今回のキャンプでは、その点に力を入れようと思い当日に挑みました。具体的に何をしていたというわけではありませんが、自分の中では、「全力を出す」ことを重視しました。歌の練習やキャンプファイヤーなど、どの場面でも、子どもたちに全力で楽しむことを強調し、自分も全力で活動し、子どもたちと触れ合いました。もちろん去年と触れ合っ



協力してテントを立てました

た子どもとは違うので、一概にどんなことが変化したかはわかりませんが、一日の振り返り、最後のまとめをしているときに、子どもたちが全力で私の話に耳を傾けていると感じました。今回のキャンプでは、子どもたちに自分の思いを伝えることができ、有意義なものになったと思います。次の機会ではさらに良い班経営ができるように努力を続けていきたいと思いました。

二つ目のフィールドワークの設計についてです。今回のメインイベントに、奈良公園のフィールドワークがありました。このプログラムを、先導しながら、設計しました。設計したといっても、先輩や後輩とともに共同での設計になりました。今回、この設計では、子どもにどんな学びを持ち帰らせるのかということをもとに多くの話し合いを設けました。生物多様性、身近なところへの接近、人間の多様性についてなど、多くの意見が出ましたが、それでも良い、軸となるような案がありませんでした。多くの人と話し合った結果、「学生がまず下見をする。その中で感じたことを子どもたちにシェアさせるのはどうか」ということになりました。これは、今までの学習モデルの教え込み型とも違う、学生が少し進んだ研究者になる方式をとることになり、子どもたちの多様な回答を得られるのではないかと思います。その思惑通り、当日、多くの意見をまとめることはとても骨の折れる作業でしたが、自分の力を出し切れたと思います。子どもたちの回答を知ることができない分、自分たちが多くの回答に対応することを要求されましたが、私の中では、まとめを行っている時間、それまでにかけて多くの時間が、最後、自分に与えられた、3分という短い時間を作ったのだと思いました。また、最後のまとめを子どもたちが真剣に聞いている目を見て、私は子どもたちに「楽しかった」ということ以外に何か持ち帰させることができたのではないかと思います。



フィールドワークで用いたワークシート

三つ目に今後の自分に対する課題についてです。今回のキャンプでは、班経営、フィールドワークと多くの活動を行いました。その中で、自分への課題を多く感じました。まずはフィールドワークでのリスクマネジメントについて。当日は気温も高く、子どもは暑さでぐったりとしていました。また、計画していたコースではあまりにオーバーワークで、子どもたちに無理をさせる結果となりました。十分に体調管理を行うこと、また、子どもたちの目線に立ったプログラム作りの必要性を感じました。さらには、班活動では、奈良町フィールドワークの前に雨具の確認を失念したり、途中荷物を忘れてしまうこともありました。リスクマネジメントにしても、その他に関しても一方向だけの先読みではなく、広い視野を持った先読み能力が必要だと感じました。

最後に今回のキャンプでは昨年とは違う学びを多く得ました。それは、班経営に関すること、プログラムの設計に関すること。そして自分に足りない広い視野での先読みの能力についてです。これらから生徒指導の能力につながるヒントや、学級経営につながるヒント、そしてプログラム作りでは、多くの自然に関する学びを得ました。これらの多くの学びや課題を積み上げていくことによって、これからの自分の糧にしたいと私は今回のキャンプを通じて感じました。



『十津川村で道普請』 報告書

～なかまと共にボランティア、最初の第一歩～

奈良教育大学教職大学院 1回生 島 俊彦
奈良教育大学 2回生 糸 綾香

2011年の台風12号により、十津川村では世界遺産に登録されている熊野古道の他、昔からの生活道が崩れたり、傷んだりしてしまいました。社会人と大学生がチームを組んで、これらの道の修復作業（道普請）に汗を流しました。

行 先 奈良県 十津川村

実施日 2013年12月7日(土)～12月8日(日)

12月14日(土)～12月15日(日)

1. 企画・活動の経緯

この事業は、平成23年9月、台風12号により被害を受けた奈良県十津川村の熊野古道復興支援をテーマに、奈良と和歌山の各労福協、近畿労働金庫、奈良NPOセンターの共同プロジェクトとして実施しました。奈良教育大学は学生実行委員会を組織し、企画・運営・実施について協力しています。

奈良教育大学の持続発展・文化遺産教育研究センターと教育実践開発研究センターでは教育活動の一環として、昨年度から5回十津川村に道普請に行っております。今回はその実績を生かし、奈良教育大学の中で学生実行委員会を作り、シンポジウム、当日の運営、報告会などを学生が中心になって計画・実施しました。

また、十津川村地域雇用創造協議会(十津川村、観光振興課)には当日実際に作業を行う場所の決定や、案内、道具やお弁当の手配などのご尽力いただきました。

2. 活動の主旨

この事業には大きく分けて三つの意義があります。一つ目は世界遺産の復旧作業に参加することができ、また地域の歴史を知ることができること、二つ目は企業、NPO、社会人、学生の協働の機会とすること、三つ目はボランティア活動の意義を考える機会とすることです。



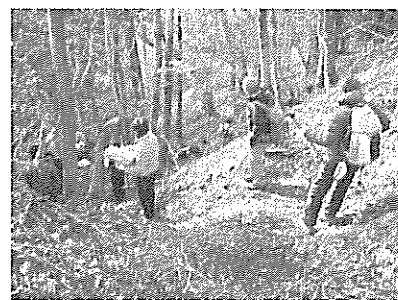
まず一つ目の世界遺産の復旧作業に参加することができ、また地域の歴史を知ることができることについてです。十津川村を通っている一部の参詣道は、「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録されています。道が世界遺産として登録されているのは世界的に見ても二つしかありません。そのような貴重な文化遺産を自分の手で復旧することができる機会というものはあまりないでしょう。被災した道を元のような歩きやすい道に変えていくとともに世界遺産を守り、後世に引き継いでいく手伝いができるという意味深い経験ができると考えます。また、村で道普請ボランティアを企画・運営されている方や玉置神社の宮司さんなど、現地の方々から十津川村の歴史や自然環境、世界遺産・熊野古道についてのお話を伺うことで、十津川村という地域に親しみを感じるとともに、世界遺産への見識を深めることができると予想します。



二つ目の企業、NPO、社会人、学生が交流を深める機会とすることについてです。今回の企画は近畿労働金庫と奈良NPOセンターの共同プロジェクトに奈良教育大学の学生

が関わらせていただいていると共に、社会人と、学生を参加対象としています。日ごろ社会人と学生がかかわりを持ち、互いの話をしたり、意見交流をしたりする機会はあまりありません。道普請という活動を通してともに汗を流し、語り合ってお互いの理解を深め、刺激を受け合うことで、学生にとっては将来教員として社会に出る前に社会経験を多く積んだ人生の先輩の貴重な話を聞く機会となるとともに、社会人にとっては学生の若い力や考えに触れ、日常から離れ楽しいひと時を過ごすことができる機会となることを期待します。

三つ目のボランティア活動の意義を考える機会とすることについてです。道普請という活動を通して、落ち葉や石、枝でいっぱいだった道が自分たちの手で通りやすい道へと変わっていく様子を目にすることで感じる達成感、自分たちの働きがこの道を通る誰かのためになっているという充実感、そして美しい十津川の自然の中で心地よく体を動かす満足感、全くの他人だった人達と作業を通じてチームの仲間になっていく連帯感などを参加者は感じることができると予想します。このような活動を通してたくさんの人との出会い、交流を深めることができることや、学生にとっては大学の講義とは異なる体験的な学びを深めることができるなど、お金に換えることができないボランティア活動の意義を参加者に見つめ直していただく貴重な機会となることを期待します。



【2】 活動当日

＜第一次隊活動＞

1. 日 時 : 平成 25 年 12 月 7 日 (土)、8 日 (日)
実施場所 : 十津川村 (果無集落へとつづく道)
参加人数 : 22 名 学生…5 名、社会人…17 名

2. 内容・プログラム等について

＜第1日目 12月7日(土)＞

8:00 奈良教育大学集合(順次近鉄奈良駅、JR 奈良駅、近鉄桜井駅)

バスの中でのアイスブレイク。

実行委員の2名がゲームで車内を盛り上げてくれました。

自己紹介や、リレー形式で名前を覚えるゲームを行い、参加者間の緊張をほぐすことができました。

11:30 十津川村役場到着

役場職員である神谷さんから、道普請の作業場所や、方法について説明を受けました。



13:00 村内移動・作業現場着

村の方から、作業現場となる果無集落へと続く道について、説明を受けました。このみちは元々、馬として使われていたらしく、当時の写真を見せてもらいました。

13:15 作業開始

社会人、学生という立場に関係なく、作業を進めていきました。途中大きく道が崩壊している場所がありましたが、皆で協力し、以前より通りやすい道に直すことができました。参加者からは、「(整備された道を見て)自分が直したという達成感を味わうことができた」という声をいただきました。



15:00 果無集落到着・作業終了

坂道を登りながらの作業のため、疲労を感じることもありましたが、果無集落からの景色を観て疲れも吹き飛びました。「世界遺産」と書かれた石碑もあり、自分たちが道普請をしてきた道は、世界遺産につながっているのだと感ずることができました。

16:00 旅館「大和屋」着

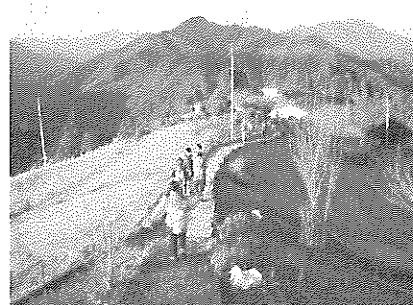
17:00 ミーティング

食堂に集まり、中澤先生から「紀伊山地の霊場と参詣道」と題し、私たちが道普請をしてきた道の文化的価値や、ボランティアの価値、ESD との関わりについて講演をしていただきました。

十津川村役場の神谷さんからは、「災害直後の十津川村の人たちと復興の現状」と題し、被災時の村の様子や、その後の復興の様子、今後の道普請の行く末についてお話をいただきました。

十津川村の語り部である樫平さんからは、村の歴史や、作家である西村京太郎先生との関わりなどをお話ししていただきました。

参加者間のディスカッションでは、活動を通して感じたことなどを話し合いました。参加者からは、「最初は面倒だと思っていた活動も、時間が経つにつれ、必死になって取り組むことができた」、「道を整備する前と後での変化を見て、驚き、感動した。」、「活動が人の喜びに貢献できる」といった意見を聞くことができました。



19:00 夕食

十津川村の名物である、椎茸をたくさん使用した料理を堪能しました。おいしい料理を通して、参加者の仲をより深めることができました。

20:00 入浴、自由行動、就寝

<第2日目 12月8日(日)>

7:00 起床・朝食

8:30 大和屋出発

9:00 作業開始

前日と同じ道を反対方向から、作業を進めていきました。前日よりも、作業に慣れ、雰囲気もやわらかく、楽しく作業をすることができました。

11:00 作業終了・村内移動

11:30 昼食・自由行動・入浴

ホテル昴に移動し、作業の振り返りを各自で行いました。振り返り後は、社会人、学生ともに野猿で遊んだり、足湯につかるなどして交流をしました。のんびりとした時間を過ごすことができました。

14:00 谷瀬のつり橋見学

名物のこんにやく玉を食べたりして、交流しました。

18:00 帰着



3. 参加者のコメント

二日間の活動を通して、以下のようなコメントをいただきました。

「自分の職場以外の人々関わることで、考え方など刺激をもらった。」

「一人一人の力は微力でも、大勢が集まることで、できることがたくさんあると感じた。」

「ボランティアの力はすごいと感じた。」

短い時間の作業、交流ではありましたが、その中でも密度の高い関係や作業を行うことができたと思います。聞くだけでは分からない、体験してみても初めて分かったという経験を多くの参加者が味わうことができました。今後も十津川村との関わりを、何らかの形でつなげていけたらと思います。

〈第二次隊活動〉

1. 日時 : 平成 25 年 12 月 14 日 (土)、15 日 (日)

実施場所 : 十津川村 (玉置神社へとつながる道)

参加人数: 23 名 学生実行委員…4 名、教育大生…6 名、教育大教員…1 名
一般…12 名

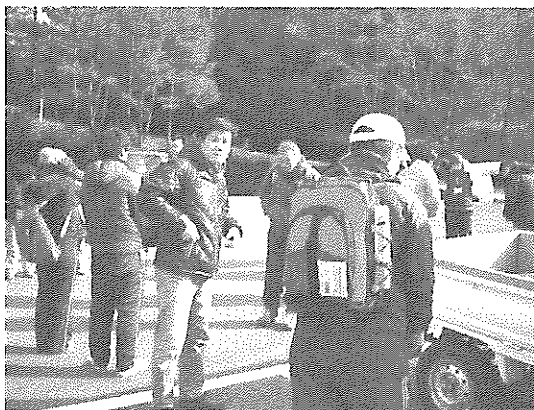
2. 内容、プログラム等について

〈第 1 日目 12 月 7 日 (土) 〉

8:00 奈良教育大学集合 (順次近鉄奈良駅、JR 奈良駅)

バスの中でのアイスブレイキング。

実行委員の 4 名がゲームで盛り上げてくれました。また、名札づくりやリレー形式の自己紹介で、参加者同士がお互いのことを知ることができました。



11:30 十津川村役場着

役場の職員で道普請の案内をしてくださる神谷さんと合流。

結団式後に昼食をとり、これからの作業に備えました。



13:00 村内移動・作業現場着

鋤簾や熊手、箒を持って作業開始。

作業前、玉置神社の神主さんに、玉置神社や十津川村の歴史を教えてくださいました。



14:00 作業再開

玉置神社の参道を二手に分かれて整備していきました。

今回は学生と社会人の混成チームで、社会人の方からは「学生、社会人が一緒に活動できて相互に会話を持つことが出来、楽しかった。」というコメントをいただきました。

また、作業中道を通った人から「ご苦労様です」という声をかけてもらったことが嬉しかったという参加者の声もありました。

16:00 作業終了・村内移動

大きなトラブルもなく、無事に初日の作業を終えました。移動中の車内では、作業を通して打ち解けた参加者同士、会話が盛り上がっていました。

16:30 旅館「大和屋」着

自由時間

17:00 ミーティング

学ぶ喜びプロジェクトの北村先生から「紀伊山地の霊場と参詣道」と題し、私達が作業している世界遺産の道を持つ、文化的価値についての講演をしていただきました。

十津川村役場の神谷さんからは、「災害直後の十津川村の人たちと復興の現状」と題し、被災した神谷さんだからこそ出来る体験談や、村民の助け合いの精神や絆の強さを伝えていただきました。「お二人の話を聴けて良かった。」という声が多数挙がりました。

19:00 夕食

夕食は十津川村名産の椎茸がふんだんに使われた料理の数々をいただきました。



おいしい料理をいただきながら、学生と社会人が交流を深めました。

20：00 入浴

21：00 自由時間・就寝

<第2日目 12月15日(日)>

7：00 起床・朝食

8：30 大和屋発

9：00 作業開始

2日目ということで、「昨日より道普請がスムーズにできた。」「昨日の振り返りも生かされ、作業がスムーズだった。」「皆とわいわい作業ができた。」などの声があるように、みんなだ
いぶ作業に慣れて楽しく活動できました。



11：30 作業終了・村内移動

12：00 昼食・入浴

滝の湯さんで昼食をいただき、入浴を済ませました。

「食事が全部おいしかったこと、温泉でお肌がすべすべになったことが最高だった。」という声が多数挙がりました。これも十津川道普請の魅力の一つですね。

14：00 谷瀬の吊り橋

十津川名物谷瀬のつり橋に着くころには、学生も社会人も一緒にピース！！

楽しい思い出をつくることができました。



18：00 帰着（奈良へ）

3. 参加者のコメント

二日間の活動を通して、以下のようなコメントがありました。

「疲れたが、自分たちが整備した道がきれいになったのが目に見えて分かったし、とてもやりがいがあった。」

「道が大変きれいになったことが楽しく嬉しかった。」

「多くの方と知り合えたことが良い思い出となったし、良い経験をさせていただいた。」

「多くの人と関わる機会が持ててまた、ボランティアに参加したいという気持ちになった。」

「今までボランティアをしたことがなかったので誰かの役に立つことのうれしさが分かりました。」

二日間を通して、たくさんの新たな出会いがありました。短い期間でしたが、新たに出会った仲間が力を合わせて作業をしたことで、各々の参加者が様々なことを感じてくれました。そのことから、この十津川道普請が非常に意義深いものになったと言えると思います。

4. 成果

今回の道普請では、大きく分けて4つの成果がありました。1つ目は社会人と学生と一緒に活動を行い、交流出来たこと、2つ目は、学生実行委員会を立ち上げ、学生を中心に企画運営を行ったこと、3つ目はボランティアの良さを感じることができたこと、4つ目は、十津川村に興味を持つことが出来たことです。



1つ目に関しては、社会人と学生と一緒に活動を行うことで、交流の場となりました。社会人と学生が交流する機会はほとんどありません。道普請という活動を通して、汗を流して語り合ってお互いの理解を深め、刺激を受け合うことで、社会人にとっては学生の若い力や考えに触れ日常から離れ、楽しいひと時を過ごすことができた機会となるとともに、学生にとっては将来教員として社会に出る前に社会経験を多く積んだ人生の先輩の貴重な話を聞く機会となりました。また、参加者同士だけでなく、十津川村役場の職員から十津川村についての話や、道普請ボランティアを企画運営させている方や玉置神社の社務所の方など、現地の方々との出会いもありました。参加者からも、「学生から若さをもたらした」、「社会人の方から貴重な話を聞くことが出来た」と言った感想が数多く寄せられました。

さらに2日間の活動を通して、参加者の、団体としての一体感を感じることが出来ました。

2つ目に関しては、奈良教育大学の学生が中心になって、実行委員会を作り、事前研修を兼ねたシンポジウムや、当日の活動、さらには活動



後の報告の企画・準備・運営を行いました。大学が行う活動に参加することとは違って、

学生が企画・運営に携わることで、受身ではなく、積極的に活動することが出来ました。

3つ目に関しては、今回の道普請に参加したことで、ボランティアに対する価値観が変わったという意見や、道普請の活動を行うことで、達成感や充実感を得ることができたという感想もありました。山道を通りやすいように整備することで、自分達が行った活動が目に見えることも、参加者の達成感や充実感につながったのだと思います。また、「活動の最初の頃はただ道を整備することしか考えていなかったが、後から通る人が気持ちよく通れるようにしようという気持ちになった。」と言った活動した人でなければ感じる事の出来ない感情の変化もありました。

4つ目は以前より十津川興味を持つことができたことです。道普請に参加したことで、昨年2011年9月に発生した台風12号の災害状況を実際に痛感しました。そして、今まさに復興しようとしている十津川村から勇気をもらいました。道普請の活動に参加することで少しでも十津川村のために貢献できたのではないかと感じました。それと同時に十津川村に対する愛着・親近感も感じる事が出来ました。また機会があれば、十津川村に行ってみたいという気持ちになったり、知り合いに十津川村のことを紹介しようという気持ちになったりしました。

この活動を通じて、実行委員を始め、参加者の多くが上記のようなことを実感することが出来ました。

5. 今後に向けて

今まで奈良教育大学独自で十津川村に道普請に行っておりましたが、今回初めて社会人と学生と一緒に活動を行うことが出来ました。今後もこのような機会を作り、社会人、学生双方に価値のある活動を行っていきたいと考えております。

また、さまざまな人に十津川村について知ってもらいたいと考えています。今回の活動を通して、十津川村に愛着・親近感を持つことが出来ました。この気持ちを持ち続けながら、いろいろな方々へ発信していけたらと思います。

さらにこの活動を継続し、さらに多くの方に道普請を通じて、様々なことを感じ取って頂きたいと思います。また、道普請だけでなく、新たな活動も取り入れつつ、多くの方にこの活動を知っていただきたいと思っています。



平成 25 年度十津川村道普請ボランティア報告書

1. 目的

平成 23 年 9 月の台風 12 号により十津川村では、死者 6 名、行方不明者 6 名、負傷者 3 名という人的被害の他、多数の家屋が被災した。また、十津川村には世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」が存在するが、その参詣道も被災し、寸断されてしまった。

十津川村では、かねてより生活道であるとともに参詣道でもある古道を「道普請」と称してボランティアで補修してきた歴史がある。しかし、今回の被災規模の大きさと十津川村の高齢化のため、修復ボランティアを外部に求めざるを得なかった。この依頼を受け、本学ではこれまでに 6 回の道普請ボランティアを派遣してきた。

今回は、一般社団法人全国労働金庫協会近畿ろうきん（以下ろうきん）への協力事業として、一般社会人とともに道普請を行った。

2. 実施日 平成 25 年 12 月 7・8 日

3. 参加者 本学学生 5 名、本学教職員 4 名、一般社会人 10 名

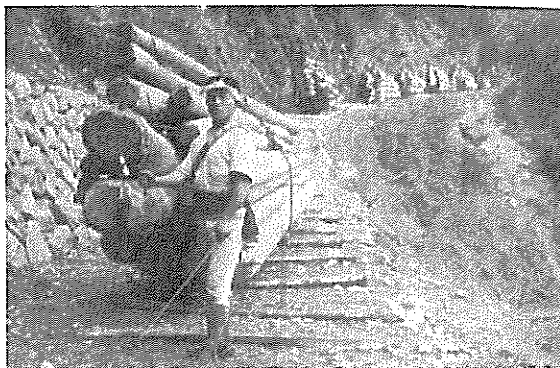
4. 内容

8 時 20 分にマイクロバスで大学を出発し、途中、桜井駅で一般参加者を乗せ、11 時 30 分に十津川村役場に到着し、結団式を行うとともに道普請担当者である十津川村観光振興課の神谷氏から道普請を行うにあたっての注意事項などを教えていただく。

12 時 45 分 果無集落への登山口より、地元の語り部の会の岡氏の指導の下、道普請を開始する。かつては木馬道として使われていた道らしいが、土砂特に岩石の崩壊が激しく、岩石を取り除く作業が中心となる。



神谷氏から道普請についての注意事項



木馬道として使われていた頃の写真

左の写真にあるように、石積みが残っている箇所もあるが、多くが崩壊してしまっている。また、風化によるあらたな落石、流された土石流により道が寸断されている箇所もあり、参加者一同で協力して岩石を取り除き、1メートル弱の道幅を確保する。

さらに倒木が道をふさいでいるところもあり、切断して通行できるようにする。枯葉や小枝などが堆積しているところは、それらを片付け、道が見えるようにした。

2 時間強の作業の後、残りは翌日に行くことにして果無集落まで登り、世界遺産である小辺路が通る岩本氏宅を訪問する。岩本氏宅は尾根道沿いにあり、非常に景色もよく、疲れが癒やされる。その後、マイクロバスで宿舎である平谷の民宿大和屋に入り、1 時間の休憩後、ミーティングを行う。

① ESD と世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」講師：奈良教育大学 中澤静男
別添：プレゼン資料参照

② 十津川村での災害復興について 講師：十津川村観光振興課 神谷明成氏
2000 ミリを超える大雨のため村内各地の災害が発生。

山腹崩壊、土砂ダム形成、河川の水位上昇、折立橋の落橋、道路崩壊、ライフラインの途絶

停電、電話不通

多くの方の支援を受け2年でだいたい復興したが、人の通りの少ない奥地では未だに道が寸断されたままである。(例：十津川村迫西川地区～龍神村は不通状態)

道普請について

2011年12月～2013年11月までにのべ608人が参加した。今後は、集落機能の維持（高齢化対策）として、また交流人口の増加を目的に、新しい道普請の形態を模索していく。

③ 十津川語り部の会 講師：樫平氏

④ グループディスカッション 「道普請をして感じたこと」

- ・ 道普請は今後のまちおこしにつながるのではないか。
- ・ 石積みを見て昔の人はどうやって積んだのか、驚いた。
- ・ 体を動かすとともに、道がきれいになるのが心地いい。
- ・ 協力して解決する大人の姿に感動した。
- ・ 肩書きとかに関わりなく交流でき、学生時代を思い出した。
- ・ 道普請は、外の人への思いやり・おもてなしだと感じた。昔から十津川の人たちが、地元に対する誇りを持っていたから、これまで続けておられたのだと思う。見習いたい。
- ・ ボランティアには会社のイメージアップでされているものもあるが、道普請は個人参加。助け合いの輪が広がっていけばよい。達成感があった。

2日目

午前9時から11時まで、果無集落までの道を修復し終え、ホテル昴で解散式を行う。



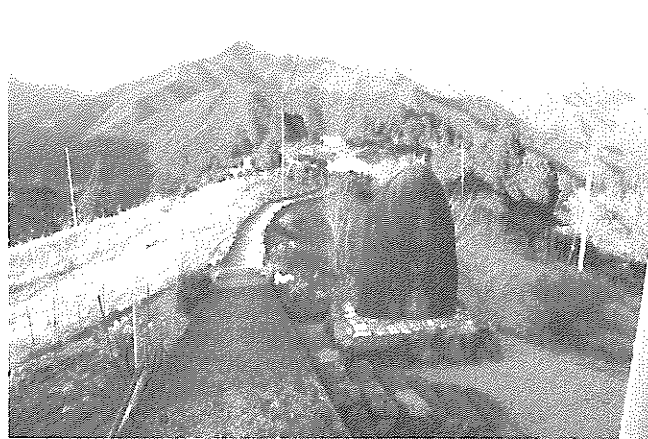
荒れた山道



土砂を除去し、道を回復



土砂と枯葉を取り除く



果無集落

十津川道普請に参加して

数学教育専修 1回生 堀口 大地

平成 25 年 12 月 7・8 日に奈良教育大ユネスコクラブとワンダーフォーゲル部、奈良コープ、ろうきんの三団体計 26 名で十津川村へ道普請のボランティアに行きました。私は今回の道普請で初めて十津川に行きました。そこで十津川村での被害の大きさを目の当たりにしました。

この十津川道普請に参加して得られたことがつあります。一つ目は社会人との交流です。二つはボランティアの有意義さです。

一つ目の社会人との交流はとても価値観が広がるものでした。往路のバス内でのレクリエーションから始まり道普請をしているときや自由時間にたくさんの人に声をかけてもらいました。また、夕食のまえにグループワークにて各個人の十津川村との関わりやボランティアを行う想いを聞き参加してよかったと思いました。聞いた想いの中には、「肩書きなど関係なく交流でき、学生時代を思い出した。」「ボランティアには会社のイメージアップでされているものであるが、この道普請は個人参加。助けあいの輪が広がっていけばよい。」というものがありました。このような意見は学生の私が考え付くものではなく、社会人との交流があつて広がった価値観だと思いました。

二つ目として、ボランティアの有意義さです。一般社会の常識では、「作業×時間＝賃金」という等式が成り立ちます。ボランティアはこの等式を逸脱しており、「作業×時間＝無給しかも参加料まで…」という等式になってしまいます。しかし、ボランティアは誰からも強制されるものではなく、自発性のものです。社会の仕事と違って自分の時間世界で活動することができます。自分らしさもボランティアをすることによって出せるようになります。また、心にも余裕が生まれ、生活も心地よいものになると思います。

ボランティアの有意義さについてもう一つ考えたことがあります。中澤先生の講座にて「全国ボランティアの活動実態調査」によるとボランティア活動を通じて得たことやよかったことがあったと回答した人は 98.3%だそうです。また、ボランティアをする人も年々多くなっているそうです。このことを聞いて、ボランティア活動をする人が点在しているのではないかと考えました。そして、この点在している人をボランティア活動を通して点が線になればもっと人と人とのつながりが増えるのではないかと思いました。これがサイクルしていけばよいサイクルが生まれてくるようになり社会がよりよいものになると思います。

以上の 2 点が十津川道普請で学んだことです。ただ道普請のボランティアをただけではなく今後につながるいい経験ができた機会だと思いました。この経験を周りの友達にも気づいてもらいたいです。そして、次回の活動に生かしていきたいです。

1. 目的

2011年3月11日の東日本大震災及び大津波により、陸前高田市は大きな被害を受けた。市民の約1割にあたる人命が失われたほか、市庁舎を始め、博物館や図書館、文化ホール等の市の重要施設が被災した。多くのものを失ってしまった。しかし、幸いにも高台にあった寺の仏像は被災をまぬがれた。この仏像等の文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前高田市の市民を元気づけることになると考え、被災地支援の一環として本調査団を派遣する。また、併せて被災地の状況を視察し、被災された方から聞き取りを行い、現地での防災教育・ESDとして実施する。

2. 実施月日

平成25年8月26日(月)～29日(木) 3泊4日

3. 派遣先 陸前高田市 常膳寺 小友小中学校、高田松原
住田町 浄福寺
石巻市持福院観音堂、慶長遣欧使節ミュージアム 他

4. 活動内容

- (1) 浄福寺での文化遺産調査
常膳寺十一面観音との関連、伊達氏の関わり
- (2) 常膳寺での講演会
昨年度の文化遺産調査の報告会
- (3) 文化遺産を通したESD教材の作成
慶長遣欧使節(支倉常長関連)、遣欧400年記念事業
- (4) 防災教育
高田松原を守る会、被災地

5. 参加者

- 教員 : 山岸公基、中澤静男、
大学院生 : 千々石喜一(M1・美術教育)、木谷智史(M1・美術教育)
教職大学院生 : 土海稚奈(M2)、英優美(M2)
学部生 : 横井まどか(3回生・文化財造形)、二階堂泰樹(3回生・社会科教育)

6. 日程

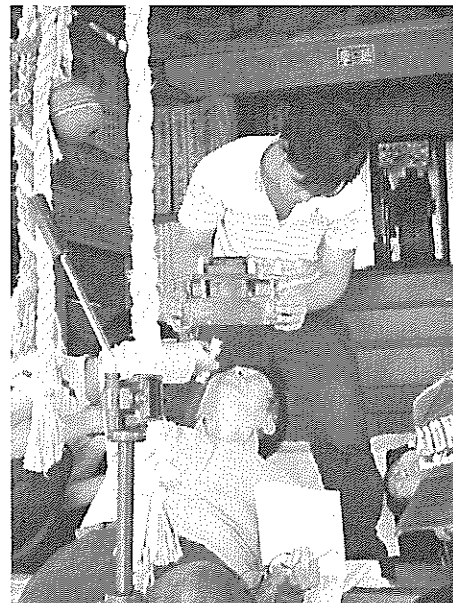
- 26日(月) 仙台空港からレンタカーで石巻市へ移動し、石巻市持福院観音堂、慶長遣欧使節ミュージアムを見学後、浜通りを北上しながら被災状況・復興状況を車内から視察する。
- 27日(火) 午前: 陸前高田市教育委員会訪問、泉増寺拝観、市内を視察
午後: 仮設住宅訪問と常膳寺拝観
夕方から常膳寺文化財についての講演会(山岸先生)
陸前高田市立小友小学校訪問

- 28日（水）：午前：住田町浄福寺文化遺産調査、高田松原を守る会について聞き取り調査
 午後：調査継続と陸前高田市視察、高田松原見学、
 29日（木）：午前：天平産金遺跡（大仏鍍金）見学

7. 文化遺産調査



- ① 住田町、浄福寺向堂観音堂十一面観音菩薩坐像調査において、台座裏面から、「伊達綱村」の墨書を発見する。



- ② 陸前高田市泉増寺の仏像は、金庫に納められ、その鍵が津波で流されたため拝観できなかったが、伊達綱村の発願によるものと伝えられている。



- ③ 昨年調査した常膳寺の阿弥陀如来坐像にも伊達綱村の墨書があった。

以上のことから、江戸時代の気仙郡と伊達綱村には何らかの関わりがあったと思われる。今回の生徒用教材は、これをテーマとしたものとなると思われる。

8. 防災教育

- ① 仮設住宅訪問



② 高田松原に関する聞き取り調査

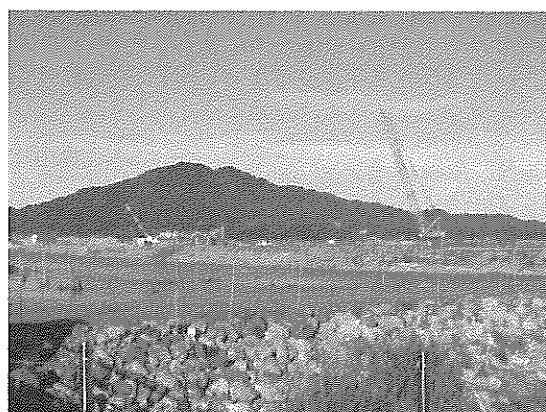
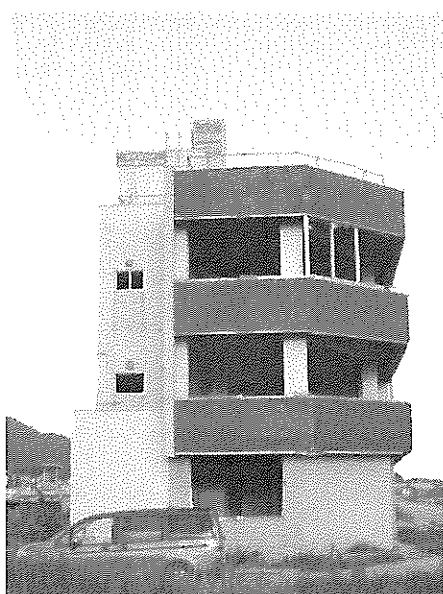
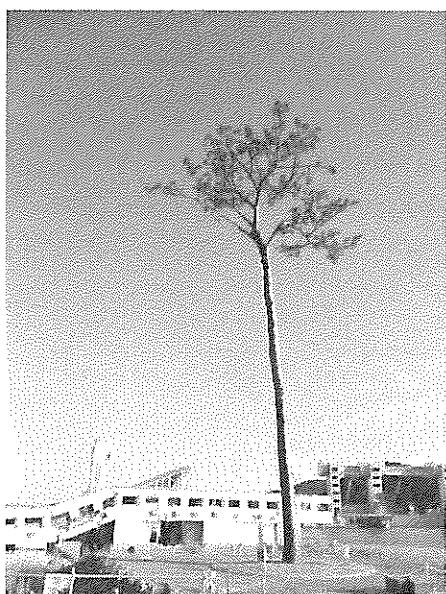


高田松原の歴史について



高田松原を守る会の活動について

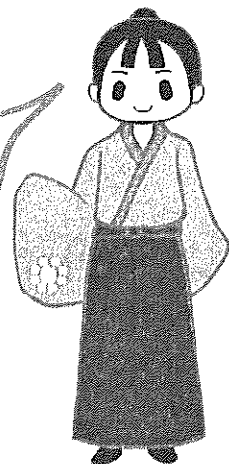
③ 現地見学



⑦びっくり!?

向堂観音堂十一面観音菩薩坐像の実物大だ。

実は向堂観音堂の十一面観音菩薩像は小さな仏様なんだ。
小さいけど、細かな所の木彫り技術はとてもすごいんだ!!

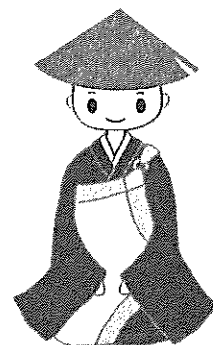
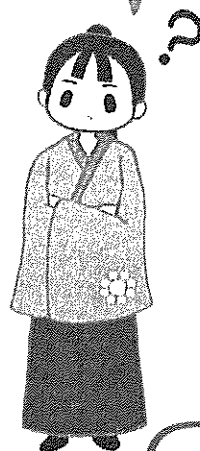


29,8cm



みんなの町の大切な文化財だ。
代々伝えてきた方々に感謝だね。
次はみんなが守っていく番だよ!

あれ!?このブレスレットやネック
レスの形どっかで見たような・・・!?



仏像のおもしろい所や不思議な
所をみんなで見つけよう!! 気づ
づかなかったことが見つかるか
もしれないよ。
次は君たちが発見する番だ!



⑤ 気仙仏像調査団!
一地域の仏像を調べてみようー

向雲觀音堂 住田町 岩手県 陸前高田市 陸前寺

みんなも近くにある仏像を調べてみよう。
目のつけどころは
①顔の上のハス
②ネツクレス
③アレスレット

⑤ 身振りにも奥義!!
陸前高田市の梵鐘寺十一面観音立像の頭部にも上半身をもつ阿彌陀様を拝見!

この像に謎を解くヒントは、この像の顔を見ればわかるよ。

④ 伊達頼村ってどんな人?
頼村さんはお寺顧問で大変だった
仙台藩を立て置いた人なんだ。
高田田代藩(高田藩)と連河を繋いで「おき」として贈られたんだよ。

伊達頼村 (1659年ー1719年) 頼村田代藩4代藩主

他にも頼村さんは寺社の運営や復興にも力を注いだんだ。

向雲觀音像の台座の裏から頼村の名を見つけたんだ。

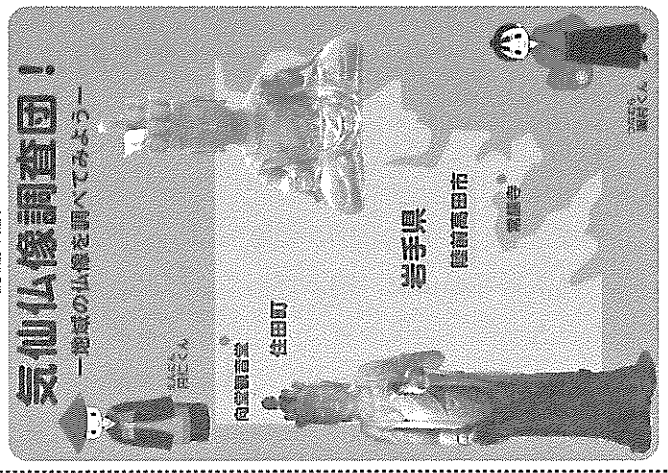
③ 田仁ってどんな人?
田仁 (794年ー864年) 聖德太子の屋敷をつとめた人だよ。中国に渡って様々な文化を日本にもたらしてくれたんだ。

右図の十一面観音像の顔の全体的な色が、田仁の顔の色が透かされているのよ。

田仁の顔の色が透かされているのよ。

山形県・五右衛門は田仁さんの顔のレプリカが置かれているんだ。

このように東北は田仁さんとのつながりがとても強い場所なんだ!!



① 十一面観音様ってなあに
蓮葉の上に阿彌陀様の像をのせてお願のつてよ。

これは蓮葉
膝ったり、突ったりしているような表情をした顔があるんだ。

多くの十一面観音像はハスをさした花籃を左手でもって、右手は下に下げてるよ。

② 発見! こんなところに違いがあるんだ!
住田町の向雲觀音堂には立派な十一面観音菩薩像がまつられているんだ。みんな知ってた?

向雲觀音堂の十一面観音菩薩像の顔は、蓮葉の上に阿彌陀様の像をのせてお願のつてよ。

向雲觀音堂の像は一般的な十一面観音菩薩像とどこが違うの? 答えは次のページ

学校名 _____
学年・組 _____
名前 _____

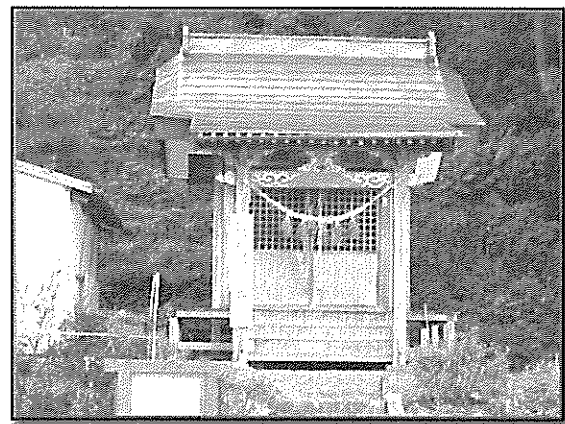
文化遺産は大切に守られて、伝えられてきたものばかりです。ではなぜ昔の人はその文化遺産を守り伝えようとしたのでしょうか。どの地域にも、昔の人が残してくれた素晴らしい文化遺産があります。みなさんの地域にある文化遺産をたずねて、その秘密を調べてみましょう。

答えもあろう。思っているのも大正解! でも、それだけじゃないんだ!
一般的な十一面観音菩薩像は顔に阿彌陀様のお顔だけが残っているが向雲觀音堂の像はお顔と体もあるんだ。他にも違いがないかみんなで見つけてみよう。

「文化財」と「防災教育」

文化財造形専修 3回生 横井 まどか

平成 25 年 8 月 26 日から 29 日にかけて、昨年度調査された常膳寺の仏像に関係があると思われる仏像を調査するとともに、防災教育について学ぶ目的で、陸前高田市文化遺産調査団の一員として岩手県陸前高田市、住田町を訪問した。平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災・津波から約 2 年半が経ち、実際に復興がどこまで進んでいるのかを自分の目で確認しておきたかったことと、地域の文化財について知ってもらうことで少しでも被災地の方々の励みになればと思い、参加させていただいた。



向堂観音堂

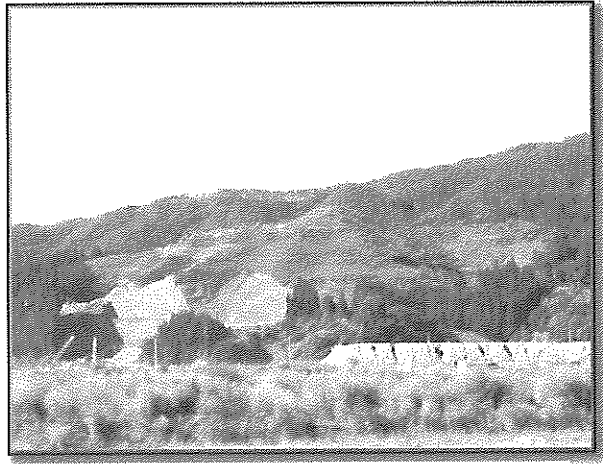
今回の調査で私が学んだことが 3 つある。一つ目は文化財の調査について、二つ目は地域の防災について、三つ目は文化財と防災教育の関係性についてである。

一つ目の文化財の調査についてである。今回、私は初めて文化財調査に参加させていただいた。調査の主目的は、昨年度の調査対象であった常膳寺十一面観音立像及び千手観音立像と同時期に製作されたと思われる岩手県住田町の向堂観音堂の十一面観音菩薩坐像の調査である。写真でその仏像を見た時、私は像高 50 センチくらいの大きさかと考えていたが、実際の大きさは約 30 センチで、内割りはなく持参したファイバースコープを挿入する箇所もなかった。そうそう思ったように調査は進まないのだと思い知らされた瞬間である。実際に調査する姿を見なければわからなかったこともあり、調査には臨機応変さが必要だということを先生や先輩方から学ぶことができ、参加してよかったと思った。

今回の文化財調査で驚いたことは、地域の方々の関心の高さであった。山岸先生の講演会も然ることながら、向堂観音堂の調査の際にも地域の方々が来て下さり、興味深げに先生の言葉に耳を傾けていた姿が印象的だった。それまで本当に地域の人たちにとって文化財を調査することは励みになるのだろうかとか、もっと効率の良い地域のためになるなにかがあるのではないかと、若干不安を感じていたのだが、杞憂だったようである。向観音堂の十一面観音菩薩坐像の台座裏から現れた伊達綱村の文字を見た時の地域の人たちの感嘆や、講演会ときの人の集まりを見て、被災地で一般にイメージされるボランティアや復興活動とは違う文化財調査という形でも、地域の方々に貢献することができるのだということを知ることができた。

二つ目の地域の防災についてである。それは今回陸前高田市を訪れた中で、私が最も衝撃を受けた光景だった。震災から二年以上が経ち、街全体が高台に移転する予定だと聞いた時、何故震災前には高台に住んでいなかったのだろうかと思いに思っていた。海に近い方が便が良いからとか、漁業関係者が多かったからと、自分勝手に予想していた。しかし、実際に陸前高田市を訪れてみるとそうではないことがわかった。陸前高田市の地形は、市街地が海沿いに広がっており、その背後に勾配のきつい山が迫っていた。海沿いの市街地のほとんどが津波の被害を受け、今は夏草の茂る野原に変わってしまっている。ところどころに残る被災した建造物がないと、市街地だったとは想像するのも難しい。そして今、勾配のきつい山を切り崩し、移転先を造成している。山育ちの私は、あんなに木を切って土砂崩れの心

配はないのかとか不安になる。しかし一方で、それ以外に一体どこに街を移転させるのかという問題がある。津波で被害を受けた元の場所に街を立て直すわけにもいかず、そうすると移転先はもう山しかないという苦渋の決断であったと思う。他の被災地では、移転先がなく元の被災地に復興を始めた街もあるという新聞記事も目にした。被災した街をどう復興していくかということは、絶対的な正解が存在しない課題のように思える。山に近い地域で育った私には、土砂崩れや鉄砲水など山の災害をすぐに思いつくが、海がもたらす災害についてはぴんと来ない。津波が来た時どうしたらいいかについてもわからない。逆に、海に近い地域の人たちは、山特有の自然災害については、具体的なイメージを持っていないのではないかと思う。山に移転していく陸前高田市を見て、地域ごとの地形に即した防災に加えて、ある程度の、他の地形における防災についても学んでおく必要があるのではないかと感じた。



復興工事で切り崩される山々

三つ目の文化財と防災教育の関係性についてである。縁のないように見えるこの二つを、どうにかしてつなげることはできないだろうか、今回の調査の最中私はずっと考えていた。私は大学に入学してから何度か ESD を勉強して来た。切り口は文化財、環境、防災など様々であるが、ずっと勉強していると、それぞれ独立しているように見えても実はどこかでそれぞれの分野が関わり合っていることに気づいた。今回の調査では文化財と防災教育がテーマであったが、この二つもどこかでつながっているように感じられ、地域というものに焦点を当てれば答えが見えてくるのではないかと考えた。この考えが間違っていないと確信できたのは、小友小学校を訪問し、聞き取り調査にご協力いただいた西條副校長先生の「防災教育は地域への安心感がなければ成り立たない。その地域への安心感を育てるのは地域の価値を知ることから始まっている」という言葉だった。その地域の価値を知る上で、地域の文化財が一定の役割を果たすことができる。地域というものを中心に位置づけることで文化財と防災教育はつながっている。こうして防災教育を実践されている現場の先生から文化財の役割を指摘していただいたことで、自分たちのしていることは無駄ではないということが実感できた。

今回の調査で私たちは文化財に関わる方、地域の方、教育現場の方など様々な人に出会った。それら全ての人々に共通していたのは、自分たちが住んでいる地域を大切にしているということだったと思う。今回の調査の目的は文化財と防災教育だったが、そこには必ず地域との関わりがあったように感じる。改めて、地域というものの大切さや人と人とのつながりの大切さを感じた。それと同時に、日常の尊さを思い出した気がする。行きの車内から一瞬見た、ごく普通の高校生たちがはしゃいでいた姿が忘れられない。当たり前の日々に感謝しよう、誰かに笑顔になってもらうために頑張ろうと、そんなことを思えた4日間だった。今回の調査に関わった全ての方々に感謝致します。ありがとうございました。



奈良教育大学陸前高田文化遺産調査団

東北地方の現状と仏像調査による姿勢の変化

美術教育専修大学院 1回生 木谷 智史

1. はじめに

2013年8月26日から29日の期間、主に陸前高田市にて、防災教育・仏像調査の活動に参加した。本活動の目的は、東日本大地震の被災地である岩手県陸前高田市の現在の復興状況の視察と東北地方の文化遺産調査である。文化遺産調査には、サンファンパウティスタ号、東北歴史博物館などが含まれている。二日目以降、教員・大学院生・教職大学院生・学部生で構成された組織は、防災教育チームと仏像調査チームの二つに分かれ、それぞれ調査を進めることもあった。私は、仏像調査チームに属し、陸前高田市常膳寺・住田町向堂観音堂等の調査に参加した。また、仏像調査と並行しつつ防災教育も行った。

2. 被災地の現在の状況

被災地には、東日本大震災後初めて訪れた。仙台空港に飛行機が着陸後、仙台空港にまで津波が押し寄せていたニュースの光景を思い出した。仙台空港と海は、直線距離にして1.5kmほど離れている。津波の恐ろしさを感じた。

そして、車を走らせている間も被災地の状況が目に入ってくる。多くの被災した建物は、撤去されてしまったのか、思っていたほど目にはなかつた。被災前、家が建てられていた場所は、現在、草が生い茂るままにされている。一見しただけでは、被災地であったかどうかよくわからない。本来から草地なのか、それとも被災後の状況なのか。たまに骨組み部分だけの建物などが見え、そこが被災地であることがわかる。

この状況は、被災した建物や流されてきたがれきなどを撤去した結果によるものだ。海岸沿いに高く積まれたままになっているがれきの山を目にしたときに、その労力の大変さを感じられた。今は、がれき撤去にとどまり、この後の土地利用については検討中のようなのだ。なぜなら、また津波が来たとき、そこは被災する可能性が高く、人が安心して住める環境とはいえないからだ。では、これから先も東北で住む人は、どうするのだろうか。

陸前高田市での仏像調査による被災地支援を発案され、今回の調査において色々な面でお世話してくださった及川さんが、「今は、山を切り崩して高台に住むための工事が行われている。そのためにダンブカーが多い。」と話してくださった。今後の津波被害を考えて、高台に住民が住める土地を造成しているのだ。海岸沿いなど、今後も津波による被害が想定される地域は、がれきを撤去するだけにし、今のところ雑草が茂るままに放置されているように見受けられた。山を切り崩して高台を作っている間、住民は仮設住宅に住んでいる。今後の海岸沿いの土地利用について、非常に興味深く思った。

区長をされている松坂さんのご厚意で、仮設住宅も見学することができた。被災後、数年が経ち、仮設住宅の問題が徐々に露わとなっている。それは、仮設住宅に住む人々の間で交流があまりないことである。仮設住宅への入居が始まった頃、障害のある方や高齢者から順番に入居が進められたようだ。しかし、地域コミュニティから離れてひとりで入居された場合、人間関係を築くところから始めなければならない。障害のある方や高齢者にとって簡単なことではない。そのため、誰かと話す機会が減り、会話のない日々をおくることになる。仮設住宅からいつ出られるのかといった不安を抱えながら生活する。それは、私たちには到底理解することのできない不安だと思う。今は、被災前の町内会ごとに入居する

ようになり、仮設住宅内に設けられた集会所等で、地域コミュニティの活動も行われるようになっていると、おっしゃっておられた。

民宿に到着するころ、周囲は暗くなっており、周りを見渡すとほとんど灯りがなく、人の営みを感じることができない。それは、津波により被災した地に建物が建っていないこと意味している。海岸沿いなどの瓦礫処理などには、復興の成果を確認できたが、被災した人たちへのケアという点では、課題が残る。

3. 仏像調査

調査する仏像については、事前に山岸先生より写真で紹介はされていた。しかし、実際に見ると写真では伝わらないものがあることに気づかされた。像の顔、体つき、装身具の細かさ、衣の皺など今までに見たこともない表現のものが本当に多かった。そして、それらの仏像の特徴が、時代性を反映したものであるのか、それともこの地方の特徴なのかの見極めが難しく、勉強の足らなさを感じた。

今回の仏像調査を通して学んだことが3点ある。一つ目に仏教美術史の学び方、二つ目が仏像への接し方、三つ目が調査内容の開示についてである。

一つ目の仏教美術史の学び方である。今回、山岸先生より調書を記入することを任せられ、先生の発言を必死に記入をした。書けない・意味のわからない漢字なども多々あったが、一つ一つ質問をすることで解消することができた。完成後、像を見ながら読み直すと、山岸先生の仏像の着目点を勉強することができた。丁寧に観察することで情報を引き出していく。これが、仏教美術史の勉強方法かと理解した。

二つ目の仏像への接し方である。調査にあたっての山岸先生の準備や、仏像を前にしての敬意を示した扱い方なども学ぶことができた。やはり、信仰の対象であることを忘れてはならない。山岸先生はそのような姿勢を大切にし、像を調査されていた。

三つ目に調査内容の開示の大切さも学んだ。先生が行った講演会では、非常に多くの方が熱心に傍聴されていた。それは、地域の宝がどんなものであるのか、また、みんなで守っていかないといけないという意識の現れであるとも感じた。

見学に訪れた神社の境内で、津波によって流された仁王像が、トタン板の下でバラバラになり置かれていた。流されたものも存在するが、残ったものもある。震災にも負けなかった仏像を調査し、歴史的背景が判明したことで、未熟な学生であるが、被災地の方々に少しは貢献できたかと考える。



図1 寺の境内に置かれたいた仁王像

4. まとめ

今回の東北地方への視察並びに調査は、意味をなすものとなった。被災地の視察では、現地に行かなければ知ることのできない地域の現状を知ることができた。そこでは復興とは、瓦礫処理だけではなく、人と人の繋がりをつくっていくことが重要であると感じた。

文化財調査では、仏像の観察の仕方や信仰の対象物であるということの理解、文化財というものを後世に伝えていくためにも歴史を明らかにすることが大切であるということを知ることができたと思う。

「奇跡の1本松」から学ぶ「高田松原の軌跡」

教職大学院2回生 英 優美

1. はじめに

2013年8月26日(月)～29日(木)の4日間、岩手県陸前高田市に赴き、文化財調査及び防災教育について学んだ。この研修を志望した理由は2つある。1つ目は、もともと中学校社会科の教員を目指しており、文化財調査に興味を持っていたからである。2つ目は、私自身東日本大震災以降、東北地方を訪れたことがなく、学校現場に出る前にどうしても被災地をこの目で見たいと思ったからである。実際に東北地方に降り立つと、予想していたイメージとは異なり、陸前高田の被災地には瓦礫すらほとんどない状態であった。しかし広範囲に何もない草原や田んぼが広がっていたことから、津波の被害の大きさを実感した。今回の被災地である陸前高田市で学んだこと、感じたことを「高田松原」を中心に述べたいと思う。

2. 草原地帯になった町

被災する前、陸前高田市の海岸沿いに7万本の松が植えられていた。この高田松原は、やませや潮風から田畑の作物や土壌を保護する役割を江戸時代から担っていた。今回、現地視察や取材等から見てきたのは津波によって沿岸部の土壌が浸食され、漁業だけでなく、農業にも大ダメージを与えたことであった。陸前高田市の沿岸部では、試験的に入れ替えた田以外は植物が育たないという厳しい現実であった。見渡す限りの草原地帯に驚きを隠せなかった。津波が家屋だけでなく、耕作地帯まで飲み込んで



試験的に入れ替えた田んぼ

いった爪跡が未だにはっきりと残っている。そして第一次産業の復興は、この地域にとっては最も重要なことであると思った。

海岸沿いでは高台移転の工事が進み、近隣の山を崩している。その山土を被災した地域に運び込み、かさ上げしている。市街地全体を高台に移転させる計画のようだ。内陸部では、スーパーや市役所、診療所等の建物もプレハブで建てられていたが、その風景が来年にはどのように復興が進められて変わっていくのか、その過程を追いたいという思いが芽生えた。

3. 「高田松原を守る会」の活動

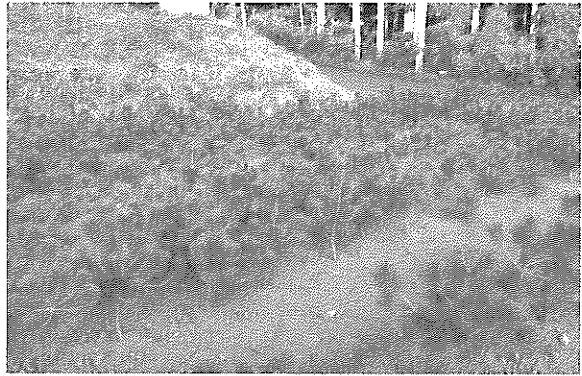
陸前高田市には、情報番組等でよく取りざたされていた「奇跡の1本松」と称される1本の松がある。あの大津波に耐えて生き残った1本の松は今も尚、復興のシンボルとして地元住民の心の支えになっている。しかし、この1本松のモニュメント保存をめぐることは、地元住民から賛否の声があることを知った。この1本松は、塩水によって根が枯死し、寿命が近づいている。しかし、復興のシンボルとして後世に残したいという声があがり、寄付金1億5千万円をかけて工事が行われ、今日までその姿を維持している。地元住民の中には、寄付金や復興予算を「奇跡の1本松」の保存に使用することに対する反対意見も多くあり、未だに仮設住宅で暮らしている地域住民等の生



奇跡の1本松

活の復興優先を望む意見を多いという。

ここで着目したいのは、「高田松原を守る会」の活動である。この活動の中心人物である及川征喜さんからお話を聞く機会があった。「高田松原を守る会」では、海岸沿いの高田松原を被災する以前の姿に戻すため、土壌の良い高台で畑を耕し、松の苗を育てる活動を行っている。そして育てた苗を、段階的に以前の場所に植えるという計画が推し進められている。「高田松原」の再興こそが、本当の意味で東日本大震災の復興のシンボルとしての価値があり、地元住民に希望を与えることが可能であると、「高田松原を守る会」の方々は考えておられるみたいだ。及川さんのお話や「高田松原を守る会」の活動に触れることができ、目に見える景観的復興だけでなく、地域の人々の「心の復興」の大切さと難しさを実感することができた。



松の苗を育成する「守る会」の活動

4. 地域を知ることが防災教育

防災教育に関連して陸前高田市の2人の教育関係者からお話を聞く機会があった。1人目は、陸前高田市の教育長である。教育長は「防災教育においては地域の文化財を知ることが大切である。子どもたちが自分の地域の文化財を知ること興味を持ち、現地に足を踏み入れる。その結果、地域の良さだけでなく地域の地形や地図を知り、いざというときに自分の命を守る術になる」と話されていた。2人目の陸前高田市立小友小学校の副校長は「地域に合わせた防災教育を考える必要性」についてお話をしてくださった。

大震災で子どもたちの命を守るためには、大人も子どもも地域の地形を理解しておくことが重要である。そのためにも、寺社や文化財等の地域教材を生かした社会科教育と防災教育を関連付けさせることが重要であると思った。陸前高田市には「高田松原」という財産がある。「高田松原」はこの地域の歩みそのものであり、「高田松原」を知ることによって地域の歴史だけでなくこの地域の魅力や価値を学ぶことができる。地域を知り、地域に学び、地域を愛する心を養うことが、東日本大震災のような事態が起きたときの自分たちの命と地域を守る術となることを学んだ。

5. おわりに

この研修は、全ての体験が初めてのことばかりであった。特に、防災教育は他教科と連携しながら、地域の特質に合わせた指導を行うことが大切であると思った。その中でも体験活動を通じた実感を持った知識理解がより質の高い防災教育へとつながるのではないかと感じた。たとえば、研修を終えてから、テレビや新聞で被災地や原発の問題が取り上げられるとついつい着目することが多くなった。被災地のリポーターの活動が映像で流れるとそのバックの被災地に目が行くようになった。これは、実際に現地に訪れ、被災地の実態を目で見て、足で歩いて、話を聞くという実感を持った学びがあったからである。

これまで、私は原発の問題や被災地に関心のある方だと思っていたが、この研修を通して自分自身の持つ情報の少なさに気付かされた。もう一度、被災地に訪れる機会を持つことができるのであれば、今なお現地で活躍する同世代やティーエイジャーの方々からの視点で震災や震災後の被災地を学びたいと思った。この学びを教員になってから、防災教育や社会科教育へと生かし、子どもたちの「生きる力」の育成に携わっていきたい。

陸前高田での研修を終えて

美術教育専修 大学院1回生 千々石 喜一

1. はじめに

平成25年8月26日から29日にかけて平成25年度陸前高田市文化遺産調査団として、陸前高田市を中心に、宮城県・岩手県周辺での調査に参加させてもらった。今回、数多くの東北地方の仏像を調査することができ、関西ではできない貴重な経験をさせてもらった。その上、新たに仏像の台座裏から伊達綱村と書かれた墨書が発見され、陸前高田市周辺での伊達家の影響を窺うことができた。また「地域と文化財」という観点から考察し、その地域における文化財がもつ重要な役割についても考えることができた。

今回のプロジェクトに参加させてもらい、特に仏像調査で感じたことを中心に、震災と関連させながらまとめていきたい。

2. 仏像調査

私も地方仏を中心に大学院では研究を進めているが、東北の仏像は私の想像を上回る特異性があると感じられた。初めに牡鹿半島で調査した持福院観音堂十一面観音立像は、足元の特徴的な衣紋表現や平面的な顔立ちなど、今まで見たことのない表現が多くあり、地方独特の神秘性に驚かされた。

常膳寺では写真撮影が中心であったが、持福院観音堂と同様、すらっとした細長いフォルムなど神木信仰を意識した神秘性に富んだ仏像を調査する事が出来たと思う。やはりその地方独特の表現が生まれてくるのは、中央政権からかけ離れた場所で生まれた独自の信仰形態や、形式にとられない独特な表現を行う仏師がいたからであろうと考えられる。また自分たちだけで仏像の寸法を測らしてもらったが、今までは先生の測量作業の助手をしたことしかなく、実際に仏像に触



常膳寺での仏像調査

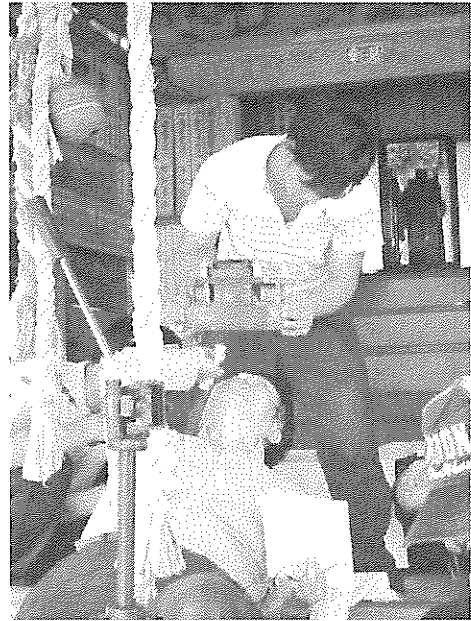
れることも初めてのことであった。もろく弱い部分を見極める必要があり、実際にやってみると、とても神経を使う作業であることを改めて感じさせられた。

向堂観音堂での調査で本尊十一面観音菩薩坐像は、瓔珞や臂釧の表現、また衣の端に細い彫筋を表す点など、常膳寺諸仏と酷似しており、同一の仏師または工房で制作されたものだろうと考えられる。おそらく平安前期に制作された檀像彫刻を模して作られたと考えられ、細かく精緻な表現は当時の一流仏師によって制作されたと思われる。また台座裏からは墨書が見つかり、常膳寺阿弥陀如来坐像の墨書と同様に伊達綱村の名前が見つかった。陸前高田市から住田町にかけて伊達綱村の影響があったと思われる。教材資料を制作するうえで、より深く考察をまとめていきたいと思う。

3. 文化財と地域のつながり

27日には、前回の陸前高田仏像調査の報告会が陸前高田市内のコミュニティーセンターで行われ、想像以上の参加者があり、住民の方々が地域の文化財にとっても関心があることに驚かされた。話を伺うと、

震災により陸前高田を離れていく住民も多いそうである。そして多くのものを失った今、住民の方々をつなぎとめているものは地域における価値だそうである。その価値を生み出すものの一つに、常膳寺をはじめとした地域に古くから伝わる文化財があげられると感じた。私の地元にも素晴らしい文化財は数多くあるが、地元住民にもほとんど知られていないのが現状である。やはり地域の絆、団結、一体感を生み出す媒体としても文化財は適したものであると考える。今回の調査報告の例をもとに、どのような工夫を行えばより地域に根差した文化財の興味・関心が高まるか考察を深めていきたいと感じた。



向堂観音堂での調査

4. 地域の文化財を活かした独自の教育

上記で述べたように地域の文化財を知ってもらい興味を持ってもらう手段として、学校の授業において教材として用いることが挙げられる。そのためにも学校教育の一環として、地域における文化財を教材化し、教育現場に普及させる必要があるだろう。今回も調査を通して得られた成果をもとに去年と同様、実際に教材を作りたいと思っている。今回は伊達綱村が関連した仏像や歴史について紹介できたらと考えている。地元の小中学生に地域の価値を、学びを通じて伝えることで、誇りに思える大切な地域づくりをサポートできたらと感じている。

5. まとめ

今回の調査で大きく印象に残ったことは、被災地の方々はとても郷土に対する愛着が強く、残された文化財に大きな期待感があるということである。この期待感は復興に対しての望みかもしれない。そして、未来を握る子どもたちに郷土の良さを知ってもらうことも復興への手助けになるのではないかと考える。私が今できることは今回の調査で得たものから、教材資料を作成し、子どもたちに知ってもらうことだと思う。そのためにも、実際に見学してみたいくなるような案内や、保護者・先生方にも興味を持ってもらえるような内容を考え生涯学習の場でも役立つ教材を作成したい。

調査に協力してくださった陸前高田市・住田町の方々に感謝し、今回の成果をもとに、期待にこたえられる教材資料を作成することが今後の課題であると考えている。



向堂観音堂



向堂観音堂十一面観音菩薩坐像

平成25年度奈良教育大学陸前高田市文化遺産調査団に参加して

教職大学院2年生 土海 稚奈

1. はじめに

8月26日から29日までの4日間、「文化財調査」「防災教育」「ESD学習の教材化」の3点を目的に岩手県と宮城県に文化遺産調査団の一員として赴いた。

今回参加した理由は2つある。まず1つめは、自身の教員志望動機と今回のプロジェクトが繋がっている点である。私の教員志望動機は、「命を大切にすることを一人でも多く育てたい」である。今までは、いじめを筆頭とした人間関係のみに着目してきたが、今回の東日本大震災・津波を受けて、「命を守る」方法を知ること、訓練することの大切さに気付いた。このことから防災教育という視点で、現地に赴き防災教育について学びたいと考えた。

2つめは、自身の出身地が海辺であるにも関わらず、津波の避難訓練を行った経験がないことに焦りを感じていたからである。現在、東日本大震災・津波の被害が極めて甚大であったことを受け、地元鳥取県では昨年7月より「鳥取県津波対策検討委員会」を設置している。そこでは日本海側での津波の発生源を再検討し、最も鳥取県に影響があると想定されている津波が発生した場合の被害などを予測し、報告書には津波浸水予測図も掲載されている。しかし、具体的な地域別の避難計画の作成は今後の課題とされ、現在作成段階である。このことから、各学校でも独自の避難計画や防災教育が必要であることに気づいた。今後必要とされる能力として、公開されている情報などを基に具体的な個別避難計画を立てたり、地域を巻き込みながら学校で具体的な防災教育のカリキュラムを作成したりすることが挙げられると考える。そのため、実際に被災された方を訪ね、体験談や取組についてお話を伺う機会があるこのプロジェクトは私にとって大変魅力的であった。

そして4日間のプロジェクトを終え、感じたことや学んだことの中から2つ取り上げる。1つめは「復興について」、2つめは「守り方について」である。

2. 復興について

被災地に赴き、一番驚いたことは工事車両の多さだ。地震や津波によって倒壊した建物を取り壊していたり、高台移転のために必要な土砂を積んでいたり様々であった。また、町の至る所に見られる工事現場の看板には「東日本大震災復興工事」の文字が並び、同時に「がんばろう東北」などの言葉も見られた。災害から約2年たった今も工事は続き、海沿いには被災した建物を撤去した後の草原が広がっていた。町が元の状態に戻るためには、まだまだ時間がかかりそうだと、その想像以上に広がった草原を目の当たりにして感じた。しかし、地域の方や先生方から話を伺うと、建物や瓦礫が撤去され1年前とは風景が随分と変わったとのことだった。少しずつ、でも着実に町が形を取り戻しつつあるのだということを知った。



持福院観音堂から見た陸前高田市の風景

現在、モノの復興は少しずつ進み、今まで生きていくことに必死だった被災された方々も、「これか

らどう生きていこう。」という自分自身の生き方と向き合う余裕ができてきたようだ。『忙しさの中に安堵を見出していた生活から次の段階に移る時期が訪れ、今まで以上に人と人の繋がり大切を感じる。』と仮設住宅での聞き取り調査に協力して下さった松坂さんは話して下さった。このことから、復興の視点として「地域との繋がり」が重要になってくると考える。そのためにも、地域で協力して行っている祭りや、地域に残っている文化財に注目し、地域教材として学校教育に取り入れることは意味あることだと再確認した。



聞き取り調査に協力して下さった松坂さんと

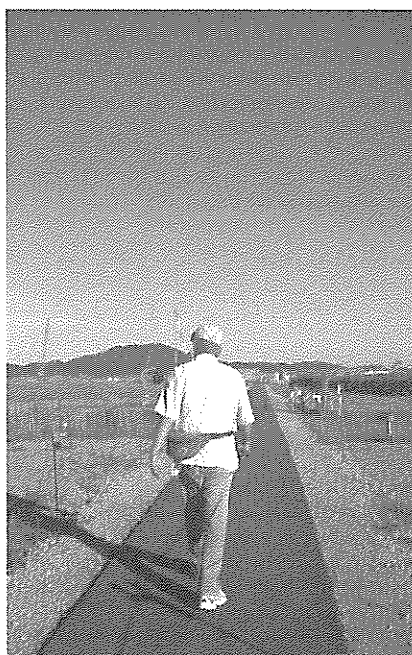
3. 守り方について

復興についてこれから「地域との繋がり」が重要になってくると述べたが、防災についても同じことがいえる。小友小学校の先生にお話を伺った際に、今後のキーワードは「いきる（防災行動）」「そなえる（防災知識）」「かかわる（安心し合える関わり合い）」の3つだと教えていただいた。そして、「これからは身を守るために必要な行動訓練や知識、判断する力が必要とされ、地域力（伝統・文化等）の中で子どもを育てることが大切である」と教えていただいた。そして、児童生徒に被災体験を乗り越えるための「ストレスマネジメント」を指導することも必要不可欠であると学んだ。

そしてお話を聞く中で、地震と津波の2点しか見ていなかった自分に気づくことができた。地震が起これば、海岸沿いでは津波を警戒しなければならないが、地震によって起こった火災や土砂崩れ、ダムの決壊など様々な災害も想定しなければならない。様々な想定をすることが人を守ることに繋がることを、今回のプロジェクトに参加して学んだ。これからは「リスクマネジメント」についても、実践例や文献を調べ、知識を増やしていきたい。

4. 終わりに

今回の調査団に参加して、自分の認識の甘さに気付かされた。実際に現地に赴き、自身が国語科を中心に学んできたことから、文化財調査をする知識もなく、勿論技術もなく、防災教育に関する知識も雀の涙程度しかないという事実と向き合うことになった。専門的知識をはじめ、出身地による土地に対する意識の違いなど、自身と違う視点や考えがあり、学部生や大学院生、そして先生方との意見交流の場はとても刺激的であった。人やモノを守るためには、知識も技術も探究もどれも欠かせないこと、そして何より「守りたい」という強い意志が不可欠であると改めて感じた。このプロジェクトで学んだこと、感じたことを学習指導案などの形として残し、さらにより良いモノを提供できるよう、今後の生活や学習活動に力を入れたい。また、テレビや写真では伝わりきらない想いや、出来事が訪問先にはあったことを心に刻んで、教材研究等に取り組んでいきたい。



一本松へと向かう
高田松原を守る会の及川さん

陸前高田での研修を終えて

社会科教育専修 3回生 二階堂 泰樹

1. はじめに

平成25年度陸前高田市文化遺産調査団の一環として、8月26日から29日にかけて宮城県・岩手県を中心に、仏像調査と防災教育を主軸とした研修に参加した。仏像調査では、普段関わることのない文化遺産調査に参加させてもらうことで、文化財を後世に遺し伝えることの重要性とその難しさを感じ取ることができた。防災教育では、陸前高田市を中心に、被災地の現状と今後の歩みについて学ぶことができた。どちらも地元の方々とのつながりの中で成り立ったものであったが、特に私が主軸としていた防災教育では、地元の人々の生の声を聴かせていただくことで、津波常襲地帯に住まわれている人たちの防災に対する考えや、思いと現実と板挟みになっている心情など、ただ単に命を守るだけの防災だけではなく、人々の生活や暮らしと関わった防災について考えることができた。防災教育とはよく耳にするが、では防災教育とは一体何を指すものであるのか、研修中に会った方々から私が感じたことをもとにまとめてゆきたい。

2. 防災教育

防災教育と聞き、私が初めに思い浮かぶことは学校の避難訓練のような校内から運動場へ、どれだけ早く冷静に向かうことができるのか、というものである。児童らには緊張感はなく、その状況を楽しむ児童もいるくらいであった。私の家の近くの避難場所は中学校だが、私が生まれてからまだ一度も避難場所として使用されたことはなく、地域住民側にも避難場所としての印象は薄い。そもそも、有事の際に、その中学校へ逃げ込むことが正しいのかさえもわからない。そのような状況であっても、防災に関して疑問を抱く人や危機感を持っている人が多いとは言えない。かくゆう私もその一人であった。しかし、陸前高田市では市が指定した避難場所に避難して命を落とした方も多いと、うかがった。避難場所の中には海拔0m地点に建てられた施設もあったためである。今ある現状を批判的に検討することの大切さと、自分の身を守ることができるのは自分自身であることを強く感じた。

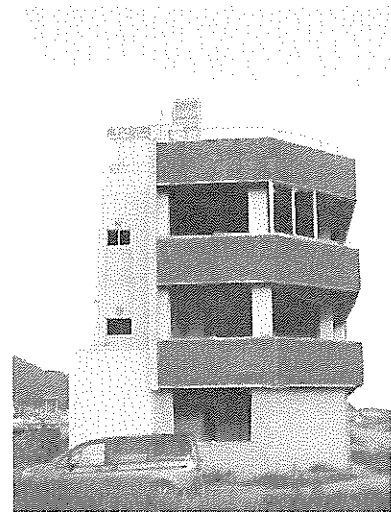


高田松原を守る会の活動について

陸前高田市内を回っていると、ほとんどのがれきや廃墟などは撤去されており、街は更地と化していた。街中では忙しく走るトラックや重機が目についた。住宅や飲食店、スーパーマーケットにいたるまでプレハブである様子から、がれきを撤去するだけでは消せない震災の雰囲気や傷跡が見えてくる。山岸先生の講演会のあと、少ない時間の中ではあったが、テレビのニュースや新聞では、なかなか伝わってこない具体的な事柄を、被災された方々から聞くことができた。語り部ガイドをしていらっしゃる河野さんは、他県よりも津波対策がしっかりしていたはずであるのに、チリ地震の際に被害がなかったことで大丈夫だと思ってしまった、と津波に対する危機感が薄れてしまっていたことを残念そうに悔しそうに語ってくださった。また別の方は、着の身着のまま避難をし、食べるものも満足になかったが、農家の方がおにぎりや野菜を差し入れしてくれありがたかったというお話をされた。普段の町内会のつながりなど、日頃からのコミュニティがいかに大切であるかがひしひしと伝わるお話を聞きながら、自

分の住む街には一体どれほどのコミュニティが形成されているのだろうかと考えてしまった。震災から今日にいたるまで被災された方々は苦しい中を生き抜いてこられた。そのような中、支え合うことのできる人が多くいることは生活だけでなく、心の支えにもなる。日頃から地域社会全体を通じたつながりを持ち、地域のコミュニティを広げてゆくことも、防災教育の役割の一つであると考え。また、地域の地形や住民の実情に合わせた災害への備えを住民の間で共有することが重要であり、そのためには普段から防災訓練や防災教育を実施することで、人と人のつながりをつくったり、避難の仕方を確認し合ったりする必要がある。防災教育を学校内で限定してはならないと感じた。

講演会来場者の方々とのお話のあと、小友小学校の副校長から避難所における教員の役割など、貴重なお話を聞くことができた。なによりも一番大事なことは「どう管理し、動かすか」であり、学校の緊急マニュアルをしっかりと読み、日頃からシミュレーションをしておくことが必要だとおっしゃった。小友小学校の防災教育には三つの重点が据えられている。①安全な避難行動（防災行動）を学ばせること、②必要な防災学習（防災知識）を学ばせること、③安心させる関わり合いを学ばせること、の三点であるが、私は特に防災知識をしっかりと子どもたちに持たせている点が素晴らしいと感じた。なぜならば、行動に意味をもたせることができるからである。防災に関わることはどうしても日常とかけ離れたものが多い。非日常であるからこそ、年に数回ある行事のように形骸化させてしまってはならない。また、地域を知り、地域を愛することが防災につながるということも非常に納得のゆくものであった。今回、私は文化財調査に関しては右も左もわからない素人として参加させてもらったのだが、地域に遺る文化財を通し、地域を再発見してゆくことが、まさしく防災教育へとつながっていることに気が驚いた。



津波の高さを示すビル

3. まとめ

四日間の研修を通して、私が一番に感じたことは、地域のつながりに勝る防災はないのだということである。いうまでもなく、防波堤や高台移転など対策として重要なものは多くあるが、それらを進めてゆくためにも、地域間のネットワークが必要である。震災で多くの方が亡くなり、たくさんの方が住む場所を失い故郷を離れている。そのような時だからこそ、地域を愛することが重要になってくるのではないだろうか。国が進めることをただ受け入れてゆくだけでは、本当の意味での復興とはいえない。それは、研修中に会った多くの方々からのお話で十分にわかった。今ある現状に疑問を抱き、行動を起こしている人が被災地にはたくさんいらっしゃる。それは地域をよく知っているからである。その動きが教育の場で活かされ、地域をよく知る子どもたちが将来を担ってゆくことになる。しかし、学校に限定された防災教育だけでは地域コミュニティを育てることはできない。地域社会全体で防災知識を共有する場が必要となるが、その点は学校と自治体とが連携して進めてゆくことで、行動だけでなく知識を伴った防災教育を広げてゆくことができると私は考えている。そして、その過程で生まれた地域のつながりが有事の際に自治体同士の連携や個人間の助け合いなどの形で役立ってくる。

今回の研修では、防災教育や文化財調査などの学びを得ることができた。また、東北の地に足を踏み入れ、東北を中心とした様々な視点を養えたことも大きな収穫であった。震災から約3年、ようやくスタートラインに立つことができたので「地域社会の力」をキーワードにより深く東北を核とした学びをし、人々の暮らしを感じることでできる教材を開発したい。

中尊胎藏大日如来坐像が居高（＝像高）八尺であり、奈良・薬師寺金堂薬師三尊像のように坐高約八尺の中尊に立高約一丈の脇侍菩薩像が附属する典型例が存することからも、『叡岳要記』大講堂条の「立高一丈五寸」が真を伝えるものと思われる。常膳寺十一面像の像高一丈八寸三分もしくは一丈六寸七分は一丈五寸と誤差の範囲であり、常膳寺十一面像は現存しない延暦寺講堂像を意識して造立された蓋然性が大きいと考えられる。

奈良教育大学の陸前高田市文化遺産調査は東日本大震災被災地支援を目的として開始されたものであったが、かえって、かつて図像集にも収載され注目を集めながらその後天災・人災により失われた近畿地方所在の仏像彫刻のよすがを伝える作例を、東日本大震災で甚大な被害を蒙った気仙郡地域に見出す結果となった。旧気仙郡に隣接する釜石市・鶴住居観音堂十一面観音菩薩立像〔永正七年（二五二〇）〕も、頂上仏面に上半身が表現され常膳寺十一面像・向堂観音堂像の図像と通じており、今後悉皆調査の進展に伴い常膳寺十一面像・向堂観音堂像の影響下に制作された作例や、場合によっては手本とした平安時代前期彫刻それ自体が見出される可能性もないとはいえない。

平成二十五年度調査に際しても、金剛寺住職（常膳寺兼務住職）小林信雄師、浄福寺前住職（向堂観音堂管理）多田俊一氏、及川征喜氏、佐藤文雄氏、松坂泰盛氏、佐々木克孝氏、千葉英夫氏をはじめとする陸前高田市・住田町の方々に数々のご高配を賜った。また本稿は平成二十五年度奈良教育大学「学ぶ喜び」プロジェクト 陸前高田市文化遺産調査団（山岸、中澤静男講師、大学院生木谷智史氏、千々石喜一氏、土海稚奈氏、英優美氏、学部学生二階堂泰樹氏、横井まどか氏）による調査成果の一部である。関係各位に対して深甚の謝意を表したい。

参考文献（抄）

- 長岡龍作「山形宝積院十一面観音像をめぐって」『美術史』第二二一冊所収、昭和六十二年一月）
- 川村知行「東大寺二月堂小観音の儀礼と図像」『南都仏教』第五二号所収、昭和五十九年六月）
- 川村知行「寛信の類秘抄と類聚抄―覚禪抄の引用をめぐって―」『密教図像』第三号所収、昭和五十九年十二月）
- 奈良教育大学「岩手県陸前高田市常膳寺仏像調査報告書」〔平成二十四年度 奈良教育大学「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト報告書〕所収、平成二十五年三月、奈良教育大学）

平成二十四年度の奈良教育大学陸前高田市文化遺産調査(第一次・第二次)における主要な調査対象であった常膳寺観音堂本尊十一面観音菩薩立像〔木造 素地 像高三二五・〇cm(三〇cmⅡ一尺とした場合)一丈八寸三分、三〇・三cmⅡ一尺とした場合は一丈六寸七分)、以下常膳寺十一面像と略称〕と向堂観音堂像との間には、法量や立・坐の体勢の違いがあるにもかかわらず顕著な形式面での類似が認められる。すなわち、中央花飾りから左右に唐草が展開する天冠台、全体の輪郭が波型を呈し中央に花飾りのある胸飾、基本帯が紐―珠繫―紐となり、布帛の副帯をつける臂釧(向堂観音堂像の臂釧は、常膳寺十一面像と同作とみられる同寺不動明王立像のそれととりわけ酷似する)、以上がすべて共木彫出されること等である。これらの特徴は同時代の仏像彫刻中にあつてきわめて稀であり、常膳寺十一面像と向堂観音堂像とは、同一工房もしくは同一仏師、あるいはそれに准じるような相近い環境のもと制作されたと考えて大過ないであろう。

ところで常膳寺十一面像と向堂観音堂像の図像的性格を考えるうえで、檀像を意識して素地を基本とする表面仕上げとならんで、頂上仏面に拱手する上半身が表現されるという特異な共通点を見逃すことはできない(常膳寺十一面像頂上仏面正面下部の山形の立上りは、向堂観音堂像の精査を経て拱手であることが確定的となった)。円仁(慈覚大師。七九四―八六四。下野国出身の天台宗僧で、入唐八家の一人。第三代天台座主)請来とみられる延暦寺前唐院十一面観音菩薩像(檀像。現存しない)の頂上仏面に合掌する上半身が表現されていたこと(『行林抄』・『阿婆縛抄』による)、延暦寺講堂十一面観音菩薩立像(中尊胎藏大日如来坐像の脇侍。以下延暦寺講堂像と略称)の頂上仏面に拱手する上半身(もしくは全身)が表現されていたこと(『類秘抄』・『覚禪抄』。特に高野山西南院本『覚禪抄』図像)、現に東北地方に山形・宝積院十一面観音菩薩立像のように頂上仏面に上半身が表される九世紀彫刻の実例が遺されていることから、常膳寺十一面像と向堂観音堂像は、円仁開創伝承に託されるような東北地方(もしくは東国)への天台宗の広布を背景に造立されたと推定することが可能になった。常膳寺十一面像・向堂観音堂像ともに、気仙郡地域における中世・近世間の有力者層の交代等により制作当時や中世に遡る古記録を伝えていないが、江戸時代中期〔宝暦十一年(一七六一)〕の相原友直『気仙風土草』が、常膳寺について「真言宗。(中略)今泉金剛寺門中。」と現在の宗旨や兼務関係と同様に記すにもかかわらず、常膳寺観音堂については今日一般に流布する坂上田村麻呂創立伝承と並んで、十一面像の作者に関する一説に「慈覚の作」、向堂観音堂像の作者についても「慈覚作」と記載することは、何らかの古伝を反映するものと理解されよう。

古像の遺されていない延暦寺講堂像の法量については、一尺五寸とする『山門堂舎記』や一丈五尺とする『三塔諸寺縁起』の記載もあるが、

陸前高田市・常膳寺と住田町向堂観音堂の十一面観音菩薩像

奈良教育大学教授 山岸公基

平成二十五年八月の奈良教育大学陸前高田市文化遺産第三次調査では、陸前高田市の隣町、気仙郡住田町向堂観音堂の十一面観音菩薩坐像（以下向堂観音堂像と略称）を主な調査対象とした。（他に陸前高田市小友町常膳寺の千手観音菩薩立像、薬師如来立像、阿弥陀如来坐像の追調査を実施した。）

向堂観音堂像は像高二九・八cm（三〇・三cm \parallel 一尺とした場合九寸八分）、髮際高二〇・〇cm（同上の換算で六寸六分）、台座天板底面に元禄九年（一六九六）の墨書銘があり、台座の作者（京大佛師四條通長兵衛）および施主（松田市郎左衛門尉義廣）の名が知られる。当時の気仙郡が仙台（伊達）藩領であることから「従四位中将／松平陸奥守綱村公（ \parallel 仙台藩第四代藩主伊達綱村、一六五九〜一七一九）御治世」と記されるのであろうが、膨大な近世の仏像彫刻のすべてに当時の藩主名が銘記されるわけではなくこれは稀少な例であり、常膳寺阿弥陀如来坐像銘記「元禄十年（一六九七）」の「伊達氏四位／松平陸奥守／綱村持（ \parallel 時か）代」と年代・地域・書式ともに近いことが注目される。なお向堂観音堂像には、当初の本体・台座の緊結に関わるとみられる柄穴が頭体幹部材像底に一、両脚部前半材像底に二あるが、台座天板にはこれに対応する柄穴がなく、台座作者が本体を造つたのではないこと、本体は元禄九年（一六九六）以前に遡る造像であることが明らかである。

向堂観音堂像は、頭体幹部が両腕肘まで、両腰脇三角部と両脚部後半まで、及び右天衣遊離部、左右天衣垂下部の遊離する部分までを含む。一材より彫出される一木造で、基本的に素地とされる表面仕上げも合せ、平安時代前期（八世紀末〜九世紀）彫刻、とりわけ素地とされるのが一般的な檀像風彫刻と通う風が認められる。天冠台や胸飾、臂釧を共木で鏤刻するのも檀像風彫刻に例が多い。ただし向堂観音堂像の、目の見開きが小さく口を引き結んだ面貌には、たとえば大阪・千手寺千手観音菩薩像「南北朝時代、南朝延文二年・北朝正平十二年（一三五七）銘、康成作」との間に一定の類似を認めることができ、南北朝〜室町時代（一四〜一五世紀）に平安時代前期彫刻に倣って制作されたと考えるのが妥当であろう。

長兵衛

從四位中將

松平陸奥守綱村公御治世

秋七月廿日

施主氣仙郡世田米村中澤

松田市郎左衛門尉義廣

光背嵌入鏡背陽鑄

藤原光重

備考

一、実査 平成二十五年八月二十八日(山岸公基・中澤静男・木谷智史・千々石喜一・土海稚奈・英優美・二階堂泰樹・横井まどか)

品質構造

針葉樹。目がよくつまる。材色が黄色味を帯びる。カヤカ。

頭体幹部は、髻頂よりやや（一・八cm）下から像底に至るまで、両腕肘まで、両腰脇三角部と両脚部後半まで、及び右天衣遊離部、左右天衣垂下部の遊離する部分までを含んで、木心を像の後方遠くに去る堅一材より彫出し、内割を施さない。（右体側部と右腕間、両前膊と両脚部との間を、トンネル状に割り透かす。）

この頭体幹部材に、頂上仏上半身（高さ八・三cm。周囲に上段頭上面四を矧ぐ。仏面三道第二条より上を矧ぐ。頭体幹部とは丸雇柄で緊結する。）、髻頂、地髪部上頭上面（七面）、天冠台及び臂釧花飾り突出部、天冠台正面飾りの上方突出部、両手首先、両脚部前半、裳先を各矧ぐ。白毫別材製。現在胸飾の天衣と接する部分に環状の金具が遺り、左にも環状金具を差した痕跡がある。別材製瓔珞を懸けたか。像表面は、当初より素地または素地色彩色とされたとみられる。

像底に、頭体幹部材に一、両脚部前半材に二の丸柄穴がある。当初の本体・台座の緊結に関わるとみられる。

保存状態

後補部 上段頭上面のうち右二面、下段頭上面のうち左端一面及び中央一面。光背（木造漆箔）。台座（木造漆箔）。

亡失部 白毫、裳先、両手持物。天冠台及び臂釧の花飾り部。天衣垂下部より腰布から地付に至る部分。

銘記

台座天板底面墨書

作者 京大佛師

皆元禄九年^丙 歳 四條通

十一面觀音菩薩坐像

木造 一軀 像高二九・八cm

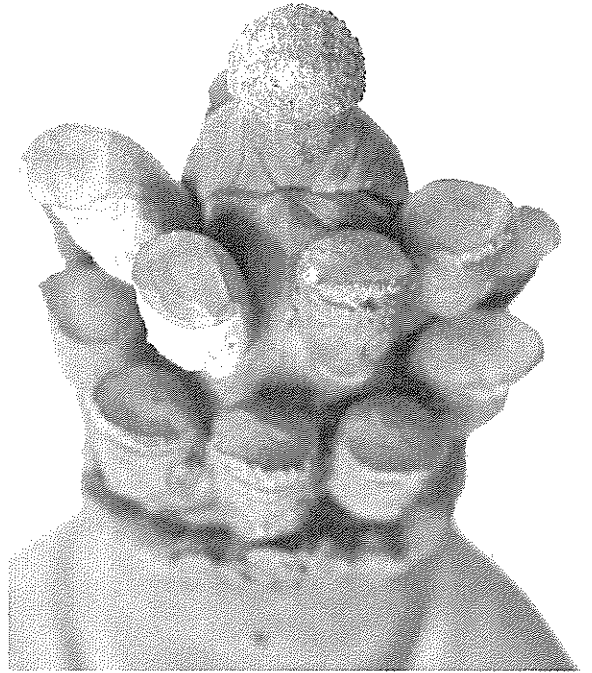
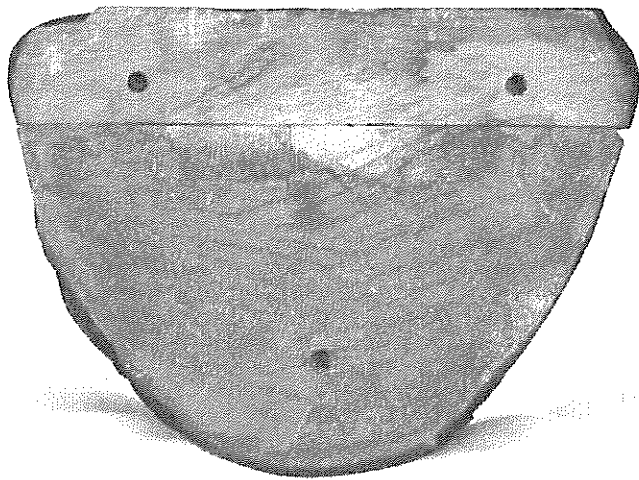
岩手県気仙郡住田町世田米字川向

向堂觀音堂

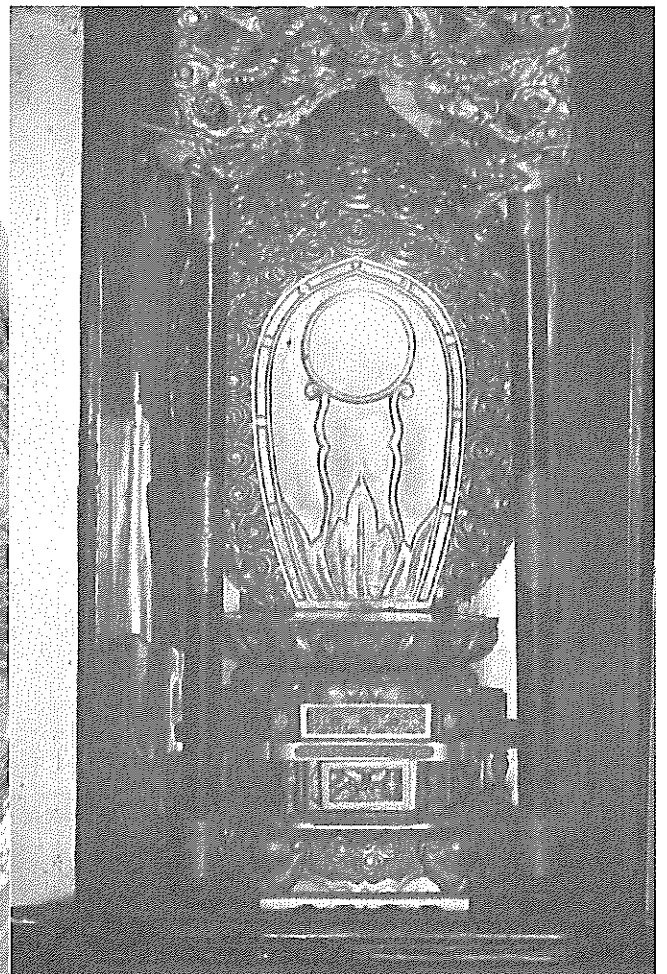
法量(単位cm)

本体

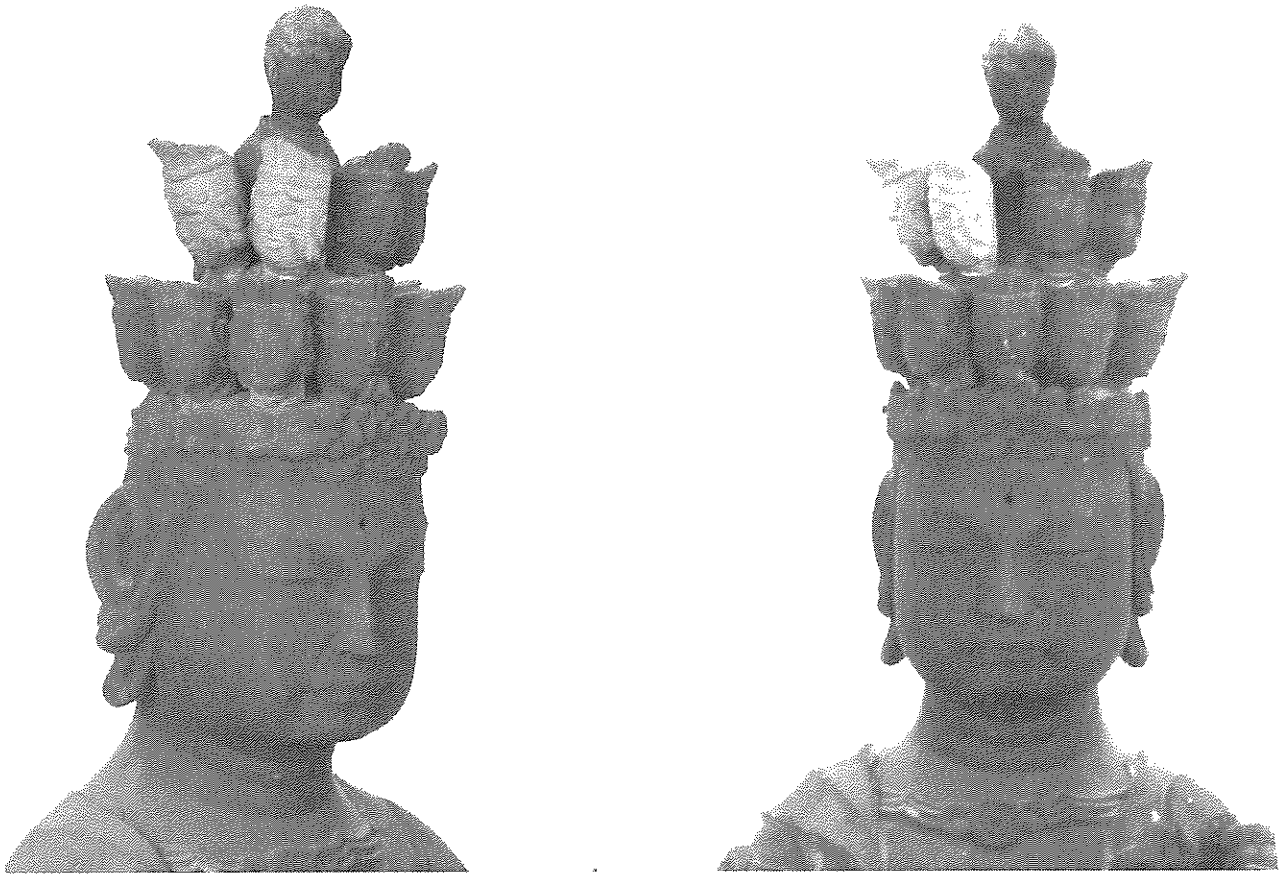
像高	二九・八 (九寸八分)
髮際高	二〇・〇 (六寸六分)
頂—顎	一六・〇
面長	五・七
面幅	五・七
耳張	七・三
面奥	七・八
肘張	一四・八
坐奥	一四・六
膝張	一九・九
膝高(左)	四・三
(右)	四・四
台座高	二〇・〇
光背高(現状)	三九・二
厨子高	七五・五



向堂観音堂 十一面観音菩薩坐像 像底 (左写真)・頭頂 (右写真)



向堂観音堂 十一面観音菩薩坐像 台座天板底面墨書 (左写真)・光背および台座 (右写真)



向堂觀音堂 十一面觀音菩薩坐像 頭部右斜側面 (左写真)・頭部正面 (右写真)



向堂觀音堂 十一面觀音菩薩坐像 頭部右側面 (左写真)・頭部左側面 (右写真)



向堂觀音堂 十一面觀音菩薩坐像 全身右側面 (左写真)・全身左側面 (右写真)



向堂觀音堂 十一面觀音菩薩坐像 全身背面 (左写真)・全身左斜側面 (右写真)



向堂觀音堂 十一面觀音菩薩坐像 全身正面

岩手県気仙郡住田町向堂観音堂
仏像調査報告書

2014年3月
奈良教育大学

テーマ 2

特に地域の教育委員会との連携・協働による
教員養成機能の充実と現職研修プログラムの
開発と平成 26 年度制度化に向けての試行的
実施

1. 目的

新しい学習指導要領に ESD の理念が反映されたことから、ESD の観点からの各教科の学習内容・方法の再検討、総合的な学習の時間の内容についての再構築が求められている。特に奈良は、ESD 先進地域として注目されており、理論・実践の双方において、今後の ESD の推進役として期待されている。そこで、教員を志望する学生・大学院生と現職教員を対象として ESD の理論や教材開発の研究を目的として、連続セミナーを開催する。またその成果報告書を作成し、今後の ESD 研究に資することを目的とする。

2. 開催概要

- 第 1 回 6 月 12 日 (木) 15 名参加
- 第 2 回 7 月 3 日 (水) 16 名参加
- 第 3 回 7 月 24 日 (木) 17 名参加
- 第 4 回 8 月 30 日 (水) 17 名参加
- 第 5 回 10 月 11 日 (金) 22 名参加
- 第 6 回 11 月 12 日 (木) 16 名参加
- 第 7 回 12 月 3 日 (火) 17 名参加
- 第 8 回 1 月 21 日 (火) 19 名参加
- 第 9 回 2 月 20 日 (木) 15 名参加
- 第 10 回 3 月 6 日 (木) 15 名参加

3. 成果物 (ESD 学習指導案)

- | | | |
|------------------------------|------------------------|------------|
| ①「広島お好み焼きから原爆が見える」 | 奈良市立朱雀小学校 | 山方 貴順 |
| ②「新しい里海をつくろう」 | 天理市立前栽小学校 | 小西 慶子 |
| ③「景観か生活か!? 瀬の浦バイパス建設問題」 | 奈良市立佐保小学校 | 吉村 泰典 |
| ④「古代から現代、そして未来へ・銅で感じる『つながり』」 | 奈良市立富雄第三小中学校 | 大田 清美 |
| ⑤「カブトガニを救え！」 | 奈良教育大学教職大学院 教職大学院 2 回生 | 中澤 哲也 |
| ⑥「放射線マップからリスクを考えよう」 | 奈良教育大学 3 回生 | 後藤田洋介 |
| ⑦「布施城跡から文化遺産を考えよう」 | 奈良教育大学 | 北村 恭康 |
| ⑧「四万十川から学び、再生しよう大和川」 | 天理市立櫛本小学校 | 福住 裕樹 |
| ⑨「郷土料理の良さを再発見」 | 生駒市立生駒東小学校 | 山方 有香 |
| ⑩「100 年後の町のために、今やらねばならぬこと」 | 奈良市立済美小学校 | 大西 浩明 |
| ⑪「「天空の城」? 竹田城」 | 奈良市立富雄第三小中学校 | 河野 晋也 |
| ⑫「砂丘物語から地域再発見」 | 奈良教育大学 3 回生 | 二階堂泰樹 |
| ⑬「軍艦島って過去のもの？」 | 奈良市立飛鳥小学校 | 松浦 慎・三木 恵介 |
| ⑭「名古屋城から文化遺産を考える」 | 奈良教育大学 | 中澤 静男 |

平成 25 年度奈良教育大学 ESD 連続セミナー①

持続発展・文化遺産教育研究センター 専任講師 中澤静男

1. 持続可能な社会実現のための ESD ストラテジー

(1) ESD の目標 (文部科学省・日本ユネスコ国内委員会『ユネスコスクールと持続発展教育』)

- ・ すべての人が質の高い教育の恩恵を享受すること
- ・ 持続可能な発展のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれること
- ・ 環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような価値観と行動の変革をもたらすこと

(2) 行動の変革に必要なもの

ESD は持続可能な社会づくりの担い手を育てる教育であることから、持続可能な社会をつくっていくのは自分であるという「当事者意識」を持たせることが重要である。

○ 当事者意識を持たせる学習方法と学習内容

- A 学びのスタイル (応答的ディスカッションを中心とした協働的な学びによる主体的参加)
- B 世界遺産・地域遺産教育 (地域を大切に作る心の育成)

(3) A : 協働的な学びと ESD

- 「すべての人が (中略) 環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような行動の変革をもたらすことであり、その結果として持続可能な社会への変革を実現することです」(『ESD 国内実施計画』 p.4)

ESD は個人が何かをできるようになるということよりもむしろ、ひとりひとりの価値観や行動の変革を通して、社会全体のあり方を持続可能なものにすることを目指すものである。

○ 正統的周辺参加論 (『状況に埋め込まれた学習』ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウエンガー (1993) 産業図書出版)

- ① 学習は全人格を巻き込む。つまりそれは特定の活動だけでなく、社会的共同体への関係付けを意味している。(中略) 成員になること、なにがしかの一人前になることを意味している。
- ② 正統的周辺参加論では学習を社会的実践の一部であるとする。つまり、学習というのは、「学び取る」とか「身につける」というよりも、「世の中のタメになること—いわば、シゴト—をやる」ことなんだという。しかも、個人の営みではなく、当人がそこに属している、あるいは属したいと願っているなんらかの「共同体」が想定されている、ということである。

ESD の場合、この属したいと願っている「共同体」が「持続可能な社会づくりを目指す学習集団」となり、ESD は「持続可能な社会づくりを目指す学びの共同体」の周辺から中心に向かって、その共同体において一人前になることを志向した学びとなる。

(4) A：協働的な学びの教育学的意義

- ①「効力感の中心には、自分に対する肯定的な見方がある。(中略) 教えあいは、教える側の者に、影響力があり、感謝され、必要とされている感じる機会を与えてくれる。(中略) 協同学習のような、一つの目標の達成を目指して、仲間同士がやりとりすることも、効力感を形成するやりとりの形として考えられる。(『無気力の心理学』波田野誼余夫・稲垣佳世子 中公新書(1981)、p.81)
- ②「相手がなかなか分かってくれないので、説明の仕方を色々変えているうちに、自分でも前よりもよく分かるようになったと思えたり、相手に説明しているうち、自分の理解が不十分であることに気づき、知的好奇心をさらにかきたてられる、といったことも起こりやすい。(『人はいかに学ぶか』波多野誼余夫・稲垣佳世子(1989) 中公新書 p.132)
- ③「大人から与えられる情報と違って、仲間からの情報は権威がないため、無批判に正しいものとして受け入れられることが少ない。このような事態では、正答を見つけるべく、自分の持っている知識を関連付けてまとまりのとれたものにしようとするのがより活発に行われやすい。その結果、対象になっている事象についての理解がより深まっていく(『知力と学力』波多野誼余夫・稲垣佳世子(1984) 岩波新書 p.106)
- ④「**教師も答えがはっきりわからないような課題**—はじめはどうなるか、どうしたらよいか見当もつかないが、しだいに答えが見えてくる活動であれば、教師も子どもも一体になってその活動に打ち込むことが見られよう。(前掲『人はいかに学ぶか』 p.191)

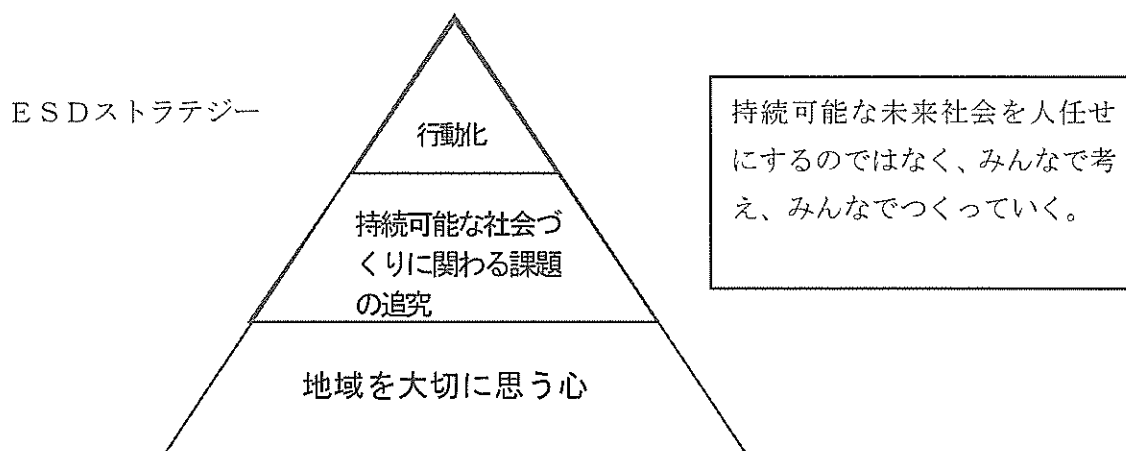
- ESDは協働的な学びによって進められるものである。
- これを契機に、現行の授業全体を改善する契機となる可能性を秘めている。

(5) B：世界遺産・地域遺産教育

地域のよさ(自然景観、世界遺産・文化遺産、伝統文化(食・行事・習慣・方言等))のよさを再発見する学習

キーポイント

- ①現地で学ぶ、本物との出会い(本当の感動)
- ②それらを伝えてきた先人の営みへの焦点化(ほったらかしで今に伝わるものはない)
- ③今も努力を続ける人との出会い(次は自分たちの出番である)

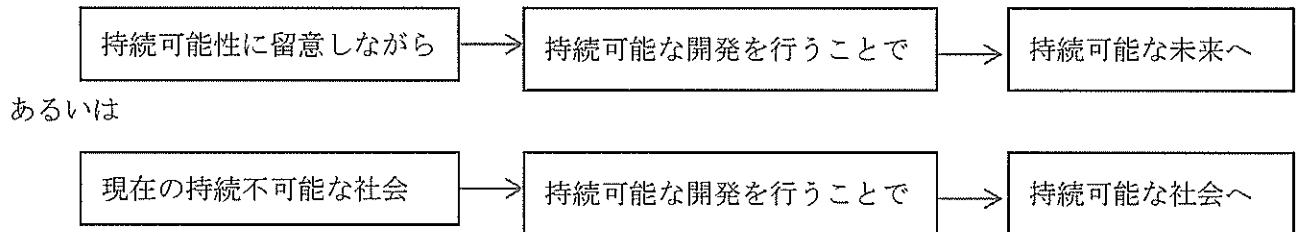


1. 開催日時 平成 25 年 7 月 3 日（水）18 時 45 分～21 時 20 分
2. 会場 国際交流室
3. 参加者数 現職教員（9 名）、指導主事（1 名）、学生（4 名）、大学教員（2 名） 計 16 名
4. 研究内容

(1) ESD のこれまでの経緯

(2) 「持続可能性」と「持続可能な開発」の概念整理

- ・ 「持続可能性」及び「持続可能性の基礎」とは、持続可能な社会に求められる要素や状態を表す。一方、「持続可能な開発」というのは、持続可能な社会が実現するように行う「行為」「行動」を表す。



(3) 社会・環境・経済に与える文化の影響について

- ・ 文化によって社会・環境・経済がつけられると共に、社会・環境・経済によって文化が変容するというように、双方向的な関係がある。

(4) グローバリゼーションとは何か

経済のグローバル化、文化のグローバル化、環境のグローバル化、社会のグローバル化についての協議から、グローバリゼーションには、文化においても生物においても、多様性を拡大するというメリットと多様性を減少する（画一化）というデメリットがある。グローバル化を指導する際には、両面を意識するべきである。

(5) ESD の価値の整理

協議の上で、本セミナーとして整理できた ESD の価値観は次の 4 つ。

- ① 生態系の尊重（生物多様性の尊重）
- ② 文化多様性の尊重
- ③ 人権の尊重
- ④ 世代間と世代内の公正

※特に「ESD の価値観の整理」ができたのは、すごいことだと思います。この 4 つに関わる授業を構想することが ESD の授業化の第 1 歩になるからです（逆に言えば、この 4 つに関わらない授業は ESD の授業ではないということです）。もちろんこの 4 つの価値観は、7.03 でのものであり、今後も検討する必要があります。

今回は、7 月 23 日 17 時 30 分からです。テキストの 98-121 を読んでみてください。また、第 6 章は河野先生、第 7 章は松浦先生、第 8 章を山方先生が担当していただきます。

- 開催日時 平成 25 年 7 月 24 日 (水) 17:30-20:30
- 参加者 17 名 (教員: 11 名、学生: 4 名、大学教員 2 名)
- DVD 視聴 「はだしのゲンが伝えたいこと」

第 5 章 持続可能な未来への学び ESD とは何か 永田佳之

7.03 のセミナーで整理した ESD の価値観は次の 4 つです。

- ① 生態系の尊重 (生物多様性の尊重)
- ② 文化多様性の尊重
- ③ 人権の尊重
- ④ 世代間と世代内の公正

この ESD で大切にしている価値観が明らかにできたことで、それに呼応する学習内容が見えてき、目指す能力・態度やそのための学習方法について考察できます。

3. ESD とはどんな教育か

(1) サステナビリティ学、持続可能な開発、持続可能な開発のための教育の分類・整理。

サステナビリティ学 持続不可能な状況についてその原因、システム、解決策について
ここから ESD で大切にしている価値観が明らかにできます。

持続可能な開発 持続不可能な社会を持続可能な社会にする行動・政策

持続可能な開発のための教育 持続可能な社会づくりのために短期的な制約が生じたとしても、すべての人がその持続可能な開発に関わる政策を受け入れたり、自ら政治に参加したり、行動したり (ライフスタイルの変革や地域での活動など) する態度や能力を養うための教育。

(2) ESD の諸特徴 (国際実施計画: 2004 年 10 月版)

- a 学際的でホリスティックであること
- b 持続可能な未来に向けた価値付けがあること
- c 批判的思考及び問題解決を重視していること
- d 多様な学習法を活用すること
- e 学習者自身が意思決定に参加すること
- f 地域の文化に適合していること

4. ホリスティックなとらえ方

永田氏が指摘する ESD の 3 つの特徴

(1) 開発を全体的、ホリスティックにとらえようとしている点

ホリスティックなとらえかたとは

「全体は部分の総和以上である。」物事を部分の集積として考えるのではなく、部分と部分のつながりに着目し、全体をとらえる眼差しの重視。

例えば、部品を組み立てると自動車になるが、人間の部品を組み立てても、人間にはならない。全体は部分の総和以上の価値あるもの。」これまでの科学では、物事を分割・分析してその本質を見極めようとする方向性であったが、先鋭化するに従って、隣分野のこともわからなくなる。それ

では、全体をとらえることができない。持続可能な社会の実現のためには、全体をとらえようとする見方が必要だ。機械論的パラダイムから全体論的パラダイムへ

(2) つながりへの着目 システムズシンキング

全体をとらえる一つの方法として、「つながり」に着目する。つながり・相互関連性に着目することで、全体像がとらえられる。

システムズシンキングを体験する

- ・ 自民党の参議院選大勝でどのような影響があるだろうか。
- ・ LINE などの SNS の普及による影響。
- ・ 土曜授業日の復活について

5. ESDはいかにして実践されるか

(1) ①インフュージョン・アプローチ

どの科目にも持続可能性の課題を意識して授業を行う方法

②インテグレーション・アプローチ

総合的な学習の時間での特定のトピックのもとでの学びの実践

様々な教科でESDについて学ぶインフュージョン・アプローチは持続可能な社会づくりに関する価値観を教えるには効果があるだろう。しかし、それだけではESDの目標である行動の変革には至らないのではないか。行動化の仕方を体験的に学ぶ機会が必要である。現在のところそれができるのは、総合的な学習の時間だけであろう。

課題の発見 → 調査 → 話し合い → まとめ という一連の問題解決型の学習の先に

課題の発見 → 調査 → 話し合い → まとめ → **行動化** を学習過程の中に位置付け、行動化を体験させること、このような学習を積み重ねて、様々な行動化を体験させること。

○ 行動化のパターン

- ① ライフスタイルの変革 個人の行動の変革を学習過程に位置付け、振り返る。
- ② 地域での活動 地域での活動を体験することが、持続可能な地域社会の実現に参加・参画する態度を養成することになる。

○ 行動化を継続させるもの

- ① 地域社会づくりの当事者意識 地域の良さを発見する学習が効果的。(世界遺産学習)
- ② メタ認知を高める 自己がどのように変容したのかを知ることが、さらなる変容へのモチベーションになる。

6. 学校を超えて、地域で展開されるESD

ESDは学校教育だけで実践されていけばよいものではない。地域住民全体が、持続可能な地域社会をつくっていこうという意識・態度の変革が求められる。そこで、学校教育でのESDと生涯教育でのESDの融合の方策として、次回からは県の環境課の職員にもこのセミナーに参加してもらおうと考えています。

※ 次回のセミナーは、8月30日(金) 17:30~です。セミナーの冒頭にご覧いただいたDVD「はだしのゲンが伝えたいこと」を活用されたい方は、ご連絡ください。

○ 開催日時 平成 25 年 8 月 30 日 (水) 17:30-20:30

○ 参加者 17 名 (教員:9 名、学生:2 名、大学教員 2 名、環境政策課 2 名、きんき環境館 2 名)

第 6 章 環境教育の視座 -自然と人間の関係性を問う- 飯田 夏代 枝廣 淳子 (監修)

担当: 河野先生

1. 今、地球に起きていること

現在はトリプルリスクの時代 (地球温暖化・エネルギー問題・食糧危機)

【地球温暖化】

地球が吸収できる炭素量は 31 億トン 現在の排出量は 72 億トン

- ・ 1 度上がると収穫量は 10% 減少し、飢餓が拡大
- ・ 熱帯性の病気に感染する可能性が高まる

【エネルギー問題】

ピークオイル 22 ヶ国はすでにピークを迎えている。減少へ。

- ・ 需要と供給のバランスの不安定化による国際情勢の緊迫化
- ・ 工業生産や農業生産への影響

【食糧危機】

- ・ バイオ燃料の価格上昇に伴う穀物価格の上昇
- ・ 食糧安全保障が大きな問題に

それぞれ個別の問題として考えるのではなく、根本的な原因や構造に目を向けることが大切。

2. 問題の構造-成長の限界

「有限の地球の上で無限の成長をめざしていること」が引き起こす「歪み」として表れているのが、温暖化やエネルギーの問題。

【エコロジカルフットプリント】

私たちの暮らしや経済を維持するために、どれぐらいの地球が必要なのか 現在は 1.4

3. 根本的な問題を考えるために

根本的な問題を考える上で有効な考え方の枠組みとアプローチ

(1) システム思考

1 つひとつの出来事をつながりをつなぐをたどり、全体像を理解して、根本的な解決策を考えるアプローチ
二酸化炭素の削減ができないのは、私たちの努力が足りないのではなく、進んで二酸化炭素を減らしたくなるようなルールやシステムがない、つまり社会や経済の構造に問題があるから。構造に働きかける必要がある。

(2) バックキャストイング

バックキャストイングでビジョンを描く。最初に将来の理想像 (ビジョン) を描き、その目標を達成するためにより効果的な方法を考え、実行するやり方。

(3) 持続可能な社会を考えるときの枠組み

① ナチュラル・ステップ

システム条件①

自然の中で地殻から掘り出した物質の濃度が増え続けない

システム条件②

自然の中で人間社会のつくり出した物質の濃度が増え続けない。

システム条件③

自然が物理的な方法で劣化しない。

システム条件④

人々が自らの基本的ニーズを満たそうとする行動を妨げる状況をつくり出してはならない。

②ハーマン・デイリーの3条件

条件①

再生可能な資源を持続可能な形で利用するには、その資源が再生するペースを超えてはならない。

条件②

再生不可能な資源を持続的な形で利用するには、その再生不可能な資源に代わりうる、再生可能な資源が開発されるペースを上回ってはならない。

条件③

汚染物質を持続可能な形で排出するには、自然や環境がそうした汚染物質を循環し、吸収し、無害化できるペースを超えてはならない。

4. 「本当に大事なこと」を考える

- ・ 「奨励すべき成長」と「抑えるべき成長」を区別する。
- ・ デカップリングの発想：
幸せや満足は増やしつつ、資源・エネルギー消費量や二酸化炭素排出量はできるだけ抑えていく。
- ・ 経済成長と環境の切り離しは可能。

(2・3) GDPとGPI、GNH

GDP：市場で取引された経済活動←幸せにつながるかどうかは関係ない

GPI：幸せにつながるものを足して、幸せにつながらないものを引いた「真の進歩指標」

GNH：国民総幸福「環境保全」「文化保存」「良い統治」「公正な社会経済発展」

- ①生活水準、②健康、③心理的・主観的幸福、④教育、⑤生態系と環境、⑥コミュニティの活力、⑦バランスのよい生活時間活用、⑧文化の活力と多様性、⑨良い統治

(4) ハーマン・デイリーのピラミッド

- ・ モノが究極の目的ではなくて、幸せになるために生きています。
- ・ 現在の社会・経済は「究極の手段」である自然資本や「究極の目的」である幸せを見失っている。

5. 私たちにできること

6. 望ましい未来をつくろう

協議内容

1. 根本的な問題とは何だろう

- ・ 「より楽に、より快適に」が多様な問題を発生させる。自分の行動の影響を知ることが大切。
例 ファーストフード → 飽食・不健康
→ 大量廃棄・エネルギー
- ・ 産業化がエネルギー問題や温暖化の引き金になっている。
- ・ すべてはエネルギー問題に収斂するのではないか
資源開発も消費も廃棄も結局はエネルギーなしには行うことができない。大量化は消費エネルギーの拡大をもたらす。
- ・ 学校教育では、消費行動に関する学びがポイントになる。
消費を「正気の消費」と「狂気（あおられた）の消費」に分けて考える。

2. 環境への影響を指導する難しさ

- ・ これまで3Rを指導してきたが、これからは2Rだ。（リユースとリデュース）
- ・ 分別収集についても、変わってきている。例えば桜井市は、プラスチックと生ゴミを一緒に焼却処分するようになった。生ゴミだけだと、消費燃料（エネルギー）量が多くなるため。
- ・ エコキャップのジレンマ
 - ▼ エコキャップを企業に持っていくのにエネルギーを消費する。そのまま捨てた方が、本当は環境によいのではないか？
エコキャップがなぜ環境によいのかをわからずにしている。
→ エコキャップが再生されると言うよりは、エコキャップに取り組む人は、キャップとラベルとペットをわける。これが分別収集につながる。
→ エコキャップは企業によるCSRのひとつ。
 - ▼ 環境によいことか、影響のないことか、環境に悪影響を与えるものであるかの判断が、素人には難しい。子どもに指導することに困難を感じる。
- ESDは一方向的に内容を伝えると言うよりは、教員と子どもが一緒に探求するというスタイルで学びを進める。知らないから指導しないではなく、これを機会に一緒に学ぼうという教員の姿勢の転換がポイント。
- ESDの役割は、環境に配慮した社会・経済活動が当たり前になるような文化（社会的価値観）をつくり出していくこと。

3. 行動化について

- ・ エネルギーのムダになることはすぐにやめるよう指導できるが、「～をやめる」「がまん」では続かない。それを子どもに求めることは難しい。
- ・ 行動したくなるインパクトが必要だ。それには、当事者意識の育成と事実を知ることが大切。
- ・ 地域の環境課題を把握し、授業を通して行動化していく。そのためには、教育現場と行政に連携は重要だ。
- ・ 自然の応じた暮らし方は環境にもいいし、健康にもいい。
- ・ 気づく力が大切。
- ・ 環境にいいことをすると気分がいいという感性も重要。
- ・ 行動化にはライフスタイルの変革といった個人レベルと集団のレベルがある。集団レベルの行動

化は、地域の環境課題を取り扱い、当事者意識を育てることで、環境に良い町づくりに参加参画する態度を育てる。そのために、授業の中で体験的に行動することで「行動モデル」を体験させる。

○ 地域から県へ、そして国・地球へと串刺しにするような学習をつくりたい。

4. その他

- ・ 林業について

日本の農業の特色は兼業である。農業機械を農業以外の収入で購入することが正しい。だから、兼業農家は強い。同じように中山間地においては兼業林家を考える。林業の機械は林業以外の収入で購入する。

- ・ エコなら 環境基本計画・白書を出している。
- ・ なーら 環境に関するひとつの物差しになる。(子どもにわかりやすい)
- ・ WWJのエコロジカルフットプリントのキット
エネルギー換算の視点
これを参考に奈良のキットを作成する。
作成チーム：河野先生、松浦先生、中澤哲也君
- ・ 企業のCO2排出量は減っているが、民生部門は逆に増えている。

次回は10月11日(金) 18時30分からです。

内容

- (1) 奈良県の環境課題について (芳川係長)
- (2) 第7章 多文化社会の異文化間コミュニケーション (松浦先生)

お忙しいとは思いますが、よろしくお願ひします。

平成 25 年度奈良教育大学 E S D 連続セミナー第 5 回概要報告

1. 開催日時 平成 25 年 10 月 11 日（金）6:30—9:00

2. 参加者数 22 名

3. 内容

奈良県の環境課題についての情報提供

奈良県環境政策課 芳川係長、長尾さん

資料：「奈良県の環境政策 2013」（奈良県景観・環境局）、

「エコな〜ら大作戦」（奈良県ストップ温暖化県民会議／奈良県）

(1) 我が国における環境問題の背景

近代化が環境問題の原因

①大気汚染／水質汚濁、廃棄物／地球温暖化

- ・ 鉱工業の発展に伴い、鉱毒や水質汚濁の問題が生じた。足尾銅山等
- ・ 石炭や石油を燃料とした、戦後の高度経済成長期の工業化により大気汚染が引き起こされた。
- ・ いわゆる公害だが、公害は特定の発生源・特定の被害という特色がある。
- ・ その後、濃度規制と排出規制により改善される
- ・ 現在は地球規模の環境問題が中心となっており、その特浴は不特定多数の発生源・不特定多数の被害である。

(2) 奈良県の環境汚染の現状

①大気汚染（p 7）

- ・ 二酸化硫黄濃度の経年変化：1975・77 は高いが、その後は全国平均と同じ傾向。
0.004ppm 程度で推移
- ・ 二酸化窒素濃度の経年変化：だいたい全国平均を下回る状況
0.01ppm 程度
- ・ 一酸化炭素濃度の経年変化：全国平均並み
0.02ppm 程度
- ・ 光化学オキシダント濃度の経年変化：全国平均を下回るものの基準達成率は 0 %
0.03ppm 1 時間平均で 0.12ppm に達すると環境課が注意報を出す。
自動車等、物を燃やすと出る。(NO₂ が原因)
- ・ 浮遊粒子状物質濃度の経年変化：全国平均並み、50%の達成率（黄砂の影響もある）
0.02mg/m³程度 特にブラックカーボン熱を吸収するため、温暖化の要因と言われている
- ・ 微小粒子状物質（PM_{2.5}）濃度の経年変化：都市部並み
17.7ug/m³ 達成率 20~30% 現在のところ科学的知見がなく対策なし

※ 光化学オキシダント濃度は全国的に漸増傾向

② 水質汚濁（p 14）

- ・ 国交省河川汚染ランキングと BOD（平成 23 年）
大和川はワースト 3 位（24 年度は 4 位）
吉野川で 100 位ほど。ただし、ワースト 5 位までは、BOD の数値が特に高く、それ以下と差がある。
- ・ 大和川の水質汚濁について

水量減が一つの要因。大和川の半分は浄化センターからの排水である。大和川の水質（BOD値）は改善されてきている。また、下水道整備率も80%と高くなってきている。浄化センターの能力をあげることで、大和川の水質が改善される見込みが大きい。

大和川の水質改善率は1位～2位と高い。

大和川水質マップ（HPあり）で、各地のBOD値を知ることができる。（授業に使える）
BOD（生物）、COD（化学）

※ 家庭からの排水の2/3は台所等からの雑排水、1/3がトイレからの排水。浄化槽の適正な維持管理（検査・点検・清掃）で水質改善が見込めるが、現在のところ実施率は10%程度と低い。

水質評価（BOD）と流域住民が感じている汚染度に感覚的なずれがある。新たな評価指標が必要。

大きく水全体の循環を見て、健全な水循環ビジョンを構築する。

③ 廃棄物処理（p18）

- ・ 一般廃棄物（家庭・オフィス）の処理状況

1人1日当たりのごみ排出量 全国平均：976g 奈良県：932g（全国15位）

総排出量は徐々に少なくなっているが、生活系ごみが多いという状況。

リサイクル率は全国平均20.8%に対し、奈良県は14.1%であり、45位である。奈良県のリサイクル率が低い原因として、①県民のリサイクルへの意識が低い、②分別数が少ない、というのがあげられる。

- ・ 産業廃棄物の処理状況

奈良県の産業廃棄物の排出量は少ない。総量としては全国一少ない。

産業廃棄物のリサイクル率は、全国（48.3%）に対し、53%である。奈良県の産業廃棄物の内訳では、下水汚泥が42%（22年度）と高く、下水汚泥のリサイクルが困難であるのが一つの要因である。

汚泥を発酵させ、発生したメタンガスを汚泥を燃やす燃料として活用するバイオエネルギーの活用も行っている。汚泥を燃やすことで、埋め立てる量を減らすことができる。

※ 一般廃棄物の総量を減らす。そのためには、3Rから2Rへ、「ゴミになるものは買わない、もらわない」という県民の意識を変えていく必要がある。ここは授業化するに値する。

3Rから2Rへをテーマとした授業開発が求められる。

産業廃棄物では最終処分率を全国平均の水準まで引き上げていく必要があるが、奈良県は多品種少量生産の中小企業が多く、お金がかかるリサイクルを実施しにくいという原因もある。

④ 地球温暖化（p21）

- ・ 過去100年間で世界平均気温が0.74度上昇。氷河の後退、世界各地での異常気象の頻発（大雨、干ばつ、熱波など）、20世紀中に平均海面水位は17cm上昇。
- ・ IPCC第5次報告書において、温暖化の原因が人間活動であることの確率は95%以上と指摘された。
- ・ 自然が吸収できる（無害化できる）二酸化炭素量は31億トンであるのに対して、人為的排出量は72億トンである。産業革命前の大気中の二酸化炭素濃度は280ppmであったが、現在は380ppmであり、年1.9ppm（1995～2005平均）増加している。

- ・ 奈良県の温暖化の現状

50年間で1℃程度上昇している。

ソメイヨシノの開花は1954年以降の50年間で約6日早まり、イロハカエデの紅葉は約19日遅くなっている。

1954年以降10年あたりで、平均気温で0.19℃、最高気温で0.2℃、最低気温で0.14℃上昇している。

1980年代後半から気温が高い年が増加している。

ゲリラ豪雨も増えている。

- ・ 部門別エネルギー起源 CO2 排出状況

奈良県は家庭部門の占める割合が29パーセントと高い。1世帯あたりの電気の使用量も、全国平均と比べて高い。(エネルギー使用の半分は電気)。家庭での取組が重要。

低炭素社会に向けて、①再生可能エネルギー等の普及促進、②省エネ・節電の促進が求められる。(太陽光パネルの設置、自然エネルギーを増やす、森林の保全)

※ここも児童にとって身近なところでの授業開発が可能。

【エコな～ら大作戦】

奈良県では、住宅用柱が一本取れるような吉野杉が、1年間に吸収する二酸化炭素量を1な～らとして、二酸化炭素排出量の見える化を図っている。

1な～ら=6.55 kg CO₂

県民目標はマイナス10% 世帯当たり285 kgなので45な～らの削減が目標。

※な～らは、わかりやすい単位で見える化ができる。例えば、通勤(奈良-天理)を週1回マイカーから公共交通に変えると年間28な～らの削減になる。年52週あるとすれば、

$28 \text{ な～ら} \div 52 \text{ 週} = 0.54 \text{ な～ら}$ つまり1回あたり0.54な～らの削減というように、わかりやすい。このように1年間で〇な～らではなく、もっとわかりやすい表示にして、授業化したい。

このセミナーでな～らを使った授業開発を行いたい。

次回は11月12日(火)午後6時30分から国際交流室です。

芳川係長から配布いただいた「奈良県の環境政策 2013」(奈良県景観・環境局)、及び長尾様から配布いただいた「エコな～ら大作戦」(奈良県ストップ温暖化県民会議/奈良県)を持参ください。

中澤から配布させていただきました、エコロジカルフットプリントもお願いします。

平成 25 年度奈良教育大学 E S D 連続セミナー第 6 回概要報告

1. 開催日時 平成 25 年 11 月 12 日（火）6:30—9:00

2. 参加者数 16 名

3. 内容

奈良県の環境課題についての情報提供（2）

奈良県環境政策課 芳川係長、長尾さん

資料：「奈良県の環境政策 2013」（奈良県景観・環境局）、

「エコな〜ら大作戦」（奈良県ストップ温暖化県民会議／奈良県）

（1）奈良県における環境政策について

基本的な考え方

「豊かな自然と、優れた歴史との共生、美しい景観と持続可能なくらしの創世」

重点施策

- ① 景観の保全と創造（歴史的景観、田園里山景観、都市・自然景観）
- ② 清流の保全と復活（水質維持・改善、やすらぎの水辺空間整備等）
- ③ 低炭素社会の実現（発生抑制、再エネ活用、吸収源整備、大気環境等）
- ④ 循環型社会の構築（ごみゼロ奈良、生活環境の保全）
- ⑤ 生物多様性の保全（生物多様性の保全）

（2）景観の保全と創造

①奈良県景観資産（平成 23 年度から）

県民の推薦から奈良県景観資産を増やしていく施策

23 年度 「四神八景」 32 地点

○奈良市内

奈良奥山ドライブウェイ、二月堂、若草山中腹、鷺池、第二次大極殿跡、大池、白毫寺

24 年度 「記紀・万葉」 22 地点

○奈良市内

県庁屋上、大仏池、垂仁天皇陵、県立図書情報館、春日野園地

※ 総合的な学習の時間の学習等において、取り組み、応募することができる。

②奈良県景観住民協定

地域住民・事業者が景観づくりのために自主的なルールづくりとそのための取組を認定する。

公的空間における花壇の整備、維持管理、等

（3）清流の保全と復活

①生活雑排水の改善が清流復活のポイント

- ・ 天ぷら油を回収し、石けんをつくる N P O の活動
- ・ アクリルたわしを作って配布することで、洗剤の使用量を減らす

②大和川清流復活ネットワーク

行政と民間団体、企業による清流復活プロジェクト

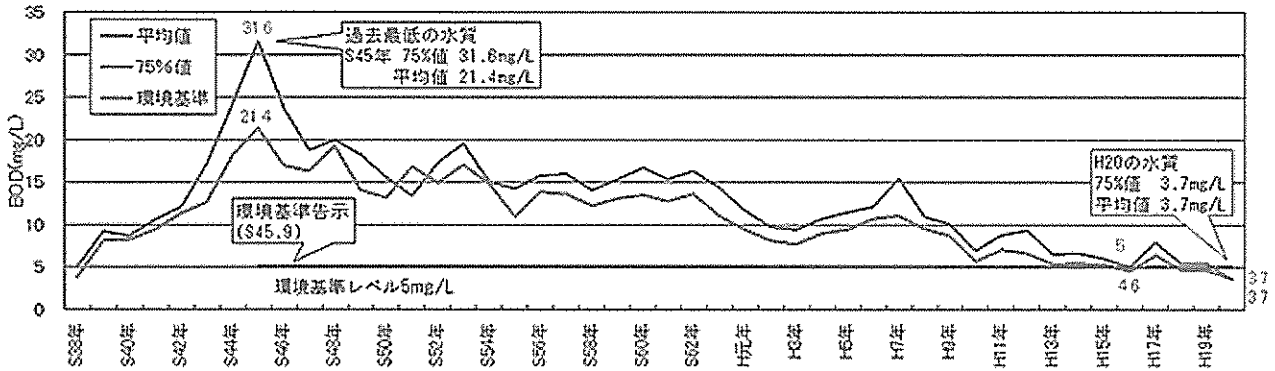
大和川の特徴

- ・ 降水量が少ない
- ・ 山地が少ない（流域に占める産地面積は約 40%）
- ・ 都市化が進展（流域に、県人口の約 90%（約 126 万人）が集中）

○ 平常水量が少ないためもともと水質が悪化しやすい。

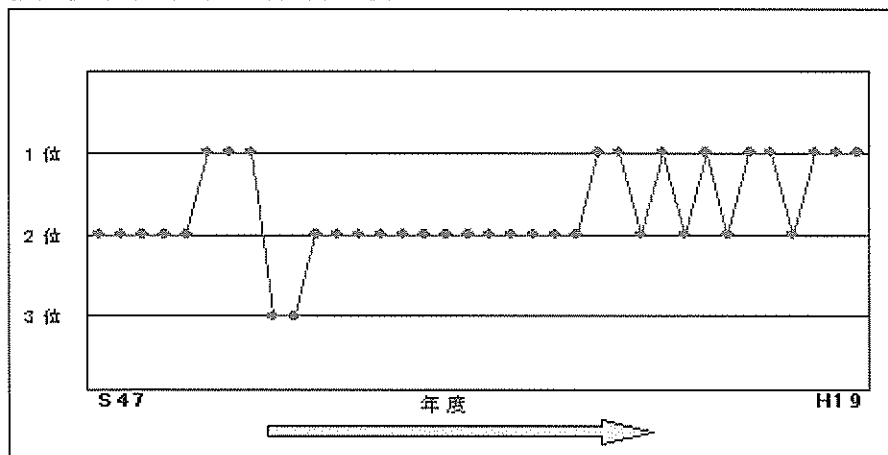
大和川の水質は年々改善されつつある。

大和川のBOD経年変化（大和川本川8地点のデータより）



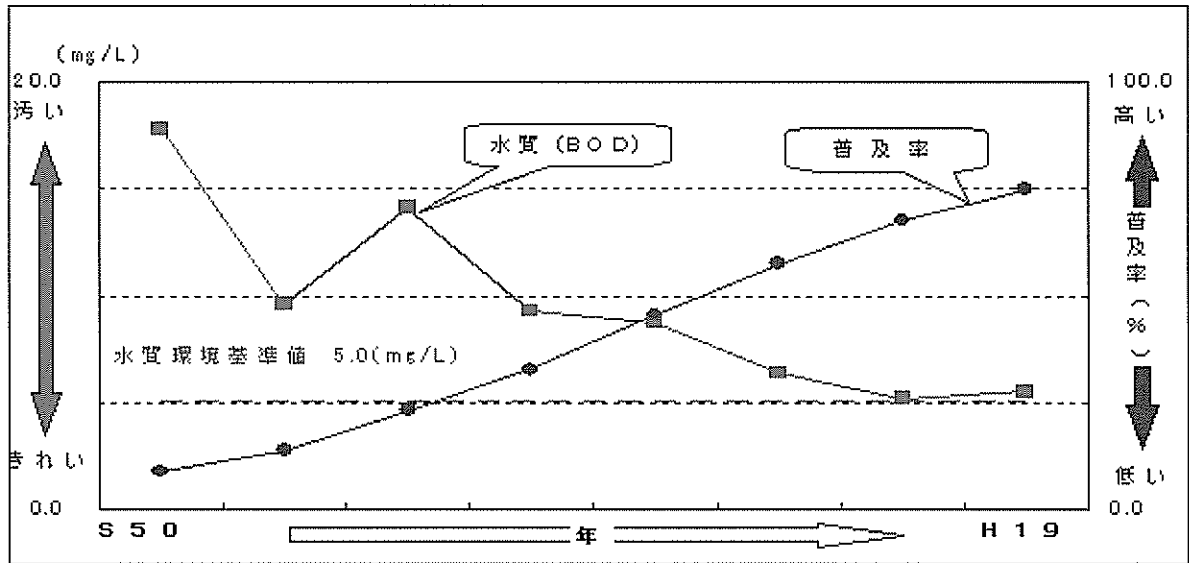
昭和 47 年以来現在まで全国 1 級河川中ワースト 3 位までにランクされ続け、近年 3 ヶ年は連続ワースト 1 である。

【図 1】 大和川のワースト順位の変遷



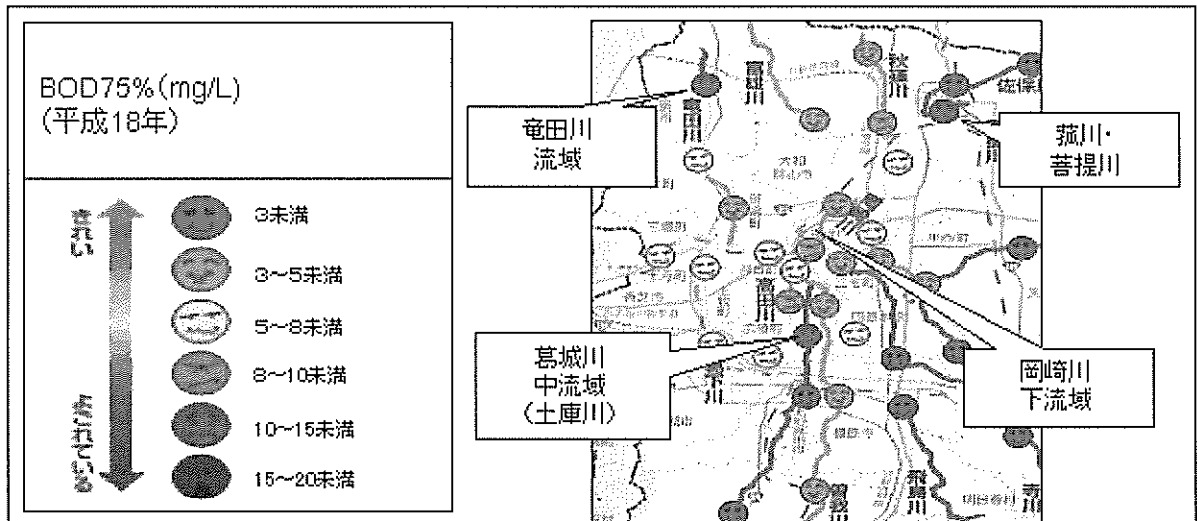
下水道の普及とともに年々水質は改善傾向にある。

【図2】 下水道の普及と大和川の水質の推移



支川の中には水質の改善が進まないところが見受けられる。

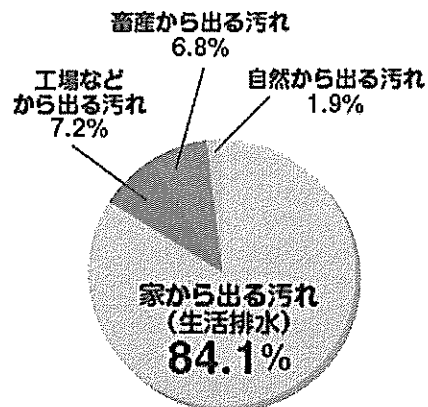
【図3】 大和川支川の水質



大和川水系の汚濁の原因

住民への生活排水対策啓発活動が必要

※このあたり、授業化できる。



【図4】 大和川の汚濁原因内訳(平成14年度データ)

(4) 低炭素社会の実現

奈良県エネルギービジョン

基本方針

- ① 多様な再生可能エネルギー等の普及拡大
- ② 奈良の省エネ・節電スタイルを推進
- ③ 緊急時のエネルギー対策を推進
- ④ エネルギーで地域振興

○エネルギーの自給自足を目指すためには、

- ・ エネルギー使用量の節約
- ・ 再生可能エネルギーの推進
- ・ 災害時のエネルギー対策 の③方面から考える必要がある。

○目標

発電：再生可能エネルギー設備容量を 22 年度比 2.7 倍

57,481 kW (14,000 軒分 (2%) → 155,497 kW (388,000 軒分 (70%))

1 軒 1 年間の使用電力量 約 4,000 kW

太陽光発電設置者に対する補助金制度

24 年度 10 万円×1,000 軒

25 年度 8 万円×1,500 軒

節電：22 年度比 5%削減を 27 年度まで維持 10%程度達成

○多様な再生可能エネルギー等の普及拡大

太陽光発電で 1 メガ発電するには、1.5 ヘクタールの設置場所が必要。

風力：奈良県は適地がない

地熱：70℃以上の温度が必要。奈良県の適地は十津川村だけ

(5) 循環型社会の構築

奈良県ゴミの組成

紙類 (50%弱)、生ゴミ (20%)、プラスチック類 (20%)

一般廃棄物 (家庭・オフィス) での数値目標

一人あたりの排出量を 920 グラム/1 日 (23 年度) から 870 グラム/1 日に削減

−50 グラムのために

- ・ ゴミになるものをもらわない
- ・ 食べ残しをしない

最終処分場について

奈良県のゴミの最終処分場は大阪フェニックスセンターだが、あと 10 年で満杯になる。

2 R の推進の重要性

(6) 生物多様性の保全

ミレニアム生態系評価によれば、人間は過去の平均的な絶滅スピードをおよそ 100~1,000 倍に加速しているとされる。

生物多様性の危機の4つの原因

- ①開発や捕獲・採取による危機
- ②自然に対する働きかけの縮小による危機
- ③人間により持ち込まれたもの（外来種、化学物質）による危機
- ④地球温暖化による危機

※奈良県エネルギービジョンに関わり、奈良県の節電スタイルについて協議した。

「家族団らん奈良タイム」（吉村先生案）など、子どもたちに考えさせることが、環境に配慮する子どもの育成につながると思われる。

2回に渡って芳川係長、長尾様においでいただき、奈良県の環境課題や環境政策について情報提供をいただきました。ありがとうございました。

次回は、12月3日（火）18時30分です。奈良市立東市小学校の菜の花プロジェクトについて情報提供いただく予定です。

平成 25 年度奈良教育大学 E S D 連続セミナー第 7 回概要報告

1. 開催日時 平成 25 年 12 月 03 日 (火) 6:30-9:00
2. 参加者数 17 名
3. 内容

奈良市の環境教育についての情報提供

奈良市環境政策課 課長補佐 油谷彰浩氏、
係長 杉本宜弘氏

資料：「奈良市の環境（こども版）平成 24 年度版」（奈良市環境政策課）

「E C O キッズ！ならの子どもプログラム」

「エコロジカル・フットプリントって？」

(1) 奈良市における環境教育について

2 年前に「：「奈良市の環境（こども版）」を作成し、市立小学校に 1 冊ずつ配布すると共にダウンロードできるようになっている。

<http://www.city.nara.lg.jp/www/contents/1362704757182/files/kodomo24.pdf>

また、すべての市立小学校 3 年生に出前授業を行い、環境への関心を高める取組を実施している。

① 水質汚濁について

- ・ 大和川の汚濁原因のうち、生活排水は 77% を占める。また生活排水の発生場所としては、台所と風呂がほとんど。
- ・ 下水道の整備により、佐保川・秋篠川・富雄川はきれいになってきた。
- ・ 家庭でできること
食べ物を残さない、風呂の排水口にネットを取り付ける、アクリルタワシを使用して洗剤の量を減らす、ゴミを流さない、食用油を流さない 等

② 地球温暖化について

- ・ 二酸化炭素排出量の削減が必須であるが、奈良市の場合、二酸化炭素排出割合（平成 20 年度）から、民生・家庭部門の占める割合が大きいので、家庭での二酸化炭素排出量の削減の持つ意味は大きい。

	産業	家庭	学校・病院・会社	自動車・鉄道
国	39.5	16.1	22.2	22.2
奈良県	21.0	28.1	20.6	30.3
奈良市	14.7	27.9	30.8	26.6

- ・ 冬の節電について 夏のエアコン使用に比べて、冬のエアコンによる電力使用量は大きい。
- ・ 冬は 3.8% の節電を目標にしている。
- ・ L E D の効果について L E D は使用電力量を 1 / 7 に削減することができる。
- ・ 補助金制度について
家庭対象 : 太陽光発電、雨水タンクの設置
商店街対象 : L E D 照明の導入
会社対象 : 電気自動車の充電設備の設置
- ・ グリーンカーテンの普及 ゴーヤのグリーンカーテン

- ・ 打ち水大作戦 水が蒸発するときの気化熱で、地面の温度を下げる
(ただし、ふろの残り湯や雨水をつかうこと)

③ 循環型社会の構築

- ・ 奈良市の年間ゴミ排出量 約 10 万 4,000 t (60%が家庭から出るゴミ)
- ・ 燃やせるゴミ → 焼却 エネルギー資源の利用・二酸化炭素の排出
- 燃やせないゴミ → 埋め立て 埋立地がなくなっている
- 資源ごみ → リサイクル 分別できていることが条件
- ゴミの量を減らすことが重要

i) リデュース unnecessaryなものは買わない、残さずご飯を食べる

ii) リユース 繰り返し使う

リユース瓶入り大和茶「と、わ(ToWA)」の販売 県庁、市役所、生駒市役所の売店
デポジット(預かり金、上乗せ金 容器の返却で預り金は戻される)制度の活用

iii) リサイクル 資源として再生利用する

④ エコロジカル・フットプリント 診断クイズ

(2) 東市小学校の菜の花プロジェクト

① 年間計画

10月 5年生と幼稚園児による種まき

11月 間引き(地域の人たち)

5月 刈取って、干す(6年)

6月 乾燥した菜種を踏む

油を搾る

油粕は肥料に

すす実験 → 握り墨体験 → 習字

5・6年生の家庭科・調理実習

5年生が世界遺産学習で現地見学の時に油を春日大社・興福寺に奉納

10月 5年生と幼稚園児による種まき

② 菜の花プロジェクトについて

- ・ 今年で4年目の取組
- ・ 地域連携(菜の花ボランティア): 下ごしらえなど
- ・ NPOとの連携: 黒飛さん
- ・ 校内に120~130株を植え、子どもが毎日水やりなどの世話をする。
- ・ 社寺での灯明にまつわる世界平和の話
- ・ 入学式に菜の花が開化する。

1. 開催日時 平成 26 年 1 月 21 日 (火) 6:30-9:30
2. 参加者数 19 名
3. 内容

(1) ESD で育てたい価値観について

ESD 実施計画における我が国が優先的に取り組むべき課題

- ① 社会経済システムに環境配慮を織り込んでいくこと
- ② 人権や文化等に対する配慮を織り込んでいくこと

ESD 国際実施計画案 (2005. 1)

- ① 人と環境との関係に関すること 自然環境が自ら再生する役割を果たすこと
- ② 人と人との関係に関すること 平和裏に人々が共存することを達成すること

ESD 国際実施計画案：価値観の基礎に含まれるもの

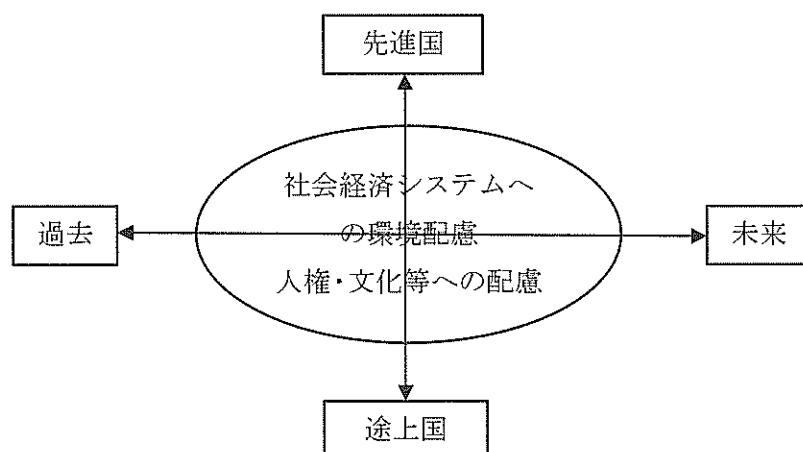
- ① 世界中のすべての人々の尊厳としての権利を尊重し、すべての人々のための社会的・経済的な公平さにコミットすること
- ② 将来の世代の人々の権利を尊重し、世代間の責任にコミットすること
- ③ 地球のエコシステムの保護と回復を含む多様性に富んだより大きな生命の共同体に対する尊重と思いやり
- ④ 文化的な多様性を尊重し、寛大で非暴力、平和な文化を地方においても地球レベルにおいても作ることにコミットすること。

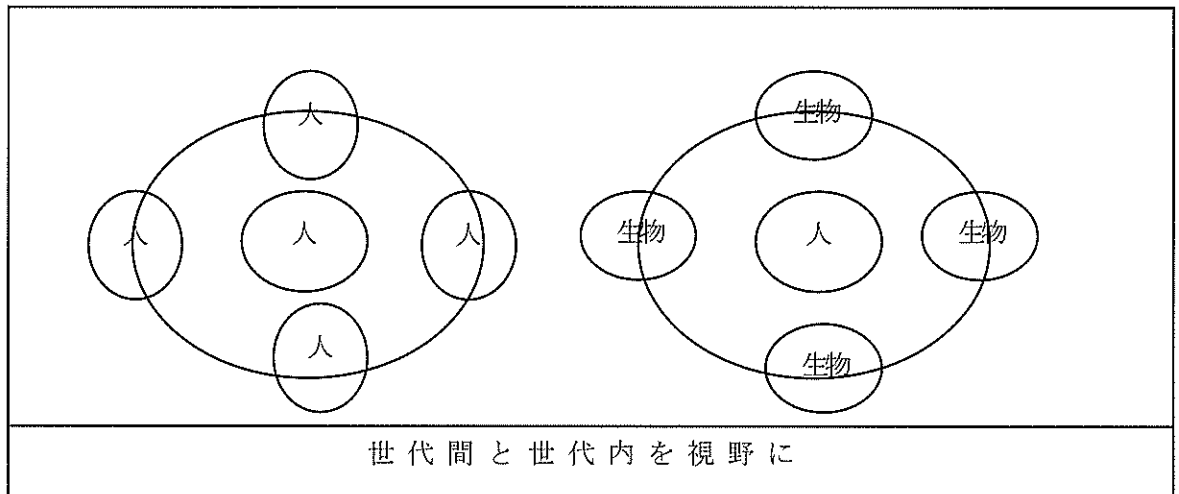
1987 年ブルントラント委員会

持続可能な開発とは、将来世代のニーズを満たしつつ、現在の世代のニーズをも満足させるような開発 (世代間の公正と世代内の公正)

以上のまとめ

ESD で育てたい価値観とは、「世代内だけでなく世代間も対象として、社会経済システムに環境配慮を織り込んだり、人権や文化等に対する配慮を織り込んだりすることができる価値観」





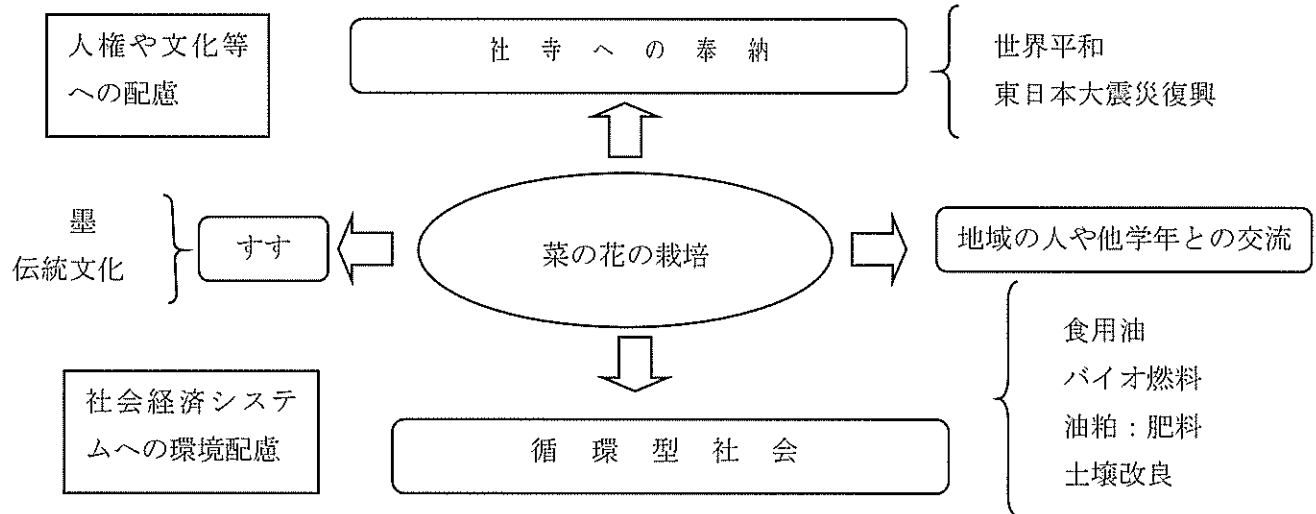
人を取り巻く「人」と「生物」の共通点は「いのち」

以上のまとめ

ESD で育てたい価値観は「世代間と世代内を視野にいのちがつながっていることに気がつくだけでなく、能動的につなげようとする（行動の変革）価値観。」

ESD のキーワード ESD とは「いのちをつなげる教育」

(2) 鼓阪北小学校の菜の花プロジェクトの紹介と東市小学校の菜の花プロジェクト



(3) 平成 25 年度近畿「ESD 環境教育プログラム」

開催日時：平成 26 年 2 月 23 日（日）14 時～16 時 30 分

会場：グランフロント大阪 カンファレンスルーム タワーC03

内容：近畿 2 府 4 県の ESD の実践報告（7 分×6）

会場参加型パネルディスカッション（60 分）

(4) 環境省「ESDの視点を取り入れた環境教育プログラム」への応募内容

応募団体：奈良教育大学ESD連続セミナー

実践担当：奈良市立飛鳥小学校 教諭 松浦慎

実践名称：飛鳥スマイルキッズ2013

ポイント① 連続セミナーで知り合った奈良県環境政策課の芳川係長・長尾さんをゲストティーチャーに招いて、奈良県の取組を直接聞いたこと。

② 飛鳥版環境「エコな〜ら」の作成に挑戦すること。

③ 環境配慮と人権・文化等への配慮の両方のコースが用意されていること

環境配慮 : エコ環境コース

人権・文化配慮 : ピースボランティアコース、地域発信コース

(5) 25年度の実践事例作成に当たっての様式について

項目の見直し

- ① (2)単元の概要に(3)ESDの視点も盛り込む。その際、「自然の摂理により土地そのものが変化する可能性のあること(有限性)」といったように、(構成概念〇〇)は残す。
- ② (3)ESDの視点の明確化は後半部分の【持続可能な社会づくりの構成概念】の箇条書きだけを残す。その際、文末にある【有限】等は削除する。
- ③ (4)留意事項は全面的に削除
- ④ 単元の目標はこれまで通り
- ⑤ 評価規準は

関連 関心・意欲・態度	未来 思考・判断・表現	参加 技能	多面 知識・理解

といったように、評価項目を2段にする。

鼓阪北小学校の村田先生、門城先生、ご報告ありがとうございました。

次回は、2月20日(木)18時30分~です。

※先生方は、作成された実践事例を持ち寄ってください。意見交流会をします。

※小島教頭先生は、23日に発表されるパワポをご持参ください。小島教頭先生のパワポ・配布資料、中澤の配布資料の締め切りは2月13日ですので、1月31日(金)午後に東市小学校にお伺いしますので、作成することにしましょう。(時間はいつでも結構です。ご連絡ください)

【ご案内】

※ 1月26日(日)14時~ 教育大学大会議室 世界遺産教育講演会Ⅲがあり、ESDカレンダーを発案された八名川小学校の手島校長先生が来られます。ぜひ、ご参加ください。

※ 2月15日(土)奈良教育大学ESD学会を開催。10時~が大西先生も登壇されるシンポです。

平成 25 年度奈良教育大学 ESD 連続セミナー第 9 回概要報告

1. 開催日時 平成 26 年 2 月 20 日 (木) 6:30-10:00

2. 参加者数 15 名

3. 内容

(1) 地域を舞台にした「ESD:いのちをつなげる教育」フォーラムにおける、奈良市立東市小学校、
鼓阪北小学校の発表内容の検討

発表者：東市小学校小島教頭先生

- ・ 菜の花プロジェクトの ESD カレンダーが作成されているのがよかった。環境教育として始めたものが、ESD に変化していったことがイメージできるように、完成版の ESD カレンダーではなく、環境教育のカレンダーから、徐々に各教科、世界遺産学習、伝統工芸等へと広がっていったのがわかるようなつくりになると、さらによいと思われる。

(2) 本年度に開発した ESD 教材 (指導案) の紹介と検討

① 奈良市立朱雀小学校 山方貴順

広島お好み焼きから原爆がみえる ～広島お好み焼きから始める修学旅行事前学習～

② 奈良教育大学 北村恭康

布施城跡から文化遺産を考えよう

③ 天理市立前栽小学校 小西慶子

新しい里海をつくろう

④ 奈良市立佐保小学校 吉村泰典

景観か生活科!? 鞆の浦バイパス建設問題

⑤ 天理市立櫛本小学校 福住 裕樹

四万十川から学び、再生しよう大和川

⑥ 生駒市立生駒東小学校

郷土料理の良さを再発見 ～長野県の昆虫食・鯉料理を手がかりとして～

⑦ 奈良教育大学 3 回生 後藤田洋介

放射線マップからリスクを考えよう

※次回について

次回は、3 月 6 日 (木) 18 時 30 分～ 国際交流室で開催します。最終回です。

今回ご報告いただいた①～⑦の実践につきましては、修正のうえ、USB で持参ください。

次回は、中澤哲也君、大田先生、松浦・三木先生、河野先生、二階堂君、渡邊君、大西先生、中澤の指導案の検討をお願いします。

平成 25 年度奈良教育大学 E S D 連続セミナー第 10 回概要報告

1. 開催日時 平成 26 年 3 月 6 日 (木) 6:30—10:00

2. 参加者数 15 名

3. 内容

(1) 地域を舞台にした「E S D : いのちをつなげる教育」フォーラムの報告

6 府県の実践事例について

地区・学校	学習内容	体験的な活動・他教科関連
京都 嵯峨中学校	環境課題を切り口に地域の歴史・文化の理解、環境保全と観光(経済)	オオカナダモの駆除作業、土産物商品開発、嵯峨中パレード
大阪 西鳥取小学校	西鳥の海の環境保全、食文化、地域産業理解	アマモ栽培、海藻おしばづくり
兵庫 西山小学校	ミヤマアカネを通じた生物と人、生物同士のつながり、河川環境と人間生活	ミヤマアカネ・リサーチ表・グラフ作成
奈良 東市小学校・鼓阪北小学校	菜の花を通じた自然環境、循環型社会の理解、文化遺産・平和教育	菜の花栽培、握り墨体験調理実習、書写
和歌山 みはま支援学校	川・海の生物観察を通じた生物への理解、生物環境と人間生活の関わり	川での水生生物の採取、海辺での生物採取、文化祭展示・発表
滋賀 渋川小学校	地域の生物調査に基づく生き物絵図作成、心象絵図による地域文化理解	生きもの調査、アオバナ栽培

各府県の実践事例の共通点は、地域の教材化・地域での活動、体験的な活動の重視、自然環境だけに留まることなく、地域産業・地域文化・地域の文化遺産の理解へと学習が展開されている点である。特に自然と社会を一体的に学んでいるところに、これまでの環境教育と E S D の相違点が見られる。

(2) 本年度に開発した E S D 教材(指導案)の紹介と検討

- ①「古代から現代、そして未来へ・銅で感じる『つながり』」奈良市立富雄第三小中学校 大田清美
- ②「カブトガニを救え！」奈良教育大学教職大学院 教職大学院 2 回生 中澤 哲也
- ③「100 年後の町のために、今やらねばならぬこと」奈良市立済美小学校 大西 浩明
- ④「「天空の城」? 竹田城」奈良市立富雄第三小中学校 河野 晋也
- ⑤「砂丘物語から地域再発見」奈良教育大学 3 回生 二階堂 泰樹
- ⑥「軍艦島って過去のもの？」奈良市立飛鳥小学校 松浦慎・三木恵介
- ⑦「名古屋城から文化遺産を考える」奈良教育大学 中澤 静男

広島お好み焼きから原爆がみえる

～広島お好み焼きから始める修学旅行事前学習～（第6学年）

奈良市立朱雀小学校 山方貴順

- (1) 単元名 「広島お好み焼きから原爆がみえる
～広島お好み焼きから始める修学旅行事前学習～」 小学校第6学年

(2) 単元の概要

本稿では、広島お好み焼き（以下、広島焼き）を切り口にした、修学旅行の事前学習を提案したい。
広島焼きから、原爆や戦後の日本がみえる【多様性】。

まず、材料に目を向ける。広島焼きには、次の特徴がある。①きゃべつやもやし等の野菜が多い。
②小麦粉が少ない。これら2点は、広島焼きが戦後の食糧難の時代に生まれた食べ物であることを物語っている。戦後の日本は、ひどい食糧難に悩まされた。生活に必要な食料の多くは、自由販売ではなく、配給販売の制度がとられた。しかし、配給量は不十分であった。そのため多くの人々は闇市で食料を買い求めた。当時貴重であった米や肉、小麦は普段の何十倍もの金額が必要であった。戦後、広島にお好み焼き屋が最初に誕生したのは1950年頃である。これは、東京より5年、大阪より2年遅れてのことである。遅れた理由は、地方都市である広島では小麦粉の仕入れが難しかったためだと言われている。少ない小麦粉で調理できるため、重ね焼きである広島焼きのスタイルが生まれたのである。後に、広島焼きは、大人も満足できる食事として、麺や卵や肉が加わり、広島名物へと定着した。

次に、店名に目を向ける。広島焼き専門店の店名は「〇〇ちゃん」が非常に多い。多くの広島焼き店が軒を連ねる「広島お好み焼き物語 駅前広場」と「お好み村」の店名は、全39店舗中13店舗が「〇〇ちゃん」であった。この特徴には、複数の説があると言われている。ひとつは、戦争で行方不明になった家族に所在を伝えるためという説である。原爆によって、広島では14万人以上の死者、行方不明者が出た。行方不明になった家族に所在を知らせるため、自分や家族のニックネームを店名にして、奇跡の再会を願ったのである。もうひとつは、家庭に入っている女性が自宅で手軽に始められる商売としてお好み焼き屋を始め、自分のニックネームを店名にしたという説である。この女性は、戦争未亡人が多かったようである。お好み焼き屋は、有りあわせの家財道具を使って始められる簡単な商売であったと言われている。

さらに、広島焼きの店内、特に客席や鉄板、食べ方に目を向ける。関西のお好み焼き店は、4名がけのテーブルの中央に鉄板があり、そのテーブルが複数あるのが一般的である。一方、昔ながらの広島焼き店の多くは、1枚の大きな鉄板があり、それを囲むように客席がある。この大きな鉄板は、店主の調理の場であると同時に、客の皿の役目も果たす。また、客は皿や箸をあまり使わず、ヘラのみで食事をする人が多い。これらの特徴は、スペースや水を省くためのものである。既に述べたように、家庭に入っている女性が開店する際、多くは自宅の空いたスペースをお好み焼き屋とした。そのスペースには限りがあるため、関西風のように、客にお好み焼きを焼かせるだけの場所がなかったであろう。また、戦後復興の時代、水道設備が整っていない屋台では、水は貴重であった。店で使う

道具や洗い物を少しでも減らすために、皿や箸を使わずに、ヘラで食事をするようになったのである。

以上のように、広島焼きの特徴を探ると、どれもが原爆や戦争と関わっていることが分かる。この特徴を切り口に、平和を重んじる児童の育成【責任性】を狙った。

(3) ESDの視点の明確化

【持続可能な社会づくりの構成概念】

構成概念Ⅰ 多様性…身近にあるお好み焼きは原爆や戦争とつながりがあり、関西のものと広島のは、異なるルーツをもっていること。

構成概念Ⅳ 責任性…一人一人が戦争の悲惨さを理解するとともに、心に平和の砦を築き、戦争反対の立場を貫くこと。

2. ESDの視点を生かした授業の実際

(1) 単元の目標 (重視する能力・態度)

能力・態度⑧ 多面的、総合的に考える力…広島焼きと、原爆や戦争のつながりを理解し、関連づけて考えることができる。《多面》

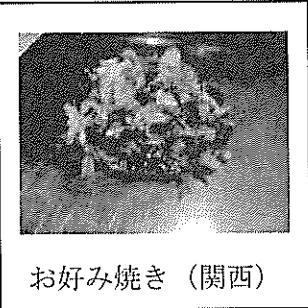

能力・態度④ コミュニケーションを行う力…修学旅行で学習したことを、在校生等に伝えることができる。《伝達》

能力・態度⑥ つながりを尊重する態度…身近にあり、気軽に食べることのできる広島焼きが原爆や戦争とつながっていることを考えることができる。《関連》

(2) 評価規準

関連 関心・意欲・態度	関連・伝達 思考・判断・表現	多面 技能	多面 知識・理解
①広島焼きや原爆、戦争、平和について意欲的に学習している。	①広島焼きを、原爆や戦争と結びつけて考えている。 ②修学旅行で学習したことを、在校生等に適切に伝えている。	①広島焼きと、原爆や戦争のつながりについて情報を集め、読み取っている。	①広島焼きと、原爆や戦争のつながりを理解している。

(3) 単元の計画 (全4時間)

時	主な学習活動と内容	◇教師の支援 ◆主な評価																		
1	<p>1. 都道府県別、1万人あたりのお好み焼き・たこ焼きの店舗数、ベスト3を予想する。</p> <p>2. 都道府県庁所在市別1世帯当たりの年間ソース購入数量を予想する。</p> <p>3. 写真をもとに、これからの学習課題を示す。</p>	<p>◇1位広島県、2位兵庫県、3位大阪府、4位徳島県、5位高知県 ◇お好み焼き屋が多いのは、関西だけでないことを気付かせる。</p> <p>◇1位広島市、2位徳島市、3位神戸市、4位大阪市、5位奈良市 ◇広島においてお好み焼きは、外食だけでなく、家庭でもよく調理されていることを気付かせる。</p> <p>◇関西風と広島風、両方のお好み焼きの写真を示し、興味をもたせる。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>お好み焼き (関西)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>お好み焼き (広島)</p> </div> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-top: 10px;"> <p>広島のお好み焼きには、どんな秘密が隠されているのだろう。</p> </div> <p>◆広島焼きや原爆、戦争、平和について意欲的に学習している。 《関連》</p>																		
2	<p>1. 材料を比較する。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-bottom: 10px;"> <p>広島焼きの材料や作り方にはどんな秘密が隠されているのだろう。</p> </div> <p>◇ソース会社がHPにアップしているレシピ(材料)を比較し、広島風の特徴を挙げさせる。</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 50%;">【関西風2人前】(一部)</th> <th style="width: 50%;">【広島風2人前】(一部)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>小麦粉 80g</td> <td>小麦粉 40g</td> </tr> <tr> <td>きゃべつ 300g</td> <td>きゃべつ 300g</td> </tr> <tr> <td>青ねぎ 10g</td> <td>もやし 60g</td> </tr> <tr> <td>豚バラ肉 80g</td> <td>青ねぎ 10g</td> </tr> <tr> <td>たまご 2個</td> <td>豚バラ肉 80g</td> </tr> <tr> <td>だし汁 100cc</td> <td>たまご 2個</td> </tr> <tr> <td>やまいも 30g</td> <td style="text-align: right;">(筆者下線)</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">(筆者下線)</td> <td></td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> ・小麦粉の量が少ない。 ・もやしが使われる。 ・だし汁や山芋が使われていない。 	【関西風2人前】(一部)	【広島風2人前】(一部)	小麦粉 80g	小麦粉 40g	きゃべつ 300g	きゃべつ 300g	青ねぎ 10g	もやし 60g	豚バラ肉 80g	青ねぎ 10g	たまご 2個	豚バラ肉 80g	だし汁 100cc	たまご 2個	やまいも 30g	(筆者下線)	(筆者下線)	
【関西風2人前】(一部)	【広島風2人前】(一部)																			
小麦粉 80g	小麦粉 40g																			
きゃべつ 300g	きゃべつ 300g																			
青ねぎ 10g	もやし 60g																			
豚バラ肉 80g	青ねぎ 10g																			
たまご 2個	豚バラ肉 80g																			
だし汁 100cc	たまご 2個																			
やまいも 30g	(筆者下線)																			
(筆者下線)																				

2. 作り方を比較する。

◇ソース会社がHPにアップしているレシピ（作り方）を比較し、広島風の特徴を挙げさせる。

【関西風】（一部）

1. だし汁の中に薄力粉、やまいも、野菜等を加え、よく混ぜる。
2. プレートに生地を流し、スプーンの角をつかって約2cmの厚みになるように押し広げて3分焼いた後、上に豚バラ肉を3枚のせる。
3. ひっくり返して、両面焼く。
4. ソースをかけて、青のりをかけて出来上がり。

（筆者下線）

【広島風】（一部）

1. ボウルに水、みりん、薄力粉の順に入れ、よくかき混ぜる。
2. 生地を20cmの大きさに広げます。その上にかつお粉をかけ、キャベツ・ねぎ・もやしの順にのせ、豚バラ肉を3枚縦に並べる。
3. 生地が焼けたら、ひっくり返します。
4. 麺をほぐしながら炒める。
5. お好み焼き（野菜部分）を麺の上のせて押さえる。
6. たまごをお好み焼きの大きさに広げ、お好み焼きをのせて押さえる。
7. たまごが焼けたらひっくり返し、お好みソース・青のりをかけて出来上がり。

（筆者下線）

- ・ 関西は混ぜ焼き、広島は重ね焼きである。
- ・ 小麦粉は、関西は野菜等と混ぜて、広島は薄いクレープ状にして焼く。
- ・ 広島焼きは手順が多い。

3. 広島焼きの小麦粉使用量が少ない理由、野菜が多く使われている理由を探る。

◇次の資料から、終戦後すぐの日本の様子を理解する。



「超満員の買い出し列車」




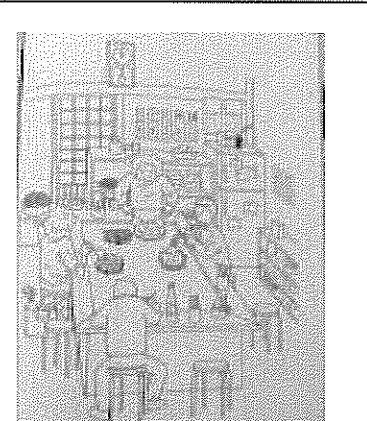
「配給だけでは生きられなかった」

- ・ 戦後の日本には、食料が少なかった。
- ・ 配給制度を取られていたが、それだけでは不十分であった。

◇次の点について、教師から伝える。

- ・ 闇市において、食料は高値で取引されていた。
- ・ 肉は高価であった。
- ・ 小麦粉は、配給すらされなかった。

◆広島焼きと、原爆や戦争のつながりについて情報を集め、読み取っている。《多面》

3	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 広島焼きの店名にはどんな秘密が隠されているのだろう。 </div> <p>1. 広島焼き店の店名を調べる。</p> <p>2. 原爆による死者・行方不明者数を調べる。</p> <p>3. 行方不明者を探す方法について考える。</p> <p>4. 戦争未亡人が、どうやって食べていくことができたのかを考える。</p> <p>◇「広島お好み焼き物語 駅前広場」と「お好み村」の店舗リストを示す。</p> <p>◇全39店舗中13店舗が「〇〇ちゃん」という店名である。</p> <p>◇広島に落とされた原爆による、死者・行方不明者数を示した資料を提示する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">【広島に落とされた原爆による死者・行方不明者数】</p> <p style="text-align: center;">死者・・・・・・・・約8万人</p> <p style="text-align: center;">行方不明者・・・・・・・・約2万人</p> </div> <p>◇多くの死者・行方不明者が出た点、それに伴い多くの未亡人が出た点を押さえる。</p> <p>◇少しでも多くの人々の目にふれるよう、店名に行方不明になった人や家族のニックネームをつけたことに気づかせる。</p> <p>◇道具が多く必要でないため、手軽であったお好み焼き屋を開業した人が多かったことを伝える。</p> <p>◆広島焼きを、原爆や戦争と結びつけて考えている。《関連》</p>
4	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 広島焼き屋の店内にはどんな秘密が隠されているのだろう。 </div> <p>1. 店内の違いを調べる。</p> <p>◇次の写真や絵を比べ、広島の特徴を見つける。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: flex-start;"> <div style="text-align: center;">  <p>お好み焼き屋（関西）の店内</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>お好み焼き屋（広島）の店内</p> </div> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・鉄板は、中央に大きい1枚のみ。 ・同じ鉄板で、店主は調理し、客は食べる。 ・客に用意されているのはヘラのみで、皿や箸は用意されない。

	2. 終戦後の日本の様子を調べる。	<p>◇以下の点をおさえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦時中は、多くの家財道具を供出しなければならなかったこと。 ・終戦後は物資が不足していたこと。 ・店舗を持たず屋台で広島焼きを売っていた店も多くあったこと。 ・屋台では、水道設備が整っていなかったため、水が貴重であったこと。そのため、洗い物を減らす必要があったこと。 <p>◆広島焼きと、原爆や戦争のつながりを理解している。《多面》</p>
修学旅行後		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>広島で学習したことを、下級生に伝えよう。</p> </div> <p>◆修学旅行で学習したことを、在校生等に適切に伝えている。《伝達》</p>

※「広島お好み焼き物語 駅前広場」や「お好み村」では、修学旅行をはじめとした団体客用のメニューや、お好み焼き体験学習も存在する。

参考文献

『広島お好み焼き物語』那須正幹（PHP研究所 2004）

「新しい里海をつくろう」 (第5学年)

1. ESD を生かした授業づくり

(1) 単元名・学校種と学年

「新しい里海をつくろう」 小学校 第5学年

(2) 単元の概要

本単元は、昔から「御食つ国(みけつくに)」(天皇の食糧、神に供える御饌(みけ)を奉る国)と呼ばれ、沿岸漁業と風光明媚な景観を生かした観光業が地域経済の基盤となっている三重県志摩市が取り組んでいる「新しい里海創生」をもとに、社会・経済・自然がつながっていることを知り、持続可能な地域を考えていくことをねらいとしている。

三重県志摩市は、真珠やおおさの養殖などの養殖業、的矢かき、あおりふぐ、アワビ、伊勢海老など海の幸が豊富に採れる地域である。また、森林も豊かで、かつては薪炭の生産も行われていた。山・海・人がつながっている自然豊かな里海である。近年では、「稼げる！学べる！遊べる！新しい里海」を掲げ、持続可能な地域社会創りを目指している。従来の里海という概念だけではなく、観光産業の活性化など稼げるというメリットや、いつまでもその場所に住み続けられるように稼ぐ(生きること)を考えたと上で、自然環境も損なうことなく志摩全体を盛り上げようとしている。

本単元で ESD の視点に立った学習指導を進めるにあたっては、里海は山・海・人がつながりあって守られてきているものであり、その摂理が崩れると成り立たなくなること【相互性】を理解させたい。また、豊かな海の幸をめあてに人間が自分たちの私腹を肥やすためだけに生活すると、限りある海の変化だけでなく、そのわずかな変化が未来の子どもたちに悪影響を及ぼすこと【有限性】を理解させたい。人と海とのバランスが重要であることにも気づいてほしい。

そして、志摩市では、持続可能な沿岸資源を利用するため「稼げる！学べる！遊べる！新しい里海」創りを目指しているが、自分たちの校区でも持続可能なまち創りはできないかと、「前栽ブランド」を考えることにより、自らが主体的に行動する力【責任性】もつけていきたい。

(3) ESD の視点の明確化

【持続可能な社会づくりの構成概念】

構成概念Ⅱ 相互性…山・海・人、それぞれが関わりあっていること

構成概念Ⅲ 有限性…自然は変化すること

構成概念Ⅵ 責任性…「稼げる！学べる！遊べる！新しい里海」を創るためには、「志摩ブランド」を一人一人が主体的に考えて行動すること

2. ESD の視点を生かした授業の実践

(1) 単元の目標 (重視する能力・態度)

《関連》

里海について、人同士のつながり、自分と地域・自然とのつながりに関心を持ち、それらを尊重し、大切にすることができる。 【関心・意欲・態度】

《未来》

里海をさまざまな視点から捉えることで、人の可能性や自然の有限性に気づき、これからの里海に向けて自分ができていることを表現することができる。 【思考・判断・表現】

《参加》

里海に関する情報を集め、自分の発言や行動に責任を持ち、主体的に参加することができる。 【技能】


《多面》

山・海・人のつながりを様々な視点から捉え、人々が協力して「新しい里海」創りに向けて努めていることを理解することができる。 【知識・理解】

(2) 評価規準

《関連》 関心・意欲・態度	《未来》 思考・判断・表現	《参加》 技能	《多面》 知識・理解
①里海について、関心を持ち、意義や人々のつながりを尊重しようとしている。	①里海を多面的、総合的に考えようとしている。 ②「新しい里海」について、自分にできることを考えることができる。	①里海の特徴や人々の関わり、自然の有限性について調べ、自分にできることを実践しようとしている。	①自然の摂理や人々の努力を理解している。

(3) 単元の計画 (総時数 11時間)

時	主な学習活動と内容	◇教師の支援	◆主な評価
	<p>【三重県志摩市の里海について知ろう】</p> <p>○志摩市英虞湾の写真を見て、思うことを出し合う。</p> <p>・景観が美しい ・リアス式海岸 等</p>  <p style="text-align: center;"><英虞湾></p> <p>○「里海」とは何なのか?を知る。</p>	<p>◇英虞湾の写真を見せ、思うことを出させる。(今も美しい景観があることを意識させる)</p> <p>◆里海について関心を持ち、多様な観点から捉えようとしている。 《関連》</p> <p>◇里海について理解させる。</p>	

	<p>○人間も生き物として、その地域に独自の豊かな生態系を育んできたことを知る。</p>	<p>◎里海とは・・・</p> <ul style="list-style-type: none"> ・漁業活動や日々の生活を通じて人と海とが関わりながら豊かな自然環境が保たれてきた沿岸域のこと ・海外でも「SATO-UMI」という <p>◇人もその地域に住むひとつの生き物として他の生き物たちと強くつながることで、栄養の循環に関係し、その地域に独自の豊かな生態系を育んできたことをおさえる。</p>
<p>2</p> <p>3</p> <p>4</p>	<p>【志摩市の里海について学ぼう】</p> <p>○グループに分かれて里海のキーワードを調べ交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生物多様性・・・ 英虞湾周辺には、たくさんの生物がいる。 食物連鎖との関係は？ ・景観・・・ リアス式海岸が美しい。人と海と山が共存している。 ・森林との関わり・・・ 森林は大事な保水機能の役割をしている。 ・干潟について・・・ 干潟が減ってきている。なぜ減少しているのか？干潟再生は必要？ 	<p>◇それぞれが課題を設定し、課題に沿って追究させる。</p> <p>◇多様な生物がいることを理解させる。</p> <p>◇森林で蓄えられた養分が海へ流れ、海へ栄養を与えていることを理解させる。</p> <p>◇干潟は「海のゆりかご」と呼ばれ、たくさんの生き物がいること、また、海の浄化力があることを理解させる。</p> <p>◆自然の摂理や人々が関わって現在の姿があることを理解している。 《多面》</p>
<p>5</p> <p>6</p>	<p>【新しい里海について学ぼう】</p> <p>○「稼げる里海」について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「稼げる」ってどういうことだろう？ →作り育てる漁業など水産業の活性化 →観光業の活性化 <p>○「学べる里海」について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「藻場」って何だ？里海と関係があるのかな。 ・自然を大切にできる人になろう。 	<p>◇「稼ぐこと＝生きること」であることを理解させ、経済の活性化が里海の活性化につながることを知らせる。</p> <p>◇藻は海の中の二酸化炭素や栄養分を吸収し、太陽の光を利用して酸素を作りだしていることを理解させる。</p> <p style="text-align: right;"><養殖場></p>



7	<p>○「遊べる里海」について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然を大切にするのに、遊んでもいいの？ ・自然体験ができるようだ。 	<p>◇海水浴や潮干狩りを通して直接海に触れることで、文化的、精神的に豊かな生活を送ることができることを理解させる。</p> <p>◆新しい里海について多面的、総合的に考えようとしている。 《未来》</p>
8 9 10 11	<p>【志摩ブランドに学ぼう】</p> <p>○学んだ事を基に未来に続く「新しい里海」が大切であることを理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・美しい自然があっておいしい魚が採れること、美しい真珠が育つこと、そのつながりの大切さについて考える。 <p>○「前栽ブランド」を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「持続可能な前栽のまち」を創るため、社会・経済・環境のつながりが重要であることを知り、自分たちが考える「前栽ブランド」をつくる。 <p>○プレゼンテーションをしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考えた「前栽ブランド」をプレゼンテーションする。 	<p>◇志摩の物それぞれが単独ではなく、全てがつながって一つの物となっていることを理解させる。</p> <p>◇社会・経済・環境のつながりの面から、自分たちの校区でも考えられることはないかを考えさせる。</p> <p>◆「前栽ブランド」を考え、伝えようとしている。 《参加》</p>

「景観か生活か！？鞆の浦バイパス建設問題」（第6学年）

奈良市立佐保小学校 吉村 泰典

1. ESDを生かした授業づくり

(1) 単元名・学校種と学年

「景観か生活か！？鞆の浦バイパス建設問題」 小学校第6学年

(2) 単元の概要

本単元では、鞆の浦（広島県福山市）のバイパス架橋建設問題を通して景観と生活、異なる2つの価値観について議論し、持続可能な開発について多面的な考え方を養うことを目的としている。

鞆の浦は広島県福山市鞆地区周辺の港湾及び海域を指す。古代より「潮待ちの港」として知られ、万葉集にも鞆の浦を詠った歌が残されている。また、江戸時代には朝鮮通信使の寄港地としても使用され、福禅寺対潮楼には「日東第一形勝」と記された文が残されている。同時代に港湾施設として使用された常夜燈や雁木、波止場といった設備や、当時の町地図に描かれた街路も現存しており、名勝・鞆公園として国からの指定を受けている。さらに、宮崎駿監督が『崖の上のポニョ』を構想した地としても有名である。

しかし、江戸時代になされた町割りがそのまま現在に残っているため、道路が狭く、対向車がすれ違うことも困難である。特に観光客の多い時期には、車が混雑し、地元住民の生活にも多大な影響を与えている。そのような背景から、1983年、鞆の浦の一部に埋め立て架橋工事を行い、沼隈半島方面への通行が可能になる県道47号線バイパスの建設が計画された。以来30年、バイパス建設に賛成派と反対派で議論が交わされ、現在も係争中である。

このような景観訴訟問題は鞆の浦のみに見られる問題ではなく、日本各地に見られる問題である。この問題について考えることで多様な価値観にふれ、多面的な見方、考え方【多様性】を身に付けさせたい。また様々な立場の意見から現状を把握し、議論を重ねた上で自分なりの意志決定をすること【責任性】で望ましい将来の社会の姿について考えさせたい。

【持続可能な社会づくりの構成概念】

構成概念Ⅱ 多様性…自然・文化・社会・経済に関わる事物・現象を多面的に見たり考えたりすること

構成概念Ⅴ 責任性…現状を把握した上で望ましい将来像について意思決定をすること

2. ESDの視点を生かした授業の実践

(1) 単元の目標（重視する能力・態度）

態度・能力⑤ 他者と協力する態度

同じ考えの児童と積極的に意見を交換し合ったり、違う考えの児童とお互いの考えを尊重し合いながら議論しようとしたりすることができる。 【関心・意欲・態度】

態度・能力① 批判的に思考・判断する力

鞆の浦景観訴訟問題について、資料をもとにそれぞれの立場の意見を客観的に考え、合理的な判断をすることができる。 【思考・判断・表現】

態度・能力④ コミュニケーションを行う力

それぞれの児童がもった意見を話したり、聞いたりするなどして伝え合い、意見をより深めることができる。 【技能】



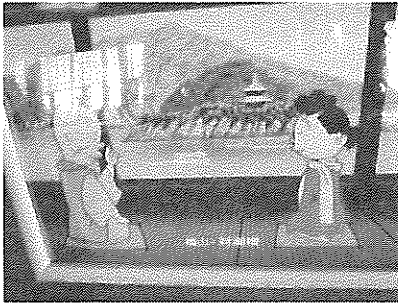
態度・能力③ 多面的、総合的に考える力

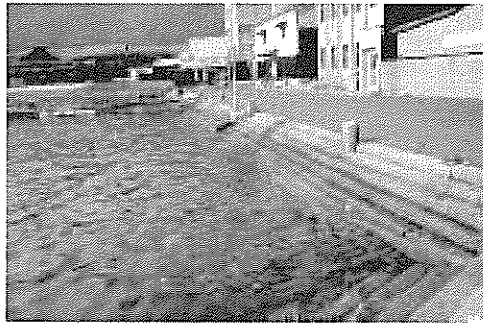
鞆の浦の歴史や文化的価値、また抱えている問題点について知るとともに、賛成派、反対派それぞれの考えについて理解することができる。 【知識・理解】

(2) 評価基準

他者と協力する態度 (ア)	批判的に思考・判断する 力 (イ)	コミュニケーションを 行う力 (ウ)	多面的、総合的に考える 力 (エ)
①鞆の浦景観訴訟問題 について関心をもち、 すすんで調べたり、発 表したり、考えをまと めたりしようとして いる。	①資料に基づいて、根拠 をもって自分の立場 について判断してい る。	①鞆の浦景観訴訟問題 について、自分がもつ た意見を友達にすす んで話したり、友達の 意見を聞いたりして 自分の考えを深めて いる。	①鞆の浦の歴史や文化 的価値、景観訴訟問題 などについて資料をも とに正しく理解している。

(3) 単元の計画

時	主な学習活動と内容	◇教師の支援 ◆主な評価
	<p>■名勝・鞆の浦について知る①</p> <p>○鞆の浦の位置について知る。</p> <p>○対潮楼、常夜燈や江戸時代から残る港湾施設 雁木などについて知る。</p>  <p>江戸時代から残る常夜燈</p>  <p>坂本龍馬の隠れ家 榎谷清右衛門宅</p>  <p>サザエさんにも取り上げられた対潮楼</p>	<p>◇坂本龍馬ゆかりの地であったことや、朝鮮通 信使の接待に使われたことなど、社会で学習 したことと関連付けながら写真を見せる。</p> <p>◇『崖の上のポニョ』のふるさとであることや、 サザエさんで紹介された名勝であることな ど、児童が親しみをもてるように配慮する。</p> <p>◆ア①</p>

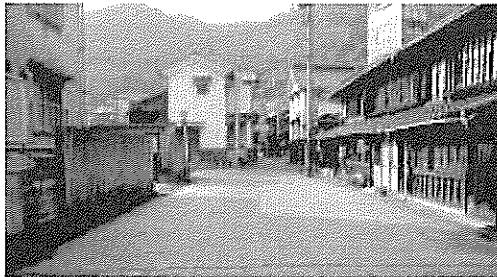


江戸時代から残る雁木

■ 鞆の浦景観訴訟問題について学ぶ②

○ 鞆の浦が抱えている問題について予想する。

昔ながらの風景を残す鞆の浦の街並



- 環境問題かなあ。
- 津波や水害に弱い町かもしれない。
- 交通の便が悪いのかもしれない。

■ 賛成・反対に分かれ意見をそれぞれの立場の中で交換し合う③

- 賛成派、反対派それぞれの主張について知り、自分の立場を決める。
- 賛成派、反対派に分かれて意見を交換し合い、それぞれの立場で立論や質問事項、反対側の意見で出そうな意見に対する反論を考えさせる。

【賛成派の主な意見】

- ・ 鞆の浦周辺の道路の混雑が住民の生活に大きな支障をきたしている。
- ・ 観光に必要な大型バスが通り抜けられないため、大きく迂回しなければならない。
- ・ 津波などの災害発生時に迅速に避難できない。

- 江戸時代から残っているなんてすごい。
- こんな場面、サザエさんで見たことがあるぞ。
- 坂本龍馬とかかわりがあったなんて。
- この建物は何に使われたのかな。



街路は細く、車が行き違うことができない

- ◇ 江戸時代の町割りが現在でも残っていることと、観光地であることをもとに考えさせる。
- ◇ 古くから残る住居や文化財のため道が細く、特に観光シーズンには車が混雑して現地住民の生活に支障が出ていることに気付かせる。
- ◇ 上記のことが原因で鞆の浦の一部を埋め立て、沼隈半島方面に抜けるバイパス道路を建設する計画について裁判になっていることを知らせる。◆エ①

- ◇ 賛成派、反対派それぞれの立場の方の証言をまとめたものなどを用意し、児童が判断をする資料を与える。
- ◇ 立場を決められない児童には審判をさせ、それぞれの立場からどのような意見が出るか予想させる。

◆イ①

【反対派の主な意見】

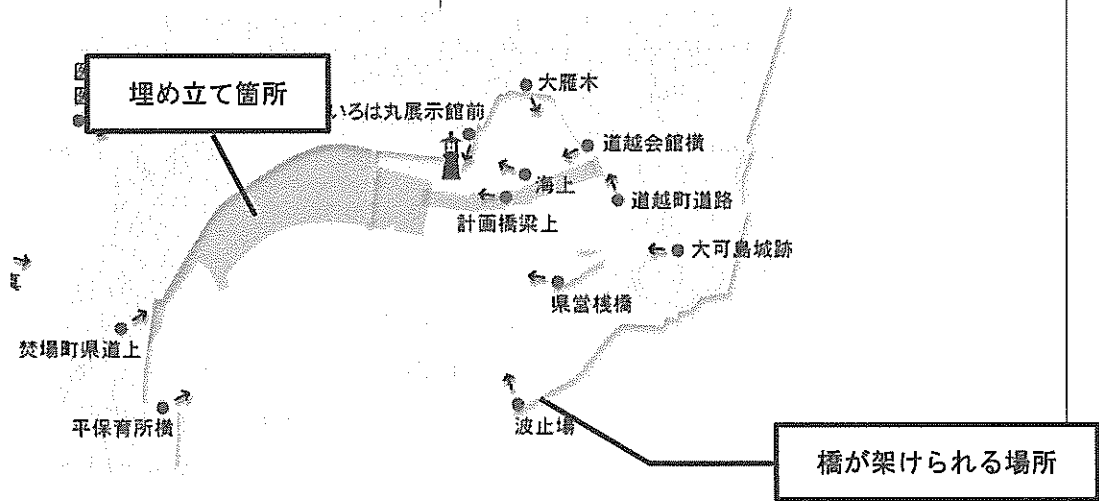
- ・ 山側にトンネルを掘ることで問題の多くを解決することができる。
- ・ バイパス工事は江戸時代から受け継がれてきた美しい景観を破壊する。
- ・ 橋を架けても十分な高さは確保できないので災害には対応できない。



バイパス建設賛成派の看板



埋め立て工事差し止め判決を知らせる新聞記事



埋め立て架橋工事の計画 (鞆町のまちづくり 福山市ホームページ)

■鞆の浦景観訴訟問題について討論をする④

- 立論⇒質問⇒反論⇒フリートークの流れで討論を行う。
- 審判を説得するように議論を進める。

■鞆の浦景観訴訟問題について話し合いを行う⑤⑥

- 賛成派、反対派それぞれの主張から、バイパス建設のメリット、デメリットを確認し、持続可能な開発という視点で議論を行う。
- 鞆の浦景観訴訟問題に類似した日本各地の事例を知る。
- この学習を通して考えたことを書く。

- ◇司会進行は児童に行わせるが、論点がずれてきたら修正するよう声をかける。
- ◇多くの児童が発言できるよう、1人が話せる回数を制限する。

◆ウ①

- ◇討論で争点になった部分をクローズアップし、論点がずれないようにする。
- ◇国立マンション問題、京都ホテル問題、大和北道路建設問題などを紹介し、鞆の浦のみの問題ではなく、日本各地で起きている問題であることに気付かせる。
- ◇鞆の浦景観訴訟を通して考えたことはどのようなことか、また景観と生活など異なる価値観がぶつかったとき自分はどうのように考え、判断するのか、について考えを書かせる。

◆イ①

「古代から現代、そして未来へ・銅で感じる『つながり』」（第6学年）

奈良市富雄第三小中学校 大田 清美

1. ESD を生かした授業づくり

(1) 単元名・学校種と学年

「古代から現代、そして未来へ・銅で感じる『つながり』」 小学校 第6学年

(2) 単元の概要

この単元では、銅を通して、先人の努力や苦勞を感じる中で、身近な文化財を大切にしようとする態度を養うとともに、銅と自分の生活や環境とのかかわりを考えることで、持続可能な社会に向けた資源の有効活用について実践していく態度を養うものである。

聖武天皇が「動植ことごとく榮えむ世の中を欲す」としてつくろうとした奈良の大仏は、長い年月と多くの人々の尽力により完成した。大仏鑄造のため、原料である銅は 496 t も使われていた。金が 440 kg、水銀が 2.5 t であることから、その量の多さは明らかである。大仏づくりで使用された銅は、奈良県から遠く離れた山口県美祢市の長登銅山から採掘されたことが近年明らかになってきた。長登銅山は、奈良時代から昭和 35 年まで採掘された銅山で、奈良時代から平安時代にかけては国直轄の採銅所（長登採銅・精練官衙）が置かれ、約 200 年以上にわたってたいへん栄えていた。「長登」は「奈良登り」に由来すると言われている。現在、古代の鉱山の様子が見学できる全国唯一の遺跡である。

古代の採銅、運搬作業は危険かつ過酷な作業であり、銅山から逃げ出す人もいたことが木簡に書かれた記録に残っている。また鉱石の 9 割近くが不純物の「からみ」であるため、それらを捨てながら 3～4 日の昼夜の精練作業が行われていたことも推察される。精練された銅は、山口県から奈良県まで馬や船などにより一月余りかけて運搬していた。銅 18 t を 20 日で運んだという記録が残っている。このような大仏づくりにおける銅の採掘、精練作業にかかる苦勞や奈良までの運搬の努力や苦勞を知ることで、大仏造営事業の規模の大きさや、聖武天皇の願いの強さだけでなく、奈良から遠く離れた人々とのつながり、そして今当たり前のようにある大仏は、当たり前に作られたのではないことが認識できるであろう。また大仏づくりにおける具体的な人の営みが見えることは、作られた苦勞や守り継がれてきた努力をより実感でき、大仏に対する愛着や、大仏をはじめとする文化財を大切にしていこうという態度を養うことができると考える。(連携性)

また、銅は古くから人類とのかかわりが深く、重要な金属として扱われていた。「金に同じ」と書いて銅と読むように、その利用価値は高い。例えば金属製品や貨幣の材料、また顔料としても多くの文化で使用されてきた。正倉院に伝わる長門銘伎楽面は長登銅山の銅が使われている可能性が高いと言われている。現代でも、銅は十円玉をはじめ、多くの家電製品や自動車部品の材料としても使われている。また抗菌効果が高く、ドアノブや調理器具など生活用品にも活用されている。さらに、銅は耐久性に優れているので長く使え、素材そのものがリサイクルしやすく環境

に優しい有価金属であるため、昔も今も銅は人々の暮らしの中でリサイクルされている。

このようなベースメタルの一つである銅は、日常的によく利用しているのにもかかわらず、その有用性について考える機会は多くはない。銅に関わる古代からのつながりに思いをよせ、その存在を身近に感じるとともに、未来に向け、限りある銅資源を有効活用していく大切さを考えさせたい。(有限性)

(3) ESD の視点の明確化

【持続可能な社会づくりの構成概念】

構成概念Ⅲ 有限性…銅は限りあるものであり、未来に向けその性質を生かしながら有効活用する

構成概念Ⅴ 連携性…古代の過酷な銅の採掘、精練、運搬の苦労などがあって、現在の大仏は存在している。また銅は昔から人々の生活と結びつき、有効利用されている。

2. ESD の視点を生かした授業の実践

(1) 単元の目標 (重視する能力・態度)

《関連》

銅について、古代からのつながりや、自分の生活や環境とのつながりに関心を持ち、未来に向けて自分にできることを考え、行動しようとする。 【関心・意欲・態度】

《未来》

大仏づくりにおける銅の採掘・精練・運搬などの努力や苦労や、銅と自分の生活や環境とのかわりについて考えたり、未来に向け自分ができていることを考えたりできる。

【思考・判断・表現】

《参加》

古代から現代までの銅の活用について、それぞれの時代と比較しながら調べることができる。

【技能】

《多面》

銅は昔から現在まで人々の生活と結びつき、有効利用されていることがわかる。【知識・理解】

(2) 評価規準

関連 関心・意欲・態度	未来 思考・判断・表現	参加 技能	多面 知識・理解
①銅の古代からのつながりに関心を持ち、文化財を大切にしようとする。	①大仏づくりにおける先人の努力や苦労を考える。 ②銅などの金属資源と自分の生活や環境との	①大仏づくりに使われた銅について、その採掘、精練、運搬方法を現在と比較しながら調べている。	①大仏づくりには、多くの銅が使われ、たいへんな採掘や精練、運搬の作業があって、大仏ができたことがわか

	かかわりについて考え、未来に向け自分ができることを考える。		る。 ②銅は昔から人々の生活と結びつき、有効利用されていることがわかる。
--	-------------------------------	--	---

(3) 単元の計画 (全 10 時間)

時	主な学習活動と内容	◇教師の支援 ◆主な評価
1 2	【大仏づくりに使われた銅について知ろう】(2) ○奈良の大仏づくりの想像図(社会科教科書・資料集参照)を提示し、大仏づくりのたいへんさを実感する。 ○大仏づくりに使われた銅は山口県の長登銅山のものであることを知らせ、調べる計画を立てる。	◇教科書や資料集に記載されている大仏づくりの想像図をプロジェクタで大きく映す。 ◇新聞記事などを紹介し、どのようにして、大仏づくりに使われた銅が長登銅山のものかわかったのか知らせ、興味関心をもたせる。 ◆銅の古代からのつながりについて関心をもって調べようとする。《関連》
3 4 5	【大仏づくりに使われた銅について調べ、先人の努力や苦労を考えよう】(3) ○DVD『奈良の大仏のふるさと：長登銅山跡』を視聴する。 ・当時の銅の精練の仕方 ・採鉱、精練作業の様子(逃げ出した人の数など) ・使用した銅の量と採掘した鉱石 $496\text{ t} \div 0.1 = 4960\text{ t}$ 実際の「からみ」(ない場合は、岩石でよい)の重さを図り、計算することで、4960 tの鉱石の量や重さを想像する。 ・運ぶのにどれだけ(時間・距離)かかったか など	◇精練時に出る「からみ」(実物)や逃亡者数を記した木簡(写真)を提示するなどし、採鉱、精練のたいへんさを実感できるようにする。 ◇496 tを採掘するにあたり、鉱石の9割近くが不純物であったことから、実際に採掘した鉱石の重さを計算する。 50 kg (2リットルのペットボトルの25本分)をリュックサックに入れ、背負わせることで、重さを実感させる。 ◇地図帳の縮尺を利用し、一日にどれだけ運んだのかを計算することで、山口県から奈良県までの運搬の過酷さを実感できるようにする。 遠足で歩いた距離を測っておき、比較するとわかりやすい。

		<p>◆大仏づくりに使われた銅について、その採掘、精練、運搬方法などを現在と比較しながら調べている。《参加》</p> <p>※現地（長登銅山）を見学できればなおよい。</p> <p>◆大仏づくりにおける先人の努力や苦勞を考え、文化財を大切にしようとする。《未来》</p>
6 7	<p>【先人の銅の活用方法について調べよう】（2）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・銅剣・銅鐸・銅鏡 ・仏像 ・貨幣 ・顔料 など ・地図帳などを使って、日本の他の銅山の場所を白地図に表す。 ・足尾銅山と田中正造 	<p>◇博物館などで展示されているものもあるので、積極的に調べさせたい。</p> <p>◇プラスの部分だけではなく、銅に関連する公害などの歴史も調べることで、次時で行うこれからの有効活用についての考えが深まるようにしたい。</p> <p>※銅鏡などのレプリカがあれば用意する。</p> <p>◆銅は精練や加工の容易さから、昔から人々の生活と結びつき、有効利用されていることがわかる。《多面》</p>
8 9 10	<p>【現在の銅の利用について調べ、これからの銅の活用について考えよう】（3）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活の中の銅製品 ・銅のリサイクル方法 ・銅などの金属は限りある資源 ・金属のリサイクルを調べ、自分ができることを考え、実行する。 	<p>◇身近なところで使われている銅製品を提示する。</p> <p>◆金属と自分の生活や環境とのかかわりについて考え、未来に向け自分ができることを考える。《未来》</p>

*参考文献等

- (1) 長登銅山文化交流館 HP
- (2) 長登銅山文化交流館 展示図録
- (3) 「国銅」(上・下)(新潮文庫) 帯木 蓬生
- (4) 一般社団法人日本銅センター HP

「カブトガニを救え！」（第6学年）

奈良教育大学教職大学院 2回生 中澤 哲也

1. ESD を生かした授業づくり

（1）単元名・学校種と学年

「カブトガニを救え！」 小学校 第6学年

（2）単元の概要

本単元は約2億年前から姿を変えることなく、海で生きてきたカブトガニを通して、環境や、生態系を学び、身近な環境保全について考え、守り続けようとする主体的な態度を育むことをねらいとしている。

カブトガニの祖先はカンブリア紀（約5億年前）に生息していた三葉虫である。そこから進化を重ね、ジュラ紀（約1億9000年前）には現在の形態とほとんど同じ姿となり、今に至っている。現在では「生きて化石」と呼ばれ親しまれ、昭和3年には天然記念物として指定された。

カブトガニは内湾性の動物であり、波の穏やかな浅い海域に生息している。また、カブトガニの産卵や幼生の生育場として、広大な干潟が必要である。しかし現在、日本で確認されているカブトガニの生息数は年々激減していることが記録されている。カブトガニの生息数が激減している大きな原因は家庭の生活排水による水質汚染や、海岸線の人工化、埋め立て、干拓などの都市化や産業の発達である。国内で多く確認される生息地は岡山県の笠岡湾、大分県の杵築（きつき）湾である。特に笠岡湾では毎年「成体および幼生の捕獲数」を記録しており、平成7年には47匹確認されていたが、平成21年には8匹にまで減少していることが記録されている。

岡山県の笠岡市では世界で唯一のカブトガニ博物館があり、カブトガニの保護・繁殖に関する様々な調査・研究が行なわれているほか、地域や外の人々にもカブトガニについて知ってもらおうと活動している。また、平成15年に「笠岡市カブトガニ保護条例」が出され、市全体での取組も進められてきた。特に、笠岡市内の5つの中学校ではカブトガニの保護を目的に、「カブトガニ保護少年団」が結成され、実際に学校でカブトガニの幼生を飼育・放流したり、海岸清掃をしたりと各校の状況に応じた目的・内容で活動している。

本単元でESDの視点に立った学習指導を進めるにあたっては、カブトガニは人類よりもはるかに長い間生息してきたにもかかわらず、近年、生息数が都市化や産業の発展によって、減少してきているということから、自分たちの生活がカブトガニを含めた海の環境に大きく関わっていること【相互性】を理解させたい。

また、笠岡市が市をあげてカブトガニの保全運動に取り組んでいることや、市内の中学校が連携して保護・繁殖活動をしていることから、大人と子どもが協力して環境保全に取り組むことの大切さ【連携性】を理解させたい。その活動の背景には、カブトガニが住んでいる自分たちのまちの誇りを次の世代へも伝えていきたいという気持ちがあることも気づかせたい。

本単元を通して、カブトガニに関する笠岡市の取組から、自分たちの生活を見直し、豊かな自然環境の素晴らしさと大切さを感じ、様々な場面・場所において、環境保全の立場から望ましい行動ができる

実践力を育みたい。

(3) ESD の視点の明確化

【持続可能な社会づくりの構成概念】

構成概念Ⅱ 相互性… 人の生活と環境は大きく関わっていること。

構成概念Ⅴ 連携性… カプトガニを守るといった市の課題に対して子どもも大人も連携して取り組んでいくことが大切であるということ。

2. ESD の視点を生かした授業の実践

(1) 単元の目標 (重視する能力・態度)

《関連》

カプトガニを通して、自分たちの生活と環境との関わりに関心をもつ。 【関心・意欲・態度】

《未来》

カプトガニや、カプトガニの保全活動の実践を通して、人と人が連携する大切さに気づき、環境の視点に立って、未来に向けて自分ができることを考え、表現する。 【思考・判断・表現】

《参加》

環境保全に関する情報を集め、自分の役割、生き方を見つめ直し、進んで実践する。 【技能】

《多面》

自分・地域・行政・自然などのつながりや広がりを経験し、人々が協力して町の誇りのために努力していることを理解している。 【知識・理解】

(2) 評価規準

関連 関心・意欲・態度	未来 思考・判断・表現	参加 技能	多面 知識・理解
①カプトガニについて関心をもつ。 ②自分たちのまちの「カプトガニ」について関心をもつ。	①カプトガニにとって住みやすい環境を多面的に考える。	①自分たちのまちの特徴や、自然について調べ、環境保全に向けて実践する。	①環境を良くしていくには大人も子どもも協力しなければならないことを理解する。

(3) 単元計画 (全 10 時間)

時	主な学習活動と内容	◇教員の支援 ◆主な評価	
1	<p>【カブトガニについて知ろう】</p> <ul style="list-style-type: none"> 約 2 億年も前から存在しているカブトガニという生物がいることを知る。 カブトガニに関する情報をムービーメーカーで知る。 カブトガニで有名な岡山県笠岡市の町の様子を知る。 	<p>◇「生きた化石」ってなんだろう？ カブトガニの映像を見せ、人類よりもはるか昔から存在していることを理解させる。</p> <p>◇岡山県笠岡市に焦点を当て、カブトガニを題材にしたまちづくりの様子を紹介する。</p> <p>◆カブトガニについて関心をもつ。</p> <p style="text-align: right;">《関連》</p>	
 <p style="text-align: center;">【駅前看板】</p>		 <p style="text-align: center;">【カブトガニ保護式自動販機】</p>	 <p style="text-align: center;">【家庭排水を意識させるマンホール】</p>
2	<p>【カブトガニを調べよう】</p> <ul style="list-style-type: none"> カブトガニについて、本やインターネット等を利用して調べる。 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>どんどころに住んでいるのかな？ 子どもの頃はどんな形をしているのかな？ 2 億年前ってどんな時代だったのかな？ 日本中どこにでもいるのかな？</p> </div>	<p>◇資料やホームページを紹介し、年々カブトガニの生息数が激減していることに気づかせる。</p> <div style="text-align: center;">  <p>【カブニくん】</p> </div>	
3	<p>【カブトガニが危ない】</p> <ul style="list-style-type: none"> なぜカブトガニが年々減少しているか考える。 <div style="text-align: center;">  <p>【笠岡市の上空写真】</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> 海の汚染によって、奇形のカブトガニが生まれてくることを知る。 	<p>◇前時に学習したことを活用し、笠岡市の上空写真から、カブトガニが減少している理由を考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 干潟が少ない。(産卵・餌場がない) 人工的な海岸が多い。 生物が住みにくそう。 海が汚そう。 <p>◆写真から多面的に生物にとって住みやすい環境を考える。</p> <p style="text-align: right;">《未来》</p>	

「放射線マップからリスクを考えよう」(第1学年)

～物理基礎・情報科の学習をふまえて～

奈良教育大学 後藤田 洋介

1. ESD を生かした授業づくり

(1) 単元名・学校種と学年

「放射線マップからリスクを考えよう ～物理基礎・情報科の学習をふまえて～」

高等学校 第1学年

(2) 単元の概要

本単元は放射線の安全性を題材に、身近な放射線量の測定やリスクについて考えることで、メディアや科学に対して、批判的に考える能力を養っていくことをねらいとする。

① 放射線について

放射線は放射線原子核の崩壊に際して、放出される粒子(光子も含む)の流れのことで、 α 線(ヘリウムの原子核)、 β 線(電子)、 γ 線(電磁波)などがあり、これらと同様のエネルギーを持つ粒子の流れなども指す。放射線は浴びた物質から電子をはじき出す電離作用を持ち、この作用によって生物学的な機能を持つ分子が壊され、その結果、がんや白血病などを引き起こすことがある。また、染色体などにも影響を及ぼすことが知られている。【多様性・相互性】

③ 放射線の単位について

放射線の単位と言っても、放射線には量(放射線量)を表す単位と能力(放射能)を表す単位がある。放射線量を表す単位は Gy (グレイ) や rad (ラド)、Sv (シーベルト)、C/kg (R (レントゲン)) などがある。放射能を表す単位には Bq (ベクレル)、Ci (キュリー) などがある。(表1)

表1) 放射線量と放射能の単位

単位	定義	適応例
Gy (rad) 吸収線量	1kg の物質が 1J のエネルギーを吸収するときの線量 (1rad=0.01Gy)	物質が吸収した線量
Sv (rem) 実効線量	Gy を放射線の種類やその影響によって補正した単位 (1rem=0.01Sv)	生体の影響などを調べるとき
C/kg (R)	γ 線などの電磁波の放射線が、電離作用によって乾燥空気1kgに作り出したイオン対がもつ電荷の総量	物質に与えた放射線量など
Bq(Ci)	1sあたりの放射線の放射壊変数	食品などに含まれる放射能を測定する

※1 放射線の科学 生体影響および防御と除去より作成

また、放射線の単位には接頭辞として、m (ミリ)、 μ (マイクロ)、などもよくつけられる。

④ リスクについて

リスクは被害の想定される被害の大きさと生起確率の積で表され、様々な事象に関してこのリスクを比較することで、未来に予測される事象の安全性について考えることができる。しかし、現実にはこのリスクの値だけが独り歩きし、市民に過剰な不安を与えているような報道も数が少なくない。ま

た、情報が氾濫する、災害直後では誤報や市民に中途半端な知識を与えることもある。リスクを考えること、リスクとうまく付き合っていくことは、何が危ないのか、何が安全なのかを知ることだけにとどまらず、なくなることはないリスクをどのように減らしていくのかということにもつながる。【責任性】

⑤ 教科との連携について【連携性】

物理基礎の授業では、原子力の単元で、放射線や放射線とその影響と利用について学習している。また情報科では、情報モラルとして情報化によって多くの情報を得られるようになり、その利点と影響について学んでいる。放射線の利用と影響についてももう一度詳しく触れ、また、様々な情報から自ら考えられるようになることで各教科での活動を生かしたい。

(3) ESD の視点の明確化

構成概念Ⅰ 多様性…放射線の有益性と有害性を理解し多面的に考えること

構成概念Ⅱ 相互性…放射線の便利な部分と影響は表裏一体であること

構成概念Ⅴ 連携性…互いに協力して放射線マップを作ること、教科間での連携性

構成概念Ⅵ 責任性…リスクについて理解し正しい情報を発信すること

2. ESD の視点を生かした授業の実践

(1) 単元の目標

《伝達》

放射線のリスク評価は、各自治体によって違う。それらの意見をまとめつつ、自分なりの意見をまとめ、他人へと伝達することができる。

《参加》

友人と協力しながら放射線マップを作成し、そのマップを用いて、地域での放射線への理解を促すことができる。

《批判》

放射線を題材に、メディアの情報を批判的に判断することができる。

《関連・多面》

放射線には利益と影響の二つの側面がある。その二つの側面を様々な立場に立って考えることができる。

(2) 評価規準

伝達・参加 関心・意欲・態度	批判 思考・判断・表現	関連・多面 技能	多面 知識・理解
①協力しながら積極的に放射線マップの製作をしようとしている。 ②自ら放射線についての意見を発信しようとしている。	①報道等で提示されている情報を批判的に見ることができる。 ②放射線のリスクについて自分なりの意見を持つ。	①放射線の利益と影響を関連付けて考えられる。	①放射線の知識、利用や影響に関して理解している。 ②リスクについて理解する。

(3) 単元の計画 (総時間数 14 時間)

時	主な学習活動と内容	◇教師の支援 ◆主な評価
1	【身近な放射線を測ってみよう】	◇放射線源を用意し練習をさせる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;"> 身近なところの放射線量はどうなっているのだろうか。 </div>		
2,3	○ガイガーカウンターを用いて身近な放射線 (環境放射線) を計測する。	◇自然環境からも放射線が出ること理解させる。 ◆環境放射線について理解している。
4,5	○放射線マップを作ろう 学校内の放射線量を計測し、地図上に放射線量を書きこむ	◇放射線マップを作成させる。 ◆協力して作成しようとしている 【伝達・参加 (関心・意欲・態度) ①】
6,7	【報道と見比べてみよう】 ○新聞やテレビの報道を調べよう	◇新聞やテレビの放送とともに、ICRP などの国際的な基準も紹介する。 ◇数字だけでなく単位や測定の方法なども調べさせる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;"> 放射線マップと調べたことを比べてみよう。 </div>		
8	○放射線マップと調べたことを比べてみよう	◇調べ学習と実際の計測値との違いをはっきりとさせる。 ◆報道等で提示されている情報と放射線マップを批判的に考えている。 【批判 (思考・判断・表現) ①】
9.1 0	【放射線について復習しよう】 ○放射線の物理学 歴史からのアプローチをふまえて学習する。 ベクレルやレントゲン、キュリー夫妻は現在のように知られている放射線の影響を知らずに放射性物質を扱っていた。 放射線は何なのか、単位はどんな意味を持っているのか、国際的な基準は何をもとに作成されているのか。	◇原子の概念の復習をさせる。 ◇歴史の中で放射線がどのように発見されてきたのか。 ◆歴史の中での扱いを、調べたことと関連付けしている。 【多面 (知識・理解) ①】 ◇放射線の専門知識から、調べたことを洗い直させる。 ◆情報を、知識と事実から批判的にとらえよう

11	○放射線の影響と利用 レントゲンやがん治療などの利益と低線量被曝や遺伝子異常などの影響について学ぶ。	<p>としている。 【批判（思考・判断・表現）①】</p> <p>◇放射線の利用と影響を教える。</p> <p>◆放射線の利益と影響の二面性を理解しようとしている。 【関連・多面（技術）①】</p>
12, 13, 14	<p>【身近な放射線について考えよう】</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>身近な放射線と報道について話し合おう。</p> </div> <p>○放射線マップと報道、理論から放射線について考える。</p> <p>○放射線の利用や影響を考えながら、自分の意見をまとめる。</p>	<p>◇メディアの情報と放射線マップ、放射線の利益と影響のすべてを加味して考えさせる。</p> <p>◇考えたことをもとに、平常時のリスクと非常時のリスクについて考えさせる。</p> <p>◆放射線リスクについて自分の意見を持つ 【批判（思考・判断・表現）②】</p> <p>◆自ら放射線リスクについての意見を発信しようとしている。 【伝達・参加（関心・意欲・態度）②】</p>

【参考文献】

- (1) 小澤俊彦・安西和紀・松本謙一郎 放射線の科学 生体影響および防御と除去 東京化学同人 2012年
- (2) 柴田義貞編集 放射線リスクコミュニケーション健康影響を正しく理解するために 長崎新聞社 2012年
- (3) 鳥居寛之 小豆川勝見 渡辺雄一郎 放射線を化学的に理解する基礎からわかる東大教養の講義 丸善出版 2013年
- (4) 国際放射線防護委員会の2007年勧告 日本アイソトープ協会 2012年
- (5) 藤垣裕子 廣野喜幸編 科学コミュニケーション論 東京大学出版会 2008年
- (6) 多田順一郎 わかりやすい放射線物理学 オーム社 2008年

「布施城跡から文化遺産を考えよう」

奈良教育大学「学ぶ喜びプロジェクト」 北村 恭康

1. ESDを生かした授業づくり

(1) 単元名・学校種と学年

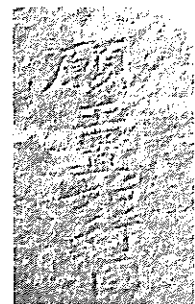
「布施城から文化遺産を考えよう」 小学校 第6学年

(2) 単元の概要

本単元は、地域に残る「布施城跡」を通して、地域に愛着を持ち、地域を大切に思う心情を養うと共に、持続可能な社会の担い手としての資質や価値観を養うものである。そのために、実際に城跡に登りどのような自然環境の下にあるのか、削平された平場(郭)はどのようなになっているのか、どのように繋がっているのか、堀切はどうなっているのか等の現状を見学や調査活動を通して学びとらせると共に、保存活動に取り組んでいる人々や地域の歴史博物館の学芸員さんへのインタビューから城跡に対するそれぞれの思いに気付かせたい。

「布施城跡」は、葛城市新庄町寺口の葛城山中腹の尾根にある。布施氏が築城したものと言われているが年代は不明である。布施氏は置始氏(おきそめし)の流れをくみ、一乗院の配下で、平田庄荘官の一人でもある。平田庄は概ね現在の大和高田市・葛城市・広陵町地域に散在し、荘官には他に万歳氏、中村氏、高田氏、岡氏の名が至徳元年(1384)の「長川流鏑馬日記」に見える。これら各氏が平田党を構成し、春日若宮祭礼(おん祭り)の流鏑馬願主六党の一党を担っていたのである。

置始氏の文字は、布施氏の氏寺でもある置恩寺(布施寺)の石灯籠(1502)に「置始行国」の名がみえ、また、多聞院日記の永正3年(1506)には、安位寺(御所市)の復興のための勸進帳に「布施安芸守行国」の名がある。



石灯籠銘文

戦国時代の奈良県は、松永久秀が1560年多聞山城を築き大和の攻略を開始していた。1565年には筒井城を攻め、筒井順慶は布施城に逃れた。その一方で布施氏は松永方の高田郷を焼き払ったことなど、大和においても松永・筒井の攻防の様子が伺える。布施氏は1868年に織田信長配下となった松永久秀に布施城下を焼き払われ、翌年には一戦を交えたがよく守り、また、1571年には松永方の高田城の出城を攻め落としている。地域史としての布施城ではあるが、布施氏は織田信長・筒井順慶・松永久秀との関連も見られ、戦国時代の学習を布施城から俯瞰することも可能である。

このような歴史に包まれている布施城ではあるが、現在の姿は下草に覆われ樹木の中に隠れている。城跡は上から下へ500mほど郭が階段状に連なり、途中で南側へ分岐しているが、単純な作りである。また、各郭の南側にハイキングコースを兼ねた林道が掘削されたおり、郭の南側が破壊されている。城といえば天守や石垣を思い起こすだろうが、布施城は土から成る城である。築城年代は不明であるが、1582年布施氏が秀吉に切腹させられてからでも四百有余年経て、今なお存在している。

私が初めて城跡に登ったとき、地元の人に聞くと「平らなところはあるがなにもないよ」と言われた。おそらく多くの地元の人も認識はこのようなものであろう。しかし、立地環境からか開発は免

れて残っていたが、忘れかけられていた遺産でもある。その存在に気付いた時、一部の地域住民が町の遺産を残していきたいという思いから、年数回の下草刈り、案内板の設置などのボランティア活動が始まった。(連携性) これらの活動には、布施城を少しでも多くの人々に知ってもらいたい、見学を通して遺跡の大切さや共有の文化財であるという認識を持ってもらい、未来に残していきたいとする思いが込められている。学習を通して、これらの活動の大切さ、必要性を考えていきたい。また、城跡の地理的条件から近年の気候変動の降雨により、地崩れや多人数による無秩序な入山により変化すること(有限性)を理解させたい。また、これらの活動を学び、城跡に登山することを通して、自分はどう城跡の未来像を描き、どう行動すべきか、さらに、地域に存在する文化遺産とどう付き合っていくのかを考えさせていきたい。(責任性)

【持続可能な社会づくりの概念構成】

構成概念Ⅲ	有限性	山城の現存は自然環境や人為的な環境により変化する。
構成概念Ⅴ	連携性	城跡を守るには多くの人が繋がり、協働することにより成し遂げられる。
構成概念Ⅵ	責任性	城跡を未来に伝えていくためのビジョンを考え、自分のできることを行動に移していく。

2. ESDの観点を生かした授業の実践

(1) 単元の目標(重視する能力・態度)

《未来》

城跡が現在まで残ってきたことを基に、有限の環境要因を考えながらどのような形で将来にわたって伝えていくか考えることが出来る。

《多面》

城跡を通して、文化財の大切さを考え、保存するには人・自然・地域社会・社会組織等を多面的、総合的に考えることが必要であることが分かる。

《伝達》

城跡の保存に向けて、地元住民や山持へのインタビューやグループでの調査活動の結果を基にして、他者の考えも聞き入れながら、自分の活動方法を精査し伝えることが出来る。



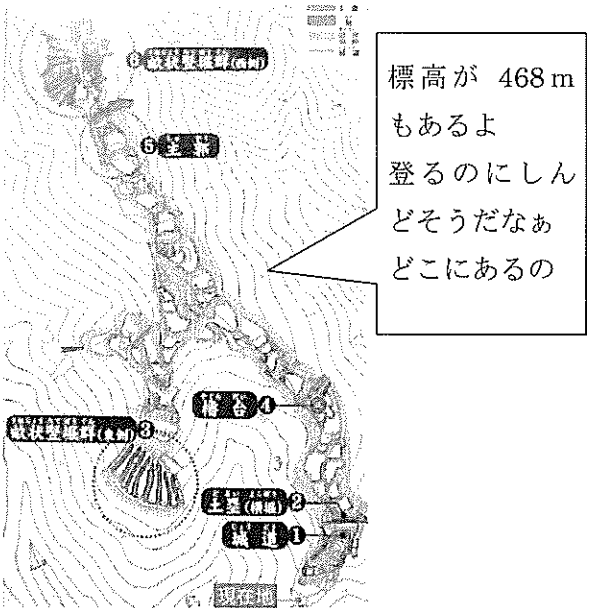
《参加》

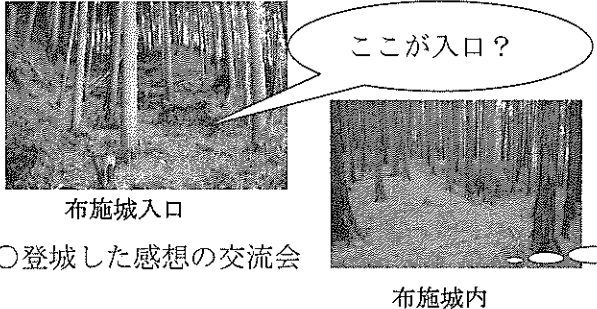
城跡の現地調査や各地の城跡の保存、活用の様子を調べ、自分のすべき役割を自覚し、主体的に取り組む実践力を養う。

(2) 評価規準

未来（興味・関心）ア	伝達（思考・判断・表現）イ	参加（技能）ウ	多面（知識理解）エ
① 城跡に興味を持ち、進んで調べたり、話し合ったりしている。 ② 未来へ伝えていくのは、自分だとの自覚を持つようとしている。	① 学習を通して、遺産を保存する大切さを考え、発信している。 ② 学習を通して、自分自身の考えの変容について表現している。	① 城跡を見学し、各種の情報を集めて、自分の役割を自覚しながら取り組もうとしている。	① 文化財を守り残そうと努力する大切さを理解している。 ② 保存するには、人と社会のつながりが必要であることを理解している。

(3) 単元の計画（全12時間）

時	主な学習活動と内容	◇教師の支援 ◆主な評価
1	○地域の文化財と思うものをあげる。 （事前のアンケート結果でもよい） ○姫路城のDVDを視聴する。※1	◇時代、種類に関係なく児童の思うものを上げさせる。
2	○写真から下草刈りを行っている場所を想像する。  	◇布施城であることを知らせ、下草刈りの苦労を想像させる。 ◇布施城の縄張り図、1/25000 地形図から想像させる。 ◆ア① 
	○布施城の位置と構造を知る。 ○学習課題をつくる。	現地案内板より <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 観光地でもない布施城跡の下草刈りをなぜしているのだろうか。 </div>

3	○城の歴史について知る	◇布施氏関係の略年表を作成し提示する。
4	○地域の人々の城に対する意識を調査する。 ・学習課題と結びつけながら自分と地域の人々を対比させながら話し合う。	・織田信長、筒井順慶、松永久秀とも関係していることを見つけさせる。 ◇地域の人々の存在を知っているかにも注視させる。 ◆イー① エー1
5	○城の基本的な名称や用途を知る。	◇城の自作パンフを配り、説明をする。※2 ◆ア①②
6	○布施城に登城しよう。	◇登城の注意事項
7	・必ず見るところと共に、自分がすごいと思うところは写真や絵に表し、メモを取る。	・服装（長袖・長ズボン）・軍手・リュック ・水筒・配った縄張図・方位磁石・地図
8	 ○登城した感想の交流会	◇必ず見る個所をはっきりさせる。 ・堀切・郭間のつながり・土塁・堅堀 ◇メモを基に学習課題を含ませながら自分の考えを交流できるようにする。 ◆イー② ウー①
9	○下草刈りのボランティアの人の話を聞こう。 ・なぜ始めたのか。 ・人数をどうやって集めたのか。	◇ボランティアの人が協力し合いながら活動していることを理解させる。 ◇城跡（文化財）への思いを知り、自分の意見と対比させながら、保存について考えさせる。 ◆エー②
10	○布施城の保存について前時を踏まえて交流しよう。	◇文化財に対して、自分はどうかかわっていったらよいのか、どう活動していったらよいのかを交流の中心課題とする。
11	・今日まで残ってきた城を未来に残すためにはどうすればよいのか考える。	◇保存活動には、多くの人のつながりが必要であることを理解させる。
12	○布施城の魅力を他学年の人や地域の人に気付いてもらえるように発信する	◇活動を評価しさらなる向上を図る。 ◇地域に残る他の文化財も大切にしていかなければならないことを、住民に訴えていく活動につながるようにする。 ◆ア② イ①

参考文献

※1 豊かな世界遺産編より 日本ユネスコ協会連盟

奈良県史 11「大和の武士」

※2 「布施城のしおり」 葛城市歴史博物館著

「四万十川から学び、再生しよう大和川」(第4学年)

天理市立櫛本小学校 福住 祐樹

1. ESD を生かした授業づくり

(1) 単元名・学校種と学年

「四万十川から学び、再生しよう大和川」 小学校 第4学年

(2) 単元の概要

本単元は、奈良県桜井市北東部、貝ヶ平山近辺を源流とし、奈良盆地を西に向かって流れ、大阪市と堺市の間で大阪湾に流れ込む「大和川」を再生するために自分たちに出来ることを考え、実行する力をつけることをねらいとしている。その際、「日本最後の清流」と称される高知県の「四万十川」での取り組みを学び、学んだことを大和川に生かすようにする。

「大和川」はかつて日本で最も水質の悪い一級河川であった。現在では、以前と比べて水質が大幅に改善され2010年の調査ではワースト3位にまで改善して環境庁の水質基準を満たした。しかし、改善はされたといっても、水質が悪い一級河川の一つであることには変わらず、さらなる水質改善や大和川の再生が望まれる。

一方、今回、大和川再生のために参考とする四万十川は「日本最後の清流」と称される日本でも有名な一級河川である。水質は全国の一級河川の中で122位(平成21年国土交通省調べ)であり、とりわけ水質が良いというわけではないが、いくつかの特徴から清流と称される。1つ目は、「生態系が豊かであること」、2つ目は、「河道や川岸が比較的的自然に近い状態で残されていること」、3つ目は、「里山の原風景、天然の落葉樹が残っていること」、4つ目は、「本流に大規模なダムが建設されていないこと」などである。現在、四万十川では川の保全のために、「四万十川条例」というものを作り、清流を後世に引き継いで行くための取り組みがなされている。

児童は、社会科の「水のゆくえ」の学習で、小学校の前を流れる高瀬川を見ての決してきれいな川でないと実感したことを出し合った。そこからつなげて、高瀬川が大和川の支流であること、大和川が一級河川の中でワースト3位であること、生活排水が川を汚す1番の大きな原因となっていることを学習した。本単元では、まず、四万十川での清流保全のための取り組み内容を学び、それを活かして、奈良を流れる大和川の現状をしっかりと見つけ、大和川を再生するために「自分たちには何ができるのか」について考えさせたい。

また、四万十川について学習する際に、川を再生させるには、川を育む山が豊かであること、川に多様な生き物が戻ってくること、景観が保たれていることなど、川を取り巻くさまざまな環境が関係すること【相互性】、川を再生させるためには地域の人々が協力して取り組むこと【連携性】が大事であると理解させたい。そして、自ら進んで大和川再生に取り組む「大和川再生プロジェクト」では、自ら考え進んで行動することの大切さ【責任性】を自覚させたい。

【持続可能な社会づくりの構成概念】

構成概念Ⅱ 相互性…川の再生には川を取り巻くさまざまな環境が関係すること

構成概念Ⅴ 連携性…川の再生には地域の人々が協力して取り組むこと

構成概念Ⅵ 責任性…川の再生には、一人一人が自ら考え進んで行動すること

2. ESD の視点を生かした授業の実践

(1) 単元の目標（重視する能力・態度）

《多面》

四万十川の保全、大和川を再生するための、自分、地域、自然などのつながりに関心を持ち、それらを尊重し、大切にしようとする。 【関心・意欲・態度】

《未来》

大和川の現状と四万十川の取り組みを照らし合わせながら、未来に向けて自分ができることを考え、表現しようとする。 【思考・判断・表現】

《参加》

四万十川、大和川に関する情報を集め、自分の役割を理解し、出来ることを進んで実行しようとする。 【技能】

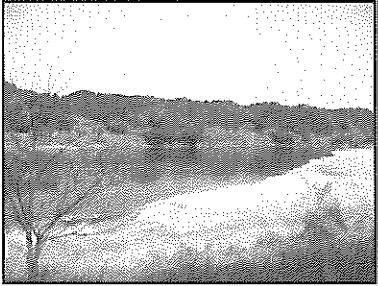
《関連》

川の再生には川を取り巻くさまざまな環境が関係することを理解している。 【知識・理解】

(2) 評価規準

関連 【関心・意欲・態度】	未来 【思考・判断・表現】	参加 【技能】	関連 【知識・理解】
①四万十川の保全、大和川を再生するための、自分、地域、自然などのつながりに関心を持ち、それらを尊重し、大切にしようとしている。	①大和川の現状と四万十川の取り組みを照らし合わせながら、未来に向けて自分ができることを考え、表現しようとしている。	①四万十川、大和川に関する情報を集め、自分の役割を理解し、出来ることを進んで実行しようとしている。	①川の再生には川を取り巻くさまざまな環境が関係することを理解している。

(3) 単元の計画（総時数 14 時間）

時	主な学習活動と内容	◇教師の支援 ◆主な評価
1	<p>【四万十川について知ろう】</p> <p>○高知県西部を流れる「四万十川」は、「日本最後の清流」と呼ばれていることを知る。</p> <p>○水質調査（平成 21 年国土交通省調べ）で一級河川の中で 122 位だったことを知る。</p>  <p style="text-align: center;">四万十川の下流</p>	<p>◇清流と聞いてどのようなイメージを持つかを考え、出し合わせる。</p> <p>◇四万十川の水質は 122 位なのに、なぜ最後の清流と呼ばれるのかについて考えさせる。</p> <p>◆四万十川について関心を持ち、多様な観点から調べようとしている。</p> <p>《多面》</p>

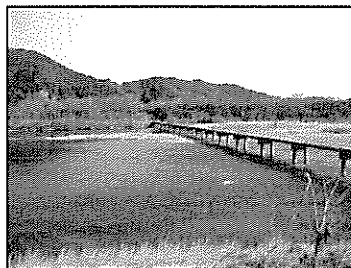
2 【なぜ四万十川は清流と呼ばれるのだろうか】

3 ○景観について考える。

- ・河道や川岸が自然に近い状態で残されている。

→堤防がない。

→山が近くて、自然が多い。



四万十川の景観

◇景観が自然に近い状態で保たれていることが、水量が確保につながることを理解させる。

○生物多様性について考える。

4 ・四万十川には、どんな生物がいるのだろうか。調べ、気づいたことを話し合う。

→アオノリが川で取れる。

→130種の魚が生息している。

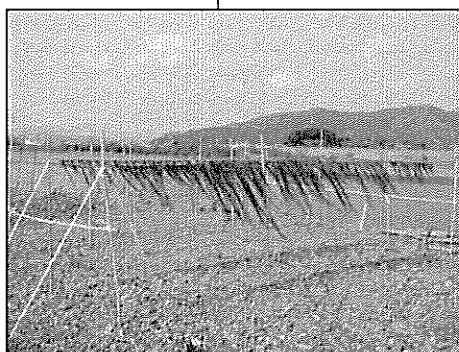
→トンボの宝庫になっている。

◇さまざまな生物が生息していることを理解させる。

◆川の保全には、生物が生息しやすい水質が必要だと理解している。

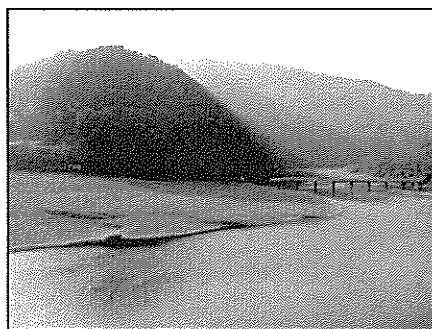
《関連》

アオノリの収穫



○里山の原風景について考える。

5 ・四万十川の近くにある里山はなぜ、濃い緑の部分と
6 薄い部分があるのだろうか。



里山の原風景

・なぜ、原生林が大事なのかな。

→葉が落ちることで、山が肥える。山が肥えると、川が潤う。川が潤うと多様な生き物が生息する。

【相互】

◇濃い緑の部分は原生林（天然の落葉樹）、薄い緑の部分は人工林（常緑樹）であることを理解させる。

◇原生林は人工林と違い、落葉することで山を肥えさせ、そこに雨が降ると、山から川に栄養分が供給されることを理解させる。

<p>7</p> <p>8</p>	<p>【四万十川保全の取り組みを知ろう】</p> <p>○「四万十川条例」について調べ、発表しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜ四万十川条例ができたのか？ →県民、国民共有の財産として、後世にこの清流を引き継いでいくため。 ・四万十川条例にはどのような内容があるのか。 →四万十川の水量が豊かで、かつ、清流が保たれていること。 →天然の水生植物が豊富に生息、生育していること。 →河岸に天然林が連なり、良好な景観が維持されていること。 	<p>◇四万十川の保全のために、「生物」、「景観」、「原生林」の点について、自然を復元することを目指した項目が出ていることを理解させる。</p>
<p>9</p> <p>10</p>	<p>【大和川の現状について考えよう】</p> <p>○奈良県土木課の方をゲストティーチャーに招き、大和川の現状について話を聞く。</p> <p>○大和川再生のために、四万十川の取り組みを活かして「一人一人ができること」をテーマに話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・四万十川で大事にされていたことは？ →「山（原生林）」、「生き物」、「自然を生かした景観」 	<p>◇前時までに学んだ四万十川と比較しながら考えさせる。</p> <p>◆大和川の現状と四万十川の取り組みを照らし合わせながら、未来に向けて自分ができることを考え、表現しようとしている。 《未来》</p>
<p>11</p> <p>12</p> <p>13</p> <p>14</p>	<p>【大和川再生プロジェクトを立ち上げ、実行しよう】</p> <p>○グループ毎に「山（原生林）」、「生き物」、「自然を生かした景観」の中からテーマを決め、大和川再生のためのプロジェクトを考える。</p> <p>○3つのテーマに分かれて考えたプロジェクトを「大和川再生プロジェクト」として1つのものにする。</p> <div data-bbox="268 1422 751 1758" style="text-align: center;"> <pre> graph TD A([山]) --- B[] C([生物]) --- B D([景観]) --- B B --- E[大和川再生プロジェクト] style B width:0px,height:0px </pre> </div> <p>○県の土木課の方を招き、プロジェクトを発表する。</p>	<p>◇学習した四万十川での取組と奈良県土木課の方から聞いた大和川の現状を照らし合わせて再生の方策を考えるようにする。</p> <p>◆四万十川、大和川に関する情報を集め、自分の役割を理解し、出来ることを発表している。 《参加》</p>

郷土料理の良さを再発見

～長野県の昆虫食・鯉料理を手がかりとして～

生駒市立生駒東小学校 山方 有香

1. ESDを生かした授業づくり

(1) 単元名・学校種と学年

自分の住んでいる土地に伝わる食べ物について知ろう 小学校 第5学年

(2) 単元の概要

本単元は、長野県の特徴ある伝統料理（イナゴ・ザザムシ・ハチノコ・鯉料理）を切り口に、料理を守り受け継いできた人たちの思いを知り、自分たちの地域に伝わる食文化の良さに気付くことをねらいとしている。

長野県では、一般的にはあまり食べられないイナゴやザザムシ、ハチノコといった昆虫を食べる風習【多様性】がある。平野が少なく農業ができる土地が限られていたこともあり、昆虫が貴重な蛋白源として食べられてきた。また、佐久地区と呼ばれる長野県の東部では昔から水田に鯉の稚魚を放流し、稲作を行いながら鯉を育てるという養殖方法（水田養鯉）が盛んに行われている。鯉は食欲が旺盛で害虫や雑草を多く食べるため、農薬を使う必要がない。さらに、成長した鯉は、あらい（刺身）や鯉こく、うま煮として食べられるため無駄がない【相互性】。また、「鯉を食べると医者いらず」と言われるほど体に良いとされ、縁起物としても大切にされてきた。その年の健康を祈り、年越し魚として食べられている。土地の開拓により田畑が減少しつつある現在でも、これらの食文化は地域の人々によって受け継がれている【連携性】。

児童は、家庭科で地域によって食文化が違うことを学習している。近年、生産技術の向上や輸入品の増加により、スーパーには様々な食品が売られており何でも手に入れることができる。そのため地域の特有の食を意識することが少なくなっている。昆虫食や鯉料理といった地域特有の食文化を通して、自分たちの住んでいる地域の風土や食文化を知り、食の大切さを理解させたい。

【持続可能な社会づくりの構成概念】

構成概念Ⅰ 多様性…それぞれの地域によって、食文化に特色があること。

構成概念Ⅱ 相互性…イナゴを捕獲することで、金銭的な収入源となること。また、水田に鯉を放つことにより減農薬作用があり、さらにその鯉を食すこと。

構成概念Ⅴ 連携性…地域の人々が環境を守りながら、伝統的な食文化が受け継がれていること。

2. ESDの視点を生かした授業の実際

(1) 単元の目標（重視する能力・態度）

《未来》

自分が住む地域の伝統料理が、将来どうなるかを考え、また伝承できるよう行動に移すことができる。

《多面》

地域によって異なる食文化があることに気付くことができる。


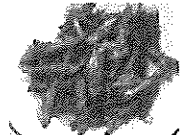
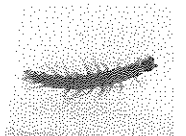
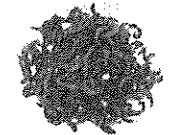
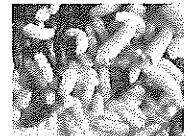

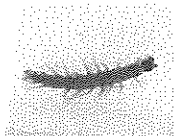
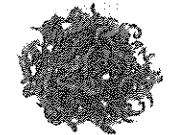
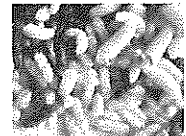

《関連》

地域の伝統料理が生まれたルーツや、現在まで伝承されていることを理解することができる。

(2) 評価規準

関連 関心・意欲・態度	未来 思考・判断・表現	多面 技能	関連 知識・理解
①地域の伝統料理が生まれたルーツについて意欲的に学習している。 ②地域の伝統料理が現在まで伝承されていることについて意欲的に学習している。	①自分の住む地域の伝統料理が将来どうなるか考えている。 ②伝統料理が途絶えないよう考えたことを適切に表現している。	①地域によって異なる食文化があることについて、資料を集め、必要なことを読み取っている。	①地域の伝統料理が生まれたルーツや、現在まで伝承されていることを理解している。

(3) 単元の計画 (全6時間)

時間	主な学習活動と内容	◇教師の支援 ◆主な評価
1	<p>【地域特有の食べ物について知ろう】</p> <p>○右のような昆虫が食べられていることを知る。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>イナゴ</p>  <p>佃煮</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>ザザムシ</p>  <p>大和煮</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>はちのこ</p>  <p>佃煮</p> </div> </div> <p>○昆虫が食べられている地域を知り、共通点を考える。</p>	<p>◇昆虫の写真と調理後の写真を提示する。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>ザザムシ</p>  <p>大和煮</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>はちのこ</p>  <p>佃煮</p> </div> </div> <p>◆地域の伝統料理が生まれたルーツについて意欲的に学習している。《関・意・態①》</p> <p>◇資料を提示して共通点を考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海に面していない地方 ・山間部

	<p>○イナゴ等の昆虫が食べられるようになった理由を考える。</p> <p>○豊かになった今でも、イナゴが食べられている理由を考える。</p>	<p>◆地域によって異なる食文化があることについて、資料を集め、必要なことを読み取っている。《技能・①》</p> <p>◇昆虫を食べることの利点を伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農産物が取れなくなる冬場の保存食になる。 ・貴重な蛋白源になる。 ・イナゴによる農作物への被害を減らすことができる。 ・イナゴを買い取る業者が存在する。 <p>◇伝統料理保存のために活動している人々がいることを伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーや道の駅、地域の特産品売り場で売られている。 ・J A信州のホームページにはイナゴの収穫法や調理法が紹介されている。 <p>◇イナゴを捕まえることで稲は守られ、食べることで自分たちの栄養になっていることに気付かせる。</p> <p>◆地域の伝統料理が現在まで伝承されていることについて意欲的に学習している。《関・意・態②》</p>
2	<p>【他に特徴のある伝統料理を知ろう】</p> <p>○鯉料理があることを知る。</p> <p>○鯉が食べられるようになった理由を考える。</p>	<p>◇長野県佐久地方に伝わる鯉料理について伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あらい（刺身） ・鯉こく ・うま煮 ・塩焼き <p>◇水田に稚魚を放し育てられていることを伝える。</p> <p>◇水田で鯉を育てる利点をおさえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・害虫や雑草を鯉が食べて成長する。 ・農薬の使用量が減る。 ・成長した鯉は貴重な食材として食べられる。 <p>◇鯉はお正月によく食べられていることを伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・病気をせず一年健康に過ごせるようにという思いが込められている。
3 4	<p>【自分の住んでいる地域の伝統料理について調べよう】</p> <p>○お正月料理を調べる。</p>	<p>◇お正月料理に込められている意味を探る活動を取り入れる。</p> <p>◇地域によって食材や食べ方が異なることに気付かせ、そこに込められた願いを考える。</p>

5	○伝統料理について調べる。	◇伝統料理は、地域の気候や風土に即していることを気付かせる。 ◇伝統料理に込められた意味を探る活動を取り入れる。 ◇伝統料理を作り続けている人にインタビュー機会を設ける。
6	○伝統料理を絶やさないためにできることを考える。	◆自分の住む地域の伝統料理が将来どうなるか考えている。 《思考・判断・表現①》 ◇理想だけでなく、児童自身にできることを考えさせる。 ◆伝統料理が途絶えないよう考えたことを適切に表現している。《思考・判断・表現②》

100年後の町のために、今やらねばならぬこと（第6学年）

～三池炭鉱の将来を見据えた團 琢磨の考えに学ぶ～

奈良市立済美小学校 大西 浩明

1. ESD を生かした授業づくり

(1) 単元名・学校種と学年

「100年後の町のために、今やらねばならぬこと」

～三池炭鉱の将来を見据えた團 琢磨の考えに学ぶ～ 小学校 第6学年

(2) 単元の概要

本単元は、2013年に世界遺産暫定リストに登録された「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」の構成資産である三池炭鉱を取り上げ、その発展に尽くした團琢磨の考えや生き様から、今だけを考えた行動でなく、将来を見据えた考えを持つことの大切さを実感し、その実践力を身に付けることをねらいとしている。

團琢磨は、14歳で岩倉使節団の一員としてアメリカで鉱山学を学び、帰国後、三池炭山局の技師となる。当時の三池炭鉱は、石炭の埋蔵量は豊富であるものの、掘るほどに水が出てくるという問題があり、国営時代の政府を悩ませていた。そこで、團は周囲の猛反対を押し切って高価な英国のデーヴィー・ポンプを導入し、三池炭鉱の出炭量を数倍に跳ね上がらせた。また、囚人を鉱夫とするのではなく、広く一般市民に正当な賃金を支払って雇用するように、自らの進退をかけて上層部と交渉して三池炭鉱の近代化を進めた。さらに、出炭の効率化を図るためには不可欠だった大きな港の建設においては、「三池の石炭もいつかは尽きる。石炭が尽きても地元の人が生活できるように、港を築き100年の基礎とする。」と、1万tクラス的大型船が接岸できる三池港を難工事の末に完成させた。現に三池炭鉱がその役割を終えた100年後の今も、当時の姿のまま地元の産業と流通を支えている。このような團琢磨の業績は、目先の利益にとらわれず、常に将来の人々に思いを馳せて行動した結果であるとともに、三池炭鉱のことだけではなく三池の人々、さらには日本全体のことを考えたグローバルな考えに基づいている。これは、江戸末期に奈良で、川路聖謨が将来の人々のことを思って私財を投じ、寄付を募って多くの木を奈良の町に植えたのと同じように、町の発展のために、そこに生きる人たちの幸せのために、未来へのビジョンを持って、自分がどう行動することがよりよい行動なのかを考えられる題材である。

学習を展開するにあたっては、終末に100年後の自分たちの町へのビジョンを持ち、自分なら今これをしていくという具体的な行動化を図るために、前述した團琢磨の三つの業績からその意図を考えていく。そのために、社会科の学習において明治維新期の殖産興業では、石炭の採掘が当時の重要な国家事業であったことを取り上げ、当時の採炭の様子や三池炭鉱の実像について調べる。その中で、團琢磨が周囲の猛反対を押し切っておそろしく高価な英国のデーヴィー・ポンプを導入したのは、単に三池炭鉱のことだけを考えたのではなく、日本の炭鉱全体の発展を思って粘り強く交渉したことや、囚人に強制的に採炭させることの不合理さを訴えて市民の雇用を促進し、三池の産業の発展と採炭技術の進歩に寄与したことから、正しいと思ったことを行動化することの大切さを実感させたい。さらに、三池港建設に際し團琢磨が言った「石炭が尽きても、地元の人が生活できるように、港を築き100年の基礎とする。」という言葉から、二つのことを考えさせる。一つは、

石炭はエネルギー変革によってその使命を終え、炭鉱の大部分は閉山していること【有限性】。もう一つは、石炭産業なき後の100年後を考えた團のように、そこに生きる人たちや町全体のことを考えて自分の生き方を見つめ直し、自分も社会の一員として、どのように行動していくことがよりよい社会の形成につながるのかを一人一人が具体的に考え行動化していくことの大切さである【責任性】。

以上のような学習を通して、よりよい社会の形成に参画することの大切さや、その実践力を身に付けさせたいと考える。

(3) ESDの視点の明確化

【持続可能な社会づくりの構成概念】

構成概念Ⅲ 有限性…エネルギーや産業は時代とともに変化すること。

構成概念Ⅵ 責任性…一人一人が自分の町の100年後の姿を思い描き、よりよい未来への行動化ができること。

2. ESDの視点を生かした授業の実践

(1) 単元の目標（重視する能力・態度）

能力・態度② 未来像を予測して計画を立てる力

自分の町の100年後の姿を思い描き、よりよい町のために自分ができることを考えることができる。《未来》

能力・態度③ 多面的、総合的に考える力

自分の町の現状や発展について、様々な産業やそこに住むいろいろな人の立場になって考えることができる。《多面》

能力・態度④ コミュニケーションを行う力

自分の考えた100年後の町のためにできることを、分かりやすく伝えることができる。《伝達》


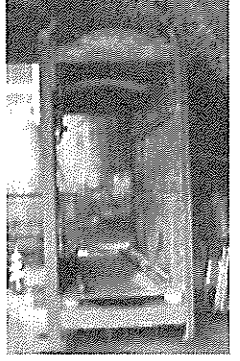

能力・態度⑦ 進んで参加する態度

自分の考えた100年後の町のためにできることを、今できることから実践することができる。《参加》

(2) 評価規準

未来・参加 関心・意欲・態度	未来・伝達 思考・判断・表現	多面 技能	多面 知識・理解
①自分の考えた100年後の町のためにできることを、今できることから実践しようとしている。	①よりよい町のために自分ができることを様々な立場に立って考えている。 ②100年後の町のためにできることを、分かりやすく伝えている。	①明治期の石炭産業の様子や三池炭鉱の様子について、情報を集めて適切に調べている。	①團琢磨が三池炭鉱を発展させるために行った功績や、その意図について理解している。

(3) 単元の計画 (総時数5時間…うち1時間は社会科)

時	主な学習活動と内容	◇教師の支援 ◆主な評価
1	<p>1. 明治期の石炭産業や三池炭鉱について調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・石炭採掘は国家事業であったこと ・三池炭鉱は日本一の出炭量を誇ったこと ・三池の石炭産出は水との戦いであること ・当時の採炭作業は過酷を極めたこと ・鉱夫に囚人が使われていたこと <p>など。</p> <p>2. 明治の日本の近代化に、石炭が果たした役割について考える。</p>	<p>◇ 社会科の学習として位置付ける。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p style="text-align: center;">万田坑の坑口跡 坑道へ下りるかご</p> <p>◇石炭が殖産興業には欠かせない重要なエネルギーだったことに気付かせる。</p> <p>◆明治期の石炭産業の様子や三池炭鉱の様子について、情報を集めて適切に調べている。</p> <p style="text-align: right;">《多面》</p>
2	<p>1. 三池炭鉱を発展させた團琢磨について知り、その業績について考える。</p> <div style="display: flex; align-items: flex-start;">  <div style="margin-left: 10px;"> <p>・莫大な費用を払って大型排水ポンプを設置した。</p> <p>・囚人を鉱夫として強制的に働かせるのではなく、一般市民に正当な賃金を支払って雇用した。</p> </div> </div> <p style="text-align: center;">團 琢磨 (1858～1932)</p> <p>2. 團琢磨は、なぜそのような施策を講じたのか、その意図について考える。</p>	<p>◇「この三池での成功は、日本各地で水に悩まされている多くの炭鉱の先鞭となるはず。」と唱えた團の言葉を紹介する。</p> <p>◇当時の採炭労働の過酷さを紹介し、なぜ囚人を使わなければならなかったか考えさせる。</p> <p>◇團琢磨の考え方は、自分たちだけの利益や目先の利益だけを考えたものではないことに気付かせる。</p> <p>◆團琢磨が三池炭鉱を発展させるために行った功績や、その意図について理解している。</p> <p style="text-align: right;">《多面》</p>
3	<p>1. 三池港を築くにあたって團琢磨が言った言葉の意味について考える。</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin-top: 20px;"> <p>「石炭山の永久などということはありません。</p> <p>築港をやれば、そこにまた産業を興すことができる。</p> <p>築港をしておけば、いくらか100年の基礎になる。」</p> </div>	<p>◇100年経った現在では、石炭はその役割を終えていることを確かめる。</p>

	<p>2. 團琢磨の三池に対する思いについて話し合う。</p>	<p>◇團は、港を建設することでどんな三池の未来像を描いたのかを考えさせる。</p> <p>◇100年経過して、現在も使われている三池港の現状を紹介することで、團の願いが現実となっていることに気付かせる。</p> <p>◆團琢磨が三池炭鉱を発展させるために行った功績や、その意図について理解している。</p> <p style="text-align: right;">《多面》</p>
4	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-bottom: 10px;"> 自分たちの町の「100年後のために、今やらねばならぬこと」を考えよう </div> <p>1. 自分たちの町の現状を省みて、その課題について話し合う。</p> <p>2. 自分たちの町のよりよい100年後の姿を思い描き、そのために今自分がやらなければならないことを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 100年後の自然環境 ・ 100年後の産業や交通環境 ・ 100年後の人口や外国とのつながり ・ 100年後の防災や安全 ・ 100年後の町並みや人と人の関係 	<p>◇様々な視点や様々な人の立場に立って、多様な課題があることに気付かせる。</p> <p>◇團琢磨のような、100年後のよりよい町の姿と、そのために自分ができる実現可能で具体的な方策を考えさせる。</p> <p>◆よりよい町のために自分ができることを様々な立場に立って考えている。 《未来》</p>
5	<p>1. 前時に各自が考えた「今やらねばならぬこと」について話し合う。</p> <p>2. 最終的に決めた自分の「今やらねばならぬこと」の行動計画を立てる。</p>	<p>◇お互いの考えを聞き合う中で、自分の考えを深めたり高めたりできるように助言し、より具体的な行動ができるようにする。</p> <p>◇今日からできること、今すぐにできることと、数年後にすること、20年後にすること…など、時間経過にそって計画を立てさせる。</p> <p>◆100年後の町のためにできることを、分かりやすく伝えている。 《伝達》</p> <p>◆自分の考えた100年後の町のためにできることを、今できることから実践しようとしている。 《参加》</p>

「天空の城」？竹田城（第5学年）

～受け継がれた穴太積み～

奈良市立富雄第三小中学校 河野晋也

1. ESD を生かした授業づくり

(1) 単元名・学校種と学年

『「天空の城」？竹田城～受け継がれた穴太積み』 小学校第6学年

(2) 単元の概要

本単元では、情報リテラシーという観点から遺産の価値を多角的に捉え、限られた情報では見出せない遺産の価値に気付くという学習活動を取り入れている。竹田城では現在、多くの観光客を迎えたことで保存に関わる問題に直面している。このことから、情報の受け取り手としての姿勢を見につけ、また美しい景観の維持という持続可能性について考えていくことができる。

①穴太積みの竹田城

竹田城の石垣は戦国期に数々の名城の石垣を作った穴太衆（あのをしゅう）の手による。穴太衆による石垣積み（穴太積みと呼ばれる）の技術の高さは織田信長の耳に届き、安土城の着工に携わったことでその名を広く知られるようになった。その後豊臣秀吉や徳川家康などに彼らの起用は引き継がれ、姫路城、伏見城、大坂城と多くの城で採用されるようになった。穴太積みは自然石を用いて（野面積み）いるため、排水の弁もよく非常に強固なものである。その技は「石の声を聞いて積む」「石の行きたいところにおいてやる」という極意とともに現代に継承され、穴太衆の末裔（栗田純司氏・滋賀県大津市坂本、穴太流十四代当主）らによって今でも日本各地の寺社城が改修されている。今年から、竹田城の修復にも穴太衆が携わることになった。

②「天空の城」としての竹田城

現在の竹田城は、山頂に築城されたことで秋から早春にかけて雲海の中に見ることができ、「天空の城」「日本のマチュピチュ」などと呼ばれて親しまれるようになった。観光客増加のきっかけは日本100名城に選ばれたことや映画、CM、テレビドラマなどの撮影地となったことなどが考えられる。ただし、観光客が増加した結果、路面の悪化や価値が高いとされてきた石垣の崩落の危険性が高まり、その維持に問題が生まれてきている。市には竹田城課が設置され、一部立ち入り制限や入山料の徴収なども始めているが、一部マナーを守らない観光客などの影響もあり、その維持保存は急務の課題となっている。

③見えにくい竹田城の魅力

現在では、情報ツールの多様化により様々な情報を簡単に手に入れることが可能になっている。しかし、我々が目にする情報は一部分に過ぎず、必ずしもすべての情報を正確に受け取ることができるわけではない。テレビなどで竹田城の雲海について知っている児童もいるだろうし、写真を見せれば自然のすばらしさや美しさを感じ取ることはできるだろう。「天空の城」という表現は竹田城のよさを非常に的確に示した言葉であるが、石垣の素晴らしさや受け継がれてきた伝統の素晴らしさ、保存の工夫が必要であることや崩壊の危険性を訴えるものではない。美しさを表現したすばらしいキャッチコピーであるが、文化財の保護という意図を伝えるものではない。このように表現の仕方一つで情報の受け取り手の思いが大きく変えられてしまうことをあわせて考えさせたい。穴太衆による石積みが現存されていることや、その技を数百年間受け継いできていること、も文化遺産としての

価値として大きいものである。現在の美しさは、かつて石の声を聞きながら石垣を積んだ穴太衆によって支えられるといっても過言ではない。受け継がれている事実をすることで、新しい竹田城を見る観点、さらには地域や文化遺産を見る観点が養われると考えた。

【持続可能な社会づくりの構成概念】

構成概念IV 公平性・頑丈であるはずの石垣が観光客の増加によって

崩れかけていることを知り、竹田城の保全、安全管理について考え、景観や穴太衆の技など竹田城のすばらしさを後世に伝えていくことの大切さを考える。【公平】

構成概念VI 責任制・県外市外からの観光客が朝来市の遺産を傷つけてしまっている現状を知り、文化遺産に対する姿勢を身に付ける。【責任】

《情報館「天空の城」 館長さんのお話》
 観光客が増えたのはこの3、4年の間。日本の100名城に選ばれたことがきっかけとなり、また「歴史」などの言葉がはやったように歴史ブームがあったことも要因。さらに拍車をかけたのが高倉健さんの「あなたへ」という映画の撮影地になったこと、グーグルのCM、最近の大河ドラマなども。映画については、今でも「良かった！」「あのシーンがすてきだった」という声を聴くという。ただ町はあまり変わらない。お土産屋さんなんかは見てもらったらわかるとおり、まだまだ少ない。空き家も多いけれど、もともとあまりよその人を迎えようという町、風土ではないという原因もある。
 来場者からお金取り始めたのも最近。冬はとらない。管理できず、また危ないから。自分の責任で上っていただくということにしないとむずかしい。以前もけがした人いた。今後は写真撮影場所もふくめて見学の通路作っていく。
 観光客が増えると保存の問題が難しい。昔は草刈りしなければいけないほど雑草が伸びていた。今ではたくさん踏みため草が生えず土がむき出しになっている。すると靴についたり、剥がれ落ちたりして、土が減ってしまう。また雨降れば流れてしまう。結果石垣も浮いてしまい、崩れやすくなってしまふ。
 今も栗田さんが修繕に行き200年もつ石垣を作りたいと言ってくれている。私たちにとってはあそこに城跡があるのは当たり前のことだが、それがなくなることを考えたらやはり悲しい。

2.ESD の視点を生かした授業の実践

(1) 単元の目標 (重視する能力・態度)

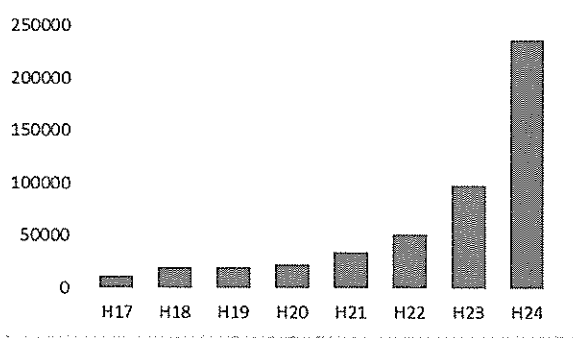
能力・態度① 多くの観光客を集める竹田城の現状を知り、メディアの伝え方について考え、より多面的に魅力を伝える方法を考える。《批判》


能力・態度⑥ 竹田城の石垣が400年前から受け継がれているものであることを知り、現在でも穴太衆の技と極意が受け継がれ、現在の石垣の修復に携わっていることを知る。《関連》

(2) 評価規準

批判 関心・意欲・態度	関連 技能	批判 思考・判断・表現	関連 知識・理解
① 竹田城の美しさに関心を持ち、どのようなメディアが伝え方をし、人々がどのような興味を持ったのか関心をもつ。	① 穴太衆の石積がどのような歴史を持ち、今に受け継がれているのかを調べる。	① 観光客が増えたことによって、竹田城の保全にどのような影響があったのかを考える。 ② 観光客に訴えるべき竹田城の魅力や課題について考える。	① 竹田城の歴史や穴太衆の技の極意について知る。

(3) 展開の概要

時間	主な学習活動と内容	◇教師の支援 ◆主な評価																		
1 時間	<p>【竹田城について知ろう】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 2枚の写真（一つは雲海に浮かぶ城、もう一つは石垣の見える写真）を見て、様子を比べる。 ○ かつては廃城となり、石垣しか残らない竹田城の写真を見て、感想をもつ。 <p>周りには雲？すごく高いところにあるの？</p> <p>きれいな景色！行ってみたいな。</p> <p>これお城なの？建物は残ってないけど。</p>	<p>◇ 「どちらに上りたいか」など二つを比べるような発問をし、同じ城でも感じ方が様々であることに気づかせる。</p> <p>◇ 「雲海に浮かぶ石垣」という竹田城ならではの魅力に気づかせる。400年以上の歴史があることや名城100選に選ばれていることもあわせて伝える。</p> <p>《批判》</p>																		
<p>竹田城はなぜ急に人気になったのだろう</p>																				
2 時間	<ul style="list-style-type: none"> ○ 竹田城の人気が近年急速に高まっていることを知り、その原因を考える。 ○ 竹田城の写真を見ながら、竹田城の魅力を端的に伝えるキャッチコピーを考える。 <p>みんな景色を見に行くのかな。</p> <p>400年前からあったのに、なぜ急に観光地になったのかな。</p> <p>テレビやCMに取り上げられたらしいよ。撮影場所になったんだ。</p> <p>どこの地域も「行ってみたい！」と思うようなキャッチコピーだね。</p> <p>私なら雲の美しさを伝えるコピーを考えるなあ。</p> <p>「天空の城」 「日本のマチュピチュ」 「恋人たちの聖地」</p> <p>「天空の城」か！確かに行ってみたいくなるね。</p> <p>「日本のマチュピチュ」？どんなところだろう。調べてみよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 来場者数の変化を読み取らせる。 ◇ 子どもの発言を受け止め、テレビで紹介されたことがきっかけであることを伝える。《批判》 <p style="text-align: center;">竹田城 観光客数(人)</p>  <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <caption>竹田城 観光客数(人)</caption> <thead> <tr> <th>年</th> <th>観光客数(人)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>H17</td><td>10,000</td></tr> <tr><td>H18</td><td>20,000</td></tr> <tr><td>H19</td><td>25,000</td></tr> <tr><td>H20</td><td>30,000</td></tr> <tr><td>H21</td><td>40,000</td></tr> <tr><td>H22</td><td>50,000</td></tr> <tr><td>H23</td><td>100,000</td></tr> <tr><td>H24</td><td>230,000</td></tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> ◇ 竹田城はテレビやポスターなどでどのようなキャッチコピーで観光客を集めたのかを考える。(参考として子どもたちの住む地域にある観光地のパンフレットやポスターを見せて自分たちの街が様々なキャッチコピーで紹介されているかを知らせる。)《批判》 	年	観光客数(人)	H17	10,000	H18	20,000	H19	25,000	H20	30,000	H21	40,000	H22	50,000	H23	100,000	H24	230,000
年	観光客数(人)																			
H17	10,000																			
H18	20,000																			
H19	25,000																			
H20	30,000																			
H21	40,000																			
H22	50,000																			
H23	100,000																			
H24	230,000																			

<p>3時間</p>	<p>【観光客が増えるということは】</p> <p>○ 観光客が増えたことで、400年残されてきた石垣を修復工事することが決まったことを知り、地域の方の思いを考える。</p> <p>観光のためだから仕方ないと思っているんじゃないかな。</p> <p>人の命が危険なら、修復するべきだと思うな。</p> <p>市役所でも観光客を呼ぶアピールをしていたもね。</p>  <p>○ 「穴太積み」について調べ、互いに伝え合う。</p> <p>竹田城を直す人たちは、もともと竹田城の石垣を作った人たちと同じ集団なんだって！</p> <p>そんなに昔の技法を今に伝えているなんてすごい！</p> <p>穴太積みって難しそう。「石の声を聞く」ってどういうこと？</p> <p>石なのにコンクリートの壁よりも地震に強いんだって！</p> <p>○ 「200年維持できる石垣を作りたい」という穴太衆の思いを知り、雲海の写真からは見えない良さを伝えることのできるポスター・キャッチコピーを考える。</p> <p>一つ一つの石の声を聞きながら積まれた石垣だから、写真は一つの「石」を写したものがいいな。</p> <p>400年以上技を途絶えさせることなく受け継いできた穴太衆についてのキャッチコピーを考えたいな。</p>	<p>◇ 竹田城の石垣工事が、安全管理のためや来場者数が増えたことによる劣化を止めるため、などの理由で実施されることを伝え、市役所の方の400年残されたものを変えていくこと思いを考える。《関連・批判》</p> <p>ずっと残ってきたものが壊れていくのはやはりつらいんじゃないかな。</p> <p>せめて、できるだけ元の形を変えずに残して行きたいだろうな。</p> <p>◇ 竹田城の石垣を作った「穴太衆」がその技法を現在まで受け継いでいることを伝え、調べたことを話し合わせる。《関連》</p> <div data-bbox="813 1075 1300 1332" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>子どもに気づかせたい事柄</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現代に伝わる穴太衆「栗太建設」 ・秘伝の技と技術者の少なさ ・その評価の高さと「現代の名工」 ・技の難しさ「石の声を聞け」 <p>…仕事の様子を伝える文や新聞記事などを紹介する。</p> </div> <p>◇写真のレイアウトや、キャッチコピーなどを考えさえ、自身が伝えたいと思う竹田城の魅力をポスターにまとめる。《批判》</p>
<p>1時間</p>	<p>○ 自分の街のキャッチコピーを見直そう。</p> <p>鹿といっしょに生活してきた人々についてキャッチコピーを考えても面白いよ。</p>	<p>◇再度自分の市（県）のパンフレットやポスターを見て、伝えるべき良さが伝えられているか、問題にすべき問題が隠れていないかを考える。《批判》</p>

参考文献 「国史跡 竹田城跡」和田山観光協会 編集・発行 H13

「砂丘物語から地域再発見！」（第1学年）

奈良教育大学社会科教育専修 3回生 二階堂 泰樹

1. ESD を生かした授業づくり

(1) 単元名・学校種と学年

「地元再発見！ 砂丘物語～生活と環境～」 中学校1年生

(2) 単元の概要

本単元は、日本を代表する海岸砂丘である鳥取砂丘を題材に、地域の遺産に目を向け守ろうとすることが、地域活性化や環境保護につながることを学ばせ、また、実際に生徒たちが住む町にも目を向け、自分たちの住む町の遺産を再発見させることで地域を大切に思う心、次世代に残していこうという考えを養うものである。

鳥取砂丘は、鳥取県鳥取市の日本海岸に広がる広大な海岸砂丘である。また、山陰海岸国立公園に指定されており、南北 2.4km、東西 16km に広がる日本最大の観光砂丘でもある。1955年には砂丘の中心部が国の天然記念物に指定された。風と砂が織りなす風紋や、砂漠のような風景に多くの観光客が訪れ、地域の人々にとって、砂丘は文化遺産であり観光資源にもなっていた。

しかし、鳥取砂丘が地域住民に注目されたのは、戦後であり、戦時中は陸軍の訓練場所として利用されるなど現在のように皆で保護をするという意識がなかった。また、鳥取砂丘から飛んでくる砂の害（飛砂）は近隣の住民にとって悩みの種であり、明治時代には丘から吹き降ろす砂で民家二軒が押しつぶされ死人を出す事態も発生している。飛砂の被害を抑えるため、県や地域住民は植林を始めた。一時は砂丘全面に植林をする計画も出たが、砂丘保護の運動が高まり、現在の 100ha ほどの砂丘が残された。大規模な植林は功を制し、周囲への飛砂は減少した。しかし、その一方で砂丘の砂の移動が変化し、砂丘本来の景観が崩れ始めた。大規模な植林が砂の移動を遮ったのである。また、同時期に実施された調査では従来から砂丘に生育していた海浜植物や多数の外来植物などが分布を広げていることが判明し、砂丘の草原化が進んだ。このことも、砂丘の景観を損なわせる要因の一つとなった。砂丘の美しい景観を守るために、防砂林として植林したクロマツの伐採や外来植物などの除草活動が行われた。特に除草活動は多くのボランティアや地域住民によって現在でも続けられており、砂丘の保護と地域住民の生活とのバランスを図りながら両者の共生が進められている。鳥取砂丘には、美しい砂丘を保護しようと立ち上がった人々によって保全され、現在の観光資源としての鳥取砂丘に整備された歴史がある。地域の遺産が、失われていたかもしれないこと。（責任性）そして、多くの人によって守られ、受け継がれてきたこと（連携性）を意識させ、自分たちの住む地域に目を向かせさせ

たい。

【持続可能な社会づくりの構成概念】

概念V 連携性 砂丘の景観を守るため多くの人々が協働し、未来につなげることで成し遂げられる。

構成概念VI 責任性 住民生活と砂丘との共存を考え、自分に出来ることを行動に移していく。

2. ESDの観点を生かした授業の実践

(1) 単元の目標（重視する能力・態度）

《未来》

砂丘の景観は自然や人為的な環境により変化することを考え、人と共生しながらどのようにして未来に伝えていったらよいのか考えることができる。

《多面》

砂丘を通して保存するには、住民の生活、自然環境、地域社会等を多面的・総合的に考えなければならぬことが分かる。

《伝達》

砂丘の景観保存の為、砂丘で生計を立てている人、周辺住民、観光客等へのインタビュー活動を基にして、保存に向けて自分の考えを発信することができる。


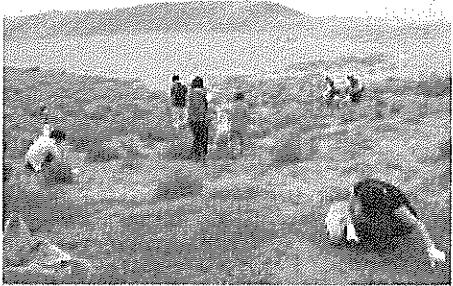

《参加》

砂丘の景観保存活動を調べ、自分の役割を自覚して積極的に取り組む実践力を養う。

(2) 評価規準

未来 関心・意欲・態度	伝達 思考・判断・表現	参加 技能	多面 (知識・理解)
① 砂丘の景観保存について調べ、自分ごととして取り組もうとしている。	① 人と遺産の共存の大切さを考え、発信している。 ② 学習を通して、自分の考えを資料に基づいて表現している。	① 砂丘の景観保存や他の遺産についての情報を集め、主体的に取り組もうとしている。	① 地域社会との共存によって、文化財は守られていくことを理解している。 ② 文化財を守り未来に伝えていこうと努力することの大切さを理解している。

(3) 単元計画 (全10時間)

時	主な学習活動と内容	◇教員の支援 ◆主な評価
<p>1</p> <p>2</p>	<p>【鳥取砂丘について】</p> <p>○砂丘と砂漠の違いについて知る。</p> <p>○鳥取砂丘について知っていることをあげる。</p> <p>○鳥取砂丘の歴史について知る。</p>  <p>鳥取砂丘 (出典：鳥取市の山陰海岸ジオパーク情報ホームページ)</p>	<p>◇砂漠と砂丘の違いを説明する。</p> <p>◇飛砂による被害、それを克服するための努力そして、今、人と自然が共存している姿を捉えさせる。</p> <p>◆未来―① 多面―①</p>
<p>3</p>	<p>【景観を守るために】</p> <p>○鳥取砂丘の写真を見て思ったことを答える。</p> <p>○鳥取砂丘での除草活動を知る。</p> <p>○除草活動をしている人の話を聞こう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・除草がなぜ必要なのか。 ・なぜ 除草活動に従事しているのか ・除草と砂丘保護とどう関係しているのか  <p>鳥取砂丘の除草活動 (出典：同上)</p>	<p>◇鳥取砂丘に緑が多いことに気付かせる。</p> <p>◇活動の様子の写真を見せる。</p> <p>◇砂丘保護を訴えた人たちや除草活動などをする人たちがいなければ鳥取砂丘は失われていたかもしれないことに気付かせる。</p> <p>◆多面―②</p>  <p>鳥取砂丘の清掃活動 (出典：同上)</p>
<p>4</p>	<p>○前時を踏まえて、文化遺産の保存について意見の交流をしよう。</p>	<p>◇自分は、文化遺産にどう接するのか、保存についてどう活動するのか、という視点で交流させる。</p>

		◇文化財は共通の財産であることに気づかせる。 ◆伝達—① 参加—①
5 6	【地域遺産を見つけよう】 ○自分の地域で未来に残しておきたいものを探そう。	◇建物だけではなく、伝承・風景・芸能など今日まで残ってきたものやこれから残しておきたいものも調べるようにさせる。 ◇なぜ残したいのか、共通の財産となる（価値）を考えさせる。 ◆参加—①
7 8	【プレゼンテーション】 ○自分たちが発見した遺産を受け継いでいくことの価値について発表する。 ○本当に残す価値があるものかどうかを発表班以外が判定する。	◇価値の基になる評価基準を作成しておく。 ◆伝達—②
9 10	【遺産マップを作ろう】 ○認定された地域遺産を記した遺産マップを作成する。 ○自分たちの活動を全校生徒や地域の人々に発表する。	◇保存活動には、人々の協力が大切であることを理解させる。 ◇地域の人々に遺産の素晴らしさを再認識してもらい、保存していく行動に繋がるようにする。 ◆伝達—① 多面—②

3. 参考文献

「砂丘物語」読売新聞鳥取支局

「砂丘を知ろう —鳥取砂丘検定公式テキストブック—」鳥取砂丘検定テキストブック編集委員会

「軍艦島は過去のもの？」

奈良市立飛鳥小学校 教諭 松浦 慎
教諭 三木恵介

1. ESDを生かした授業づくり

(1) 単元名

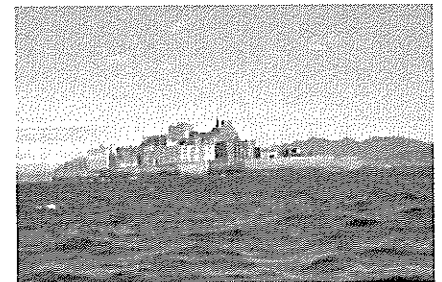
「軍艦島は過去のもの？」 小学校6年生

(2) 単元の概要

① 軍艦島について

本単元は、2009年に世界遺産暫定リストに登録された「九州・山口の近代化産業遺産群」の一つ、「軍艦島（端島）」を通して、産業の発展と衰退に対する認識を深め、社会の持続性について考え、自己の生き方・行動の変容を促すものである。

「軍艦島」は、長崎県長崎市にある「端島（はしま）」の通称である。かつては、海底炭鉱によって栄えていたが、閉山とともに島民が島を離れ、現在は無人島になっている。大きさは、南北約480m、東西約160mであり、最盛期の人口は約5300人（1960年）に達し、当時の東京の人口密度の約9倍であった。また、石炭の出炭は年間41万トンを誇り、日本の近代化を支えてきた炭鉱の一つであった。軍艦島の特筆すべき点は、わずか63000㎡の島に、炭鉱施設や住宅以外にも、小中学校、病院、寺院、娯楽施設（映画館、パチンコ、雀荘、社交場など）を有し、島内だけでほぼ完結した都市機能を備えていたところである。しかし、主要エネルギーの移行（石炭→石油）に伴い、石炭産業が衰退し、1974年1月に閉山し、同年4月、島は無人島となった。



無人島となって以来、建物の老朽化が進み、長らく立ち入りは禁止されていた。現在、安全面の問題がある程度解決され、長崎市の方針で2009年より島の一部に限り上陸・見学が可能になった。現在、「NPO 軍艦島を世界遺産にする会」等による「軍艦島上陸ツアー」が行われている。これまでの軍艦島上陸ツアーによる経済波及効果は65億円以上（2012年現在）に上る。

無人島となって以来、建物の老朽化が進み、長らく立ち入りは禁止されていた。現在、安全面の問題がある程度解決され、長崎市の方針で2009年より島の一部に限り上陸・見学が可能になった。現在、「NPO 軍艦島を世界遺産にする会」等による「軍艦島上陸ツアー」が行われている。これまでの軍艦島上陸ツアーによる経済波及効果は65億円以上（2012年現在）に上る。

② 教材化にあたって

軍艦島を教材化する上で注目したいキーワードは軍艦島の「過去」「未来」「現在」である。

- 「過去」…軍艦島は、炭鉱という単一資源に依存した島であり、その石炭がニーズを失ったため、島内の生活は持続性を保てなくなる。ここで、軍艦島は動きを止めた「過去」のものとなる。「過去」となった軍艦島を見つめることで、なぜ軍艦島は持続していくことができなかつたのか、社会を持続させていくには何が必要なのかを考えることができる。
- 「未来」…現在の日本の産業衰退や過疎化が進む地域社会にとっては、軍艦島は他人事ではない。軍艦島はそれら地域社会の「未来」の姿かもしれない。軍艦島を他人事の事例と考えるのではなく、自分たちの地域にも当てはめることはできないか、自分たちの地域を未来に持続させていくためには何が必要なのかを考えるきっかけになる。
- 「現在」…社会から忘れられ過去のものとなった軍艦島は、「NPO 軍艦島を世界遺産にする会」を中心とした人々の活動により、観光地として注目を集めることとなった。産業遺産として軍艦島を活用・保存していくことで、島は「現在」にその姿をよみがえらせる。歴史の中で消えようとしていた軍艦島を、遺していこうとする人々の思いや願い・活動に触れることで、ふるさとを遺すためには、人々の思いや願い・行動が必要であることを理解することができる。

【持続可能な社会づくりの構成概念】

構成概念Ⅱ 相互性…「過去」の軍艦島の視点から、人々の暮らし（軍艦島）と地域資源（石炭）の関わりについて理解し、社会の持続性について学ぶ。

構成概念Ⅴ 連携性…「現在」の軍艦島の視点から、持続可能な社会の実現のためには、地域に暮らす人々の協力や思い、そして行動が必要であることを学ぶ。

構成概念Ⅵ 責任性…「未来」の軍艦島の視点から、自分たちの地域社会の将来像を描き、持続可能な社会の構築のために主体的にかかわっていく。

2. ESDの視点を生かした授業の実践

(1) 単元の目標（重視する能力・態度）

《批判》

軍艦島がなぜ地域社会として持続することが不可能であったかを考えることで、持続可能な社会の実現には、何が必要かに気付くことができる。

《来来》

軍艦島の事例を通して、地域を持続させていくには何が必要で、自分たちに何ができるかを考える。

《関連》

軍艦島の発展と石炭が関連していることがわかる。
軍艦島の事例と似た地域が他にもあることがわかる。

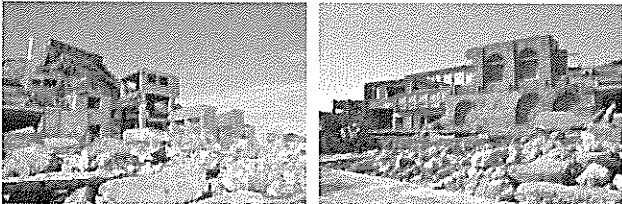
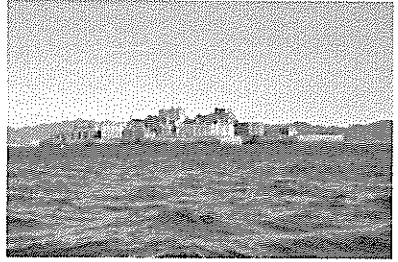
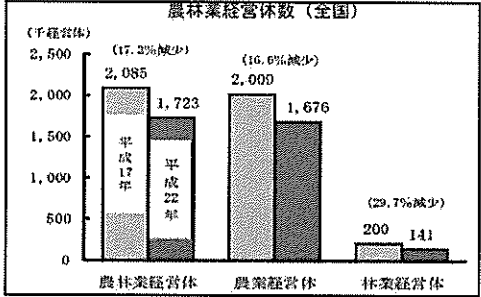
《参加》


軍艦島の事例を通して、自分たちの地域でもできることはないかを考え、行動に移すことができる。

(2) 評価規準

関心・意欲・態度 (批判)	思考・判断・表現 (未来)	技能 (参加)	知識・理解 (関連)
①なぜ軍艦島が持続できなかったか関心をもつ。 ②地域の保存・持続のためには、様々な思いや行動があることを知り、軍艦島の取組みに関心を持つ。	①軍艦島の事例を通して、地域を持続させていくには何が必要で、自分たちに何ができるかを考える。	①軍艦島の事例を通して、自分たちの地域でもできることはないかを考え、行動に移すことができる。	①軍艦島の発展と石炭が関連していることがわかる。 ②軍艦島の事例と似た地域が他にもあることがわかる。

(3) 単元の概要 (全5時間)

時	主な学習活動	◇学習への支援 ◆評価
1	<div style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <h3>軍艦島ってどんな島？</h3> </div> <p>○軍艦島について知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> 一枚絵から想像を膨らませます。 なぜ「軍艦」のような島になったのだろうか？ <ul style="list-style-type: none"> 生活に必要なものをどんどん作ったから。 かっこよかったから。 基地にしたかった。 など <p>○軍艦島が無人島になった理由を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 廃墟と化した写真を見て考える。  <p>○資料 (別紙) から理由を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 石炭の国内生産・輸入量の推移 石油の消費量・輸入量の推移 	 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>基礎データ</p> <ul style="list-style-type: none"> 長崎県の端島、港から約 30 分 面積 約 63000 m² (甲子園 5 個分) ピーク時は約 5300 人住んでいた。 (東京の人口密度の約 9 倍) 石炭が採れた。家族で住み込んで採掘。 島にあったもの→炭鉱施設、住宅 小中学校、病院、寺院、娯楽施設 (映画館、パチンコ、雀荘、社交場など) </div> <p>◇様々な角度から無人島になった理由を考え、最終的に「石炭採掘のためだけの島であったため、エネルギーの転換により必要がなくなった」という旨を押さえる。</p> <p>◆軍艦島と石炭の関連がわかる。(知・理①)</p> <p>◆自分なりに無人島化の理由を考えている。(関・意・態①)</p>
2	<div style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <h3>軍艦島は「過去のもの」？</h3> </div> <p>○日本の他の産業に目を向ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> 漁業、漁村はどうだろう。 例 山口県下関市豊北町 林業、山村はどうだろう。 例 奈良の林業 農業、農村はどうだろう。 例 消滅集落、限界集落など <p>○軍艦島は自分たちが暮らす地域の未来の姿かもしれないことを知る。</p>	<p>◇5 年時に学習した社会科の「日本の産業」と結び付けて考えるようにする。</p>  <p>出典：「2010 年世界農林業センサス結果の概要 (暫定値)」</p> <p>◇共通点として「ニーズがなくなることによる衰退」や「安価な外国産の流入・国内産業の衰退」があることに気付かせる。</p> <p>◆軍艦島の同じような未来を辿るかもしれない地域があることがわかる。(知・理②)</p>

3	<div data-bbox="284 152 1206 264" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 軍艦島は「未来の姿」？自分たちの地域もそうなるの？ </div> <p>○自分たちの地域が持続していくためには、 どうすればいいか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの地域は持続可能なの？ <p>○軍艦島を未来に遺すための取組を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インターネットで遺す取組・伝える取組を調べる。 <p>→世界遺産運動 →観光地化</p>  <p>○自分たちの地域を未来に遺していくためには、「遺そうという思い」だけでなく「具体的な行動」が必要なことを知る。</p>	<p>◇HP「軍艦島を世界遺産にする会公式 WEB」などを活用する。</p> <p>◇あくまで「世界遺産運動」「観光地化」は未来に遺し、伝えるための手段の一つであるということに留意する。</p> <p>◆地域の保存・持続のためには、様々な思いや行動があることを知り、軍艦島の取組に関心を持つ。(関・意・態②)</p>
4	<div data-bbox="338 974 1193 1102" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 軍艦島は「過去」でも「未来」でもなく「遺したいもの」。自分たちの地域でも、今できることはないだろうか？ </div> <p>○自分たちの地域を未来に遺していくためにできることがないかを考え、行動に移す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在、放っておかれているモノ（過去）はない？ ・このまま放っておいたら未来にはなくなってしまふモノはない？ ・大切なものを未来に遺していくには何ができるだろう？ ・思い（考え）を行動に移そう！ 	<p>◇児童の実態に合わせて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クラス内…みんなに知らせたい、「友達のいいところ」はないか。 ・学校内…忘れられている「学校のいいところ」はないか。 ・地域…他地域に伝えたい「地域の素敵なおとこ・もの」はないか。 <p>など活動を展開する場を工夫する。</p> <p>◇自分たちにできる身近なことから考えさせる。</p> <p>◆地域を持続させていくには何が必要で、自分たちに何ができるかを考える。 (思・判・表①)</p>
5	<p>○取組内容・成果をまとめて他校・他学年に向けて発信しよう。</p>	<p>◇模造紙などに活動内容・成果をまとめ、「カルチャーボックス」として発信し、交流するようにする。</p> <p>◆自分たちの地域でもできることはないかを考え、行動に移すことができる。(技①)</p>

参考文献

- ・『軍艦島の遺産－風化する近代日本の象徴』後藤恵之輔・坂本道徳著 長崎新聞新書 2005
- ・長崎市発行、軍艦島リーフレット

名古屋城から文化遺産を考える（中学3年）

奈良教育大学持続発展・文化遺産教育研究センター 中澤静男

1. ESDを生かした授業づくり

(1) 単元名 名古屋城から文化遺産を考える 中学校3年生

(2) 単元の概要

本単元は、名古屋市のランドマークである名古屋城を題材に、文化遺産に危機的状況をもたらすものについて考え、自己の生き方を振り返ることを通して持続可能な社会づくりの担い手に求められる価値観のひとつである平和の文化を尊重する態度を育てることを目的としている。

① 名古屋城について

名古屋城は、1600年の関ヶ原の戦いで勝利を得、江戸幕府を開いた徳川家康が、大阪城の豊臣秀頼との武力衝突に備えて築城・拡張した城の一つである。1610年に将軍徳川秀忠の命により、秀吉恩顧の西国の外様大名を動員した天下普請の城である大阪への備えとともに、豊臣氏に加担のおそれのある者の財力の消耗させるのがねらいであったと言われている。名古屋城は名古屋台地の西北端に位置しており、台地の西面と北面が高さ10メートルの断崖になっているほか、断崖の下には泥沼が広がり、その西には庄内川、木曾三川が流れるなど、西からの攻撃を意識した天然の要害の地に築城されている。また、名古屋城は本丸、二之丸、西之丸、御深井丸、三之丸の五郭にわかれており、本丸には金の鯨で有名な天守閣、小天守、御殿、西南櫓がある。

② 金の鯨について

名古屋城のシンボリック存在として金の鯨がある。城郭の大棟の上に鯨を掲げることは、室町時代前期ころから、火事を防ぐまじないとして広まっていったと言われている。名古屋城の金鯨は、家康の権力・財力を誇るにふさわしく、金の純度は80%であった。

金鯨の大きさは、文政10年の記録によると次のようなものであった。

	全長	うろこの数
雄	2.57メートル（8尺5寸）	194枚
雌	2.51メートル（8尺3寸）	236枚

作り方としては、榎材（さわら、後にはヒノキ）で荒彫りにつくった心木に鉛板を貼り付け、さらに銅板で覆い、その上に大判小判を薄く延ばした金を張ったものであり、金の量は慶長大判で1,940枚、小判にして17,975両というものであった。

その後江戸時代に3回、藩の財政が逼迫したときに、金鯨を取りおろし、金鯨を鋳直している。

③ 金鯨のない天守閣

名古屋城のシンボリックな存在である金鯨は、ずっと天守閣にあったと思われているが、そうではない。明治2年の版籍奉還後、明治3年の藩議において、旧物破却の時流にのっとり、城郭並びに金鯨を取り壊して金に換え、禄を離れた旧藩士の帰農および生計資金と、城跡整理の費用に充てることを決議し、新政府に請願している。その頃駐日ドイツ公使であったフォン・ブランドが、名古屋藩知事

と政府に対して破却中止の勧告を申し入れたため、藩では金鯨の売却を思いとどまり、宮内省に献上することとなった。献上された金鯨のひとつは明治5年にオーストリアで開催された万国博覧会に出品され、もうひとつは、全国各地の博覧会に陳列された。その後、名古屋の豪商代表9名と県令が政府に金鯨返還の請願を提出し、明治12年に8年ぶりにもとの天守閣上に復帰した。【責任性】

名古屋城の金鯨のような有名な文化財でさえ、人々の考え方、人々の無関心によって失われる可能性があることを、この事実は示している。奈良の仏像などの文化財を廃仏毀釈から救ったのがアメリカ人フェノロサであり、金鯨や名古屋城を救ったのがドイツ公使フォン・ブランドであったという共通点から、大切なものでもそれが身近であたりまえのものであればあるほど、人々からは見えなくなってしまう傾向にあり、身近な文化遺産を再度見つめ直すことの大切さを示唆してくれるものである【相互性】。

④ 金鯨の蓬左文庫

しかし、この金鯨の取りおろし・献上には、別の味方も存在する。名古屋には今も蓬左文庫と呼ばれる尾張徳川家が所蔵していた和漢の優れた古典籍が所蔵されている文庫がある。蓬左文庫の始まりは、1616年の徳川家康の死去に際して尾張家に譲られた駿河御譲本と呼ばれる家康の蔵書3000冊である。その後歴代藩主による書物収集により蔵書が拡大され、幕末期には5万点になっていたと推察される。この蓬左文庫を守るため、金鯨を差し出したという意見がある。開庁後間もない名古屋藩庁としては、新政府に対し恭順の意を示すために金鯨を差し出したが、本当に大切な蓬左文庫は出さずに守ったという意見である。

⑤ 金鯨と名古屋城の焼失

築城が日本城郭史上の再後記であり、一度の戦争も経験せずに明治をむかえた名古屋城は、名古屋鎮台の設置に伴い、次々に陸軍の施設が建てられたものの、天守閣や本丸御殿などは保存されていた。しかし、1945年5月14日の空襲によって焼失してしまう。天守閣の石垣をよく見ると、当時炎上した傷が、焦げ跡となって残っているのがわかる。

(3) ESDの視点の明確化

【持続可能な社会づくりの構成概念】

構成概念Ⅱ 相互性 名古屋城の石垣の構築の技術が韓国のものであったり、金鯨を救ったのがドイツ公使フォン・ブランドであったことなどから、文化交流の大切さを学ぶことができる。

構成概念Ⅵ 責任性 金鯨の取りおろしを通じて、文化遺産を次の世代に伝えていくことの重要性和困難さを理解するとともに、名古屋城の焼失から平和の文化の大切さを学ぶことができる。

2. ESDの視点を生かした授業の実際

(1) 単元の目標（重視する能力・態度）

《批判》

金鯨の取りおろしを通じて、身の回りで当たり前の存在となっている文化財や伝統行事などを見直し、文化遺産の保護や平和の文化について考えることができる。

《多面的》

金鯨と蓬左文庫の関係など、ひとつの歴史事象を多面的、総合的に考えることができる。

《伝達》

グループでの調査活動やインタビュー、聞き取り調査、それをもとにした考察などの学習を通して積極的にコミュニケーションしようとする力を養うことができる。

《関連》

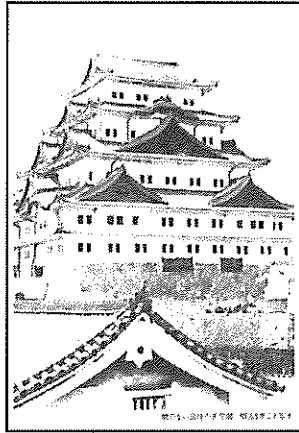
身近な文化財や伝統行事などと自分とのつながり・かかわりに関心を持ち、それらを尊重し大切にしようとする態度。

(2) 評価規準

関連 関心・意欲・態度	批判・多面 思考・判断・表現	伝達 技能	多面 知識・理解
① 名古屋城や金鯨、蓬左文庫の見学調査など、積極的に学習に取り組んでいる	① 身近な文化遺産を見つめなおし、その価値を考えている。 ② 金鯨の取りおろしから文化財保護について多面的に考えている。	① グループでの調査活動やインタビュー、聞き取り調査、それをもとにした考察などの学習を通して積極的にコミュニケーションしている。	① 金鯨と蓬左文庫の関係など、ひとつの歴史事象を多面的、総合的に考え、理解する。

(3) 単元展開の概要 (全8時間)

主な学習活動	◇学習への支援 ◆評価
1. 名古屋城に関するDVDを視聴し、見学計画を立てる。(1)	◇ 「プロジェクトX名古屋城再建 金のシャチホコに託す」を視聴させ、名古屋城見学への関心を高める。
2. 名古屋城と蓬左文庫を見学する。(課外活動) ・ 名古屋城の魅力について観光客へのインタビュー。 ・ 名古屋城の石垣に掘られた文様 ・ 石垣を築く技術	◇ グループ単位で観光客に名古屋城の魅力についてインタビューさせる。 ◆ インタビューや見学調査に積極的に取り組んでいる。《関連》 ◇ 石垣に掘られた様々な文様を見つけ、関心を高める。 ◇ 石垣を築く技術が韓国伝来のものであったことを知らせ、国際交流の大切さに気付かせる。
※ 見学できない場合は、名古屋城ホームページを参照する。 http://www.nagoyajo.city.nagoya.jp/	◇ 名古屋城にとって、金鯨の重要性を確認する。 ◇ 金鯨がなかった天守閣の写真を掲示しその理由を考えさせる。
3. 名古屋城の魅力について話し合う。(2) ・ インタビュー結果をグループごとに発表する。 ・ 自分たちで見つけた名古屋城の魅力を発表する。	
なぜ、金鯨を取りおろしたんだろう。	



金鯪のない天守閣（明治5年頃）

4. 文化遺産の保護について調べる（4）

- ・ ドイツ公使フォン・ブランドの貢献から、身近な文化遺産再発見のための調査活動を行う。
- ・ すでに失われてしまった文化遺産、伝統行事についての聞き取り調査
- ・ 身近な文化遺産の価値を調べる

5. 調べたことの交流（2）

- ・ 身近な文化遺産、既に失われてしまった文化遺産について、グループで調査したことを発表する。
- ・ 保護者や地域の方も招き、身近な文化遺産の価値やその保護の大切さをうたえる。

◆ 金鯪を取りおろした理由を多面的、総合的に考えている。《多面》

◇ 明治維新の頃の歴史的背景を踏まえてキーワードを提示し、グループごとに考えさせる。
キーワード

- ・ 版籍奉還、殖産興業、脱亜入欧
- ・ 蓬左文庫

◆ 金鯪と蓬左文庫の関係など、ひとつの歴史事象を多面的、総合的に考え、理解する。
《多面》

◇ ドイツ公使フォン・ブランドの行動を紹介する（さらに奈良でのフェノロサの演説について紹介したい）。

◆ 身近な文化遺産を見つめなおし、その価値を考えている。《批判》

◇ 文化遺産は過去の人々の声を聴く手がかりであり、それを保護するということは、過去の人たちの意思を受け継ぎ、将来世代に伝えていくことであることを踏まえ、自分ができることを考え、発表させる。

◆ グループでの調査活動やインタビュー、聞き取り調査、それをもとにした考察などの学習を通して積極的にコミュニケーションしている。《伝達》

参考文献

『特別史跡 名古屋城』山田秋衛著、名古屋城振興協会編集・刊行、1966年

『特別史跡 名古屋城いまむかし』服部鉦太郎著、名古屋城振興協会編集・刊行、1995年

『知れば知るほど好きになる名古屋城』名古屋城検定実行委員会企画・編集、名古屋城振興協会発行、2011年

奈良ASPネットワークESD体験合同研修会実施概要

1. 目的 ESDとは持続可能な社会づくりに関わる課題をテーマに、探究的な活動をとおして様々な能力や態度を養い、持続可能な社会づくりの担い手を育む教育であり、新しい学習指導要領にその理念が反映された。今後は、総合的な学習の時間をはじめ様々な教育の機会、教科においてその実践が展開されていくと考えられる。そこで、学校現場におけるESDの推進拠点であるユネスコスクールの教員、および教員を志望する大学生・大学院生がESDを体験的に学ぶ合同研修会を実施する。

2. 実施日 平成25年9月14日(土)～16日(月・祝日)

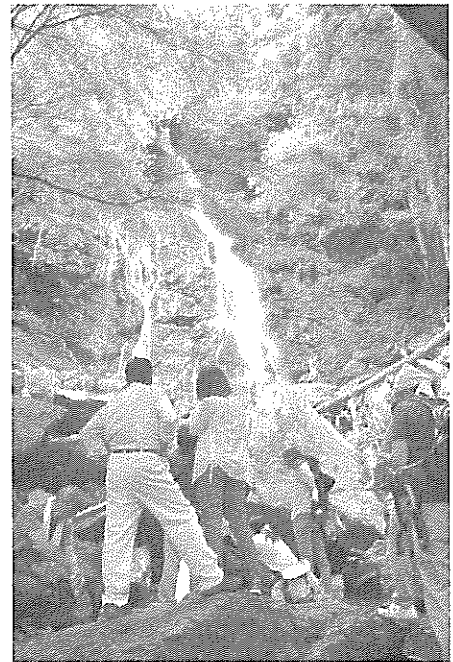
3. 研修場所 奈良県東吉野村三尾

4. 参加者 10名

4. 活動概要

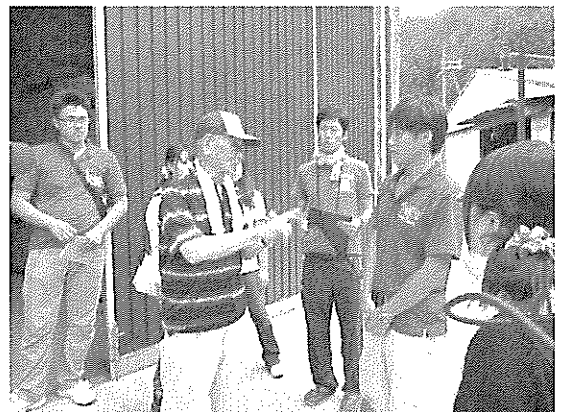
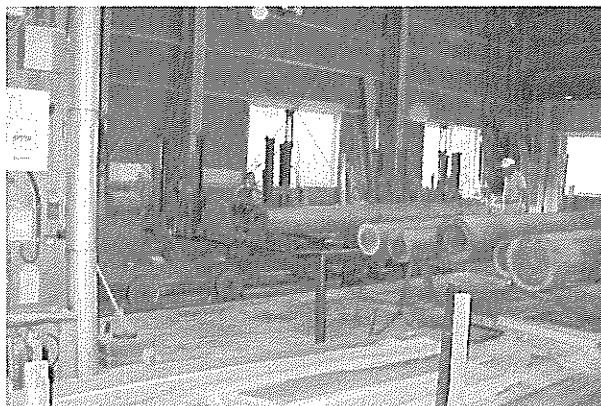
東吉野村ふるさと村活性化協議会の協力

(1) 植林地の現地調査 和佐羅滝周辺



(2) 木材利用場面見学

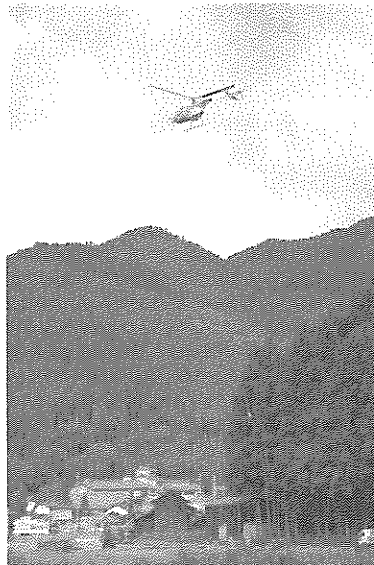
① 製材所



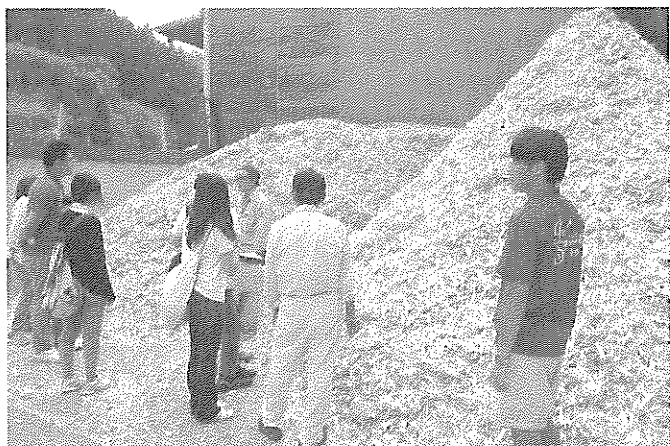
② 割り箸工場



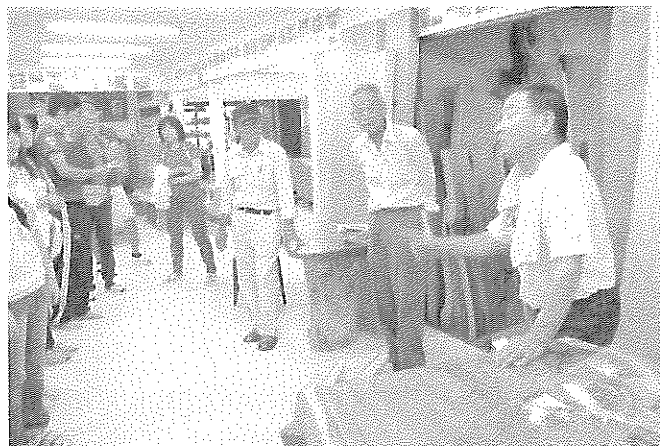
③ ヘリコプターによる集材



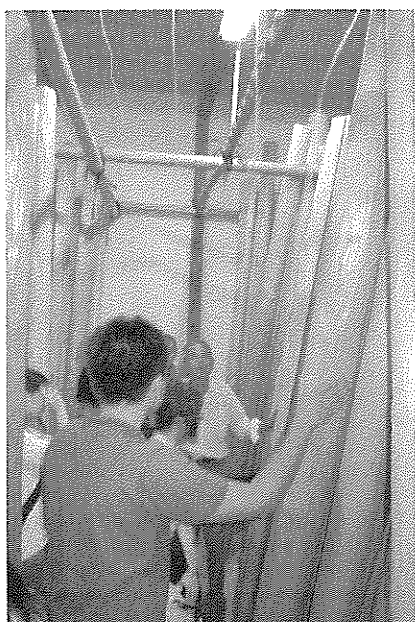
④ チップ工場



⑤ 家具工房



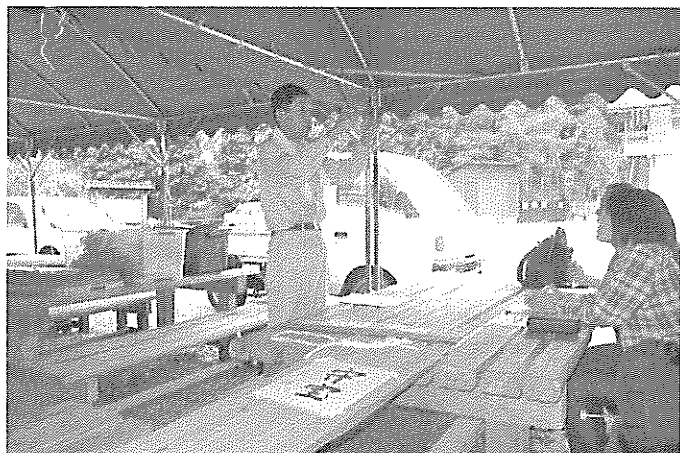
⑥ 銘木工場



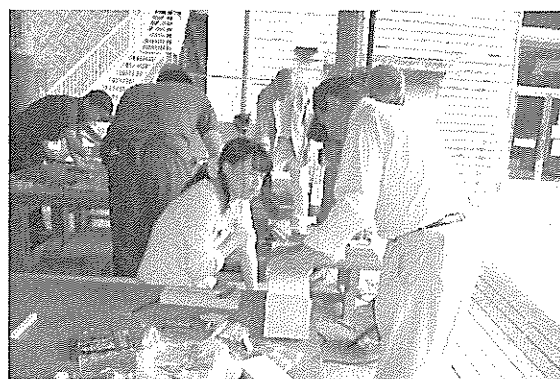
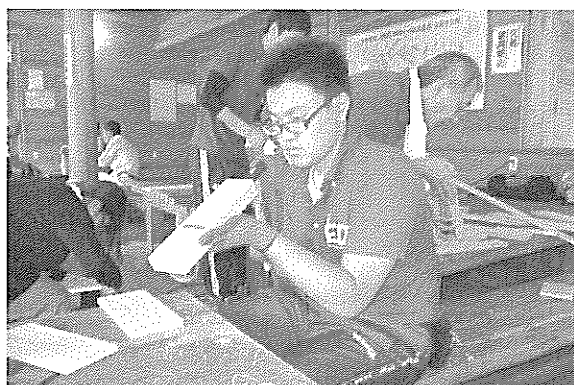
(3) 林業家との座談会



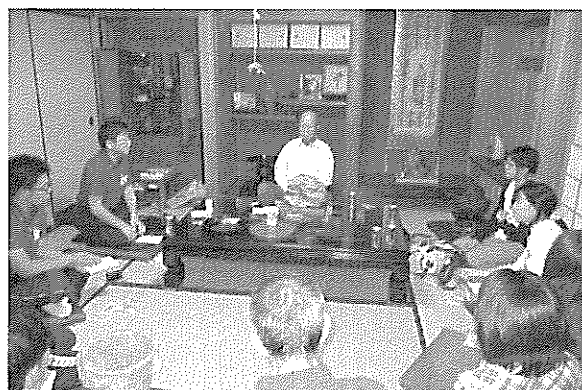
(4) 山林労働の聞き取り



(5) 木工体験



(6) 日本建築見学



今回の研修を通して再認識させられたことは、日本の森林環境の現状、及びそれを守り育ててきた林業が危機的状況にあるということである。この林業不振の構造は、日本のいわゆる加工貿易、外材輸入、過疎地対策の遅れ、国民全体の無関心などが関連しあっている。さらにその影響となると、過疎地の産業不振だけでなく、生態系サービス全般にわたるものである。国土の69%を森林が占めていることから、森林環境の保護とその活用について、早急に検討すべきである。我が国が優先的に取り組むべきESDは「社会経済に環境の視点を取り入れること」だが、森林環境の保護とその活用は、まさにESDで優先的に取り上げる内容であると考えられる。

奈良ASPネットワークESD体験合同研修会に参加して

奈良市立椿井小学校 教諭 河合 摩香

1. はじめに

平成25年9月14日～16日に奈良県東吉野村で行われた奈良ASPネットワークESD体験合同研修会に参加した。台風18号の影響で、2日目からはプログラムを変更しての研修だったが、それまであまり関心が高いとは言えなかった森林環境について親しむよい機会となった。

研修は、現地のふるさと村活性化協議会の全面的な協力によるものであった。林業の現場や加工場を案内していただき、そこで働いておられる人々の熱い思いを聞かせていただくことができた。人々の温かさ、真剣さにふれながら、めったにない研修に参加できたと思う。今回は、現職教員と学生、大学院生、大学教員の合宿研修であった。交流の中で、刺激を受け、多くのことを学ばせていただいた。

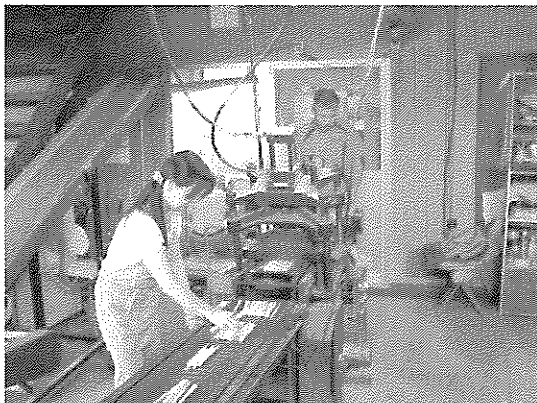
今回の研修成果の報告をまとめたいと思う。

2. フィールドワーク

1日目は10時にふるさと村に着き、すぐにフィールドワークを開始した。ふるさと村活性化協議会の事務局長の上高垣内さん、会長の阪本さんが出迎えてくださり、さっそく和佐羅滝へとむかった。非常に険しい登り道で、足場も悪い。すぐ左を清流が流れているのだが、景色を楽しむ余裕もなく、前を行く学生さんの後ろを追う。到着した和佐羅滝は、見事な滝だった。落差60メートルを一気に水が落ちていく。あたりには冷気がただよい、さっきまでの汗もひいていった。

和佐羅滝で休憩したのち、植林帯に登りなおし、阪本さんから林業を取り巻く状況についてお話を聞く。林業について知らなかった情報を次々教えていただく。「日本の自動車や機械を海外に売るために、安い外材が輸入される。それが木材価格を引き下げ林業を立ち行かないものにしてしまった。このままでは、後を継いで林業をやろうという若者がいなくなる。林業が廃れると山が荒れ、自然災害も発生しやすくなる。日本の国土の70パーセントほどが山林だ。日本は国土の70パーセントを捨てているようなものだ」阪本さんはたくさんのことを伝えたくて仕方がないようすであったが、このあとのプログラムもあるので途中で山を下りていった。和佐羅集落だ。ここも以前はたくさんの人が住んでいたらしいが、今は空き家が目立つ。人の気配を感じなかった。

自動車で製材所に向かう。山から切り出されてきた木材が、まっすぐな板になっていく様子を見学し

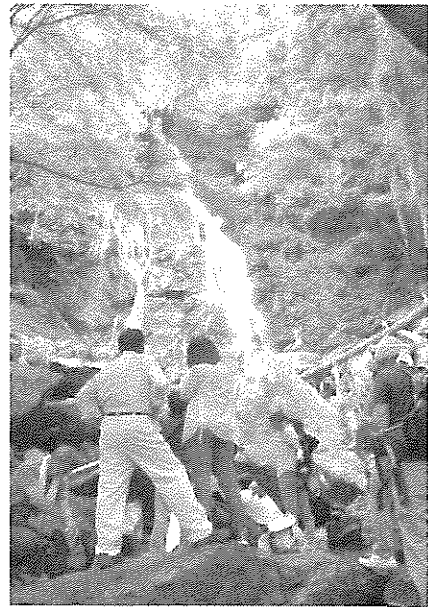


ご夫婦でされている割り箸工場

た。ここには近隣の山から切り出された木材が集められ、様々な用途に切り分けられ、乾燥後に出荷される。

このとき発生する端材を利用して作るのが割り箸である。次に訪れた割り箸工場では、割り箸の製造過程を丁寧に見せていただいた。木材の場合は、杉材よりも檜材の方が高価であるが、割り箸では杉の方が香りもよく高級になるそうだ。不思議な気がする。

そして、使い道のない木材は、チップとして紙の原料になる。チップ工場では、木を砕くものすごい騒音の中で働いておられた。チップにも2種類あり、色も白く形も整っ



冷気ただよう和佐羅滝

たチップはトイレトペーパーなどの原料になり、樹皮などの混ざったやや黒いチップは段ボールの原料にされるらしい。

続いて訪問したのが、高級木材工房だった。ここでは吉野材だけではなく、海外からも高級木材を輸入し、テーブルセットなどを製作されている。大変高価で手の届くものではなかったが、木々のぬくもりは確かにいいものだと感じた。

最後は阪本さんの銘木店の倉庫を訪れる。そこには数百本の床柱が林立していた。「よい時には1本70万円ほどで取引されていたのが、今は4万円ほどにしかない。それでも売れたらいい方だ」と、残念そうに語っておられた。

1日目のフィールドワークは、山の立木を見るところから始まり、製材所へ、そこから用途に分けられた利用される工場をすべて見て回るなど、よく考えられたコースであった。また、どの工場の方々も親切で、人のつながりがあってこそそのフィールドワークであると感じた。教材開発の仕方のお手本を見ているようで、教員を目指す学生には、大変勉強になったことだと思う。

2. 山仕事について

2日目は山仕事体験のはずであったが、台風接近による大雨のため、山守の東平さんから道具を見せてもらったの講演となる。これまで森林環境について授業することもあったが、実際は「教科書を」教えていたと反省する。山の道具はそれぞれ一人で使えるように工夫されている。特に木の切り出しの時に使うくさびのような道具は、一度打ち込んだら絶対に抜けない（抜けると危険）仕組みだそうだが、なぜそうなるのか、東平さんも分からないと言う。昔の人は木を知り尽くしていたのだろう。その知恵に驚かされる。今回はできなかったが、次の機会があれば枝打ちや間伐なども是非体験したいと思う。

3. 林業を巡る状況

夜には4名の林業家の方々や東吉野村で小水力発電に取り組んでおられる方と、宿舎のテーブルを囲んで座談会を行った。お話によると、農業は第二次世界大戦後に農地解放が行われ、多くの自作農が誕生したが、林業ではそれが行われず、未だに不在地主や一部の人が山を持っているという状況らしい。そういう人たちは経済的余裕があり、自分で山を見に来ることがない。だから、力はあっても政府に働きかけることがない。だから、山の状況は改善されないのだと嘆いておられた。山には保水や洪水調整、保温、保湿、空気清浄、木材産出、動物の住みかといった様々な役割がある。これが放置されると大変なことになる。教育を通して林業の現状を伝えていく必要性を強く感じた。



林業家との座談会

4. まとめ

今回の研修会は、フィールドワークの楽しさや醍醐味を実感できるものであった。いつもとは違う環境に身を置き、学生や院生、大学教員の方々と話し合えたのがよかった。教育現場に立つ前に、このような学びに参加できる学生や院生がうらやましくも思える。現場の教員にとっても、教材研究、教材開発に生かすことのできる有意義な研修となった。ただ、残念なことに、現職教員の参加は、私一人であった。多くの現職教員が参加することで、よりダイナミックな学びの取り組みができるのではないだろうか。

最後に、今回の研修会の企画・準備にご尽力いただきました大学職員の方々に、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

東吉野村林業体験 ESD 研修会に参加して

物質科学専修 3 回生 後藤田洋介

9月14日から16日にかけて、東吉野村で林業体験 ESD 研修会に参加しました。この研修会では、林業の現状を見ることと、現地の人のお話を聞くことで、日本の林業に対する理解を深めるとともに、自然環境が抱える持続不可能な問題を知ることで、ESD について考える研修会でした。

私は、この研修会を通じて2つの学びを得ました。それは第一に東吉野村の人たちの自然の認識について、第二に先を見越す力についてです。

第一の自然の認識については、最近、よく耳にする、「森は海の恋人」ということを、東吉野村の人たちが感覚的に感じていたということです。海の栄養を肥やそうとすると、森の恵みが必要なるということを最近では漁業に関わる人がよく口にしますが、東吉野の人たちも同じように森の恵みの大切さと海の関係は感じていたということを知り、海に関わる人も森に関わる人も同じような自然観を持っていると感じました。

第二の先を見越す力については、今回の研修会、日本家屋、そして林業についてです。今回の研修会では、最終日に台風のせいもあり、途中で引き返すという結果になりました。その時は安全かもしれませんが、いつか危険が迫ってくるような場合にどんな対処をとるのか、どんな手を考えておくのかがとても重要なことになると思います。学校現場においても、他の場面でも、このことは大切になると思いました。臨機応変な対応を学べる良い機会となりました。また、日本家屋のことでは、座談会の時にお話を伺いましたが、現代の建築では、すぐに建つが、数十年しか持たない、日本建築では、表面は同じように数十年しか持たないが、「骨組は百年は使える」ということを聞きました。自分が住む場合はすぐに建つ前者はとても便利になると思いますが、自分の子ども、孫に受け継いでいうものとしては後者が良いのではないかと思いました。ここにも先を見通す力、ここでは未来を考える力があるのではないかと思いました。そして未来の林業についてです。東吉野村の方々は、口々に「この先の林業に光が見えない」という話をしていました。林業には、先を見ることはできない現状が広がっているのです。先が見えない、つまりは何をしたらよいか分からない、そんな持続不可能な現状を目の当たりにしました。

森と海の人々の自然観が似ていることにはとても驚きました。それは、私が森や海の自然観から離れた感覚を持っているからではないのかと考えさせられました。また、先を見越す力については、これからを担っていく私たちも考えていかなければならない課題を知ることができました。今回の研修は、普段近づかない森林環境の現状や林業家の苦悩を知るきっかけになったと思います。現在のことだけでなく、将来世代の幸せを見通した行動をとることが、現代に生きる私たちがしなければならないことだと痛感しました。



和佐羅滝近くの山で、林業の現状を学ぶ

奈良教育大学ESD学会第2回研究大会 ユネスコスクール国際音楽交流会 — 香港教育学院・奈良教育大学 — 【概要報告】

前日に積もった奈良にしてはめずらしい雪の中にもかかわらず、たくさんの方にご参加いただき、熱い話し合い、ESDの学び合いができたことを感謝申し上げます。今年で2回目となる奈良教育大学ESD学会研究大会は、ユネスコスクールの大学間交流として香港教育学院を迎えての国際音楽交流会と併せて開催した。3日間にわたるプログラムは次の通りである。

3月15日(土) ESDシンポジウム、ESD子どもフォーラム、コンサート
16日(日) シンポジウム「香港と日本における音楽科教育と教員養成」
17日(月) 教育資料館演奏会

また、ESD子どもフォーラムでは、国内の4つの小中学校生が日ごろのESDの取組について紹介していただいた。

- ①大牟田市立吉野小学校：桜プロジェクト、復興桜、桜で美しいまちづくり、桜プロジェクト交流
- ②大田市立大森小学校：石見銀山遺跡愛護少年団、子どもガイド活動、ずっと友だちプロジェクト
- ③奈良市立富雄第三小中学校：修学旅行だけで終わらせない平和学習、他学年への発信・つながり
- ④大阪市立鶴見橋中学校：人権防災教育、毎日を真剣に生きる、中学生が核となった地域防災

本概要報告では、主に第1日目のESDシンポジウムについて紹介する。(参加者数70名)

1. ESDシンポジウム「ESDで育みたい価値観」

(1) 奈良市立済美小学校 教諭 大西浩明氏

ESD世界遺産学習を実践する者として、目の前の子どもを見つめ、日頃大切にしていることをお話ししたい。住んでいるとどんな価値のあるものでも、「あって当たり前」という感じになってしまい、本当の価値を知らずにいることが多い。子ども達には、自分たちの身近なところにある地域の遺産の本当の価値をまず知る、そして地域にある「人」「こと」「もの」を題材にしながら、知ることから自分たちの町を好きになってほしいと考えて学習に取り組んでいる。

好きになると、真剣に考えるようになる。地域で自分たちもよりよく生きていこうという行動化が生まれるという仮説に基づいて実践している。

本校では新しい学習を始めるのではなく、ESDの視点で再構築して、低学年から、様々な教科で実践に取り組んでいる。

低学年：済美の町に親しむ

中学年：済美や奈良を見つめる

高学年：済美や奈良について考える

自分の住む地域がたくさんの人たちによって支えられていることを知ることは大切だ。地域を調べ、その良さを感じることで、子どもは地域が好きになる。地域を支えて下さっている人との出会いから、地域の人が好きになる。そうすると、この地域で自分たちもよりよく生きていこうという、そういう自分が好きになる。学校評価アンケートでは、「済美や奈



良が好きになった」答えた児童が93-95%、また、70-73%の保護者が「子どもは済美や奈良に興味を持つようになった」と本校の取組を評価している。

自分たちの住む地域を好きになれば、地域のことを真剣に考えるようになり、地域でよりよく生きていこうとする行動化が生まれると考えている。

(2) 大牟田市立吉野小学校 校長 安田昌則氏

本校でもESDの実践を進めているが、私の方からは実践にあたり、どのような話し合いを行ったのかということを中心にお話したい。本校では持続可能な社会づくりについて自分の考えを持ち、行動する児童の育成を目指し、国際理解、生命（いのち）、エネルギー関係という3つのテーマで取り組み、「かかわり」「つながり」をキーワードに地域のひと・こと・ものといった教材開発を進めており、特に地域のひとのかかわりを大切にしている。「理論なき実践は無謀であり、実践なき理論は無力である」と言われるように、我々はどういう子どもを育てるのかについて議論を重ねてきた。



横軸として過去、現在、未来という時間軸、縦軸は空間で地域から日本、世界へ広がっていかねばいけない。子どもはかけがえのない命を持った唯一の存在であり、生命そのものの尊厳性について子どもたちなりにしっかりとらえていくことが大切だと考えている。また我々は地域については小地域（校区）、大地域（大牟田市）というカテゴリー分けを行い教材開発を行っている。生命（いのち）については、海外も視野に自他共栄を考えていかなければならない。国際理解においては、共通性と差異性を理解するだけでなく、互いの文化を尊敬する心を育てることを大切にし、平和を希求する子どもを育てている。様々な恩恵なり、連関の中で子ども達は生きている。根底に感謝する気持ちを育てたい。特に単なる感謝ではなく恩に報いていかなければならないという報恩感謝が大切だと考えている。

ノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイさんの言葉、「未来は未来の中にあるのではない。今、この時からしか未来は生まれない。」をESD実践において大事にしていきたい。「他人の不幸の上に、自分の幸せを築かない。」ことも学んでいかなければならない。「他国の犠牲の上に自国の繁栄を築かない。」生命尊重の観念からもwin-winの関係でなければならない。

ESDで育てたい力については、国立教育政策研究所から出されたものを「ひと・もの・ことを尊重し、他者と協力する態度」「互いの意見を大切にしたコミュニケーション力」「持続可能な社会の一員として責任を持った行動力」の3つに絞り込んで議論している。

(3) 日本ユネスコ協会連盟 理事 米田伸次氏

ESDは価値観の学びだと言われる。よくESDの視点という言葉が使われているが、その内容は統一されていない。①何のために学ぶのか、②どんな人間を育てたいのか、③どのように学ぶのかの3つにわけて考えることができるが、特に①②が本日のテーマであるESDで育てたい価値観に関係がある。



ESD国際実施計画案には、ESDの価値観を端的に書いていないが、価値観の基礎となるものを4つ挙げている。

- ① 世界中のすべての人々の尊厳としての権利を尊重し、すべての人々のための社会的・経済的な公平さにコミットすること
- ② 将来の世代の人々の権利を尊重し、世代間の責任にコミットすること
- ③ 地球のエコシステムの保護と回復を含む多様性に富んだより大きな生命の共同体に対する

尊重と思いやり

- ④ 文化的な多様性を尊重し、寛大で非暴力、平和な文化を地方においても地球レベルにおいても作ることにコミットすること。

これらはESDが提起される以前からユネスコが進めていた教育ときわめて深いつながりがある。そこで1990年代からのユネスコの動向について紹介したい。ユネスコのキーコンセプトは「平和の文化」である。さらに平和の文化とはユネスコ憲章に則った命の尊厳、共に生きる・文化の多様性の尊重、この2つが平和の文化のキーワードだ。ユネスコは1990年代に新しい教育として2回にわたって提起している。1回目が1995年の「平和・人権・民主主義のための教育」、2回目が1998年の「平和の文化と共生のための教育」だ。ここには4つの新しい視点として①いのちの尊重、②共に生きる・文化の多様性の尊重、③価値観の学びを重視、④地域との連携を重視が出てくるのだが、特に③の重要性が指摘されている。

以上の1990年代の動向を背景として、ユネスコは「平和の文化」を築くために2つの指針を提起した。一つ目が「4つの学びの柱」(1996年)と言われるもので、学校教育だけでなく、生涯学習をつらぬく学びの視点として重要視されている。ユネスコはこれを学習の基本として、また教育を再構築するための視点として打ち出している。①知ることを学ぶ learning to know、②為すことを学ぶ learning to do、③(他者と)共に生きることを学ぶ learning to live (with others)、④人間として生きることを学ぶ learning to be これをトータルとして捉えることが重要だ。③共に生きるという概念は初めて出された概念で、そのためには他者とつながることが求められる。他者とつながるためには、まず自分をしっかり知ることから始めなければならない。他者とつながることで自分への理解も深まる。これが他の文化の理解の基本になる。またユネスコでは、共に生きるとは人間と人間の関係にとどまらず、すべての命との共生という意味も含まれていることに留意していただきたい。これは環境教育の基本とも通じるものだ。私は④人間として生きるはESDの価値観と深いつながりがあると考えている。

1999年の「私の平和宣言」も重要なユネスコの提言で、平和の文化を支える人々の生き方の指針・基盤として出されており、学びの価値観として受け止めている。①すべてのいのちを大切にします、②どんな暴力も許しません、③思いやりの心を持ち、助け合います、④相手の立場に立って考えます、⑤かけがえのない地球環境を守ります、⑥みんなで力を合わせます。この中でも①すべてのいのちを大切にしますは特に重要だ。これは21世紀の哲学ではないか、ESDで学びたい価値の基本ではないかと考えている。

国研の報告書にESDで育みたい能力などは示された。これはこれで重要だが、地域・子ども・学校の現実、また学習内容によって絞り込んでいくことは重要だと考えている。国研の提言にも価値観はあまり明記されていない。様々なグローバル 이슈があり、それは環境、経済、社会の3つに分けることができるが、そのベースとなるのが文化である。命の尊厳、共に生きるというユネスコが積み上げていった哲学である平和の文化をおさえることが必要だ。ベースに文化があり、それに環境・社会・経済のアプローチがあるという捉えだ。命の尊厳についてだが、いろんな人、自然と出会う、そしてそこに命のつながりを実感する、私たちは生かされている、すべての命のつながりの中で自分の小さな命を実感していく、生きているということに感謝し、さらによく生きようとする、そういう気づきの学びが大切だと思う。命の尊厳をどうとらえるのがこれからの私たちの課題でもあるだろう。

(4) 文部科学省国際統括官付 国際交渉分析官 岩本渉 氏 (指定討論者)

今日は土曜日なので、すべてが文部科学省の見解というのではなく、岩本の私見と捉えてほしい。大西先生は、「好きになる」→「考える」→「行動化」という流れを示された。学習が行動に表れていることがすばらしい。安田先生は大牟田の現実にして、人と人のつながり、課題と課題のつながり、相違性、自他共栄というお話をされた。米田先生からは、長年の研究からユネスコの考え方をもとに、共生・生命の尊厳・文化の多様性の重要性を指摘された。私はESDは共生について、もうひとつ新しい軸を付与したと考えている。時代を超えた共生もあると思う。

学校現場では、ESDは総合的な学習の時間でよく行われているが、その他の教科でしなくていいのかということもある、また、ESDではよくグループ学習が行われているが、そこでは成績の良い子だけが活躍するのではないという状況が見られる。こういった、ESDの現実について、この先どうやって行くのか等について意見を交換できればよいと思う。

大西先生にお伺いしたい。日本の中の他の地域との交流によって、理解を深めるという工夫はされているのか。

(大西)

ユネスコスクールが全国に増えてきて、学校間交流の機会も増えてきたが、なかなか継続的に行うのは難しい。金沢の学校と交流していた時に、こちらが地域の良さを発信したいのと同じように金沢の学校も地域の良さをアピールしたい気持ちが伝わってくる。そういうのを感じることができることは大事だなと思った。今後、様々な学校と学びの交流ができれば素晴らしいなと考えている。



【全体協議】

(永井)

今後どうすればESDの活動が広がっていくのだろうか。リーダーシップのある教員がいる学校はどんどん進んでいくが、そうでない学校もある。ESDはわかりにくいという声はまだある。一人ひとりの教員が納得して進めていくためには、平和の文化を基盤に置くのがよいと感じている。平和教育は生命の尊重だ。新しい平和教育は、文化の尊重、生命の尊重、違いの尊重とうのユネスコ精神だ。これをもっと前面に出していけば、先生方の共感は得やすいと思う。世界会議でも新しい平和教育を発信してみてもどうかと思う。

(米田)

ESDは突然21世紀になって出てきたものではなくユネスコが積み上げてきた人類の知恵の発展の中にある。そしてその中心は平和の文化である。それをどうとらえるかだ。人間の生き方を考えることだと思う。

(岩本)

文科省が推進するグローバル人材も、それぞれの国のアイデンティティを持った上で、かつ、相手の国や民族のよさ、主張をわかろうとするものでなくてはならない。また企業戦士を育てるものでもない。戦争がおこるような社会的矛盾が続けば続くほど、この地球を次世代に伝えることができなくなるということを、教える側だけが考えていけばよいのではなく、学習者中心ということが言われている。自分の社会を子ども達が考えていくというのは、日本の教育においてESDがもたらした貢献だろう。

(祐岡)

具体性を考えた場合、教育内容（どんな科目で何を教えるのか）、どんな方法を取るのか、それと価値観がどう絡むのかが大事だと思う。

(大西)

様々な教科でできるものがあるので、ESDカレンダーなどにおいて、どのような活動ができ、どのような価値観を育てることができるのか、どのような能力・態度を身に付けさせることができるのかを整理していくことは大切だと思うが、本校ではまだできていない。例えば平和教育においても、学校現場では個々ばらばらにやっており、修学旅行で広島に行けばそれで終わりといったところがある。そうではなくて、平和教育において人権であったり、文化の多様性であったり、環境であったりも学ぶことができるはずで、そういったことをコーディネートできる能力は大事になっていくだろうと思う。

(安田)

ESDカレンダーだけでなく、単元ごとにストーリーマップというのを作成している。他の教科との内容の関連、付加されるものであったり、修正されるものであったり、強化されるものがあるとする

ならば、どういう観点でそれを結び付けていくのかを示している。さらには方法としての関連に留意して単元構成を考えている。私たちは国研の7つの力を3つに絞り込んだ。それを6学年で行うので、18のマトリックスができる。さらにそれをそれぞれのテーマの中で取り上げた具体的なねらう姿を重ねている。最終的にねらう姿において評価している。

(祐岡)

ストーリーマップをもう少し具体的にお願いします。

(安田)

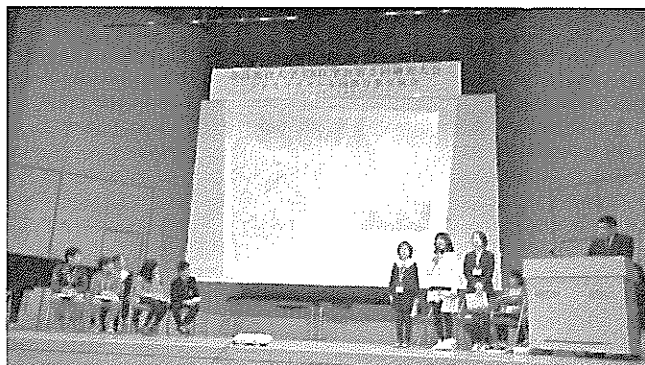
単元レベルで作成している。メインは総合的な学習の時間のストーリーで、それに各教科を関連付ける形で作成している。

(岩本交渉分析官のまとめ)

今後の方向性を考える上での材料を提示したい。これは(スライド)米田先生と相談したわけではないが、奇しくも同じ「学習：秘められた宝」に示された学習の四本柱だ。こういったものが根底にあるのではないかと私も思っている。では今後、どうなっていくのかだが、その前にOECDのキーコンピテンシー、これはよく汎用的能力と言われているが、ESDで育みたい力と近いことを言っている。こういったものを連携させていってはどうかということが話し合われている。

ユネスコでは2014年以降、グローバルアクションプログラムというのを後継プログラムとして設けた。そこでは、①政策的支援、②包括的取組、③教育者の育成、④若者の参加の支援、⑤地域コミュニティの参加の促進が重要視されている。ここでまた地域が出てくる。ESDがもたらしたもう一つの意義は、学校を地域に広げる、あるいは地域の教育力をいかに学校の中に生かしていくかということだ。ESDというのは教員の力もそうだが、教員以外の地域人材や保護者が関わっていくことの重要性が高い。

文部科学省の今後の方向についてだが、ESDはユネスコスクールだけでやればいいというわけではなく、ユネスコスクールが核となって、同じ地域のユネスコスクールでない学校、青少年教育施設・社会教育施設にESDをたり、海外のユネスコスクールと交流できたりといったコンソーシアムを考えてはどうかと国内委員会でも提言を受けている。ESDは特殊な教育の話ではないわけで、日本の教育、世界の教育の中で今まで色々な形で問題になってきたことを、こういった方向で進められないかという革新的な動きだと思っている。文部科学省としては、2014年で終わりというわけではなく、今後ますます初等中等教育局との連携を深めて推進していくつもりだ。



1. 開催日時 平成 26 年 2 月 6 日 (木)
 午前の部：10 時-12 時 30 分 午後の部：14 時-16 時 30 分
2. 会場 航空会館
3. 分科会 午前の部：小学校・中学校 (ESD)
 午後の部：中学校・高校 (伝統文化教育、ESD)
4. 担当官 田村学、濱野清、村山哲哉、五島政一、後藤顕一

5. 分科会内容

1) 午前の部

① 多摩市立多摩第一小学校

「持続可能な社会づくりの推進に向けた、問題解決力を身につけ子どもの育成」

校区に流れる多摩川や学区内にある室町時代の古戦場跡をフィールドとし、ESD で育む力と態度を「問題解決能力」「つながり」「意欲」の 3 つに設定し、6 年間の生活科・総合的な学習の時間を中心とした指導で研究を進めている。

② 広島大学付属東雲小学校

「共生社会を担う子どもを育てる ESD の創造

～異なる価値観に気づき、互いを認め合う子どもの育成をめざして～」

単式、複式、特別支援という形態の異なる 3 つの学級を有する本校の特質を活かし、学級や学年の枠を外した縦割り活動を軸とした結果、児童は互いを認め合うようになった。これを基盤に「共生社会」を担う子どもを育てる ESD の創造に取り組んだ。

③ 北九州市立早鞆中学校

「ESD の視点に立った『心の育ち』を支える教育活動の推進」

ユネスコスクールとして学校が地域と ESD の理念を核として連携することで、生徒によりいっそう郷土愛や自尊感情、活動意欲を高めさせ、課題解決に必要な能力・態度を身につけさせる。

2) 午後の部

① 岡山市立京山中学校

「地域にほこりを持ち、地球的視野で考え未来を創る生徒の育成

～グローバルな視点を活かした授業・活動で育む思いやり・夢・志・共生～」

地球的視野で未来を考え、その課題に対して、当事者意識を持ち、地域のために社会に貢献できる生徒を育てるために「グローバル」な視点を活かした授業・活動を通して、自然と人間の調和を

多面的に考え、思いやり、夢・志を大切にしたい、共に育ち合う学校づくりを推進しようとしている。

② 愛知県立豊田東高等学校

「新学習指導要領を踏まえた総合学科における ESD の体系的な推進及び各教科等における効果的な指導と評価のあり方に関する研究」

学校の教育活動全体を ESD の視点から見直し、「地域社会との連携」「環境教育」「国際理解教育」を3つの柱にした。豊田市を実践のフィールドとし、河川の生物多様性保全や、地元商店街・各種施設の活性化など、地域の課題解決に向けて行動する意欲と態度を育成する。

③ 岡山県立林野高等学校

「地域社会の未来を予測し課題を解決する態度と能力の向上

～森と海をつなぐ吉井川流域をフィールドとして～」

美作市から、広く岡山県東部を流れる吉井川流域までフィールドとし、生物の多様性・連携性に目を向けることとして推進している。

多様性…吉井川流域から那岐山麓、瀬戸内海にかけてフィールドワークを行い、地域の諸問題とその解決策について、共通点や差違点について考察した。

連携性…「昔ふれあい倉敷祭り」の企画段階から、「美作市国際交流を進める会・地域おこし協力隊、地域の町内会と連携して活動した。

6. 担当調査官等による講評

- ・ ESD はわかりづらく、何をやったらいいの？というのが現場の声である。
- ・ ESD を実践する切り口は3つ。
①環境教育、②経済の開発（貧困、雇用）、③社会の問題（人権、ジェンダー）。それぞれが関連していることがポイント。
- ・ ESD は一部の教員だけではできない。また、環境教育はマニアの教員がいないとできないし、その先生が去ると取り組みも終わってしまう。だからこそ ESD はできることからやる。あらためて大きな構えをするのではなく、どこかに ESD 的なことが必ずあるはずなので、少しずつ変えていくことが大事。
- ・ 目に見えるデータから目に見えないことをみていくこと。
- ・ 子どもにさせるのではなく、子どもがする教育にする。ESD の主体は子どもと教員両者である。すべて先生がそろえてはいけない。
- ・ 地域保護者には参加ではなく、参画してもらう。一緒に取り組み、評価してもらう。別に全部でなくていいのである。何か続きそうなことを参画してもらう。学校がひとつのきっかけとなって町を変えていく。その起点を子どもがすると子どもの自己効力感も上がる。（村山）
- ・ ESD のテーマは様々。「体験」と「つながり」が非常に重要であり、それを再構築することが ESD。

授業にどう反映させるのか。育てたい能力、学習内容、学習活動それぞれがばらばらになってしまっ
てはいけない。理念が先行してしまっは理念のための教育になる。かといって活動だけでは何も残
らない。言葉を大事にする。 (後藤)

今年 11 月には岡山県で ESD 世界大会もあり、日本中の学校が ESD に熱を入れている。今回の研究
指定校による発表ではどの学校も自分の学校の特色を活かした実践を進められていた。どの学校にも必
ず共通していたことは「地域」をフィールドに入れることだった。「地域」なくして ESD はできない。
地域や保護者それぞれが持続可能な社会に向けて、課題への取り組みを進めていかなければならない。
それに気づかせる、または意欲をもたせる、そしてそれぞれをつなげるのが、学校としての大きな役割
であると考え。

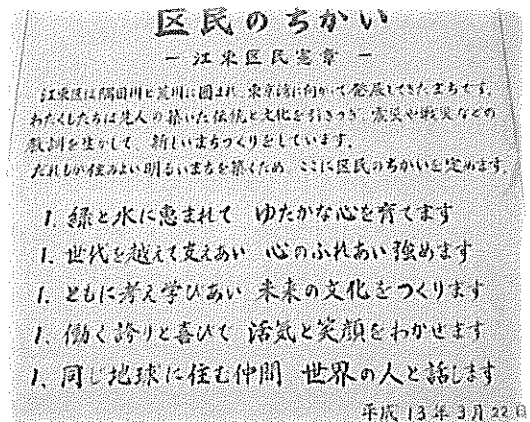
では、1 人の教員としての動きはどうすればいいのか。これから学校現場に出る私自身としても大き
な課題である。まずは自分が地域をよく知り、愛することから始めていきたい。

(文責 中澤哲也)

ESD パワーアップ交流会報告書

日時 : 2014年2月8日(土)
場所 : 江東区立八名川小学校
参加学生 : 新宮 済 中澤 哲也 上海 稚奈

活動内容 : ①実践発表
②多田孝志氏の講演



① 実践発表

実践発表は、A分科会とB分科会の2つの分科会に分かれて行われた。分科会の内容は以下の通りである。

●A分科会

- ・「～貧困国現実の疑似体験の有用性を探る～」

長野県伊那市立伊那東小学校 原先生

- ・「「なぜ？」を力に真実一路 —沖縄・宮崎の小学校における実践紹介—」

南九州大学人間発達学部 遠藤先生

- ・「学校を活性化させた ESD の成果と実践事例」

東京都江東区立八名川小学校 横田先生・宇津井先生・川村先生

●B分科会

- ・「多面的、総合的に考えることのできる児童の育成—ESDの視点を取り入れた学習活動を通して—」

愛知県東浦町緒川小学校 種村先生

- ・「「持続可能な社会をめざし、世界の人々とともに生きる子どもを育てる。」～ESDでつながり・のびる、子どもたち～」

大阪府大阪市立関目東小学校 筒井先生

- ・「ESDを取り入れた授業の開発～総合・生活科を中心とした実践～」

東京都稲城市立稲城第二小学校 鈴木先生

- ・「学校を活性化させた ESD の成果と実践事例」

東京都江東区立八名川小学校 花田先生・福島先生・鹿野先生

各分科会では、実践発表の後質疑応答の時間が設けられており、発表者と参加者が意見交流することができた。

② 多田孝志氏の講義

演題「次世代の教育を考える」

講師：目白大学 人間学部長 多田 孝志 氏

キーワード：協同・対話

(1)聴き合う関係の学びの提唱

・21世紀の社会の諸課題（①知識基盤社会への対応 ②多文化共生社会への対応 ③リスク格差社会への対応 ④成熟した市民社会への対応）を解決するためには、全人的見方をする必要がある。また、共生の意味を考える必要もある。

(2)学習観の転換

- ・殻を破ることが未来を創る力を高める
- ・伝統主義から構成主義への変化に対応すること、協同的な学びと個人の選択のバランスを考えること、対話を重視すること、正統主義偏重からの脱却すること、学習形態とスタイルの遅れの課題に取り組むこと、多様な価値をぶつけ合う学習を行うことが求められる

(3)授業の改革について

- ・形成的アセスメントを生かした学習の導入の検討
- ・対立伝授型から主体性を育む学習への転換：地道な継続した取り組みを行うことが必要
- ・「対話」という切り口から、子ども同士の学び合いを問い直す：師問児答→児問師答→児問児答

平成 25 年 11 月 29 日
音楽教育講座 劉 麟玉

東洋音楽学会第 64 回大会参加報告

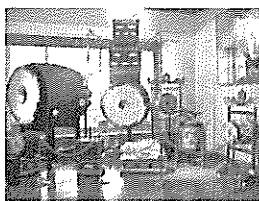
開催日：2013 年 11 月 9～10 日

開催地：浜松市楽器博物館、静岡文化芸術大学

(1) 浜松市楽器博物館見学会及び講演会（11 月 9 日午前）

10 時半から浜松市楽器博物館館長の講演会および博物館の見学会に参加した。館長の嶋和彦氏の話しによると、楽器博物館は 1981 年より浜松市が進める「音楽のまちづくり」の一環として 1995 年 4 月に設立された我が国初の公立楽器博物館であり、設置当時は世界最大規模の楽器博物館でもあった。楽器博物館の目的は世界全域の楽器と楽器に関する資料を収集、保存し、調査・研究をおこない、世界の楽器を偏りなく同じ目線で平等に展示し、様々な活動を通して楽器や音楽とその文化についての、人々の認識と理解を深めることであるとされている。また、嶋館長のお話しでは、博物館が常設展や特別展など展示活動の他、演奏会や一般対象の講座やワークショップを行なうほか、小学校への移動博物館、中学校との共同授業も行なっており、教育現場との関わりも力を入れているようである。さらに国内外の音楽や楽器文化の調査、取材、記録など、多彩な活動が行なわれているため、国内外から高い評価を得ている。総合的な活動では世界第一級の楽器博物館だそうである。「楽器は、その素材や形、音の出し方や音色、さらにはそこから生み出される音楽を通して、それぞれの地域と時代に生きた人びとの智慧や感性を、鮮明に映し出してくれる」と館長の嶋和彦が語ったように、この楽器博物館での世界中の楽器に触れることにより、各国の歴史・伝統・文化をに対する関心や理解を深め、尊重する態度が育てることができると考えられる。その上、国の伝統や文化を守っていくと思われる。

実際に見学をしてみると、同じ弦楽器でもデザインや弦の素材の違いによってその地域性の特徴が見られるという例もあれば、異なる地域であっても非常に類似した楽器を使用しているという例もある。また、博物館の立地は鍵盤楽器の発祥地である浜松市のためであろうか、ピアノの所蔵品の種類が豊富である。ピアノ展示室にはサイズも規格も用途も違うピアノが陳列され、ピアノの歴史がそこで凝縮され、不思議な空間である。



(2) 浜松周辺の邦楽文化 ～浜松まつり他について～（11 月 9 日午後）

浜松市および周辺地域では、一般市民が従来の「お稽古事」とは違った消費形態で、地

域の中で邦楽を楽しんでいることが今回の公演で伝えられた。伝承を行なっている地域としては浜松市、磐田市、袋井市、掛川市が主であり、伝承されている音楽種目としては、三味線、能楽、雅楽が取り上げられている。

(3) 浜松市無形民俗文化財 「遠州大念仏」 (上演) (11月9日午後)

遠州地方夏の風物詩として知られている遠州大念仏は、浜松市を中心に盆(7月あるいは8月)の3日間に行われる郷土芸能である。今回の郷土芸能を紹介したのは静岡芸術文化大学の奥中康人氏である。同氏によると、今回出演した早出組は遠州大念仏保存会の中で最も南に位置する団体である。お盆の時期に大念仏の一行が初盆の庭先に入ると、お経を唱え、また音楽に合わせて踊る。太鼓を中心にして、その両側に双盤(そうばん)を置いて、音頭取りに合わせて念仏やうたまくらを唱和する。そして、太鼓を勇ましく踊るようにして打ち鳴らし、初盆の家の供養を行う。現在、約70の組が遠州大念仏保存会に所属し活動しているそうである。



(4) 研究発表：シンポジウム「グローバル化時代のインド音楽と舞踊」(11月10日午後)

今回、数多い研究発表のうち、いくつかの個人発表も聞いたが、ものうちに最も印象深いものを紹介する。シンポジウム「グローバル化時代のインド音楽と舞踊」の発表である。発表者は国立民族学博物館の研究グループである。本発表はインドで地域ごとに考察してきた音楽・舞踊の実践をグローバルな人的・経済的ネットワークの枠組みの中で総合的に考察することを目的とした。従来のインドからアメリカ、またはインドからシンガポールなど単方向の研究が多い中、三人の研究者は単方向というより、環流的な概念のほうがさまざまな事象を説明しやすいのではないかと気付き、環流的な概念を用いて、各国でのインド音楽の再生産を巡る問題について検討するようになった。また、事例としてフランスのロワール地方とインドのラージャスターン地方という二つの地域間を往復するインド音楽家の活動と地域社会へのインパクトに注目した。さらに、シンガポールにおけるインド芸能の伝播と培養、変容と発展についても検討の対象にした。

今回の大会では大きなテーマとして、「伝統音楽の地域保存と伝承」、「楽器博物館と地域の連携」、の二つであると考えられる。特に博物館や保存会が行なっている活動は音楽教育にも深く関わっており、大きな成果をあげていると思われる。今後、本学と奈良県の連携活動を行なう際、非常に参考になると考えられる。

東洋音楽学会見学レポート

奈良教育大学 教科教育専攻
修士課程 院2回生 金ジョブ

11月9日、10日に浜松市楽器博物館に見学させて、静岡文化芸術大学で研究者の発表を聞かせていただきました。浜松市楽器博物館の見学はとても楽しかったです。この楽器博物館は日本で初めての公立楽器博物館として、またアジアで一番大きな楽器博物館と聞きました。アジアの楽器だけではなく、異なる時代の西洋楽器にも展示されている。その中に、印象を残したのは日本の雅楽で使用されている楽器とピアノの展示室です。



日本伝統音楽の授業の中で、「雅楽」は日本の伝統音楽として今でもよく演奏されています。雅楽で使用されている楽器の写真を見たことがありますが、今回の見学で実際に楽器を見ながら曲を聴いたら、各楽器の音色、曲の中の役割も理解しました。



また、ピアノの展示室で異なる時代、国のピアノを見ました。私は子どものごろからピアノを学んでいるけど、ピアノについての知識はまだ勉強不足だと思います。このピアノの展示室の中に様々な種類のピアノを見られるし、ピアノのペダル、クッションと原盤の素材によって音色の変化も紹介されて、勉強になったと思います。

それ以外は、韓国、ベトナム、インドなどの楽器を見ながら、楽器の音色を感じました。音楽に興味がある人々に対して、とても価値があると思います。今回は東洋音楽学会をきっかけで、楽器に関する知識を学びました。

静岡文化芸術大学の講演と上演を聞かせて、浜松市の文化をすこし知りました。また、各大学の音楽研究者から朝鮮、インド音楽などについての発表聞かせて、自分の研究分野以外の音楽知識も学びました。今回の見学を通して、音楽知識を増やただけではなく、たくさん発表者の研究を聞かせていただいて、自分の研究にも役に立てると思います。

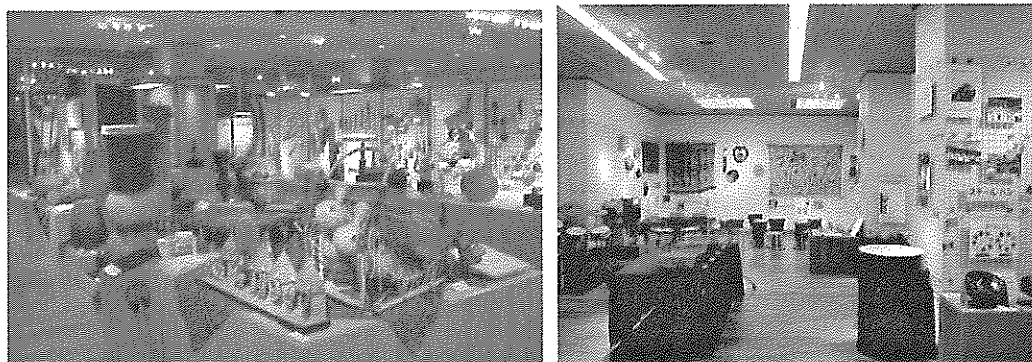
東洋音楽学会に参加して

教育学研究科 教科教育専攻 音楽教育専修

133502 服部安里

○ 浜松市楽器博物館

浜松市が「音楽のまちづくり」の一環として、日本初の公営の楽器博物館相当施設を運営していく過程、また、博物館の現状や課題を学んだ。その後、実際に見学をし、楽器を見るだけでなく、その地域に見合った装飾や展示されている楽器で有名な演奏法の視聴、実際に触ることができるブースにて体験したり、地域の雰囲気を感じながら学ぶことができた。日本最大級の楽器博物館というだけあり、楽器だけで三千五百点、資料は一万点程あるという。さらに、ワークシートや手作りの楽器等もあり、将来的に学校現場に出たらこれらの学んだことを生かし、民族音楽の授業を行いたいと思った。



(浜松市楽器博物館より)

○ 東洋音楽学会大会

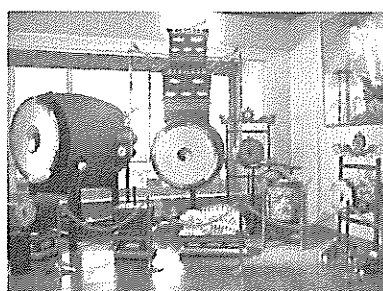
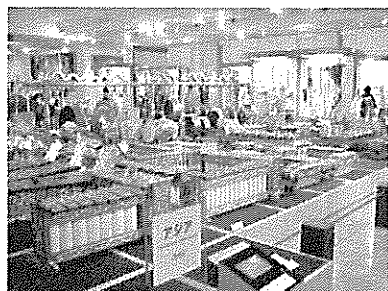
大会の部では、主に民族音楽や音楽文化についての研究発表を聞くことができた。音楽に関わる発表ではあるが、大学では中々聞くことのなかった分野の講演であり、自身の視野を広げる貴重な機会となった。同時に、様々な地域、文化の音楽に関する研究を聞く中で、自分の知らない地域の音楽を聞く機会も多々あり、同じ音楽を学ぶのではあるが、歴史的背景を知っているか、知らないかで、いかに音楽の理解にも差が生じるかということに改めて感じた。同時に、学校現場では、民族音楽をいかに本物に近い形で児童・生徒に説明できるか、考えさせられた。さらに、音楽の知識面ではもちろんだが、同じ大学院生の方も何名か研究発表しており、同じ院生として、とても刺激を受けた。これを機に、より一層自分の研究としっかり向き合いたいと感じたし、将来、学校教育に携わろうとする身としても、知識面、指導面で多くの気づきがあり、とても為になる機会に参加することができたと感じている。ありがとうございました。

開催日：2013 年 11 月 9、10 日

開催地：浜松市楽器博物館、静岡文化芸術大学

◎浜松市楽器博物館見学会

1995 年（平成 7 年）4 月に開館した浜松市楽器博物館は日本唯一の公立の楽器博物館である。館内に世界のあらゆる楽器を偏り無く収集展示し、楽器を通じ、人間の文化を紹介する。



「楽器は、その素材や形、音の出し方や音色、さらにはそこから生み出される音楽を通して、それぞれの地域と時代に生きた人びとの智慧や感性を、鮮明に映し出してくれる。」と館長の嶋和彦が語った。この楽器博物館での世界中の楽器に触れることにより、各国の歴史・伝統・文化をに対する関心や理解を深め、尊重する態度が育てる。その上、国の伝統や文化を守っていくと思われる。

◎浜松周辺の邦楽文化 ～浜松まつり他について～

今回の公演を通して、浜松市および周辺地域では、一般市民が地元の練習グループに入って邦楽を伝承していることが分かった。活動を行っている地域は浜松市、磐田市、袋井市、掛川市である。器楽のジャンルとしては、三味線、能楽などがある。

◎浜松市無形民俗文化財 ー遠州大念仏ー (上演)

遠州地方夏の風物詩として知られている遠州大念仏は、浜松市を中心にお盆の 3 日間に行われる郷土芸能である。今回出演した早出組は遠州大念仏保存会の中で最も南に位置する団体である。



◎研究発表：「グローバル化時代のインド音楽と舞踊」

発表者は「環流」という概念を使って、インドで地域ごとに考察してきた音楽・舞踊の実践をグローバルな枠組みの中で総合的に考察する。従来のインド音楽の研究はインドから他国へと単方向で考察されてきたが、その方法はインドの音楽の伝播状況を説明できないことから、還流的な概念を考案した。また、フランスとインドの二つの地域間を行き来するインド音楽家の活動と地域社会への影響に焦点を当てる。さらに、シンガポールにおけるインド芸能の伝播と伝承、変容と発展について検討した。

平成 25 年 11 月 29 日

奈良教育大学附属小学校 小川 綾子

出張報告書

出張日：平成 25 年 11 月 9 日

イベント：第 64 回東洋音楽学会大会

開催地：浜松市楽器博物館、静岡文化芸術大学

(1) 浜松市楽器博物館

午前 10 時から、まず楽器博物館館長嶋和彦氏の講演があった。館長のお話の中で、「楽器とは人間の知恵と感性によって生まれ、発展してきたものであり、博物館ではその歴史を感じたり、知ったりすることができる」というものがあった。ここから、学校教育等において楽器について学ぶことは、演奏技術だけでなく、その楽器の歴史を知ることが含まれることも大切であると考ええる。

博物館に展示してある実際の楽器を見ると、それぞれの楽器の歴史が一目でわかり、楽器によっては実際の音の試聴もでき、実物を感じてみるのできる貴重な場であるように思った。芸術においては、いかに本物に触れることができるかが重要であると考えているので、楽器博物館の存在は音楽教育や芸術教育にとっても良い働きがあるのではないかと考える。(しかし、近場ではないので簡単に行くことができないのが残念である) また、西洋だけでなく東洋やアフリカなど、さまざまな国や地域の楽器が展示されており、学校教育における民族音楽や日本の伝統音楽についての学習においても、楽器博物館は大きな働きがあるように思った。

(2) 浜松周辺の邦楽文化—浜松まつり「解説」について

おもに、三味線のお稽古についてのお話だった。全体のお話を通して、それぞれの地域で地元根付いたまつりがしっかりあることに驚いた。このまつりがあるからこそ、邦楽への取り組みが盛んであることがわかった。地域の子どもたちは「まつりで三味線や囃子を演奏したい」というきっかけで稽古を始めるそうだ。私が生まれ育った地域ではこのようなことがなかったのも、とても新鮮な事実だった。このようにまつりが地域に根付いていると、三味線や囃子が生活の中にあることが当たり前であるのだろうと思われる。このような姿こそが日本の伝統音楽のあるべき姿であるように思う。

(3) まつり音楽「遠州大念仏」の演奏について

地域に根付いている行事として、こちらはまつりではなくお盆の時に演奏される念仏だった。街の中で念仏を唱えながら練り歩き、初盆を迎える家で儀式を行う様子を想像しながら鑑賞した。これは太鼓や鉦などが単純なリズムで繰り返され、それに合わせて念仏を唱えるスタイルである。しかし、唱えている念仏の内容は「なむあみだぶつ」であるが、リズムに合わせて一つ一つの文字を長くのばして唱えるため、初めて聞いた者は全く聞き取れなかった。演奏者の中には若い人も交じっており、やはり地域に根付いている音楽はどンドン語り継がれていくのだということが見て取れた。

『「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)
[テーマ2] 附属学校園の「学び合い・育ち合い」機能の強化のための研究開発
2-1 附属学校園における教育課程の基本方針としてのESDの研究開発

項目名 ⑥研修旅費(広島大学附属中・高等学校)

1. 事業の内容

「広島大学附属中・高等学校の教育研究会視察」

①研究主題：知識基盤社会における生徒の育成
～教科指導からのアプローチ～



21世紀は「知識基盤社会」とあるといわれる。知識基盤社会の定義は一定ではないが、2008年の中央教育審議会の答の中では「知識が社会・経済の発展を駆動する基本的な要素となる社会」であり「新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す」社会である、と定義されている。我々には、知識基盤社会における生徒の育成のあり方について、カリキュラムの基礎となっている教科教育をベースとした具体的な方略を明らかにすることが求められていると考える。これまで教科教育の実践研究の中で摸索し蓄積されてきた「育てたい力」「そのための方略」を再構成し、知識基盤社会において求められる学校教育のあり方を提案したい。

②英語科研究主題： コミュニケーション能力の育成

③公開授業Ⅰ

「帯活動」と呼ばれるいわゆる授業の導入部分での工夫が特徴的であった。「帯活動Ⅰ」では、英語の歌“What Makes You Beautiful”を歌わせていた。小さな声ながらも、生徒達はしっかりと口ずみ、はっきりと発音している様子が見てとれた。また「帯活動Ⅱ」で行われていた“Voice Inflection Exercise”という活動でも生徒相互で行うShadowingのような活動で日頃のトレーニングの成果が伺えた。

「readingにおけるいくつかの手法」では、「英文分析」として、教科書の本文の分析がなされていた。話のまとまりを四角で囲ませ、関連のある部分や、言い換えが行われている部分に波線を引かせ、最後の部分で、スピーチで伝えなかったことを考えさせるなどいくつかの工夫された英文読解力のアプローチが試みられていた。また、音響や視聴覚機の効果を十分に活用した授業で、大きなスクリーンを活用し、パソコンを随所に使い効果的に活用されていた。

公開授業Ⅱでは高等学校の授業を参観させていただいた。中高一環教育であり、中学教員であっても高校の授業を教えなければならず、Communication Englishの初年度として授業がほぼAll Englishで進められており、今後中学校においてもその指導が求められており、参考となる点がいくつかあった。

④研究協議

研究協議会では英語科の研究協議だけでも学生も含めて約100名の参加があり活況を呈していた。中学の英語指導にNHKの基礎英語の利用が家庭学習の必修課題として位置づけられており、定期テストにも活用されている事が報告されていて興味深く感じた。協議会終盤で、会のサポートとして参加されていた附属小学校の英語学習のコーディネーターの女性教諭から小学校の英語教育の現状報告が行われた。小学校では、3年生以上で必修教科として英語科指導がおこなわれているとのことであった。この教員は、英語指導の専任教員で、彼女のコーディネートにより英語教育を試行錯誤しながら進められている様子が伝わった。研究協議会後もこの教員から話を聞いた。附属小学校では教科担任制が取られていることも知り、学力向上に力を入れられている様子が感じられた。中高一貫教育で

あり、中高の連携は当然であるが、附属小学校の英語教育との連携・接続などについて、大変興味深い示唆を得られた。

⑤研究発表

研究協議会後、附属高等学校八島教諭による「文脈からの未知語の推測のための最適な割合と語彙サイズを求めて」という主題の研究発表会がもたれた。八島氏はこのテーマを20年近く研究されておられ、中学3年生用のパッセージ（文章）で40語に1語であれば、学年を問わず60%以上の推測成功率が得られることをつきとめた（Yashima, 2001）と述べられていた。研究目的としては、日本人英語学習者が文脈から未知語を推測するための「最適な」割合と語彙サイズを探求するというものであった。中学生の授業でも、英文読解においても「未知語推測」という視点からの指導も取り入れていくべきであり、効果的な指導方法であると感じさせられた。

⑥全体講演

研究会最後のプログラムは、東京大学大学院教育学研究科本田由紀教授による「日本社会の変容と教育の課題」と題する全体講演であった。氏は教育と仕事の接点としての若年労働市場を研究対象の一つとされ、共著『「ニート」って言うな！』（光文社新書）において、「ニート」は働く意欲のない若者であるとする風潮を批判された。また、「人間力」が重視されるようになる傾向を批判的に検討した著書『多元化する「能力と日本社会」』（NTT出版）で、大佛次郎論壇賞奨励賞を受賞される。その他、数多くの著作をお持ちである。講演の趣旨は以下の通りであった。

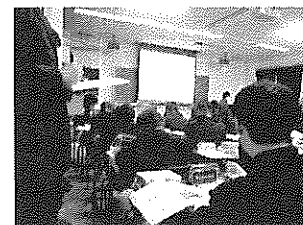
戦後日本社会においては、高度経済成長期の1960年代から安定成長期の80年代にかけて、独特な社会構造が形成されてきた。その社会構造の特徴とは、教育・仕事・家族という3つの社会領域が、相互に緊密な循環関係を形成していたことにある。この「戦後日本型循環モデル」は一見効率的ではありながら、様々な社会問題を生み出した。

しかし、1990年代以降、このような日本の社会構造には様々な破綻が現れてきている。特に仕事の領域において変化が大きく、従来のような「日本的雇用」から外れる層が増加するとともに「日本的雇用」そのものが変質してきている。また、家族の基盤も揺らいでおり、「貧困の連鎖」も顕在化している。さらに日本では少子高齢化が非常に急速に進んでいることも社会の持続可能性を脅かしている。このような社会変化に対して教育の変革は遅れており、生活や仕事に対する教育内容の意義がまだまだ低いことから、厳しさを増す社会経済生活の中で生き抜いていくための術を若い世代に与えることができていない現状がある。

こうした状況下で、旧来の日本の社会構造の再編成が急務となっている。取り組むべき課題は数多くあるが、特に教育に関しては、社会の具体的な現実を時間と空間の広がりの中で把握・認識するような教育内容の拡充や、特定の専門分野に立脚した上で隣接する諸分野にまで展開する「柔軟な専門性」を組み込んでおくことが必要となる。また、様々な社会の問題を是正してゆくための建設的な批判と新しい提案を行う力、自分とは異なる他者と協力して物事に取り組んでゆく力の育成もいっそう求められるようになってきている。このような教育の変革を通じて社会現実に対する適応と抵抗の力を若者に伝えてゆけるかどうか、この社会の将来を左右することになる。

2. 事業の成果と課題

今回の研究会参加の目的の一つに、他の附属中学校での教育研究会運営を観察したいということがあった。当日は、参加者が受付を済ませた後、すぐに各教室での公開授業を参観に出向いた。当時の日程全般を見ても、公開授業に対するウェイトが大きいと感じた。また、中国地区の教育の中核的な学校として位置づけられているのか、会の参加者が大変多いと感じた。最後の



全体講演会では、広い講堂に座りきれないほどの参加者があり、研究大会が最後まで熱気が保たれていたのは印象的であった。今後、本校での研究会でも一般参加者をいかに増やすかが課題であろう。

課題としては各研究会のねらいを吟味し、研修会参加の目的をもう少し絞るべきであったと考える。

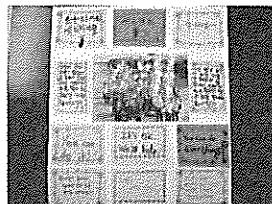
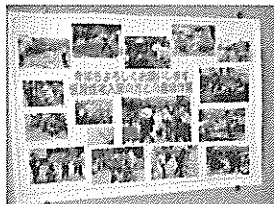
『「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた

持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)

項目名 ⑥研修出張旅費（先進地視察）

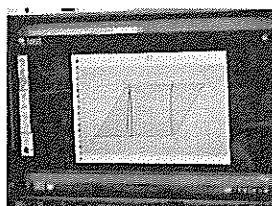
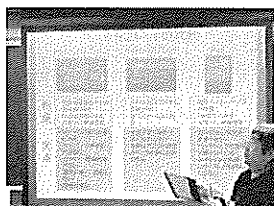
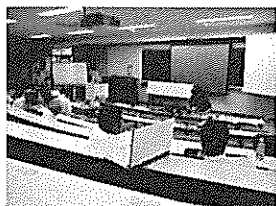
1. 事業の内容

①「気仙沼市立唐桑中学校・気仙沼市立小原木中学校視察および交流」



奈良教育大学附属中学校と韓国公州附設中学校との交流事業において、韓国訪問団とともに被災地に向けたメッセージづくりを行うことを生徒会が企画した。作成したメッセージを気仙沼市立唐桑中学校・気仙沼市立小原木中学校に届け、現地の状況を視察した。現在の学校の様子や、生徒の実態について話を聞くことで、今後の本校の生徒会との交流にとって示唆に富んだ内容であった。

②「宮城教育大学公開講座受講」公開講座「iPad,タブレット型PC,スマートフォンの教育的利用」



特に、附属小学校での iPad,タブレット型PC,スマートフォンの教育的利用について、実践事例の紹介と、活用方法の提案があった。校外学習でどう活用するかなど、今後の本校の活用方法に深く関わる内容を聞くことができた。

2. 事業の成果と課題

①「気仙沼市立唐桑中学校・気仙沼市立小原木中学校視察および交流」

現在の生徒のようすは、落ち着いた学校生活を取り戻しつつある。依然として全校生徒の3割が仮設住宅から通学している。震災から2年半がたち、実態が変わってきたことがわかった。今後の交流のあり方については、物的支援ではなく、震災を風化させないように被災地の今を知ることが続けることが重要であり、それが被災地の願いであることがわかった。また、震災前から先進的な避難訓練や防災教育をしてきた学校であっても、今回の震災では十分に機能しなかったことを切実に述べられ、今後の本校の避難訓練や防災教育も充実させていく必要があると思われる。

②「宮城教育大学公開講座受講」公開講座「iPad,タブレット型PC,スマートフォンの教育的利用」

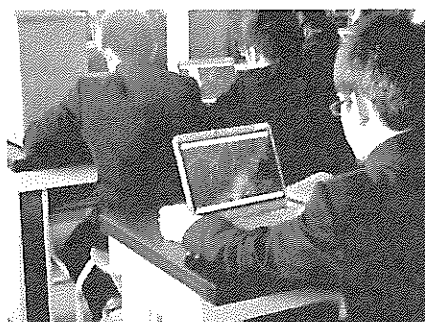
附属小学校では、修学旅行などの校外学習に iPad を持ち出し、学習したことを記録し、事後の報告会で電子黒板等を使用してプレゼンテーションを行っていることが紹介された。総合的な学習の時間に力を入れている本校の、今後の iPad 等の1つの活用方法のヒントが得られた。

また、新しい授業スタイルとして、反転授業が提案された。反転授業では、基本的な事柄を10分程度の動画にしてタブレットPCに保存し、生徒に持ち帰らせて予習ノートをつくらせる。従来の授業では、基本的な事柄から授業で扱うため、生徒が考える時間の確保が難しい場合があり、それを改善するスタイルとして認知されつつあることが分かった。

『「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)

項目名 ⑥研修出張旅費（上越教育大学附属中学校 ICT 研究発表会）

1. 事業の内容「上越教育大学附属中学校 ICT 研究発表会」



上越教育大学附属中学校は、2011年から総務省「フューチャースクール推進事業」文部科学省「学びのイノベーション事業」実証校に指定されている。今回の研究発表会は、実証後指定から3年がたち、これまでの取組の集大成が発表された。全校生徒1人1台タブレット PC が貸与され、ほぼ全ての授業で活用されている。今後はタブレット PC を持ち帰っての活用方法と学習効果について研究が進められるようである。

公開授業では、既存のアプリケーションソフトをどのようなねらいで、どの場面で使用するか、よく練られた授業であった。ICT 利活用に関する授業研究の1つのあり方をみる事ができた。また、授業での活用に加え、生徒による自主的な利活用についてや、機器の維持管理面での課題分析など、今後の本校での ICT 利活用に関わる重要な示唆を得ることができた。

2. 事業の成果と課題

本研究発表会の資料の学習指導案は、ICT 機器使用の目的とねらい、使用場面が明記され、非常に明確な物であった。ICT 利活用に関する授業研究を推進していく上で、本校に合った内容へと改変させて使用していきたい。

ICT 機器導入に関わって、活用ルールの作成や ICT 機器の維持管理は大きな課題である。上越教育大学附属中学校では、生徒の自主的活用についても取組に力を入れている。生徒会と情報担当教員などをメンバーとした ICT 委員会が組織され、そこで ICT 活用ルールなどを協議し作成されている。ICT 委員会によって校内ポータルサイトも運営されており、学級・部活・委員会などの活動が常に紹介されていた。今後、本校でも生徒が主体となって ICT を活用できるようにしていくことは、十分に考えられるため参考にしていきたい。また、機器維持管理の課題については、導入から3年がたつことで、タブレット PC のハードディスクの破損やバッテリーの消耗、修理費用の捻出などの問題が起きていることが発表された。今後、本校でも想定される問題であるため、今後の ICT 機器導入時に、考えておかななくてはならない問題であることがわかった。

『「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)

項目名 ⑥研修出張旅費

1. 事業の内容

「日本教育情報学会第29回年会」への参加

11月9日・10日に沖縄県那覇市の沖縄女子短期大学で行われた日本教育情報学会第29回年会に参加した。本年会では「地域文化を教育に」をテーマに、先人が築いた琉球王国大交易時代の絢爛豪華な伝統文化や沖縄戦とその後の米軍統治時代の国際色豊かな文化、亜熱帯の気候風土や島嶼性による沖縄の文化等の多様性を踏まえ、伝統文化の継承と学校教育での実践について確認し、今後の教材開発・教育実践の方向性を検討することを目的としている。また同時に、それらの伝統文化を風化させず、確実に継承するための記録化（アーカイブ化）をいかに進めていくのか、そのために行政は、学校現場は、地域はどのような役割を果たしていけばよいのかを、現場での実践を通して検証することも大きな目的としている。本年会では、「伝統文化をいかに伝承していくか」というテーマのもとに基調講演・シンポジウムが行われ、特に教育現場からは、ユネスコ「こども未来遺産」にも登録された現代版組踊『肝高の阿麻和利』が地域の子どもたちを育む可能性について上江洲安吉氏による報告の後、中高生による現代版組踊『肝高の阿麻和利』が実演された。この取組では、地域の子どもたちが郷土芸能の伝承に仲間とともに取り組んでいくなかでお互いに自尊感情を高め合い、地域に誇りを持ちつつ、それぞれが進路に向けて活路を見いだしていく過程が子どもたち自身の言葉によって語られたところが圧巻であった。



研究発表では「地域教材と学習利用」をテーマに以下の内容が発表され、活発な討議があり、多くの交流がもてた。

- 01 沖縄の低海拔地域の自然・文化環境を踏まえた地域防災学習・教材のアーカイブの取り組み
- 02 八重瀬町友寄地域に伝承されている獅子舞行事についてのオーラルヒストリーの研究
- 03 ひめゆり学徒隊関係者による平和学習のためのオーラルヒストリーの開発と実践的研究
- 04 地域のひと・もの・ことにかかわり合う教材開発と学習指導
- 05 地理的な見方や考え方を養う学習指導の工夫ー地域の課題を見だし、地域社会の形成に参加する活動を通してー
- 06 フィールドで学ぶ自然と文化 07 沖縄教材デジタルアーカイブの内容と利用 08 「e 手仕事図鑑」の開発と教育利用

2. 事業の成果と課題

今回の学会参加で沖縄県における平和教育実践の課題が把握できたと共にE S Dを進める附属中学校の取組に示唆を得た。戦後68年を経て、戦争体験を語れる方の減少に伴い、直接的な戦争体験の継承が難しくなってきたこと、多様な価値観の中で戦争体験の継承を次代に向けての課題にすることに共通理解が図りにくいことが挙げられた。それを打開する方法の一つとして、戦争体験を記録化（アーカイブ化）することが沖縄各地で取り組まれている。文字資料として伝えることの他に、映像を通して直に語り継いでいくこの手法をICTを最大限に活用し、地元沖縄のみならず、本土や世界に発信することを子どもたちと共に取り組むことが進められている。附属中学校においても、毎年実施している「平和の集い」や「沖縄修学旅行」でも、これらの手法を積極的に活用したい。また、伝えられた者として、次代に伝える「新たな伝承者」としての中学生を育てていくことの使命を痛感した。

『「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)

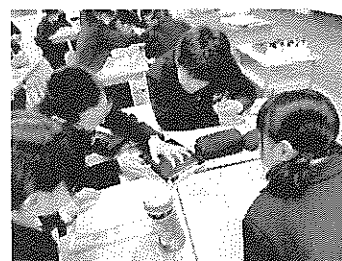
項目名 研修旅費 (愛媛大学教育学部附属中学校)

1. 事業の内容

- 事業名 第93回愛媛教育研究大会(中学校の部)視察
- 日程 2014年2月20日(木)～21日(金)
- 参加教員 吉田 寛
- 目的 ESDを研究主題に設定している愛媛大学教育学部附属中学校の実践を学び、今後の本校での研究推進の参考にする。



〔愛媛大学教育学部附属中学校 研究主題〕
持続可能な社会の形成に向け、自らを活かす生徒の育成
～すべての生徒が伸びる学びの追求～(3か年研究1年次)



○活動の概要

- ・2月20日(木) 夕刻 奈良から愛媛松山市へ移動(泊)
- ・2月21日(金) 第39回愛媛教育研究大会 出席
 - ・基調提案
 - ・公開授業Ⅰ(社会科・1年地理)
「持続可能な社会の実現について考えよう～南アメリカ州～」
 - ・公開授業Ⅱ(社会科・2年歴史)
「産業革命における我が国の変化を捉えよう～民富か、国益か～」
 - ・教科領域別分科会(社会科)
 - ・講演 市川伸一教授(東京大学大学院教育学研究科)
演題…「教えて考えさせる授業」は何をめざすのか
～学ぶ意欲と深い理解を育む授業設計～
- ・2月21日(金) 夕刻 松山から奈良へ移動、帰着

2. 事業の成果と課題

「すべての生徒が伸びる学び」のために、愛媛大学教育学部附属中では、生き生きと自分を発揮できる学びの場を創造することに留意され、「学び合える集団をいかに形成するか」と、「学びの質をいかに高めるか」といった点から研究主題へのアプローチを進めておられた。ESD的な視点で、3つのきょうどう(協同・共同・協働)から「自分」・「他者」・「社会」とのつながりを意識させた上で、身につけた資質や能力を自在に活用する力をつけようと試みておられた。具体的な授業実践として、前半部では理解確認を図る問いを設定し、後半部で理解を深化させる問いを設定するといった手法で授業を展開されていた。前半部の理解確認を図る際には班単位でipadを活用する場面も見られ、今後、本校での研究を推進していく上でも参考にしていきたい。

『「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)

項目名 研修旅費（松阪市立三雲中学校）

1. 事業の内容

「ICT教育環境の充実に向けた松阪市立三雲中学校（フューチャースクール）の視察」

○視察の目的

ICT教育実践校の実践視察とiPad導入に関するアプリ等の助言やシステムの構築について学ぶ。

○視察の日程

- | | |
|-------------|--------------------------|
| 10:00～11:30 | 今までの実践と導入に対する考え方
意見交流 |
| 11:30～12:30 | 実践視察1（技術・体育） |
| 13:00～13:45 | 実践視察2（理科） |
| 13:45～15:00 | 質疑応答 |

フューチャースクールに指定されている松阪市立三雲中学校で、iPadを取り入れた授業の視察とICT教育を進めていくにあたっての環境設備等について助言・話し合いの場を持って頂いた。三雲中学校は導入してから3年がたち、ICT教育のモデル校となっている。設備としては各教室に電子黒板（メーカーは多種）、投影機（ELMO）、PC、apple TV、タブレット用コンテナである。

iPadを一人一台所有しており、授業へ行くときには、持参して移動していた。また、iPadを生徒会（iPadによる生徒会選挙の投票）やクラブ活動（フォームのチェック）、地域の学習会（星座の観測）などに活用されていた。生徒が持つことで故障等もあり、メンテナンスの予算も確保されているようだった。

導入にあたり、本校の教員が持つICT機器への不安（ICTの未経験、多忙による導入の拒否、効果に対しての不安等）を三雲中学校でもあり、それを解消するための研修を常駐のICT支援員が行っていた。研修内容としては、ある週は使い方を、ある週はアプリについての研修をランダムに行っているようである。

活用例としてiPadを共同学習に使用している例を示された。課題を設定し（各iPadに転送する）、それを個人で考え、その後学び合い、共有し、振り返る。その過程でiPadを使い他人の意見を取り入れたり、比較したりすることで学習の中にiPadを取り入れていた。

今後は、各家庭でオフラインでも使用できるようにし、課題として家で行ってきたもののデータを、wifiを使って回収し、どこを理解できていないのかの推察のために用いることを行うようである。また、ドリル学習を取り入れ不登校の生徒にも使えるような環境をつくっていくことも行うようである。

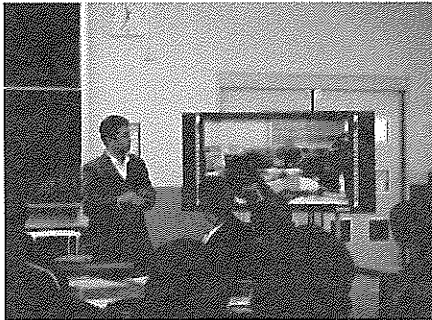
2. 事業の成果と課題（視察を終えての所感）

3年という短い期間の中で、三雲中学校独自の使い方を模索し生徒自身だけでなく教員自身が持続的に使用できる環境を作り上げていた。ゼロからのスタートということであったが、ルール作りやさまざまな活用方法を見出しており、タブレットを用いての授業にもまだまだ活路があると感じた。また、支援員の動きが活発で、教員に提案や講習を行うことでさらなる活路が見いだしているのだと感じた。本校でも常駐の支援員がいるという環境なので、授業のみの支援だけでなく講習な

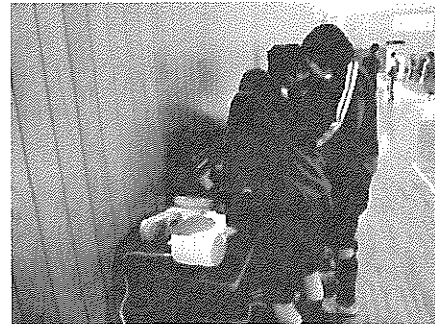
ども携わっていただき、我々教員以外の考え方を授業の中で取り入れていくことの大切さを感じた。また、iPad導入時から常駐されているようで、トラブルのパターンをよく理解しており、支援員自体が機器に慣れたり、私たちと共同して授業を作り上げたりするには短い期間ではなしえないことだと感じた。

教師間での機器の使用は、学校の校長先生が使用することで、どんな人にでも使えるということを示されていた。三雲中学校では、校長先生が毎朝全クラスに今日の一言をPCから送ることや1年に1回ICTを使った授業をされていた。本校でも機器に不慣れな先生が試しに使うことで、機器の操作のハードルが下がるのではないかと思います。

今後、奈良市の教育委員会も検討中であるということなので、本校でも奈良県のICT教育を先導していくことが可能である。奈良県のモデル校として先導していくためにも、研究会等に向けて活用方法を考え、発信していくことが必要ではないだろうか。



技術の授業で前回行った作業の振り返りのため、iPadで記録した画像を示している。



体育の授業で自分たちのダンスを記録し、確認している。

北海道教育大学釧路校 ESD 推進センター視察報告書

1. 目的

北海道教育大学釧路校のESD推進センターは、平成20年に、「ESD についての調査・研究、持続可能な社会実現を目指す教員や地域活動人材の育成支援、地域と連携した ESD 活動の推進」を目的として設置された。ESDの先進校である、北海道教育大学釧路校を視察することで、今後の本学でのESD活動へと生かしていくことをねらいとしている。また、北海道教育大学釧路校が活動の拠点としている釧路湿原や根室岬などを同時に視察することで、活動地域への理解を深めることもねらいとしている。

2. 視察日：平成26年3月13日（木）～3月16日（日）

3. 参加者

長友恒人	学長
加藤久雄	「学ぶ喜び」プロジェクト座長（国際交流・地域連携副学長）
後藤田洋介	物質科学専修3回生
黒田千尋	家庭科教育専修3回生

4. 行程

3月13日（木）

10:30	伊丹空港集合
11:30	伊丹空港発 JAL114便
12:35	羽田空港着
13:15	羽田空港発 JAL1147便
14:50	釧路空港着
15:00	宿泊先へ移動
15:35	宿泊先着、チェックイン

3月14日（金）

9:30	ホテル発
9:40	北海道教育大学釧路校着
10:00	ESD 推進センター視察
12:00	昼食
13:00	釧路湿原（鶴居町、釧路湿原ビジターセンター）見学
16:00	釧路市立博物館

3月15日（土）

9:30	根室岬・納沙布岬へ出発 厚岸水鳥観察観、スワン44ねむろ、北方四島交流センター
12:30	納沙布岬到着
16:30	ホテル着

3月16日（日）

9:00	ホテル発
9:40	釧路空港着
10:25	釧路空港発 JAL1144 便
12:15	羽田空港着
13:30	羽田空港発 JAL119 便
14:40	伊丹空港着
	解散



ESD 推進センター

5. 行程の概要

- ・北海道教育大学釧路校 ESD 推進センター

【専攻について】

北海道教育大学釧路校では平成 18 年度の大学改組時に ESD に根ざした大学づくりを行った。その中でも地域教育開発専攻の中の地域教育分野と環境教育分野では ESD に立脚したカリキュラムが組まれていた。

【ESD 認証制度】

北海道教育大学釧路校では、決められた講義の中で 16EP を履修することで「ESD プランナー」という大学独自の認証制度を行っている。この ESD プランナーは一般にも公開されており、地域でボランティアを行っている市民や、道内で教員をしている人などが認証を受けている。また EP というのは、一般にも公開できるように単位の代わりに設置しているものである。

16EP の中には基礎的な活動や、フィールドワークなどがある。フィールドワークでは釧路湿原を使ったエコウォッチング（鳥や植物の観察）や、ごみ処理体験、キャンプなどがあつた。このフィールドワークは地域トライアルという形で、一回の講義が約 6 時間程度となっている。座学だけではなく、フィールドに出て実際を知ることによって環境への意識を高めている。

- ・釧路湿原国立公園

【鶴見台】

鶴見台では丹頂鶴と白鳥を見ることができた。丹頂鶴の羽数は数えられないほどいたが、これは餌の少ない冬季のみ給餌をしているためであった。観光客の餌やりは禁止されているが、給餌を行っていることで完全な自然ではなかった。



鶴見台の丹頂鶴

【釧路湿原ビジターズハウス】

ここでは釧路湿原への道があるほかに、感光見学のためにスキーの貸し出しを行っていた。ESD プランナーを取得するために受講する地域トライアルでは、釧路湿原をフィールドにする際には、このビジターズハウスを中心に活動を行っている。

- ・釧路市立博物館

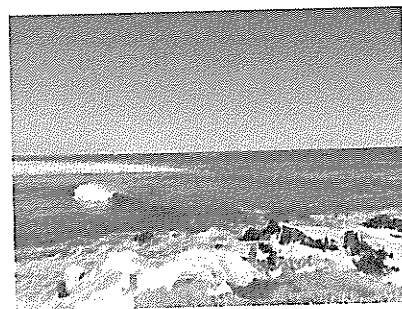
展示は、一階、二階、四階の三つに分かれており、一階には釧路の自然を展示している。その中には魚類のことや野生動物、エゾシカやヒグマの展示などもあつた。二階には釧路の文化について、擦文文化の土器や漁業や交易を支えた船の紹介、戦時中にあつた釧路空襲の展示などがあつた。四階にはアイヌ文化が展示してあつた。アイヌの一年の生活の様子や、伝統儀礼、服飾、ビデオによる伝統舞踊の展示などがあつた。また、地元の住民によると、釧路市立博物館では多くの収蔵物があり、置ききれないようになっているようである。さらに、地元の住民が釧路のことについて知識

が少ないということも聞くことができた。

・納沙布岬

納沙布岬へ向かう道中には、オオワシ、オジロワシ、天然の丹頂鶴、また帰路ではテンやエゾジカなどを見ることができた。これらの動物は給餌をしていない天然の動物である。これらをウォッチングすることも根室の名物になっている。

納沙布岬は日本本州最東端の岬で、その岬からは国後島などの北方四島を眺めることができた。



納沙布岬からの景色

6. まとめ

本視察では北海道教育大学釧路校 ESD 推進センターで行われている ESD 認証制度や、カリキュラムについて詳しく知ることができ、また、釧路湿原国立公園では釧路校で行われている活動フィールドを見学でき、多くの丹頂鶴などを見ることができた。さらに納沙布岬の見学では、日本本州最東端から北方四島を見ることができたことなど、多くの学びを得ることができた。

とくに ESD 認証制度では、一般に開かれた制度で、様々な世代との学び合いであること、フィールドワークを中心に社会教育や自然環境教育を行っていること、さらに、学生の意志によって活動が行われていることなど、その制度自体が ESD 的な活動であることを知れた。

これらの ESD 先進校を視察することによって得られたものを、本学の活動にも生かしていきたい。

テーマ 3

特に地域の学校との連携・協働による地域の
学校での校内研修に対する支援体制の構築及
び平成 26 年度制度化に向けての試行的実施
等、大学の地域のセンター的機能の拡充

平成 25 年度 奈良教育大学公開講座
特別トークショー 実施報告概要

1. 目的

本学では、持続可能な開発のための教育（E S D）を推進しており、今年度は「地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト」として、E S Dの研究・教育と推進に取り組んでいる。

持続可能な社会を制限するものとして2つ考えられる、一つは自然環境による制約である。資源・エネルギーには限りがあると共に、二酸化炭素などの廃棄物を無害化する環境容量にも限界がある。もう一つは、平和な社会をつくるという、人と人との関係に関わる課題である。環境が保護されていても、戦争になれば持続可能な社会ではない。

第1回の特別トークショーでは、文化多様性の尊重をテーマに韓国文化や韓国との交流に関わるトークショーを行うことで、多文化共生の重要性や現在の問題点などについて関心を高めることを目的とする。

また第2回の特別トークショーでは、アフリカの現代教育事情をテーマにアフリカの子どもたちの現状やJICAが行っている支援とその成果に関わるトークショーを行うことで、アフリカ等の途上国に対する関心を高めることを目的とする。

2. 主催 「地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト」

3. 開催日時

第1回 平成25年12月11日（水）14時～16時 21名参加

第2回 平成26年 1月10日（金）17時～19時 22名参加

4. 内容

第1回 テーマ「日本と韓国は近くて近い国」 日本人が見た韓国、韓国人が見た日本

講師：サイクルライフショップ白星 代表 辻 正光 氏（元奈良市立椿井小学校教諭）

奈良教育大学外国人研究者 ナム・ヒョンスン 氏（元駐在大阪韓国総領事館奈良韓国教育院長）

第2回 テーマ「アフリカの現代教育事情」

講師：株式会社アイリンク主任研究員 光長 功人 氏（元JICA 専門家）

M-wing コンサルティング代表 松山 匡延 氏（元JICA 中小企業支援室調査課）

平成 25 年度 地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

第 1 回特別トークショー「日本と韓国は近くて近い国」実施概要報告書

1. 実施日時 平成 25 年 12 月 11 日（水）14 時～16 時
2. 会場 次世代教員養成センター大会議室
3. 参加者 21 名
4. 講師 辻 正光氏（サイクルライフショップ白星代表）
ナム・ヒョンスン氏（奈良教育大学外国人研究者）
5. 内容

辻氏：日本に教育視察に来られた韓国人教員を色々案内した。英会話教育などに先進的に取り組んでいる学校も見ていただき、感想を聞いたところ、「日本の学校を視察して、感心したことは何もなかった」と言われ、ショックをうけ、韓国の教育に興味を持つようになった。韓国の教育事情の象徴は、「サンセンム」という言葉に表されていると感じた。日本語にすると、「先生様」だ。韓国では自分のことを紹介するときでも「教師」ではなく「先生様」と、「様」をつける。



ナム氏：自分に「様」をつけるのは、先生だけ。会社の社長でも、自分のことを社長様とは言わない。

辻氏：韓国では教員は尊敬の対象だし、憧れの職業だ。

辻氏：ソウル大学師範大学附設初等学校を視察して。保護者が授業に協力していた。伝統的な遊びの時間には、母親もハンボ（韓国の伝統的な服装）で協力していた。礼儀の授業もあり、韓国では知徳体の徳も重視していると感じた。

ところで、日本の子どもの家庭学習にかかる時間は平均 53 分だが、韓国ではどうだろうか。

留学生：学校が終わってから、4～5カ所の塾に通っていた。

ナム氏：日本の塾は週 1 回とか 2 回だが、韓国では習いものは原則として毎日行く。毎日すると上達も早い。

辻氏：韓国の子ども（小学校 3 年生）の家庭学習の時間は 4 時間らしい。

ナム氏：放課後学校というのもあり、塾に行くとお金がかかるので、こちらに通う子どもも多くいる。先生と地域の人が教えてくれる。費用は月に 5～6000 円ほどだ。

加藤氏：10 時まで学校で勉強していると聞いたが、夕食はどうしているのか。また先生はいつも 10 時まで働いているのか。

ナム氏：夕食は、学校の食堂で食べる。近くのお店に行く人もいる。先生は当番制で、毎日ではない。また放課後学校で指導する先生には、別に給与が支給される。

韓国では習い事や教室がさかん。朝の 6 時からスポーツや英会話の教室があり、大人が通っている。夜は 12 時までやっている。

辻氏：給食の様子も見たが、誰も食べ物を残していなかった。配られるときに、少なくしてとか、

言っているようにも見えたが。

ナム氏：食べ物を残さないことを指導しているし、マナーだ。

辻氏：ソウル静文特殊学校（特別支援学校）を視察して。

学校予算が十分にあると感じた。また、売店や学校の展示、授業にも保護者が協力している。校長先生も、保護者の協力が学校運営に欠かせないとおっしゃっていた。特に室内遊具施設が充実していた。

ナム氏：それは遊びを通した治療のためですね。

辻氏：忠清北道生徒外国語教育員を視察して。

県の施設で、ここでは4泊5日のプログラムで小学生が英語の勉強をしていた。生活全体が英語を学ぶ。ここにいる間は韓国語禁止と聞いた。

例えば、2008年度の日本の教育予算は約6億円だったが、韓国は約1000億円だ。国家予算の20%を教育に使うことが決められている。「東アジアにある資源の乏しい国が投資すべきは国家の未来を支える子どもたちだ。」

ナム氏：韓国の人たちがどんな暮らしぶりなのかを紹介する。韓国ではマンションが中心だ。広い土地を開発して、高層マンションを建てている。最近、小学校の運動場の芝生化が進んでいる。80%が芝生化された。韓国で人気のあるスポーツと言えばサッカーだ。その他にもバドミントン専用の体育館があるくらいバドミントンも盛んだ。



韓国の学校と日本の学校の違いのひとつは、韓国の先生は一日中教室にいるというところ。日本のように休み時間になると職員室

に行くということはない。

最近、韓国の学校でもいじめや校内暴力が深刻な問題になっている。すべての小・中・高等学校にスクールポリスが配置され、解決にあたっている。また、NPO団体などによる子どもだけでなく保護者対象の講習会もやっている。

韓国ではボーイスカウトも盛んで、子どもたちはボランティア活動をやっている。

韓国の小学生に一番人気がある教科は体育だ。でも、日本のようにみんなが同じ体操服は着ていない。それぞれの家で体育にふさわしい服装を用意する。春と秋に運動会がある。春は小規模だが、秋の運動会は大規模だ。

韓国の学校には、日本のような部活動はない。でも、先生方のクラブはある。

最近、菜園のある学校が増えた。また、室内温水プールのある学校も増えた。温水プールは、地域にも公開している。学校は生涯教育の場でもある。

辻氏：テグに行くときに乗ったタクシーの運転手さんが、韓国はガソリン代が高いと言っていた。でも、それはガソリン代に教育目的税が課せられているからで、運転手さんも納得していた。韓国では教育に理解があると感じた。

とても親しくなった韓国の方に、日本や日本人についてどう思うか、本音を聞いた。すると、「高校までは日本や日本人が大嫌いでした」と言っていた。

ナム氏：そういう教育だから。私もそうでした。

辻氏：でも、今は日本や日本人のことが大好きになったと彼女は言ってくれた。私にとって韓国の娘のような存在だ。たった一人との出会いでも、変えられることもあると知った。

日本に戻り、椿井小学校で彼女の学校とスカイプをつかった交流を始めた。双方にとって外国語である「英語」でのコミュニケーションだ。この交流のようすが韓国の教育委員会でも認められて、評価がよくなったと彼女も喜んでいて。

ナム氏：韓国では、教員の評価がしっかり行われており、それによってボーナスの額が大きく変わる。

辻氏：私は交流には3つの効果があると思う。一つ目に互いの共通点や相違点に気がつくことだ。二つ目は、「次は日本の何を紹介しようかな」と考えることで、自文化理解につながる点だ。三つ目は英語学習の動機づけだ。

私は、日本と韓国は友達じゃないと思う。兄弟だ。友達を選ぶことができるけど兄弟は選べない。それぐらい近い存在だと思う。みなさんも韓国に行ってみましょう。

ナム氏：お互いに関心を持ち続けることが大切だ。それが絆になっていく。ぜひみなさん、韓国に来てください。百聞は一見にしかずですね。



平成 25 年度 地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

第 2 回特別トークショー「アフリカの現代教育事情」実施概要報告書

1. 実施日時 平成 26 年 1 月 10 日（木）17 時～19 時
2. 会場 次世代教員養成センター大会議室
3. 参加者 22 名
4. 講師 光長 功人氏（株式会社アイリンク主任研究員）
元 JICA 専門家 ザンビア、セネガル、ケニア、ブルキナファソ、
ニジェールでの活動経験
松山 匡延氏（M-wing コンサルティング代表）
JICA 中小企業支援室調査課 ルワンダ、マラウィ、ケニアでの活動経験

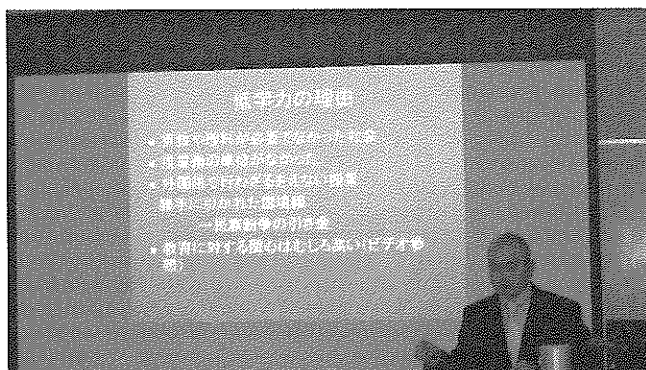
5. 内容

(1) アフリカ大陸基本情報（光長氏）

- ・ ケニアが東の玄関口、セネガルが西の玄関口
- ・ アフリカ大陸には 54 ヶ国あり、人口は 8 億人。その半数は 18 歳以下。
- ・ エチオピア以外は、もともと文字のない文化だった。
- ・ 学校制度は始まって 50 年である。
- ・ 日本は 25 ヶ国で理数科教育支援を実施している。また、サハラ以南のほとんどの国で教育支援を行っている。
- ・ 資源の奪い合いが原因の民族紛争が多い。
- ・ 産業発展のためには人材育成が急務という考えの下、JICA はアフリカの理数科教育を支援している。
- ・ JICA は日本の援助 ODA の一部。相手国の要望に応えるため、120 の職種がある。健康な体と挑戦心があれば、誰でもできる。
- ・ 低学力傾向の原因

① 自然環境が豊かなため、算数・理科が必要とされなかった。（あとどれくらいでなくなるかという心配のいらぬ社会。なくなってからで、十分対応できる。）計算問題では、繰り上がりや繰り下がりがあると、急に正答率が下がる。大きいことがいいことという文化のため、小ささを比べる状況がなく、小数を使う場面がない。教学を指導する際には、文化的背景に考慮して教える必要がある。

② 先進国によって勝手に国境線が引かれている場合もある。そのためあつて、様々な部族によって国が成り立っているため、どれかの部族の言語を使用すると不公平感がある（民族紛争を引き起こさないためにも外国語を公用語にせざるを得ない）。小学校から外国語で授業が行われているが、それは家では使っていない言語である。言語力と学力がリンクしている。読解力の低さも外国語が原因。



- ③ チョーク&トークという言葉に代表されるように、教員の授業レベルが低い（教科書に書かれている文章を黒板に写させるだけで、何の説明もない授業）。教員研修とカリキュラムづくりへの支援が重要。

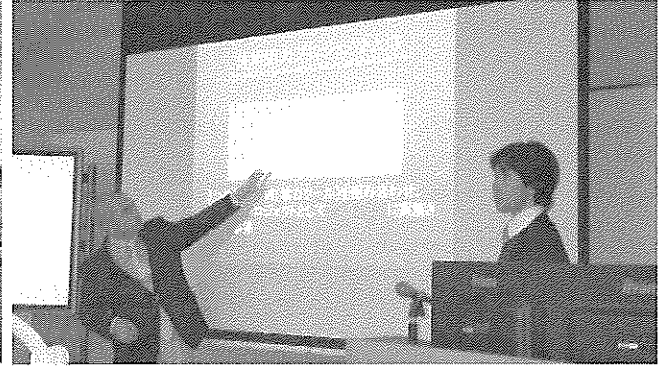
(2) ルワンダについて (松山氏)

- ・ 道にはヤギがたくさんいる。
 - ・ 水道や電気といったライフラインは整備されていない。
 - ・ 国民の気質として先のことを考えることがあまりない。(例：家を建ててから、壁をぶち抜いて牛乳タンクを設置したものの、結局は牛乳販売もしていない家)
 - ・ 貧富の差が開き続けている。
 - ・ ツチ族とフツ族による紛争で多くの国民が犠牲になったルワンダでは、ツチ族フツ族の違いは、宗主国であったベルギーが鼻の高さなどから勝手に決めたものである。また公用語もフランス語から英語に変更されるなどの混乱がある。
 - ・ ルワンダでは空手（カラテ）の人気の高い。
 - ・ 日本人は尊敬されている。
 - ・ ルワンダは人口密度が高いことと資源がないことから、人的資源による技術立国を目指しており、理数教育が求められている。
- ・ 教育の無償化が行われたのはよかったが、必要な数の教員を養成する施策がなかったため、教育の質は下がった。教員養成の必要性。



(3) アフリカの教育の今後

- ・ ナショナルテストの結果で人生が決まるところがあり、都会に住むエリートをめざす層は、必死に勉強している。一方、田舎では、未だに家庭の手伝いなどで、学校に行っていない子どももいる。格差が広がっている。
- ・ 教育を受けても、一部のエリート以外は、国内産業が育っていないため職がない。外資を呼び込むしかない。それはまた、国内産業の成長を妨げることにもなりかねない。
- ・ 先進国が一方的な（要望に関わりなく）支援を行ってきたという経緯があり、支援物資はけっこう使われていない。例えば教材を送っても、現地の先生には使い方がわからないため、倉庫で眠っているものも多い。
- ・ 技術協力は3～5年で終了するため、スタッフが引き上げると事業自体が終了してしまい。自立発展性がない。これからは、ビジネスを入れることで相手国の雇用を創出し、事業を継続させるといった新しい協力の可能性が探られている。一方、日本の中小企業はすごい技術力を持ちながらも、国内にマーケットがないという実情がある。そこで、中小企業の途上国進出支援として、ビジネスと国際協力の融合という民間連携が目指されている。



奈良教育大学の位置する奈良の地には社寺や遺跡、美術工芸など多くの有形文化財が遺され受け継がれているが、それ以外にも祭や芸能などの無形文化遺産も数多く継承されており、民話などの伝承文化も古くから各地域で語りつがれている。これらは豊かな地域コミュニティを形成していく上で欠くことのできない、地域の歴史や風土、特色、文化などを世代を超えて語り継ぐものであり、家庭や地域社会の中で重要な教育的役割を担ってきたものである。近年は地域コミュニティの希薄化や核家族化などに伴い民話の伝承そのものが失われつつあるが、奈良県は比較的多くの民話が現在も地域の中で語りつがれており、これからも継承していくことが求められている。しかし、その担い手は減少の一途を辿っており、地域における学習や教育を考える上で留意すべきものともなっている。

基本的に民話は口承による「語りの文化」であり、「語る」ことにより人との繋がりを構築し、家庭内や地域内、世代間の関係性を保ち、地域コミュニティを持続的に維持していく働きをもっている。伝統文化の尊重や、生活する地域に対する理解の深化、人間愛や礼節、価値観、思いやりや助け合い、コミュニケーション能力の育成、自然に対する畏敬と知識など、地域社会・環境を持続的に支える重要な内容が含まれている。これらは、ESDの推進においても意義深い働きである。そこで、奈良県内各地に残された民話を活用した教育プロジェクトを企画し、平成21年以降継続的に展開している。本年度は民話地図教材のさらなる充実と新たに民話紙芝居の作成、そして語り手養成講座の開講に取り組んだ。

平成21年に「地域と伝統文化」教育プログラムの一環として民話地図教材「ならまち民話地図」の初版を作成して以来、奈良県内で伝えられてきた民話をテーマにした民話地図教材の作成を継続的に行ってきた。本学近傍の「奈良町」の民話以外にも、奈良県南部の特色ある地域である「吉野」の民話、そして奈良市東部の剣豪の里として名高い「柳生」の民話など、奈良県内の特色的な地域に着目した民話地図教材を制作している。現在までに、「ならまち民話地図」は日本語、英語、ドイツ語、中国語、韓国語の5カ国語版を、「吉野民話地図」および「柳生民話地図」は、日本語、英語、ドイツ語、中国語の4カ国語版を作成・公開している。本プロジェクトではこれに加え、「吉野民話地図」「柳生民話地図」の韓国語版を新たに作成した。制作にあたっては本学へ韓国から留学に来ている学生の協力を得て、「吉野民話地図」の翻訳をイ・ミンヒさんに、「柳生民話地図」翻訳をヨ・ジュヒさんに依頼した。さらに、韓国語訳の校閲を京都府立大学の井上直樹先生にお願いした。民話地図の制作は、本学卒業生である増田恵子さんおよび山崎彩乃さん両名の日本語版デザインを基盤として、韓国語版用に青木がデザインを一部改変して行った。また、全体の監修を青木および本学名誉教授の竹原威滋先生が行った。今回、両民話地図の韓国語版を作成したことにより、「ならまち民話地図」「吉野民話地図」「柳生民話地図」3地域の民話地図教材の、日本語、英語、ドイツ語、中国語、韓国語の5カ国語版が出揃ったことになる。5年にわたって継続してきた民話地図教材の作成プロジェクトが準備段階を終え次の段

階へと向かう体制が調ったことになり、今後、これらの地図教材を活用したESD事業を包括的に行っていく計画である。

本年度から、新たな試みとして始めたプロジェクトに民話紙芝居教材の作成がある。先述の通り、民話は本質的に「語り」の文化であり、話者が聴者に語り聞かせることにより構築される文化コミュニケーションである。紙芝居は、その一つの方法といえる。今回は「柳生民話地図」にも掲載されている民話「猿の肝」を紙芝居として作成した。紙芝居の作画は、民話地図の制作にも携わった本学卒業生の増田恵子が担当した。今後は、自由に利用可能な紙芝居教材としてWeb上などで公開する予定である。また、次年度以降、民話種を増やしさらなる充実も模索したい。



図 1. 吉野民話地図 (韓)

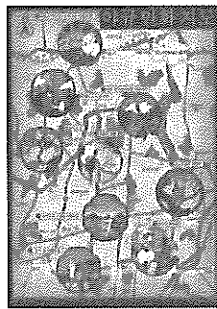


図 2. 柳生民話地図 (韓)

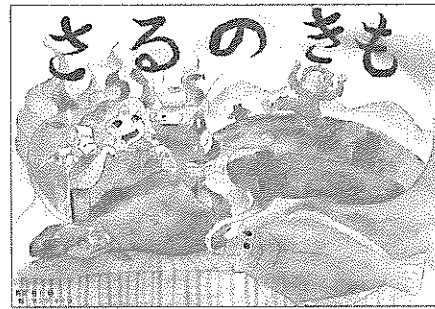


図 3. 紙芝居「ざるのきも」

民話の「語り」には様々なテクニックがあり、未経験のものが実施するには困難が伴うことも多い。そこで、本プロジェクトでは民話・伝承の担い手の育成を目指した公開講座を今年度も開講した。この「語り手養成講座」は、本学の学生だけを対象とするのではなく公開講座として広く一般に開かれたものであり、平成 21 年度の以降継続的に開講し、多くの語り手の養成を行ってきた。今年度は「2013 年度 語りの講座Ⅲ」として、平成 25 年 10 月 15 日から全 5 回の公開講座として展開した。受講生は 36 名であった。講師としては、伝承文学研究者の奈良教育大学名誉教授の竹原威滋先生、現役で活躍されている語り手の村上郁さん、放送技術者である植田一宏さんを迎え、伝承文化や語りの技術を学ぶと同時に、語りにおけるマルチメディアの利用という新たな内容も取り入れて展開された。ESDでは、育成された人材の社会への貢献が重視されており、本プロジェクトにおいてもその点を強く意識している。講師の竹原は、奈良の民話・伝承を語りつぐ活動として市民グループ「奈良の民話を語りつぐ会」を運営しており、「語り手養成講座」で養成した語り手のうち有志が同会の活動に参加し、「奈良民話祭り」の開催や地域の幼稚園や図書館などで民話の語りを行っている。本学の「語り手養成講座」と市民活動「奈良の民話を語りつぐ会」が連携した人材育成から社会貢献までの一貫した取り組みである。本プロジェクトで制作した民話地図教材や民話紙芝居教材の積極的な活用と併せて、今後も継続して取り組んでいきたいと考えている。

1. 奈良 ASP ネットワーク連絡会議

(1) 目的

奈良県及び近隣の地域に所在するユネスコ・スクール等の学校間交流、教員・児童・生徒交流の実施、及び研修会等を開催することを通して、ユネスコ活動の質的向上を図ることを目的とする。

(2) 開催内容

- 第 1 回 5 月 23 日 奈良 ASP ネットワーク ESD 子どもキャンプ実施案の提案
- 第 2 回 6 月 20 日 ESD 子どもキャンプの検討、合同研修会の提案
- 第 3 回 7 月 25 日 ESD 子どもキャンプ役割分担 合同研修会の検討
- 第 4 回 8 月 22 日 各校の 1 学期の ESD 活動報告
- 第 5 回 9 月 12 日 ESD 研修会 (ESD で取り組む学習内容)
- 第 6 回 10 月 10 日 ユネスコスクール 60 周年記念大会参加報告、ESD 研修会 (価値観)
- 第 7 回 11 月 07 日 ESD に関する新しい動向、ESD 研修会 (人と人との関係に関する課題)
- 第 8 回 12 月 12 日 ユネスコスクール全国大会参加報告、ESD 研修会 (生物多様性)
- 第 9 回 01 月 23 日 韓国教職員との交流、各校の 2 学期の ESD 活動報告
- 第 10 回 02 月 13 日 奈良教育大学第 2 回 ESD 学会について
- 第 11 回 03 月 07 日 各校の 3 学期の ESD 活動報告

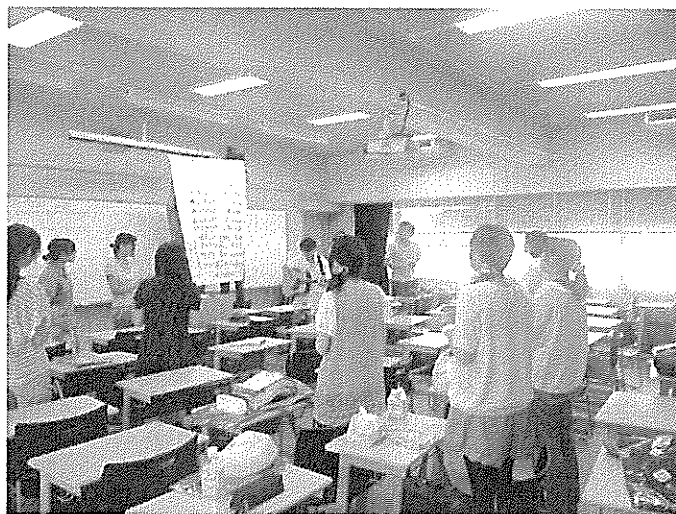
2. ユネスコスクール活動支援

(1) 各校からの依頼のあった支援活動

- 5 月 24 日 奈良市立椿井小学校 野外活動支援、福祉教育支援
- 6 月 13 日 奈良市立済美南小学校 野外活動・フィールドワーク支援
- 8 月 19 日 奈良市立三笠中学校 生徒会リーダー研修会支援
- 9 月 25・26 日 奈良市立飛鳥小学校野外活動支援

(2) 親子燈花会活動支援

- 8 月 5 日 奈良市立飛鳥小学校
 - 8 月 7 日 奈良市立済美小学校
 - 8 月 9 日 奈良市立済美南小学校
- (今年度は、奈良市立椿井小学校の開催日が、ESD 子どもキャンプと重なったため、参加できなかった。)



支援活動に向けた学習会

1. 開催日時 平成 26 年 1 月 23 日 (木) 16 時～19 時
2. 開催会場 奈良教育大学 201 号教室
3. 日程
 - 16 時 00 分 : 韓国教職員の出迎え 201 号教室へ
長友学長あいさつ
韓国教職員代表あいさつ
 - 16 時 10 分 奈良教育大学のユネスコスクールとしての取組紹介
奈良教育大学講師 中澤 静男
 - 16 時 45 分 質疑応答
 - 17 時 00 分 奈良教育大学ユネスコクラブとの交流
アイスブレイク・アンクルン演奏
 - 17 時 15 分 グループ別アンクルン体験 (3 グループ)
 - 17 時 45 分 グループごとのアンクルン演奏発表
 - 17 時 50 分 終了・休憩
 - 18 時 00 分 奈良 A S P ネットワーク教員との交流
加藤副学長あいさつ・3 グループに分かれての意見交換会
 - 18 時 45 分 グループでの話し合いの共有
 - 19 時 00 分 終了

4. 奈良教育大学のユネスコスクールとしての取組紹介

2007 年 7 月 日本で最初に大学としてユネスコスクールへの加盟が認められる。

2011 年 3 月 持続発展・文化遺産教育研究センターを設置

(1) 文化遺産を通じた E S D の研究

- ① 理論研究
- ② 研究大会の開催

(2) 持続可能な社会づくりの担い手を育成する取り組み

- ① 十津川村道普請 E S D 体験ボランティア
- ② 親と子の公開講座
- ③ E S D 奈良円卓会議の組織化

(3) E S D を指導できる教員養成の取組

- ① 授業
- ② E S D ・学ぶ喜び連続公開講座
- ③ E S D 子どもキャンプの開催
- ④ 特別トークショーの開催

(4) E S D に関する教員研修への協力

- ① E S D 連続セミナー
- ② 奈良 A S P ネットワークでの E S D 研修会

奈良教育大学の取組

持続発展・文化遺産教育研究センター 中澤静男

文化遺産を通じたESD

ESD 持続可能な開発のための教育

ESDで育てたい価値観とは

ESD国際実施計画案(2005.1)

ESDの目標

- ① 人と環境との関係に関すること
自然環境が自ら再生する役割を果たすこと
- ② 人と人との関係に関すること
平和裏に人々が共存することを達成すること

日本のESD実施計画

先進国が優先して
取り組むべき課題

- ① 社会経済システムに環境配慮を
織り込んでいくこと
- ② 人権や文化等に対する配慮を織
り込んでいくこと

共通点は

国際実施計画案 日本ESD実施計画

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| ① 自然環境が自ら再生する役割を果たすこと | ① 社会経済システムに環境配慮を織り込んでいくこと |
| ② 平和裏に人々が共存することを達成すること | ② 人権や文化等に対する配慮を織り込んでいくこと |

ESDで養う価値観の基礎

- ① 世界中のすべての人々の尊厳としての権利を尊重し、すべての人々のための社会的・経済的な公平さにコミットすること
- ② 将来の世代の人々の権利を尊重し、世代間の責任にコミットすること
- ③ 地球のエコシステムの保護と回復を含む多様性に富んだより大きな生命の共同体に対する尊重と思いやり
- ④ 文化的な多様性を尊重し、寛大で非暴力、平和な文化を地方においても地球レベルにおいても作ることにコミットすること。

持続可能な開発

- ※ 1987年国連ブルントラント委員会
- ※ 「持続可能な開発とは、将来世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、現在世代のニーズを満たすような開発」

ニーズ＝必要物

- ※ エネルギーなどの資源を現代世代が使い切ってしまうてはならない。

世代間の公正

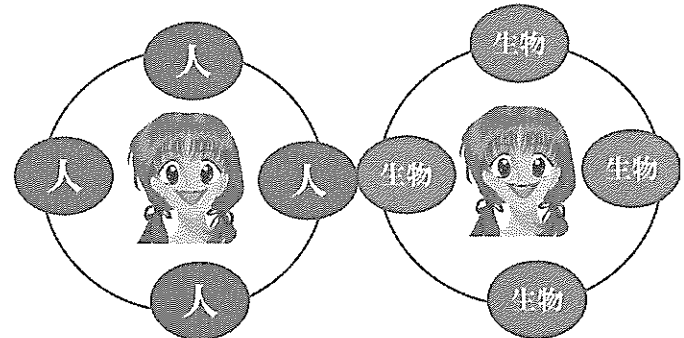
- ※ 発展途上国の貧困を犠牲にした先進国の豊かな生活があつてはならない

世代内の公正

ESDで養う価値観の基礎

- ① 世界中のすべての人々の尊厳としての権利を尊重し、すべての人々のための社会的・経済的な公平さにコミットすること(世代内の公正)
- ② 将来の世代の人々の権利を尊重し、世代間の責任にコミットすること(世代間の公正)
- ③ 地球のエコシステムの保護と回復を含む多様性に富んだより大きな生命の共同体に対する尊重と思いやり
- ④ 文化的な多様性を尊重し、寛大で非暴力、平和な文化を地方においても地球レベルにおいても作ることにコミットすること。

ESDで育てたい価値観



世代内だけでなく世代間も視野に

人と生物の共通点

いのち

問題点

※ 世代間の公正の概念範囲

※ 現代 → 未来

※ 過去がない

世代間の責任

ca 将来の世代のニーズ：よりよい社会（生活）を目指す意思

過去



現在



未来

- ◆現代社会は所与のものではなく、先人の苦勞と努力のたまもの
- ◆我々も、この社会を少しでもよりよいものにして、将来世代に引き継いでいく責任がある。

ニーズの拡張＝よりよく生きる意思

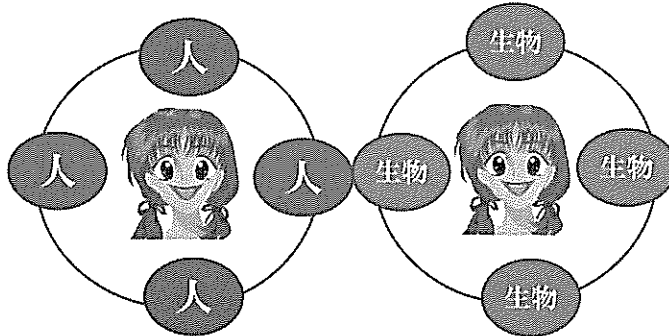
- ＊過去の人々のよりよく生きたいという意思を尊重し、少しでも良い社会にして、将来世代に引き継いでいかなければならない

世代間の責任

- ＊発展途上国の人々のよりよく生きたいという意思(人権)を尊重する社会をつくる

世代内の責任

いのちをつなげる教育

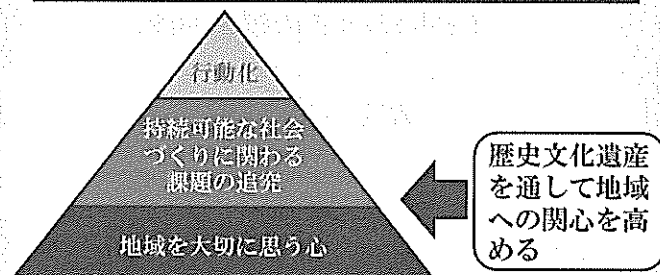


世代内だけでなく世代間も視野に

◆先人の声を聴く手がかりとなるのが歴史文化遺産

ESDストラテジー

行動化を促すためには、地域を愛する心を育て、当事者意識をもたせることが必須条件



歴史文化遺産を通して地域への関心を高める

ESDは
いのちをつなげる教育

- ① 奈良教育大学では、文化遺産を通した ESD を研究しています。まず、文化遺産を通した ESD とは何か、その理論を簡単に説明し、この理論に基づいた取組を紹介します。
- ② ESD は持続可能な社会づくりの担い手を育てる教育ですが、我々は、まず ESD で育てたい価値観について研究しました。
- ③ 2005 年 1 月に ESD の 10 年の国際実施計画案が策定されました。そこには、ESD の目標として次の二つが挙げられています。1 つは ESD は人と環境との関係に関することであり、その目標は自然環境が自ら再生する役割を果たすことだとされています。もうひとつは ESD は人と人との関係に関することであり、その目標は平和裏に人々が共存することを達成することだとされています。
- ④ 2012 年に改訂されました日本の ESD 実施計画に、先進国が優先的に取り組むべき課題として 2 つ挙げられています。一つ目が社会経済システムに環境配慮を織り込んでいくことであり、二つ目が人権や文化等に対する配慮を織り込んでいくことです。
- ⑤ 今ご紹介しました国際実施計画案と日本の ESD 実施計画を比較すると、ESD で求めなければならない価値観が、環境に関することと人権や文化に関することという 2 つだということが分かります。
- ⑥ また先ほどの国際実施計画案には ESD の価値観の基礎に含まれるものとして次の 4 つを挙げています。
 - i 世界中のすべての人々の尊厳としての権利を尊重し、すべての人々のための社会的・経済的な公平さにコミットすること
 - ii 将来の世代の人々の権利を尊重し、世代間の責任にコミットすること
 - iii 地球のエコシステムの保護と回復を含む多様性に富んだより大きな生命の共同体に対する尊重と思いやり
 - iv 文化的な多様性を尊重し、寛大で非暴力、平和な文化を地方においても地球レベルにおいても作ることにコミットすること。
- ⑦ iii と iv はそれぞれ環境に対する配慮と人権や文化に対する配慮を示しています。では、i と ii はどこからきたのでしょうか。
- ⑧ それは 1987 年のブルントラント委員会で定義された持続可能な開発の概念から引用されていることが分かります。ブルントラント委員会では、持続可能な開発とは「将来世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、現代世代のニーズも満足させるような開発」と定義されました。
- ⑨ このニーズは普通、「必要物」と訳され、持続可能な開発とは、エネルギーなどの資源を現代世代が使い切ってしまうてはならないというような「世代間の公正」と 発展途上国の貧困を犠牲にした先進国の豊かな生活があってはならないというような「世代内の公正」として現在は定着しています。

- ⑩ 以上のことをまとめると、E S Dで育てたい価値観とは、世代内だけでなく世代間も視野に入れて、自然環境や人権・文化に配慮できるということになります。
- ⑪ この自然環境つまり、人を取り巻いている生物と我々を取り巻いている人々の共通点は何でしょう。それはいのちがあるということです。
- ⑫ です。E S Dで育てたい価値観は「いのちのつながりに気付く感性」ということができるでしょう。でも、ここにはひとつ問題があります。
- ⑬ ブルントラント委員会で取り上げられている世代間の公正といった時の世代間とは、現代世代と将来世代のことであり、過去の世代が入っていません。私たちはそれはおかしいと思いました。
- ⑭ そこで、ブルントラント委員会の「ニーズ」に「よりよく生きる意思」「よりよい社会をつくろうとする意思」を含ませ、意味の拡張を図りました。そうすることで、世代間の公正は「現代社会は、よりよい社会を作ろうと苦勞してきた先人の努力の賜物であり、我々は社会を少しでもよくして将来の世代に引き継いでいかなければならない」という「世代間の責任」に拡張できました。また、「世代内の公正」は「途上国の人たちのよりよく生きたいという意思を台無しにするような開発をしてはならない」という「世代内の責任」に拡張できました。
- ⑮ 意味の拡張を図ることで、過去・現在・未来という時間軸と途上国と先進国という空間軸をつなぐことができたわけです。
- さらに、E S Dは行動の変革を求める教育ですから、過去・現代・未来そして途上国と先進国を視野にいのちのつながりに気付くだけでなく、つながっていないところをつなぎ、つながりが弱いところを強化するという「いのちをつなげる教育」へと発展することができます。
- ⑯ そして、先人の声を聴く手掛かりとなるのが歴史文化遺産です。歴史文化遺産がなぜ作られ、なぜこれまで守り伝えられてきたのかという、先人の営みを学ぶことで、地域を大切に思う心が育ち、持続可能な地域社会のための行動の変革を促すと考えています。
- 我々は「E S Dはいのちをつなげる教育」をキャッチフレーズに取り組んでいます。ぜひ、韓国でもこの言葉を広めてください。
- これで文化遺産を通したE S Dの理論についての説明を終わります。

テーマ 4

特に地域の学校との連携・協働による学校現場体験(スクールホート等)の充実と、附属学校園の教育実習機能の強化

附属学校園報告概要

1. 内容

「地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化」プロジェクトのテーマ4のサブテーマである附属学校園において、「教育実習と教育研究会の有機的結合による効果的な教育実習システムの構築」を目的に実施をした。学生の教育実習での貴重な体験と教育研究会での各先生方の発言から、「教師になることはどういうことなのかの」を感じ取ってくれたものと思う。また、それ以外の教育活動に学生がかかわることで教師としての目を養ってくれたものとする。

2. 主な取り組み

幼稚園

- 6月 8日（土） 公開保育研究会
- 10月25日（金） 「レリーフオブジェ」の製作
- 12月 6日（金） 「レリーフオブジェ」に釉薬を掛ける
- 11月14日（木） カプラ体験

小学校

- 10月25日（金） 学習指導案検討会
- 11月 6日（水） 校内研究授業
- 11月16日（土） 教育研究会開催

中学校

通 年

中庭プロジェクト

- 8月 5日（月）～ 9日（金） 韓国公州大学附設中学校との交流（於 附属中学校）
- 8月23日（金）～27日（火） 韓国公州大学附設中学校訪問
- 5月24日（土）～25日（日） 教職大学院生と第一学年との協働（曾爾高原）
- 10月26日（土） 教育研究会開催
- 11月 9日（土）～10日（日） 日本教育情報学会参加
- 1月24日（金） 奈良教育大学留学生との交流
- 2月20日（木）～21日（金） 愛媛教育研究大会参加

特別支援学級での「読み聞かせ」プロジェクト

- 4月24日（水）・5月13日（月）・7月1日（月）・9月9日（月）・10月7日（月）
- 11月 8日（金）・2月 3日（月）

【附属幼稚園 公開保育研究会】

日時 2013年6月8日(土)

テーマ 「幼児期に必要な『からだ力』を育む」

子どもたちが生涯健康で生き生きと過ごすために幼児期に大切にしたいものを『からだ力』と呼び、その『からだ力』を「からだ」「うごき」「きもち」の3つの視点から捉え研究を進めてきた。様々の実践を繰り返し検討を重ねることで、『からだ力』を育むための学年別ポイントや指導計画を作成し、研究紀要にまとめた。

日程 9時～11時 全クラス公開保育(桃組・赤1組・赤2組・黄1組・黄2組)

12時半～2時 全体会 ・本日の保育について

・本園研究報告

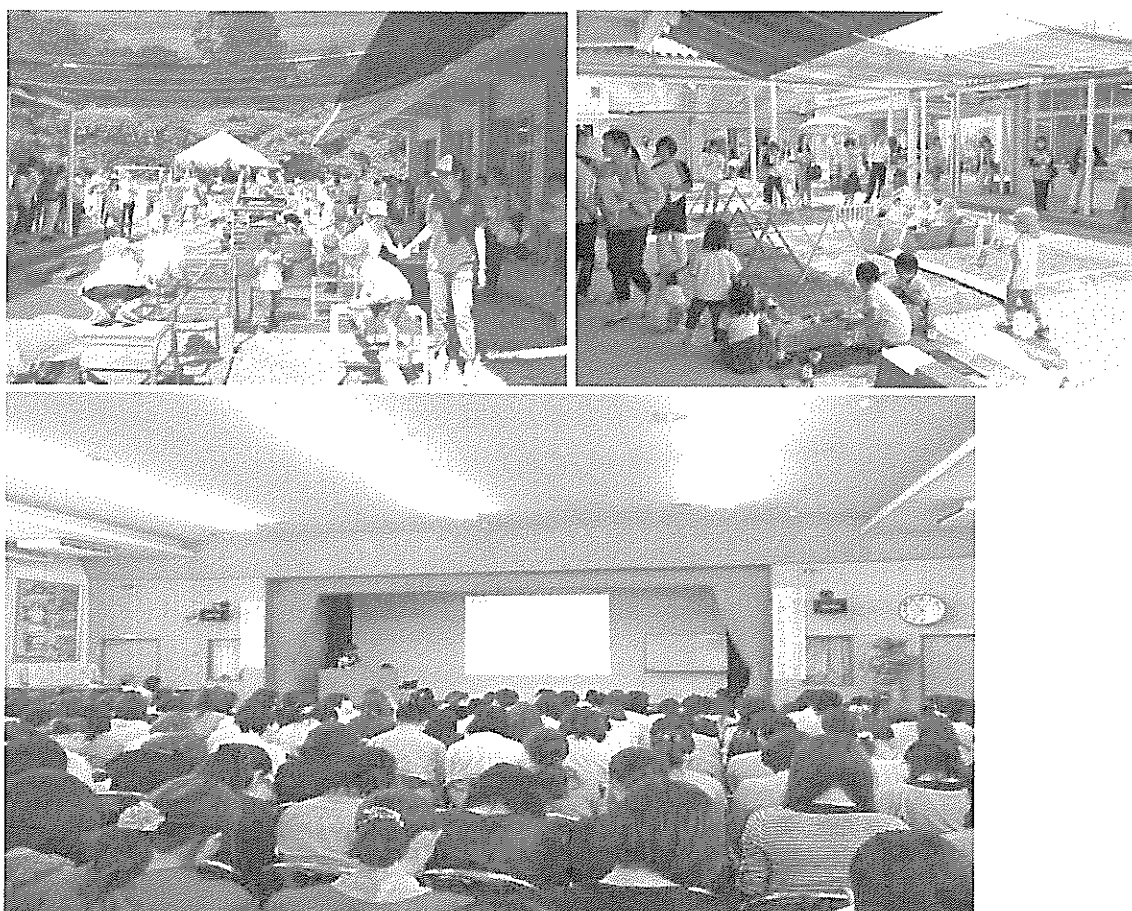
2時～4時 講演 無藤隆先生

「躍動するからだ力を伸ばす 幼児の身体生の保育とは」

参加者 県内外の幼児教育関係者 345名(学生47名)

学生にとっての成果

大学からは47名の学生が参加した。午前中には保育を参観することで現場での保育を体験した。午後は参加者の人数が多くて遊戯室には入りきれなかったため、大学の協力を得て、テレビ会議システムにより別室で研究報告会、講演会に参加し、本園の教育実践および研究成果を学んだ。学生には、本園「教育課程」および「研究紀要」を配布し、現場での幼児教育の課題や保育の実際について深めることができた。



【附属幼稚園 カプラ体験】

内容 「カプラ」という素朴な木の板の遊具で遊ぶ

日時 2013年11月14日（木）

目的 ○子どもに…カプラという遊具を用いて、それぞれが思い思いの物を作ったり友達と協同してひとつの物を作ったりする中で、子どもたちの創造力、構成力、集中力を高める。

○学生に…園児とともに、同じ目線に立ってカプラで遊ぶ機会をもち、夢中で遊ぶ体験をする中で、小さな子どもの物の見方や考え方を知るとともに、その創造力の可能性に触れ、自らの教師としての感性を高めることにつなげる。



学生の感想

・子どもたちの発想の柔軟さに驚いた。私は初めてカプラをみたときは四角にして積み上げるかドミノのように並べるかしか思いつかなかったが、子ども達は壺のような形を作ったり、線路を作ったりと多様な組み合わせ方をしていて、子どもの人数分だけ遊び方があっておもしろかった。一生懸命作っていたものが壊れたらとたんにやる気をなくしてしまったりいざこざが起こったりするのではないか、と思っていたが、それよりも集中して作ることに楽しさを感じているようで、トラブルがあっても自分なりに折り合いをつけてまた遊びだし、夢中になる楽しさを体感していると思った。

・カプラの数には限りがあるので、譲り合って使わなければいけない。子どもたちは友達同士で交渉しながら、自分の作りたいものを作り余ったものは友達に分けてあげるなど優しく接する姿が見られた。また、大きなものを作るためには友達と協力をしなければできず、役割分担をして大作に挑む子どもの姿も見られた。このように、カプラを通して協力する力、他者を思いやる力が育まれると感じた。

・素朴な素材だからこそ、縛りがなく何でも作れるし、子どもの発想力も伸ばせると考える。更に上を目指して高く積み上げている様子もあり、失敗しても諦めずに挑戦する力も身につくと感じた。

・子どもたちの遊び方を見て気付いたのは、イメージを共有する力が身についていることだ。日頃から友達と協力して楽しむ遊びを数多く経験していることで、自分の考えを相手に言葉にして伝える力が備わっているのではないだろう。カプラはみんながイメージしている形が異なれば一つの形にはならず、すぐに崩れてしまう。イメージを共有し、一つの形にする遊びという点でカプラは優れている。カプラを保育に取り入れる良さを認識できた。

【附属幼稚園 卒園作品「レリーフオブジェ」の制作指導】

恒例になった卒園作品の粘土制作指導を10月25日に行った。彫塑研空室3回生、4回生で指導を任せた。4回生に、昨年度の経験者がいたので用意した粘土が不足視したものの附属幼稚園の先生から粘土あそびの粘土をお借りして何とか終えることが出来た。

学生の指導の感想は、制作手順の例は見せたが、自由に思い出になる作品の制作に熱中してくれていたということである。5mm厚の帯を櫛目でブリッジやアーチを作ったりスタンプでへこんだ模様を作る作例を見せたが、子どもたちは思い思いの細いものや分厚いものなどさまざまで、土粘土の可塑性を自由に活かしそれぞれにユニークな作品を作ってくれた。固定観念がないことと粘土使いを器用に扱うのではなく、蕨のようなものを作りたいと思いながら、渦巻き状が器用に出来なかったり、たとえば、カタツムリを作ろうとしても描写的にならなかったり、そのような苦心や集中力は、年長児になると予想以上のものがあった。

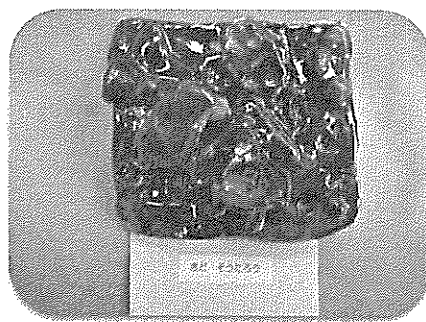
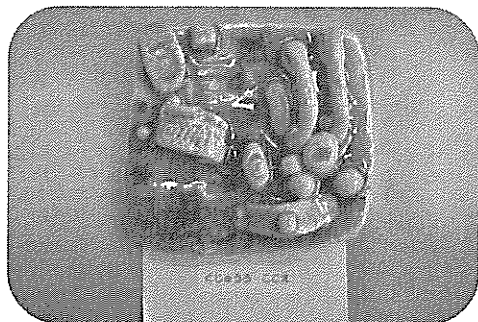
終了し、美術棟で2週間乾燥させて、素焼きを20時間かけてそそ鋳物もあったのでゆっくり温度を上げていき780度まで焼成した。

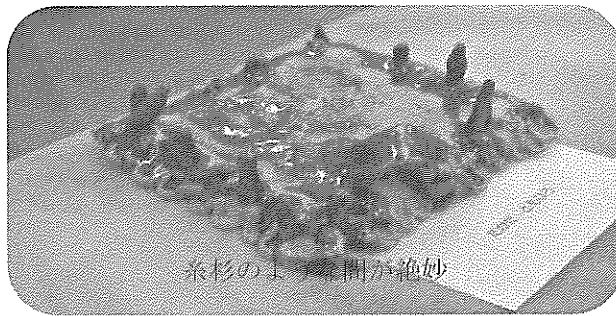
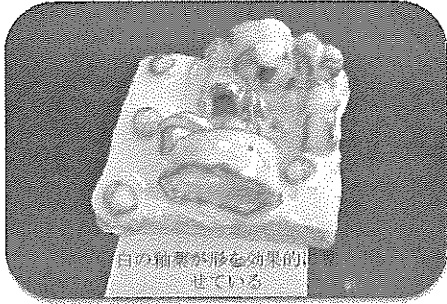
十分に時間をとって釉薬を作って用意し上薬掛けを12月6日の黄組みさんの時間に行った。自分で釉薬を選んで、今のその色は、絵の具ではないので、作例を参考にさせた。ルリとかビードロ、ペルシャブルーは、薄いと塗っては刷毛に取り繰り返すよう指示したのでうまく塗ることが出来ている。

本焼成

釉薬の溶解温度も考慮に入れて、1230度でゆっくりと温度を上げて、そこからまた温度を保持しながら徐々に温度を下げ冷まして行くようにし、3日間をかけた。窯変の妙というか作品の形にあった効果的な作品が多く出来た。

下の画像は、作品の一例ですが参照いただきたい。





ねらって、間の粗密の表現を意図的に作ってはいないのだが、子どものもともも持っている、造形のセンスが現れている。知識や固定観念のない、気持ちの開放によりなせる表現なのではないだろうか。

学生たちは、この子どもたちの作品に理論でない真の心の集中によるどろんこワークショップから延長上にある造形の本能による作品に、指導しながらも余計な知識やうまく見せようという浅はかさなど、この活動により子どもとかわりながら共に学んでいくことに自覚できるのである。



文化会館での展示



次年度は、「空に楽描きを描こう！」というタイトルで透明のビニールシートに透明の絵の具やマーカーで光を通してみることが出来るプロジェクトを「どろんこワークショップ」との2本立てで幼児の表現の可能性をさらに開放させ幼児の美術教育の研究・追及し共に時間と空間を共有しながら、学生と共に学ぶプロジェクトの構想を検討中である。

附属小学校の第41回教育研究会（公開研）に参加するとりくみ

1. 目的

附属小学校で毎年おこなっている公開研究会、及びそれに向けての校内研究授業や学習指導案検討会に参加することで、公開研究会が何を目標としてどのように具体化されていくのかについての理解を深める。そして、それを以って学部や院での研究の意味づけを確かにする。

2. 実施内容・日時

(1) 学習指導案検討会への参加

2013年10月25日（金）に、附属小学校で、第41回教育研究会にむけて学習指導案検討会がもたれた。この検討会への参加を全学の学部生・院生に呼びかけたところ、残念だが希望は無かった。

(2) 校内研究授業への参加

2013年11月6日（水）に、附属小学校3年2組で、音楽科の校内研究授業を実施した（教材は、『き』。指導者は、学級担任の磯田教諭）。この授業への参観を全学の学部生・院生に呼びかけたところ、音楽科の学生（1人）から参観希望があった。当日体調不良で参加することができず、残念だった。（写真①）

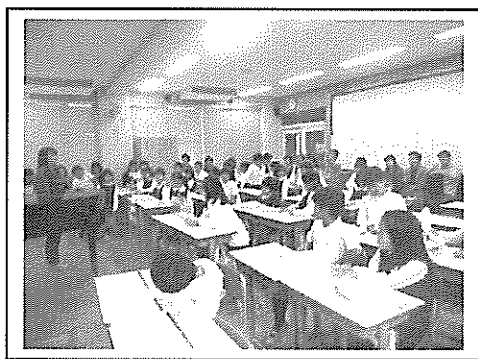
(3) 第41回教育研究会への参加

○2013年11月16日（土）に、附属小学校で、第41回教育研究会が開かれた。（写真②～④）

<研究主題「教材の価値となかまとの学び合い」>

附属小学校では、一人ひとりに確かな学力を身につけさせるためには、価値ある教材を仲間とともに学び合う授業が欠かせないと考えている。こうした考え方に基づく授業を公開し、多くの学生、教員と討議することで、互いの研究や実践をより高めたいと考えて取り組んだ。

○この授業への参加を全学の学部生・院生に呼びかけたところ、20人の参加があった。実際の授業や基調報告から、子どものありのままの姿に寄り添おうとする附小教員の姿勢に賛同が寄せられた。



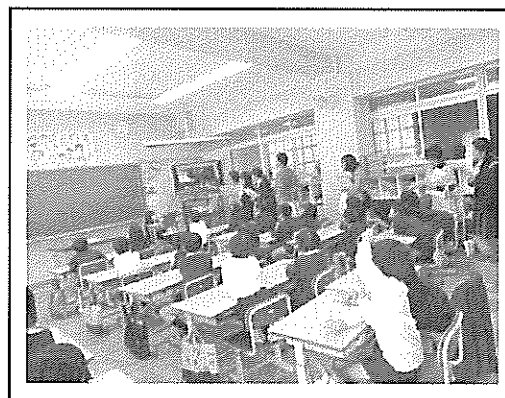
①校内研究授業での授業



②研究会での討議（体育科）



③研究会での授業（図工科）



④研究会での授業（食の学習）

「未来を創る子ども」を育むESD

項目名

～自己変容の物語を捉えるー学びの意味につながる対話と記述ー～

1. 事業の内容

本年度の奈良教育大学附属中学校の研究推進では、ESDの不易と流行でいえば不易の部分、子どもの学びの土台の部分、学校臨床の課題に照準を当てて「真の学力形成につながる対話と記述～子どもたちのナラティブとその変容に着目して～」を研究主題として、そのESD的展開に取り組んだ。対話と記述にあらわれた子どもたちのナラティブを捉え、そのナラティブの変容が学力形成を促し、自己物語を獲得し変容していくプロセスを分析する枠組みを抽出し、提案していくことを目的にしている。特に「分析知」と「物語知」との関係性を教科並びに総合において 子どもたちのナラティブをどのように組織し、捉え、深め、気づかせ、新たな問いを形成する中で「ナラティブ変容」をみとっていきのか、また教師と生徒、生徒と生徒の「2者の関係」（吉田敦彦）を読み取っていくのかに焦点化して実践研究を始めた。その実現のために、本年度は以下の事業に取り組んだ。

(1) マインド・マップ講習会

年間2回（7月・3月）、講師に鹿江宏明先生（比治山大学）をお招きし、教員並びに生徒にむけて実施することを位置づけた。また、本講習会には院生・学部生、大学・附属の教員にも公開することにした。これは次年度も継続して行っていく。

(2) 物語論の理論的学習

講師に田中昌弥先生（都留文科大）を7月研修会にお招きし、対話論を育む教科指導として、授業における「問い」はどのように練られたか。「問い」の前提となる学びや語りの文脈を埋め込んだ教材開発とその指導法や評価方法の理論的基礎を物語論として括ることの意義について研修を行った。

(3) 臨床教育的視点とナラティブ

ナラティブと生活指導 集団作りに関して 照本祥敬先生（中京大学）を2回（12月・3月）にわたってお招きし、附中の置かれている状況 今後入学してくるであろう生徒の臨床的な課題をどう解決していくのかの学校づくりについて、担任の先生方から軽度発達障害の傾向がある子どもたちの詳細な指導過程をレポートするかたちで研修会を行った。本研修は長期的な研究課題として継続していく予定である。

(4) 社会とのつながりを求めた学びとESDの展開

①3. 11以降のASP ネット校である気仙沼の中学校との交流、②公州中学校との交流事業、③裏山クラブを通じての山間僻地校（洞川中学中学校）との雑穀交流である。

①は、夏に本校の研究推進部佐竹教諭、11月に谷口主幹が現地入りをし、表敬訪問をするとともに、校内に被災地の様子を報告するコーナーを設けて生徒と現地との「つながり」（遠くの友人たちに起こった震災を忘れない、語り継いでいく記憶）の場となっている。

②は、現地の交流もさることながら、地域のボランティアの方との交流も外せない。古都奈良の歴史、世界遺産から東アジアとの多層的な「今」とのつながりを学習したり、歴史学習や、コリアンタウンの見学会などを通して、在日の問題を多角的に考える機会を設けたりしている。

③は、裏山クラブは本校の部活動ではあるが、雑穀プロジェクトとして本年度より雑穀を中庭で作り始めることになった。雑穀は現在も国内・県内の山間部（ここでは天川地区）・八重山などの島嶼地域で細々と栽培されている。食文化の多様さを知ることは、雑穀文化が東南アジアの盆地部や山間部の少数民族の暮らしの「今」に出会うとでもある。小さな穀物の種を通して、文化の多層性・

多様性を物語る機会となっている。また、本年度は洞川中学校のESD研修会に竹村が講師として招聘されている。

2. 事業の成果と課題

(1) 総合的な学習の取り組みについての成果と課題

総合的な学習の時間でESD実践を行うにあたって、本校が大切にしてきた教科学習の背景を十分吟味し共有化し得ただろうか。

→1年生では社会科の公開授業「民族」についての教科学習が、国際理解学習の導入として国内におけるアイヌ民族問題を多元的に捉え学習する機会となった。また、授業内では子どもたちからの様々な疑問点に応答しながら、「なるほど、そうか!」を、子どもたちの話し合いの中で気付かせ、理解していくプロセスを大切にしている。もちろん、そのための教師側の投げかける十分な資料やその教師の教材理解の背景（学びの履歴）からの問いがあつてこそであることは言うまでもない。

2年生では、臨海学習の事後学習、沖縄修学旅行事前学習の取り組みにマインド・マップを始めて取り入れた。自分たちは「その場所」で何をしてきたのか？これから何をしようとしているのか？の、問題点や課題を「見える化」し、論点を整理する機会を得ることができた。このような思考ツールは、中学生は容易に活用できることもまた大きな収穫であった。研究会では、その臨海学習のグループ発表を公開した。

3年生では卒業研究発表会を公開授業で行った。いままでの公開授業との違いは、「学び方を学ぶ」という方法論（方法知）に焦点を当てたり、「追究した課題の価値観」を自らが対話的に語る内容（分析知）であったが、ナラティブを前面に出すことによって「私が学ぶことの意味」というような、この課題によって「私の学びはどのように私自身に意味づけられたのか」（物語知）に焦点が当てられた。

(2) 変容の分析に関する課題

子供たちの変容とはどういうことかの理解が、私たちは十分把握されているだろうか。

→今回の研究会のメインテーマがこれである。子どもたちのナラティブ変容に着目することによって、時には方法論的に捉えがちな「対話」を、子どもの学びを子どもたちの生き方の次元の深まりまで捉えようとする試みであった。ナラティブ変容のモデル図を今研究会に提案することができたが、その検証やその深まり看取る評価規準（ルーブリック）は次年度の課題として残された。また、多くの参加者から、吉田敦彦氏の全体講演をはじめ、「研究テーマとしてのナラティブへの注目」は評価をいただき、おおいに関心をもっていたと考える。参加していただいた香川大附属坂出中学校、愛媛大学附属中学校、三重大附属中学校の参加も各校の次年度の研究テーマとして視察されている。逆に、次年度は本校から3校の教育研究会へ派遣交流を検討しても良いかと考える。

(3) 連携に関する課題

大学・教職大学院や附属小学校・幼稚園ならびに教育委員会との連携は図れていただろうか。

また、公立教員との共同研究の可能性は追求できただろうか。

→今回は、大学・教職大学院からの応援をいただくことができた。学生への呼びかけを始め、臨時バスの運行も実現した。講座の掲示板や研究室の扉に本校の研究会の案内を貼っていただけると学附連携のかたちが実現したと考える。また、午前の全体会のみ、教科公開授業のみの参加としての大学教員からの当日参加も多数受け付けたことも本年度の特徴である。

特に、幼・小・中の連携を今年度から具体的に推進していくという目標は、先の連絡進学の問題だけにとどまらず、お互いの研究会に参加するかたちで実現したことは特筆される。

さらに、奈良県教育委員会・奈良市教育委員会の協力の下、指導助言を大学と教育委員会の2本立てで今回初めて行った。大学教員と教育委員会指導主事とのかすがいに本研究会は役だったともいえるし、教育委員会側からも本校研究会を職員の研修の場として位置づけていただく機会になったと考える。特に、奈良市教育委員会はICT教育への関心から各校に呼びかけていただいたことは大きな成果である。

(4) 教育環境に関する課題

研究活動を促し、アイデアを創発する教室環境をデザインできているだろうか。

新たなデジタルデバイス（タブレット型PC）を従来の授業の中に融合して、新たな授業の形態を創造していくこと、ICTを用いた他の学校との交流を模索していくことが課題である。

→6月決定で、実質的には8月下旬からの稼働ではあったが、佐竹教諭がICT委員会（仮）の座長として、谷口主幹、葉山教諭（情報部）ならびに内外との連絡調整に尽力してくれた。研究会では、理科、音楽、美術、技術科が、総合的な学習では2年総合で活用された。

本学小柳和喜雄教授によるICT講演会は好評で、多くの参加者を得た。次年度も県内の先生方のICT研修の場として、ICT講演会は設定したいと考えている。

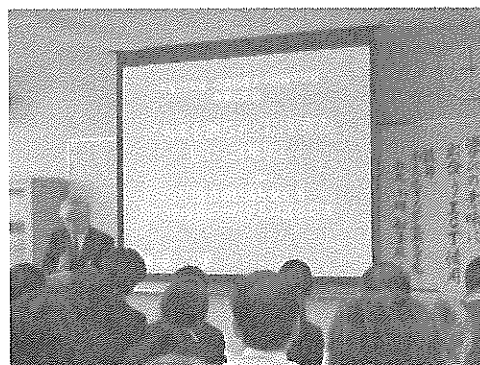
また、この成果をもとにさらなる校内のICT化が強化されることになり、次年度へ向けた施設設備面の充実を得ることができた。そのために、ICT委員会の設置が実現できた。

職員室の空間構成や図書館のラーニングコモンズ化については、まだ検討に到っていない。まずは、ICT環境の充実化が具体化し、その協働による活用方法がどのような空間デザインによって可能かが検討されるであろうことが期待される。

(5) その他

①研究紀要査読体制の確立

集録から紀要に名称変更して3年目になる。今回は、査読体制をとった。大学の指導助言者からの査読と、教職大学院教員からの査読、そして研究推進部の査読である。



②研究会参加者内訳

総計 231名（本校ならびに特別支援）

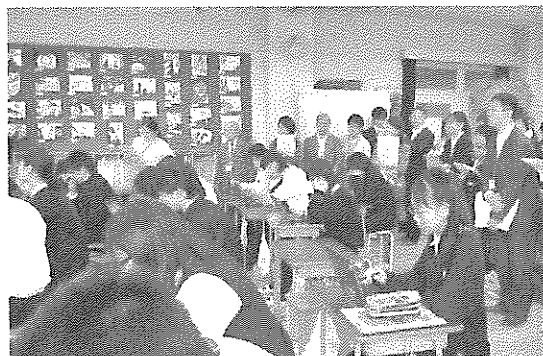
内訳 教職員（大学・附属・公立）89名

内 奈良県公立 16名 内奈良市 17名 他県附属 8名

学生・院生 130名 内他府県大学・院生 5名

一般（卒業生・NPO・OB）12名

昨年度実績は75名であったので、3倍以上の参加人数を得られたことは評価できる。ちなみに昨年度は公立教員は11名（内奈良県9名）であった。昨年度は教科が3教科（本年は8教科）という事もあったので単純に比較はできないが、土曜日開催の意味は有意に見いだせたと考える。特に奈良市教員にとっては、ICT講演会と接続する公開授業が評価されたと考えるので、次年度以降もこの形は踏襲していきたい。



『「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)

項目名 ①公州大学校附設中学校との交流

1. 事業の内容

(1) 交流に向けた取り組みの現状

① 交流の仕方

○訪問交流は、交互に毎年1回実施、原則として5日以内。

○訪問生徒は、受け入れ側中学校生徒の家庭にホームステイする。

② 教育課程の中への位置づけ等

学校間交流のあり方 → 相互訪問のみに収束しない国際理解学習の展開を

③ 実施日程

・ 来日 2013年8月5日(月)～9日(金)の4泊5日

・ 訪韓 2013年8月23日(金)～27日(火)の4泊5日

④ 代表訪問者の決定 (2013年度)

3学期末に、公募後、希望者全員に「参加希望届」と、希望理由と抱負を述べた「作文」を提出させ、「個人面接」と「英語力検査」を実施。養休み中をめどユネスコ委と引率教員で決定、企画委員会と職員会議に提案し、最終決定。

(2) 訪問と招待のプログラム

① 受け入れ時の日程

受け入れ期間中の通訳：「奈良外国語観光ガイドの会」の協力を得た。事前・事後学習でも協力。

【8/5(月) [1日目]

公州→仁川→関空→移動→歓迎会→生徒は帰舎

【8/6(火) [2日目]

宿舎→(a)附属中学校で生徒間交流→(b)東大寺大仏殿へ→生徒はホームステイ先へ。

【8/7(水) [3日目]

生徒は各ホームステイ先家庭で県内の史跡などを訪問。教員は神戸方面の視察。

【8/8(木) [4日目]

各ホームステイ先→近鉄奈良から見送り→大阪へ

② 韓国訪問時の旅程

【8/23(金) [1日目]

近鉄奈良駅→関空→仁川空港→景福宮見学→公州→
韓屋 Hanokumaetul →歓迎会→宿泊

【8/24(土) [2日目]

公州市内バスツアー(武寧王陵、公州国立博物館、石
壮里博物館、朝鮮の伝統的民族舞踊パンソリの体験)
→生徒はホームステイ先へ

【8/25(日) [3日目]

ホストファミリーによる観光案内 教員は全州市内の視察

【8/26(月) [4日目]

ホームステイ先家庭→公州附設中訪問、生徒間交流(歓迎セレモニー・クラブ活動体験) →



公州市長表敬訪問・市庁舎見学→公州附設中での給食体験→公州バスターミナル→ソウル

【8/27(火)[5日目]】

ソウル市内見学→仁川空港→関空→奈良

(3)2013年度の事前学習の内容と日程

5日間8講座(韓国語の基礎会話1・韓国の文化にふれよう1・韓国語の基礎会話2・韓国の文化にふれよう2・公州の歴史や地誌・日本と韓国の関係史1・日本と韓国の関係史2・基本的な英会話)を実施し、鶴橋コリアタウンでのフィールドワークを実施した。

(4)生徒会の取り組み

公州附設中との交流会は、生徒会中央委員を中心として実行委員会を組織し、企画・運営を行った。第1回相互訪問交流で訪韓した生徒の経験を生かし、求められている交流を考え、企画内容を検討していった。交流のねらいとして、次の2つを設定した。

- 相互の国際理解を深め、同年代の生徒どうしの友好関係を結ぶ。
- 学校全体の取り組みとして、より多くの生徒に交流について知ってもらう。

7月初旬に実行委員募集の呼びかけを行い、1学期の終業式には、これまでの生徒会の取り組みをプレゼン形式で報告し、活動の状況を全校生徒が共有できるように意識付けを行った。その日の放課後に実行委員会を開いて、交流会の準備を開始した。交流会当日の進行については以下のとおりである。

【8月6日 生徒間交流会】

- 9:30 オープニングセレモニー
- 10:00 学校探検・クイズラリー ～ペットボトルキャップを探せ～
- 11:00 部活動見学・体験、浴衣の着付け体験
- 12:00 昼食(日本の食文化体験)
- 13:00 風船飛ばし
- 14:00 閉会セレモニー

交流会は、実行委員を以下の6チームに役割分担し、グループごとにアイデアを出し合い、準備を進めた。

①「垂れ幕制作と飾り付け」係

歓迎の気持ちを表す垂れ幕制作と飾り付けを担当係。両校の結びつきを示す花鳥を絵に描き、「ようこそ」を韓国語で記した。

②「セレモニー」係

進行の流れの立案、本校の学校紹介パワーポイントの制作などを担当。セレモニーでは、本校生徒が津軽三味線を演奏、公州附設中側も韓国伝統楽器「タンソ」の演奏を披露、料理手芸部からプレゼントも渡されるなど、全校の各組織と協力した。

③「学校体験クイズラリー」係

クイズを通じて本校や奈良についての理解を図り、本校のペットボトルキャップの回収活動への理解を得ることをねらいとした。

④「部活動見学と浴衣の着付け体験」係

日本文化紹介のため企画。日本固有の和服文化として、卒業生の保護者の協力も得て、浴衣の着付けを体験を行った。部活動見学では、韓国の生徒に活動内容を伝えるため 様々な工夫をこら



していた。

⑤「食事」係

日本の食文化を知らせる料理を料理手芸部と実行委員で作り、保護者の協力も得、良い交流の場となった。

⑥「風船飛ばし」係

交流会のねらいを込めた企画として行った。参加生徒全員がお互いを知り、交流を深めることを意識した。双方の生徒は、彼らの夢を共有した上で、願いが込められた風船を校庭から大空に放飞放った。自然に還る素材を使ったものを使用し、環境に配慮した準備をおこなった。

2. 事業の成果と課題

<成果>

生徒は事前学習を通して、日本（奈良）と朝鮮半島の間の長く、深いつながりについて知見を得ることができた。多年にわたる交流の中で、半島からは人・モノ・技術・思想など、その後の日本の社会や文化を形づくる基盤となるものが伝えられた。秀吉による侵攻や近代における植民地支配など、今も両者の深い溝となっている出来事があっても、日本と朝鮮半島は切っても切れない関係性を持っていることを学ぶことができた。また、双方の学校での交流会やホームステイ体験等を通して、相互の文化の一端に触れることができた。本校で準備した交流会では、韓国の生徒や教員がお好み焼きやちらし寿司などを食べることで、日本の食文化に触れ、また、訪韓時には、香辛料がふんだんの給食を共に食べることで韓国の食文化の一端に触れることができた。韓国での日本文化解禁や日本での韓流人気を経て、互いの文化がより身近なものになったとはいえ、生徒自身が自分の五感で、互いの中にある相違点と共通点を体験することの意味は大きかった。



国家間に課題は横たわっていても、民間レベルや個人レベルでは理解し合える面が多くあることがわかった。昨年に続き今年も、両国間には竹島の問題があり、本交流事業もこの問題により、頓挫することも懸念していた。しかし、実際に訪韓してみると、公州附設中学校の方々だけでなく、移動中もソウルの市内見学時に町で出会った方々もとても親切で、構えや警戒感なく自然な交流ができたと思う。相互のヘイトスピーチがネット上を賑わし、スポーツの世界にまで対立が飛び火し、マスコミがそれらを報道する中で、両国の一般市民までが憎しみの渦に巻き込まれていくのではないかと憂慮される。そうした世相であるが故に、尚更、日韓の次代を担う子どもたちが、自分自身で見聞し、心で感じることの大切さを改めて認識した。

英語がお互いの理解を深めるために有効であることを再確認できた。訪韓した生徒にとっても、本校での交流会で公州の生徒や教員を案内した生徒たちにとっても、今まで教科として学習するものであった英語が、コミュニケーションの手段としていかに有効であるかを実感したようである。こうした国際交流を経験することで、日韓という、英語を母語としない二国間の意思疎通にも、共通言語としての英語が重要なツールになることを、生徒も教員も再認識することとなる。そしてそれは、その後の英語学習へのモチベーションにつながる。訪韓した生徒の一人は、「語学力をUPすることで、国境を越えた交流をスムーズに行うことができる」と帰国後に書いていることから、「実際に使うこと」「曲がりなりにも通じたという体験」が語学学習には大切であると改めて確認できたように思う。

<課題>

交流の目的に照らし、事業内容の更なる充実を図る必要がある。昨年からはまった本交流事業だが、今年も含めて、相互の学校訪問とホームステイ体験、史跡見学、相互の「おもてなし」が活動

の中心となっている。訪問の時期や日数など、種々の制約がある中ではやむを得ないところもあるが、本稿の冒頭に掲げた本事業の目的につながる活動内容が弱いのが現状である。

公州附設中学校は、まだASPには未加盟であり、ESDについてもこちらから紹介し、本学主催のESD研修会に附設中学校の教員を招聘してきた経緯がある。そうした事情の中、今年は来日した公州の生徒が附設中学校で実践しているESDとして、老人養護施設でのボランティア活動や環境美化活動、環境保護学習などを紹介し、こちらも本校の取り組みを訪韓時に附設中で紹介している。こうした内容を更に深め、例えば、互いにESDに関わる共通テーマを事前に決めておき、それに関する実践を行い、交流時にその学びの成果を出し合って討論をするなどの共同学習の場面を設定するようにしていきたい。そのためには、事前の論議が必要となるため、スカイプなど両校のネット環境を整備し、インターネットを介したテレビ会議を定例化することなどが求められる。

生徒間においても教員間においても、本交流事業がまだまだ全体ものにまで浸透していない面があり、これを学校全体のESDの一つとして位置づけ、取り組みを進めていく必要がある。

交流に向けての事前学習や本校での交流会は、訪韓する生徒だけでなく、生徒会中央委員会のほか、一般生徒にも呼びかけて有志を募り、実施してきた。昨年、今年と数十人が実行委員となって、事前学習や交流会に参加しているものの、まだ全校で取り組んでいる実践には至っていない。同様に、教員についてもユネスコ委員会メンバー（校長・副校長・主幹・研究推進部・生徒会担当・教務部）及び訪韓の引率をする教員が中心であり、交流会当日も含め、まだ教職員全体で対応しているとは言えないところもある。反省点として、通常の様々な校務と並行しての準備であるため、事前学習の学習内容についてのアナウンスが直前になってしまっている。事前学習の日程や学習内容について、早い段階で、生徒にも教員にも周知徹底する努力が必要である。また、1)であげた共同学習の取り組みについても、一般生徒を巻き込むための手立てが必要である。次回からは、来日が1月半ばに予定されているため、これまでのように夏休み中という、比較的時間の余裕がある中で取り組みが難しいので、これまで以上に早めの立案と準備を心がけなければならない。

また、本交流事業の組織的運営が課題である。校内の分掌として、本事業は先述のユネスコ委員会が核となって担うこととなっているが、実際には委員会自体が組織的に機能できているとは言えず、交流の準備や事前学習の取り組みについては、引率の教員と生徒会担当教員が奔走しているのが実態である。この交流事業を継続して実施していくためには、ユネスコ委員会を核に、全教員が組織的に活動できるよう、役割分担を丁寧に決めていくなどの手立てが必要であると考えられる。

『「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)

項目名 ②「国際理解教育・多文化共生教育の推進
～第1学年と奈良教育大学留学生との交流事業」

1. 事業の内容

第1学年では、本年度後期の「総合的な学習の時間」の大きな取り組みとして「国際理解学習」に取り組んだ。本校教員による講義、11月の国立民族学博物館への社会見学を経て、3学期、奈良教育大学に来られている23名の留学生の方々を本校にお招きし、交流会を実施した。

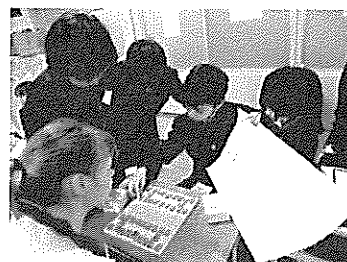
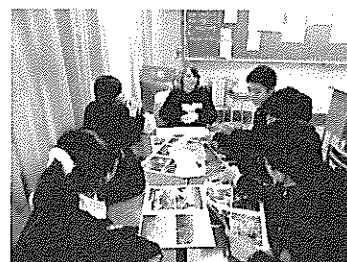
本校側の交流会のねらいとしては、次の3点を設定した。

- ・国際理解の核は、互いの人間関係にある。留学生との交流の場を設け、受け身ではなく、積極的に関わりあう。
- ・日本の生活文化について伝えることができるような「会話力」「発表・プレゼン力」を培う機会とする。
- ・日本の文化について留学生に伝える活動を通して、自分自身が日本の文化を再認識する。

大学側でも留学生用科目「日本語教育論」の一環として本校との交流会を組み込んでいただき、事前に中学生からの疑問・質問を集め、留学生どうして授業案を検討協議した上で、交流会当日に臨んでいただくことができた。

当日は、15カ国からの留学生計23名が4クラスに分かれ、昼食を一緒にとったあと、約2時間の交流会を行った。

交流会の前半は、留学生からのプレゼン授業を行っていただき、後半は、留学生が小グループを巡回する形式で、体験を交えながら日本の生活文化について中学生がプレゼンを行った。



2. 事業の成果と課題

先述したように、本年度は大学側とスムーズに連携を図ることができたことにより、多くの留学生に参加していただくことができ、充実した交流活動につながった。中学生からは「このような場を通して、外国の方と触れあうことは、小さなつながりができたように感じました。これからも、このような機会をきっかけに、国境を越えたつながりをつくっていけたらな、と思います。」といった感想が多く寄せられた。また、留学生にとっても中学生の前で授業を実施したことによる達成感が大きかったと大学側担当教員からご連絡をいただき、双方にとって有意義な活動になったといえる。



尚、本事業は「総合的な学習の時間」での活用であったが、国語科では留学生の方々へのお土産として冊子「奈良の紹介」を事前に作成したり、英語科では交流会の後、感想文を英語で書いて留学生に送るなど、教科での取り組みとしても広がりを見せている。教科学習との相乗効果により、今後も生徒の学習意欲の向上につながっていくことを期待したい。

『「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)

項目名 ③「ESD へのホールスクールアプローチを推進する学校としての
環境づくり ～中庭プロジェクトの展開～」

1. 事業の内容

「中庭の活用から学校環境を考えるとともに中庭をホールスクールプロジェクトのシンボルゾーンとして積極的な活用を図ること」を目的にした。

①緑のカーテン：

アサガオの種を使い、緑のカーテンを育てた。グリーンカーテンは直射日射をさえぎり、日陰をつくることで周囲の温度が上がるのを防ぐと同時に、蒸散作用を利用して涼しくなる葉の表面から水分が蒸発する際に、気化熱を奪いまわりの気温が下げる効果もある。中庭や校舎端でアサガオを栽培することで、附中の環境についても考えた。また、植物を世話することで、委員だけでなく附中生同士のつながりも広めた。これらの取組みを文化のつどいでは紙面発表し、また月刊の環境ニュースで環境委員が中心となり広報につとめた。

地球の環境について、宇宙視野から考えるという視点から、上述のグリーンカーテンで蒔いたアサガオの種は、数年前からの取組みを継承し宇宙フライト実験をしたアサガオの種を用いて取り組んだ。この取組みはJAXAの奨励実験としておこなうため、データは全国で集約されるが、今年度はその連携がはかれず栽培観察のみとした。

②中庭の整備：



本校中庭は、中庭設置の経緯を鑑み、学校植物園として活用できるように平城山周辺の植生を踏まえた学校植物園として必要な植物を栽培育成されてきており、観察・実験に資する理科教材園となっている。理科の授業等に活用できるためには、今後、どのような植物が必要なのかを、理科担当教員とも連携し、調査研究を行い、時節年次に基づき設備を充実していきたい。また、生徒たちが気軽に立ち入れるよう遊歩道や簡易のベンチを設けるなど、環境学習がより生徒にとって身近なものとなるように取り組んだ。同時に、環境委員会を中心に、チューリップの球根植え、卒業式での寄せ植えづくりなど草花栽培の魅力を主体的にアピールすることで、環境教育への意識を高揚に努めた。

2. 事業の成果と課題

成果：

グリーンカーテンは、生徒の身近で目につく場所での取組みだったので、担当の生徒以外にも興味を喚起することができ、多くの生徒が取組に関わった。また、時々の活動報告を環境ニュースとして全校生に発信することで、附属中学校生徒に、環境問題への意識付けがはかれた。季節により、天候により移り変わる植物の姿を日常的に目にするすることで、生徒の心に安らぎを与え、環境問題への関心が高まった。

課題：

「環境問題」には重点的に取り組み、その成果を得られたが、ESDホールスクールアプローチという視点から取り組みがやや低調であった。「アンネのバラ」栽培の継承や東日本大震災の被災地の中学校との交流活動を積極的に推進できなかった。次年度への課題としたい。



項目名 ④平和の集い

1. 事業の内容

(1)今年度の位置づけ

平和について、生徒ひとりひとりが「平和ってなんだろう」「どういうことが平和なんだろう」ということを考え、附中生がこれから創り上げていくべき平和のかたちを、クラスや全校での対話を通して探していく。附中の「平和の集い」の取り組みの意義を再確認し、「平和」について考える。

(2)教師のねらい

- ・附中の「平和の集い」の取り組みの意義を再確認し、「平和」について考える。(今年度は、原点に戻り、「平和の意味」を考えることから再出発する。)
- ・本校教育目標「真理を求め、平和を願い、しあわせな世の中を築く人間に」の実践。
- ・今年度の取り組みをきっかけに、今自分たちにできることを行動化すること来年度以降の活動へつなげていく。

(3)生徒会中央委員会のねらい

～2013年度後期生徒会テーマ「カラフル」を踏まえて～

「一人ひとりの平和の積み重ねが、全体の平和につながっていく。」

- ・それぞれが平和であればこそ、自分たちを含む大きな世界も、平和になるのではないだろうか。全体として見かけ上平和に見えても、一人ひとりを見た時、つらい思いをしている人がいるのなら、それは本当の平和とはいえないのではないだろうか。

「相手に自分の気持ちを伝える。相手の気持ちを知る。そして共通理解を図っていく。」

- ・一人ひとりが平和を目指して意見を出しあうことが平和を創る一歩となる。クラスおよび全校生徒で平和への願いを共有(シェア)しあい、一人ひとりが平和に対する願いを考え伝えることで、平和に近づいていく。

(4)取り組みの流れ

事前学習(1月9日(木)5限)

- ・学級単位で実施。(学級教室)
- ・各クラスの考える「平和」について、話し合い、意見を出す。(対話)

当日(1月16日(木)5・6限)

- ・全校で実施。(体育館)
- ・進行案

①事前学習の各学級の意見のまとめを各学年

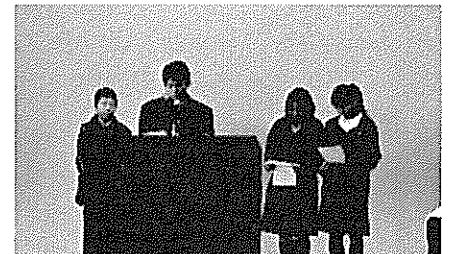
1クラス発表する。…6分

②これまでの平和の集いを振り返る。(生徒会…

パワーポイントによる報告)…10分

③今、私たちが考えたい「平和」とは?…DVDを2本視聴…45分

DVD「標的の村」(琉球朝日放送 2012年9月2日放送、約25分)、「いじめをノックアウトスペシャル」(NHK 2013年12月7日放送、約20分)



④学級教室に戻って感想・意見を書く。…15分

事後学習（1月23日 木曜 5限）

- ・学級単位で実施。（学級教室）
- ・平和の集いの感想集プリントを読む。（3年生のメッセージバトンを受け取る。）
- ・自分と仲間の感想をもとにクラスで話し合い、来年の平和の集いに向けた意見としてまとめる。
- ・まとめたものをポスター（もしくは宣言文）にして、掲示板に全クラス分を貼る。

2. 事業の成果と課題

(1) 成果

今年度の話し合いで考えた平和のかたちを、来年度以降の平和の集いの取り組みにつなげていきたい。これまでの平和の集いを振り返り、なぜこのような行事が附中で行われてきたか、平和について考えることの意義を、あらためて意識することができた。



生徒会本部としては、自分たちで考えたい、話し合いたい、という思いを実現できたことで、達成感を持つことができた。事後学習で行った平和についての意見のまとめは、来年度の平和の集いに生かすための貴重な資料となった。

1、2年生の縦割りで話し合いをしたことも、学年の違う生徒同士が意見を交換しあうことで刺激となった。このような形での行事への取り組みが今後も続けられるとよい。

(2) 課題

平和の集いの実施計画の立案が遅くなった。年度当初から具体的な計画を検討していれば、全体の内容についても、事前・事後の学習計画についても、もっと深めることができた。

当日の活動で、討議の場で生徒の意見が思うように出ない場面があり、日常的な対話の習慣づけの必要性が感じられた。対話については、授業や総合などに組み込んで、日頃から意見を述べることに慣れるような取り組みが必要だ。また、どのような議題についても自分の意見が述べられる力を育成することも重要だと感じた。

『「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)

項目名 ⑤教職大学院生による
特別支援学級での「読み聞かせ」プロジェクト

1. 事業の内容

「特別支援学級での読み聞かせ活動～アニメーションの手法を取り入れて～」

『たかばたけ・ほんがく（本楽）倶楽部』第二年次

- ①実施日時：第1回 2013年4月24日『できるかな～あたまのさきからつまさきまで～』、
第2回 2013年5月13日『あらしのよるに』
第3回 2013年7月1日『お化け屋敷へようこそ』、第4回 2013年9月9日『被害』
第5回 2013年10月7日『ぼちぼちいこか』、『あれこれたまご』、『しごとば』
第6回 2013年11月8日『からすのばんやさん』
第7回 2014年2月3日『おまえうまそうだな』

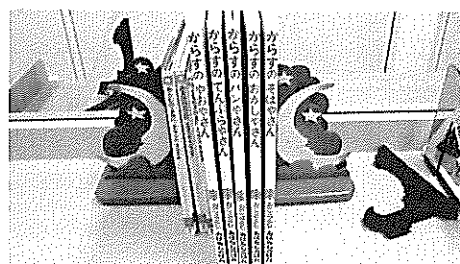
※教職大学院の本プロジェクトスタッフと、特別支援学級の本プロジェクト担当教員とで、
各回の前後に、打ち合わせ企画会議と事後総括会議を実施している。

- ②実施時間：昼食後の昼休み、約30分間（12:50～13:20）
③実施場所：特別支援学級 多目的教室
④スタッフ：松川利広（教職大学院、附中校長）教職大学院の学生10名、特別支援学級教員4名、
⑤対象の生徒：附属中学校特別支援学級の生徒（16名）
⑥事業のねらい：アニメーションの様々な手法を活用して、生徒の実態に応じて、知的障害や発達障害のある子どもたちに有効な読み聞かせの実際やあり方について、実践をしつつ学級の教員とともに深める。

2. 事業の成果と課題

①企画立案において

昨年度に続く2年目の取り組みとして、今年度は、i) 実施回数を増やすことやii) 関わる学生の輪を広げること、
また昨年度からの課題であるiii) 絵本の選択についてよりていねいに吟味することを課題とした。



②実施の経過とその成果

i) について、昨年度は4回の実施であったところを7回実施することができた。このことにより、学生スタッフの生徒理解がしやすくなり、読み聞かせの方法やアニメーションの「作戦」選びにおいて、より生徒の実態に応じた適切なものに改善することができた。このことは生徒の反応から明らかである。

ii) については、実施回数が増えたことにより「参加の機会」のみならず、「準備や総括の場面」に未参加の生徒が接することが、教職大学院内で増えたことにもよる。次年度以降にむけて継承者をつくることのできたことは、「子どもに関わるよりよい取り組みを単発で収束させない」という大切な視点を持つことのできたという点で成果であるといえる。

iii) については、例えば「一方的に読んでもらうだけでなく、一人ひとりが考える活動ができ、それをフィードバックさせることができた」という新しい発想から、登場人物がもし自分ならという仮想場面を想定し、紙に書きお互いに発表する、またそれを掲示するということができた。

これは予想以上に生徒のなかに、次回への期待感と前回の振り返りをもたらすことができ、参加の意欲を高める一助となった。

もう一点は、読み聞かせたその絵本と同じシリーズや、同様の内容の他の絵本、関連する絵本などを紹介して、生徒の絵本の世界を広げることができたという成果がある。一冊だけではなく、フロアに数冊の絵本が広げられ、自由にページを繰り、友だちと語らいながら絵本をながめることは、生徒達にとっても新鮮な活動であり喜々として読み続け、設定された時間を超過したほどである。



③課題

実施回数が増えたことは、様々な面で成果が認められたが、同時に附属教員との打ち合わせや総括が煩雑になってしまったことは否めない。事前事後のそれらの方法についてはより計画的に、また事務手続きなどについてはシステマティックにするなど、改善点がみえてきたところである。

『学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける』教員の養成に向けた

持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)

項目名 ⑦教職大学院生と第一学年との協働(宿泊行事づくり)

1. 事業の内容

①曾爾野外活動:

好天に恵まれバスにて曾爾に入り、入所式後、西浦峠の登山に取り組んだ。1年生全員が登山に挑戦し、難所をいくつかクリアし、ほぼ全員が完歩できたことは大きな成果が得られた。午後8時からのキャンプファイヤーを行い、松川校長の演じる火の神の点火からキャンプファイヤーが始まりクラススタンプ、「獅子舞」など盛りだくさんな内容であった。



翌朝は野外炊飯で野趣に富んだ林間での自炊場でカレーづくりやご飯炊きなど、本格的な自炊で、生徒達には貴重な体験を与えられた。曾爾高原の大自然のもと、自然からの学び、友人からの学び、ふれあった人からの学びなど様々な貴重な学びを経験し、生徒は絆を深め、一段と成長した充実した活動が展開できた。

②教職員大学院生と第一学年との協働:

本年度、教職大学院生の参加は、昨年度に増して7名の協力参加があった。最初からバス添乗した者、遅れて現地入りした者など差違はあったが、全行程にわたり7名の院生参加があったことは様々な面でのサポートになり大変有効であった。具体的には、全行程を通じた学年生徒との関わりや我々教職員のサポートなど、随所に彼ら院生の積極的な協働が見受けられた。特に、キャンプファイヤーでの準備やスタンプの運営は、生徒活動の活性化を促し、曾爾野外活動全体の成功への大きな要因の一つとなった。

また院生にとっても、事前打ち合わせや、当日のサポート、夜のミーティングなどにも参加し、教職員と場を共有することで、様々な学びがあったことかと思う。特に泊を伴う学校行事においては「安全に行事を終える」ということが最優先となる。教員の責務や使命感に対する気づきや学びが得られたのではないか。



2. 事業の成果と課題

成果: 上述の通り、7名の院生の参加は、活動全体の様々な場面で大きなサポートとなり活動成功の要因となった。野外活動をまず何よりも無事に、安全にやり遂げるためには、サポート人数が多いとありがたい。院生リーダーの指揮の下、何よりも若い力のサポートがほぼ全行程を通じてあったことは大きな助力となった。特に行程中の大きなイベントである西浦峠登山においては、高齢化が懸念される職員集団では、彼らのサポートは大きな助力となって、今後もこの体制でのサポートの継続



を願いたい。また、先にも述べたとおり、院生の学びも大きかったのではないか。このような行事でのサポート体験は普通の教育実習では得難い体験であり、かれらの学びにつながればと願う。

課題：学年生徒と院生達とのかかわりの場面がどこまで深く持てたのか。より密接なかかわりの場面が仕組みなかったのかなどの課題があったと考える。事前の打ち合わせを、もう少し頻繁に取り、より有効なサポート体制や支援のあり方を工夫する余地はまだあろうと思われる。

《参考資料：代表院生 行事後のレポート（要約）》

キャンプファイヤー活動を通しての学び—中学生の主体的活動とは—

生徒は私たちのサポートなしでも、学級や学年全体で楽しもうとする意識が高いように感じた。そのような気持ちを高めたのは、各学級のスタンツ発表への思いの強さからであると考えられた。ファイヤーに向けて、各学級でスタンツの練習を積み重ねていたため、その出し物を成功させたいという思いが表情にまで強く出ていた。それがプログラム前半のハイテンションな雰囲気を作られていくきっかけになった。後の聞く態度や盛り上げようとする態度が少し低下していくように感じた。しかし、学級開きがあつて約1カ月半、学級で協力し合いながらこのような取り組みが行える実態からも生徒の自主性の高さがうかがえる。日頃からの生徒指導の賜物であると感じた。今回の経験が今後の学級活動の基盤となり、学級をさらにまとまりのある集団に変えていくきっかけになると考えられる。

教員をめざすものとしての学び—生徒の活動を支える教師の役割とは—

今回、事前の打ち合わせや当日の先生方の動向や様子から、学校行事における先生方の役割や動きといった生徒からは見えない部分を見させていただく機会となった。特に深い学びとなったのは「生徒の安全面・健康管理」への配慮が徹底されていたことであつた。プログラム中の密な連絡の取り合いや夜の打ち合わせ等からうかがえたことは、生徒の活動を成功させるためには教員間の連携が不可欠なことである。教員間で、常に生徒の健康状態や学級の様子を情報共有し合い、必要に応じて対応を取っていくことが大切であり、このような一連の流れが整えられて初めて学校行事は実施できるのだと学んだ。安心して生徒が活動を行える環境を保障するのも教員の務めであると学んだ。

サポートスタッフとしての学び

今回スタッフ側の中心的な役割を担っていた。学んだことは、「学生の学校行事への携わり方」であつた。学校側がこの行事にどういうねらいを持っているのかを事前の打ち合わせ等で正確に情報として把握し、それに基づいて当日の動きを考えるが必要であつた。勿論、守秘義務等の兼ね合いで、全ての情報を提供してもらえないわけではない。しかし、その限られた情報の中で、自分たちが生徒のために何ができるのかを精一杯考え、自分なりに動くことが重要であると学んだ。現場経験がほとんどない学生にとって、このような活動への参加は非常に貴重である。ボランティア野外活動等とは違った「学校行事」に参加し、学びを得ることに深い意味があると思った。

ESDのつどい実施報告書

1. 目的 環境や平和、資源エネルギー枯渇や貧困、食料問題など、地球的な課題が表面化する中、一人一人のライフスタイルの変革や社会づくりへの参加・参画を通して持続可能な社会の実現を目指すことが求められている。この持続可能な社会づくりの担い手を育てるための教育であるESD（Education for Sustainable Development）は、全国のユネスコスクールを推進拠点として展開されている他、2008年に公示された新学習指導要領にも反映された。昨年度から大学と三附属校園は協力してESDの取り組みを展開し始めており、今後ますます家庭と学校が協力してESDに取り組むことができるよう、保護者へのESDの普及・啓発を目的とする講演会を開催する。

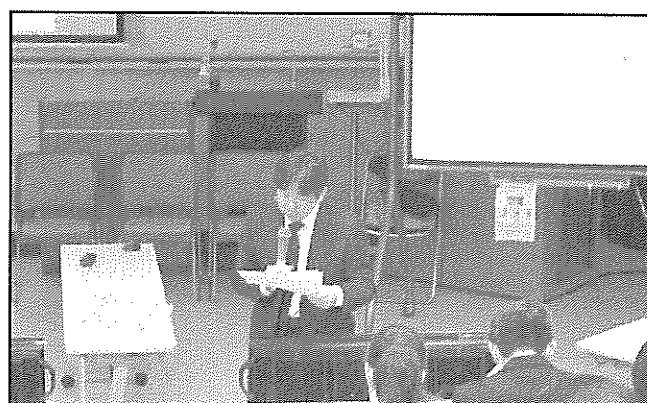
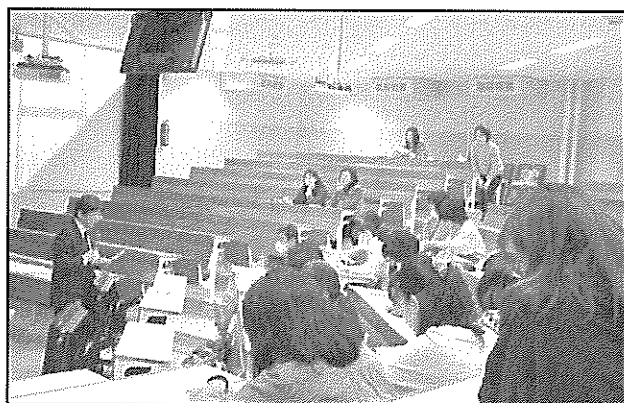
2. 実施主体 奈良教育大学「地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化」プロジェクト：持続発展・文化遺産教育研究センター

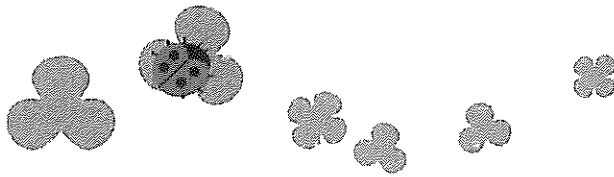
3. 協力 奈良教育大学附属中学校・保護者会
奈良教育大学附属小学校・保護者会
奈良教育大学附属幼稚園・保護者会

4. 会場 奈良教育大学大講義室

5. 開催月日 平成26年2月26日（水）9時45分～11時

6. 内容 「ESDの学びと親子のコミュニケーション」
講師：奈良教育大学 副学長 加藤 久雄





2014年2月26日(水) 9時45～11時

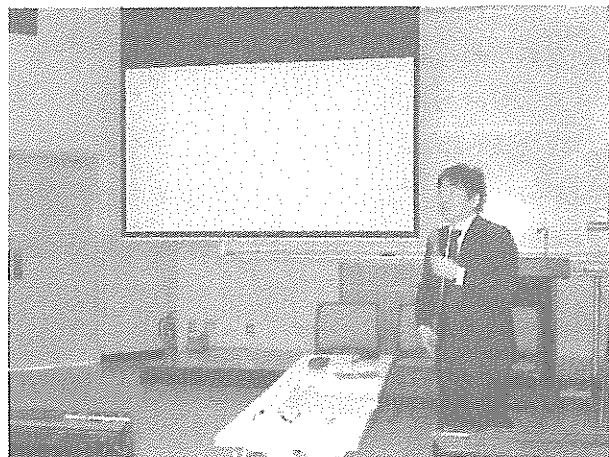
ESDに関する講演会

「ESDの学びと親子のコミュニケーション」の感想

- ◎ 「教育」という字は、子供のためにあるとなぜ思っていたのでしょうか？今日のお話を聞いて学びは学校や園 + 家庭、社会生活において親子共に進めていくべきなのだと実感しました。ただの会話と思うことなかれ、幼稚園の送り迎えで子供と交わす言葉を大切にしていきたいと思えます。わかりやすく楽しいお話をありがとうございました。
- ◎ 先生の言葉に関する思いは、私もとても共感しています。言葉の適切な選択（時と場合による）は、非常に重要であると日々思っています。ESDということがどんなことなのか、私にはよく理解できました。学習に関しては、子供に合った step by step で理解させながら進めていくことが重要だと思います。研究室に遊びに行きたいです。
- ◎ あっという間に時間がすぎました。とても楽しく聞かせていただきました。もっと聞きたかったです。親子のコミュニケーションで見直すことが多々あったのでこれからは活かしていきたいです。
- ◎ 子供が軽度の障害があるといわれ、今日まで育ててきました。ずっと学校の勉強などでも「理解する」「頭で考えて行動すること」が難しい子でずっと悩みながら育てています。先生のお話を伺っていて、親子でまた、学校の先生、地域の方々と共に一緒に色々な経験を通して1つ1つ学び、学習していくことの大切さなど、とても勉強になると思いました。小学校で世界遺産学習がありました但其の理由がやっとわかりました。
- ◎ 「答えはない」「私たちのほしいものはない」というところから、始めるとき、絶望ではなく、ないからどうする・・・というふうに、生き残りをかけるような、切羽詰まるような緊張感？背筋をぴんと張るような「ほしいもの」を忘れるくらい夢中になることを今、少し見つけかけていて、それは発展学習ですね。これから高校、大学に進んでいく自分の子供達にも色々学習を経験してほしいです。そうゆう面では日本にうまれて（生活していて）よかった。ESDについて学ぶことができ感謝いたします。
- ◎ 自分で観察して発見してほしいという願いは常日ごろから思っていますが、やはり時間の制限、自分がそこまで導くようにするのが面倒だと思い、すぐ答えを教えがちになっています。改めて、待つ大切さを大事にしていきたいと思えます。また機会があればお話を聞かせていただきたいと思えます。

- ◎ 我が校がユネスコスクールに加盟（幼・小申請中）するにあたってのお話、子供たちが自分の住んでいる地球のことを考えて、生活、関わり、つながりを考えていく事は親として喜ばしい限りです。そして、教えてくださる教師の方々の努力が大事なことも知りました。今後の学びの場としての学校の発展を応援しております。家庭側としても協力していきたいと考えております。
- ◎ 子供との接し方、生き方を考えさせられました。反省の1時間でもありました。これからの課題です。
- ◎ スワヒリ語の問題をまくらに、観察、発見、学びへとつなげていくのは、なるほどと思いましたが、肝心のESD教育とは具体的にどんなことをしているのか、なぜ私たちに必要なのかという説明があればよかったかなと思います。保護者向けというより現役の学校の先生向けの内容になっていた感じがあります。
- ◎ 大変勉強になりました。家庭でのコミュニケーションの大切さがわかりとても反省しています。子供の笑顔はもっと話したい、聞いてほしいというのを感じてきましたが、母である私がそれを満足させず子供の能力を押さえていた様に思いました。
- ◎ 答えのない問題が本来の世の中です。考えさせることで、考える力をつけさせることの重要性を感じました。話を続けることで、発展があるのですね。
- ◎ 附属幼稚園、小学校にお世話になり5年経ちますが、ESDの取り組み、ユネスコスクールなど、知らないことが多く恥ずかしかったです。ESD…理想と現実、私自身の子育てでの目的になりそうです。「～ね」は今日から実践させていただきます。
- ◎ ESDを理解したく今回参加させていただきました。難しいお話でしたが言葉の部分で「～だね」「～ね」と子供と会話するよう心がけたいと思いました。
- ◎ 学校での学習スピードについていけなくても、あわてず理解を深める学習に付き添って一緒に学んでいってやりたいと思いました。子供と一緒に大人と学べるっていいことですね。
- ◎ ESD教育を受ける子供たちが成長していくのを楽しみにしています。家庭でも子供とのコミュニケーションを楽しみたいと思います。ユネスコスクールになる小学校に期待しています。
- ◎ お話はよくわかり楽しかったです。ただ、期待していた内容とはずいぶん違っていました。それは多分、親子のコミュニケーションのお話をもっと聞きたかったからではないかとおもいます。我が家では日々言葉の問題でつまずいていて、それくらいという親と、いやこうでないという親の板ばさみになっている子供がいます。ESDについては漠然としてしまっていました。今日、少し理解が深まりました。できるところはESD的に実践してみたいです。
- ◎ 日々の生活の中でもっと「何かな?」「不思議だね」などと子供と一緒に感じたり考えたりしていきたいと思えました。まずは私たちの大人の意識を変化させ、地球的な大きな視野で子供の事、未来のことを考えていく事が必要なのだと感じました。

- ◎ ESD と聞いただけでは難しそうと思っていましたが、日常の子育てで気をつけなければいけない事がたくさん含まれているとわかった。教育現場だけの事かと思っていたが、普段の生活での会話を少し変えるだけで子供の成長に関わるので気をつけようと思った。
- ◎ 観察と発見を大切にして、子供とも付き合いをしていこうと思いました。子供の好奇心を無駄にしないで「～ね」と言ってあげられるように、気持ちの共有を大切にしたいです。
- ◎ 先生のお話はとても面白かったです。漠然としていて伝えにくい？伝わりにくいかな…と思いました。
- ◎ 昨夜も 8 歳の孫とお風呂に入っているとき、口論になりました。九九を一生懸命に覚えているのですが、バラバラ九九を私が言って問題を出すとき、間違えると何回もいい直しをしています。そのうち、のぼせてきて不機嫌になりごんたが現れて、二人の間がきまらずくなり、私も年がいもなく言いかえしてしまいます。「バアピー（祖母のこと）は僕の話聞いていない。僕の面倒をみていない…」と涙ながらに言います。とてもショックで私も涙してしまいました。ハッ！と気づかされました。自分は聞いているつもりでも、相手には通じていない！今日のお話を聞いて、何か今までの事に芽を摘んでいたことを理解し、これからは、内省、理解という事を、孫と一緒に学びたいと思います。
- ◎ 親子で ESD 的な会話をしていきたいと感じつつ、日ごろの会話は？？？でした。ESD 教育を積極的に取り入れている学校で生活できることに感謝です。



飛鳥小学校 野外活動ボランティア

物質科学専修 3回生 後藤田洋介

9月25日、26日に奈良市野外活動センターで行われた、飛鳥小学校の野外活動に現場体験ボランティアとして参加しました。この野外活動に入るにあたって、2度の打ち合わせおよび生徒との顔合わせを行いました。当日は学部生が3名と教職大学院生2名、奈良ユネスコ青年部から1名が参加しました。さらに、キャンプファイヤー時には、教職大学院生2名がサポートとして参加しました。

私がこの野外活動ボランティアを通して学んだことが3つあります。一つ目に当日に向けての準備、二つ目に教師の動きについて、三つ目に段取り力についてです。

一つ目の当日に向けての準備についてです。今回のボランティアには、ほかのそれとは違うところがありました。それは、2度の打ち合わせ時に子どもたちと交流をすることができたことです。子どもたちとの交流では一回目に「スタンプとは何か」という話をし、二回目では、子どもたちが作ったスタンプを見てコメントするというを行いました。子どもたちと事前に知り合いになることで、当日のコミュニケーションが円滑に図れたとともに、事前の子どもの状況を知ることができたので、野外活動を通して子どもたちがどんな成長をしたのかが見えました。

二つ目の教員の動きについてです。小学生から高校生の時は「参加」、大学生になり「運営」というように立場が変化しましたが、今回はその間に立ちました。参加だけでなく、「運営」を経験したからこそ、様々なことに気が付きました。例えば、夜に先生方は、ある時間ごとに子どもを起こしに行くということをしていました。また、キャンプファイヤーでは、担任ではない教員がファイヤーキーパーを務めていました。他にも担任の教師がいつどこで何をしているのかを見ることができたのは今回の活動の大きな学びになりました。

三つ目に段取り力についてです。グリーンオリエンテーリングや飯盒炊爨、キャンプファイヤーを通して、段取りの重要性を感じました。グリーンオリエンテーリングでは、危険な道を事前に把握しておくことや、子どもたちの水筒にちゃんとお茶が入っているかなどの確認をすることもとても重要な事だと感じました。キャンプファイヤーでは、何時に開始するのか、それまでに何をしておくのかを、子ども一人一人に伝えておくことや、終了時にどんな動きをすればいいのか、次の動きの説明の仕方など、子どもがどうしたら動きやすくなるのか、教員の伝え方が、子どもたちの段取りにつながると感じました。

今回の野外活動ボランティアでは、教員がどんな動きをするのか、どんな声掛けをしているかを学ぶことができました。実際に教員がどのような指導や行動をするのかを見聞きすることで、それらの児童への影響などを学ぶことができました。この経験をこれからの活動につなげていきたいと思いました。

中学生と関わる貴重な経験～三笠中学校生徒会リーダー研修会～

大学院教育学研究科 理科教育専修 1回生 渡邊 憲

8月19日、奈良教育大学ユネスコクラブ部員6名が三笠中学校の生徒会リーダー研修会に参加させていただきました。このリーダー研修会は、学級代表（各学級男女1名）・生徒会本部役員・専門委員長の計60名の生徒から構成される「リーダーの育成」「学年を超えたリーダー間の交流」「リーダーと教師の相互理解」を目的とした集まりで、本校ユネスコクラブの参加は二回目である。私たちはこのリーダー研修会で主に二つの活動に関わらせていただいた。一つ目は「ユネスコと仲間づくりの活動」の講話とアンクロン演奏。二つ目はハンドベルとアンクロンの練習のサポートである。

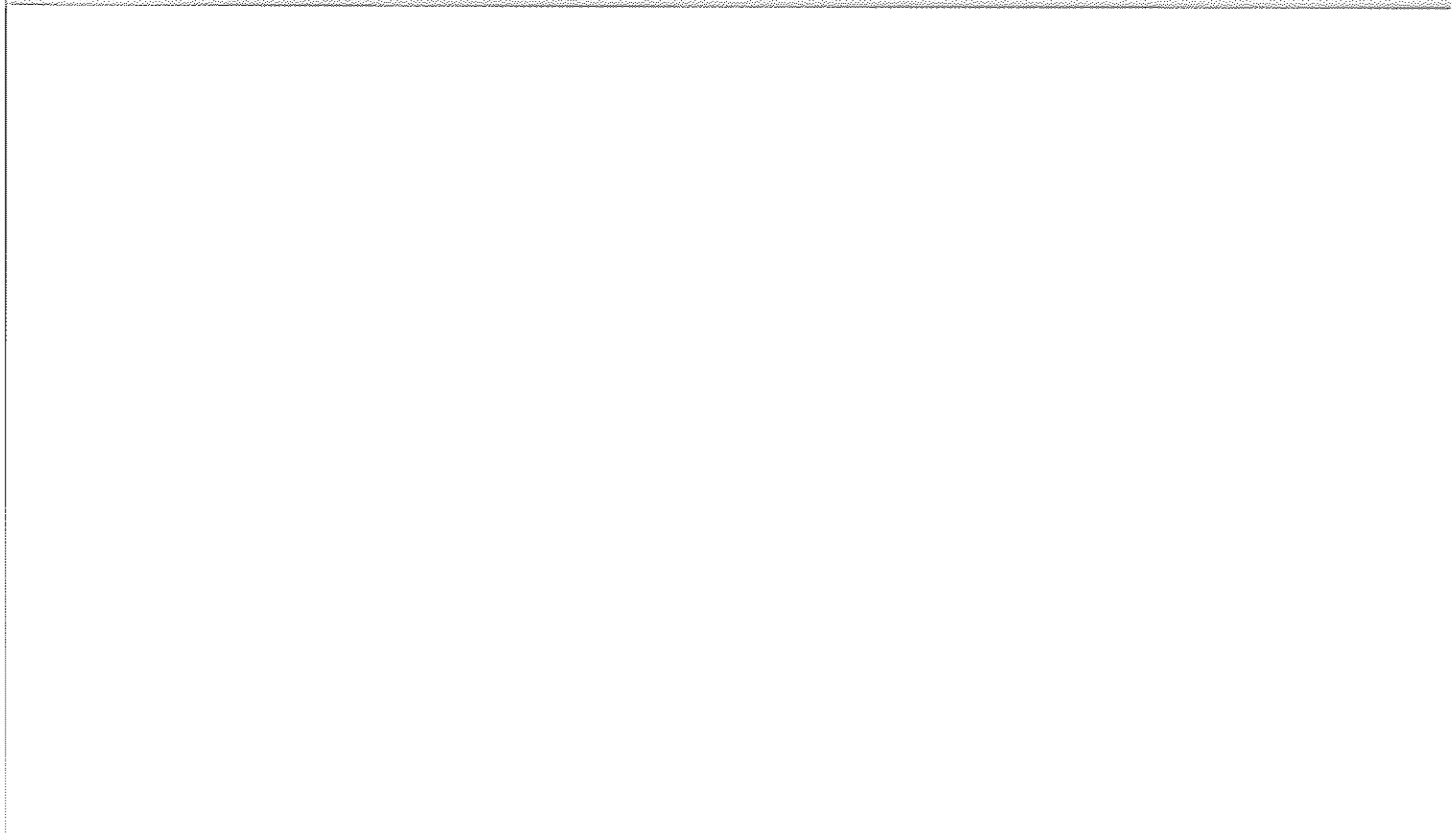
まず一つ目の活動「ユネスコと仲間づくりの活動」の講話とアンクロン演奏で、私たちからユネスコクラブの仲間づくりの活動を伝えた。ここでは最初に、私たちユネスコクラブの活動をムービーで紹介した。中澤さんが作成したムービーで最後に「いっしょにいいもんつくっていこう！」と締め括られており、ユネスコスクールのみんなでこれからの奈良をつくっていくのだと意識することができた。そのためのユネスコスクール支援であろうと思う。

続いて、私たちがアンクロンを演奏（数時間前に即興で練習）し、「ユネスコと仲間づくりの活動」の講話ということで、6人それぞれの「大学生の私たちが中学生に伝えたいこと」を語らせていただいた。中学生と歳が近い私たちの等身大の想いに、生徒たちは真剣なまなざしで耳を傾けてくれていた。後日、ASP連絡会議で三笠中学校の九鬼先生から「先生の話は素直に聞けないが、大学生の話は素直に聞いた。」など中学生の感想を聞かせていただくことができ、中学生の前で語らせていただいたことが届いていたと実感し嬉しかった。また、大勢の生徒の前で語ることで私は自分自身の成長を実感することができた。それは、ほとんど緊張することなく語ることであったことである。私がこのリーダー研修会に参加させていただいたのは、昨年度に続いて二回目である。昨年度は大勢の中学生を前に足が震えるほど緊張したが、本年度はほとんど緊張することなく話したいことを整理しながら話すことができたと思う。ESD子どもキャンプやASP会議で話す経験の成果ではないかと実感している。また、本年度は私たちの受け持った時間の司会進行をさせていただき、昨年度にも増してたくさんの経験をさせていただいた。

二つ目の活動は、色団（1年生から3年生から編成される縦割りグループ）ごとに課題曲をハンドベルやアンクロンで演奏する練習のサポートである。短時間の練習時間であったが、どの色団の生徒も協力しあい、仲間を尊重する姿勢をもっていることに感銘をうけた。私がサポートに入った色団は大森屋のCMでお馴染みの「森へ行きましょう」の演奏をおこなった。練習時間では一度も通して練習できなかったが、本番では大成功し、演奏後色団の結末がより強くなっていたように見えた。私たちが生徒たちから学ぶことがたくさんあった。

私は中学校の教員を目指しているが、実際に中学生と関わることのできる場面は本当に限られている。今回のような私たちが中学校に赴く形だけではなく、「いっしょにいいもんつくっていこう！」のように、ともに何かをつくっていくような活動もしてみたいと感じた。

長浜校長・九鬼先生など三笠中学校の先生方、ご馳走になった美味しいカレーを調理してくれた生徒のみなさん、引率など様々な形でサポートしてくださった本学の北村先生ありがとうございました。



その他ESDに関する取組

玉川大学ユネスコクラブ・奈良教育大学ユネスコクラブ合同スタディーツアー
実施報告書

物質科学専修 3 回生 後藤田洋介

1.目的

奈良教育大学は ASPUnivNet に加盟しており、ユネスコスクールの活動支援等を行っている。その活動支援などの主体となる学生の育成と、学生間の交流を深めることで活動の質を向上していく。本年のはじめに、奈良教育大学の学生 5 名が玉川大学ユネスコクラブを訪問し、交流会を実施した。今回は玉川大学ユネスコクラブの顧問・学生合わせて 11 名が奈良を訪問し、世界遺産や奈良の地域遺産を学ぶ活動をする。活動とその支援を通して、学生間の交流と互いの活動を深め合うことを目的とする。

2.実施期間

平成 26 年 2 月 11 日～14 日

3.参加学生

<p>2 月 11 日 参加人数 24 人</p>	<p>中澤静男 () 加藤久雄 () 後藤田洋介 (3) 二階堂泰樹 (3) 木村絃子 (2) 仲孝昌 (1) 北側瑞歩 (1) 横井まどか (3) 寺田翔一 (3) 糸綾香 (2) 浅野優子 (1) 吉門歩実 (1) 堤由衣 (1) 玉川大学ユネスコクラブ 小林亮 (顧問) 利根川護 (2) 山口日香里 (2) 飯富梨沙子 (1) 石井佑季 (1) 石黒琴恵 (1) 小原英真 (1) 黒石香菜 (1) 近藤剛司 (1) 島田景子 (1) 想田唯 (1)</p>
<p>2 月 12 日 参加人数 22 人</p>	<p>北村恭康 (研究員) 後藤田洋介 (3) 二階堂泰樹 (3) 仲孝昌 (1) 北側瑞歩 (1) 横井まどか (3) 寺田翔一 (3) 吉門歩実 (1) 坂井晴香 (3) 親木翔平 (3) 中澤哲也 (M2) 玉川大学ユネスコクラブ 小林亮 (顧問) 利根川護 (2) 山口日香里 (2) 飯富梨沙子 (1) 石井佑季 (1) 石黒琴恵 (1) 小原英真 (1) 黒石香菜 (1) 近藤剛司 (1) 島田景子 (1) 想田唯 (1)</p>

2月13日 参加人数 20人	後藤田洋介 (3) 二階堂泰樹 (3) 仲孝昌 (1) 北側瑞歩 (1) 横井まどか (3) 寺田翔一 (3) 糸綾香 (2) 親木翔平 (3) 堀口大地 (1) 玉川大学ユネスコクラブ 小林亮 (顧問) 利根川護 (2) 山口日香里 (2) 飯富梨沙子 (1) 石井佑季 (1) 石黒琴恵 (1) 小原英真 (1) 黒石香菜 (1) 近藤剛司 (1) 島田景子 (1) 想田唯 (1)
14日	降雪の為中止

※ () の中は学年など

以上、参加者3日間のべ66名

4.行程

2月11日 (火曜日)

時間	行程
12:40	集合 宿泊先 (ホテルサンルート) 着
13:00	開会式
13:30	春日大社拝観 (春日大社・夫婦大国神・若宮神社)
15:00	東大寺拝観 (大仏殿・手向山神社・二月堂)
17:30	懇親会

2月12日 (水曜日)

時間	行程
8:45	ホテルサンルート集合
9:00	移動 (近鉄奈良駅～飛鳥駅)
10:30	猿石・鬼の俎・鬼の雪隠の見学
11:00	亀石見学
11:20	橘寺見学
12:20	昼食 (明日香夢市)
13:00	石舞台古墳見学

13:30	岡城跡見学
14:00	伝飛鳥板蓋宮見学
14:30	飛鳥寺拝観・蘇我入鹿首塚見学
15:00	水落遺跡見学
	休憩
	雷丘見学
16:00	移動 (雷丘～橿原神宮前駅～大和西大寺)
17:10	翌日の打ち合わせ
19:00	移動 (大和西大寺～近鉄奈良)
19:10	解散

2月13日(木曜日)

時間	行程
8:40	宿泊先発 移動 (JR奈良駅～法隆寺駅)
9:45	法隆寺拝観
12:00	昼食
13:00	移動 (法隆寺駅～JR奈良駅)
13:30	三条通・中谷堂見学
16:00	興福寺拝観
17:00	大学にて活動交流会
18:00	ASPUnivNet 連絡会議
19:00	ESD 連続公開講座に参加 奈良公園内で行われているなら瑠璃絵の見学
22:00	解散

2月14日(金曜日)

時間	行程
9:00	宿泊先集合
9:30	降雪の為帰路へ

5.活動を通して

本年度は、11月に行われた、ユネスコクラブ全国サミット、1月に行われた玉川大学ユネスコクラブとの交流会、そして本活動の奈良での活動の3つを行った。それらの活動の中で私たちが感じたことは大きく分けて三つある。それは、学生間で交流を行うことの大切さ、活動をお互いに行いあうこと、そして世界遺産や地域遺産を学ぶことについてである。

一つ目の学生間で交流を行うことについては、互いの人を知ることができ、人と人のつながりを作ることができた。交流が終わった今でも、連絡を取り合いながら、今後の活動について考えている。また、人と人のつながりを着実につなげていくことで、ユネスコスクールの活動支援への学生の参加が増えると考えた。

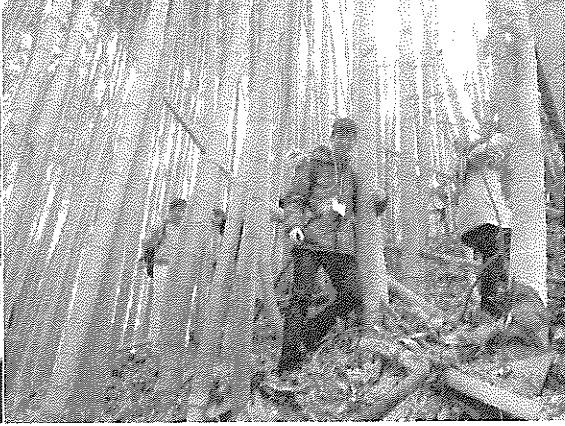
二つ目の活動を互いに知ることについては、玉川大学のユネスコクラブでは国際交流をメインに活動を行っている。それに対して本学では、ESD活動や、地域遺産の発見などをテーマに行っている。それらの活動が交流することによって、活動の幅が大きくなることや、自分たちの活動を見つめ直すことにつながった。本学ユネスコクラブにおいても、留学生との交流や海外へのスタディーツアーを計画しているところである。

三つ目の世界遺産や地域遺産を学ぶことについては、今回の奈良でのスタディーツアーでは、本学の学生が主体となって、奈良の世界遺産、法隆寺や東大寺などを案内した。また、明日香村に出向いた際は、明日香村の地域遺産を案内し、地域の魅力を伝えた。他県から来た学生に、世界遺産や地域遺産の魅力を伝えることが、自分たちがその魅力を再認知することにもつながり、伝えることと学ぶことの一体化を実感することができた。

最後に玉川大学ユネスコクラブとの交流を通じて、人と人のつながりを学ぶことができた。また、世界遺産や地域遺産を紹介することで、奈良という地域について再び考えることができた。玉川大学以外にも、ユネスコクラブを置いている大学がある。今年度の活動を、玉川大学ユネスコクラブと本学ユネスコクラブだけのものだけではなく、他大学との交流にもつなげていきたい。



開会式



岡城跡の見学



集合写真（東大寺）



集合写真（法隆寺）



本学学生による法隆寺の説明



集合写真（奈良教育大学）

玉川大学との学生交流の振り返り

英語教育専修 1 回生 北側 瑞歩

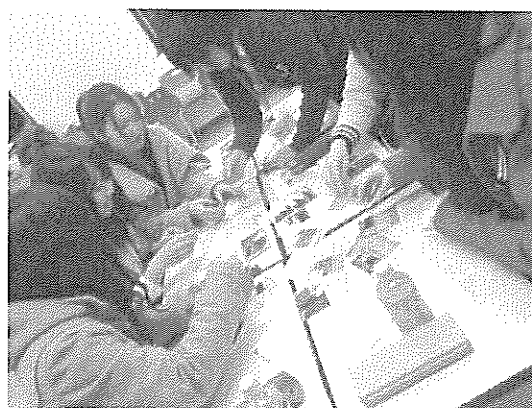
2014 年 1 月 18、19 日に玉川大学のユネスコクラブの皆さんと交流をしてきた。玉川大学のユネスコクラブでは、国際交流が盛んに行われており、マカオのスタディーツアーにおいては、一日でマカオ国内の全世界遺産 30 ヶ所を踏破している。奈良教育大学ユネスコクラブにおいても、今年の 3 月に韓国との交流を行うことになっている。玉川大学のスタディーツアーのノウハウを本学ユネスコクラブのメンバーに伝えること、また個人的に学生間のつながりを作りに行くことを目的にこの交流会に参加した。

私がこの交流会で学んだことは 3 つある。玉川大学の活動報告から学んだこと、他大学の学生とつながりを築くことができたこと、奈良の魅力を再び感じることもできたことの 3 点である。

まず、玉川大学ユネスコクラブの活動報告を聞いて、どの大学のユネスコクラブも ESD を行っているものであると思っていたが、それは奈良教育大学特有のものであることを知った。また、スタディーツアーの訪問場所、事前学習、各日程を決めるために 4 ヶ月前から活動を始めており、それが一日でマカオ国内の全世界遺産を踏破できる理由なのではないかと感じた。二日目には玉川大学の学生に浅草寺と上野公園を案内してつた。浅草寺では建造物の紹介をしてもらい、スタディーツアーがどのようにされているのかがわかり、よかった。

二つ目は、他大学生との交流をもつことができたことである。今回の学生交流は二日間だけではあつたが、それにもかかわらず深い関係を築くことができた。今回のように関係を築くことができたのは、玉川大学の方がアイスブレイキングなどの工夫を取り入れてくれたからである。私自身、今後は人とうまく打ち解けあえるような工夫を考えていこうと思った。そして、人とつながり、意見を言い、自身のこと、自身の活動を見てもらうことの楽しさを学んだ。

三つ目は、東京へ行き、他県の人と話すことで自分が住んでいる奈良の魅力をさらに感じることもできた。この交流会で行うアクティビティに奈良の世界遺産の紹介を行った。私たちは事前に資料を集めるために奈良の寺社へ赴いた。また、玉川大学の学生の方に奈良はどのような所であるかを聞かれ、説明することを通して、奈良は豊かな自然に恵まれ、世界遺産が数多くあり、良いところであると改めて感じた。



アクティビティの様子

奈良とは離れたところの大学の方との交流は初めてで、刺激を受けることが数多くあつた。この経験をほかのユネスコクラブの学生に伝えたい。また、他の学生もこのような刺激を受けてほしい。

玉川大学との交流から得たもの

美術教育専修 2 回生 木村 絃子

1月18・19日にかけて、玉川大学ユネスコクラブとの交流を行った。それぞれのユネスコクラブの活動のテーマの違いから、話し合いなどの際に意見の衝突や擦れ違いが起こらないか不安であったが、双方が相手側の意見を尊重し合いながら充実した交流をすることができた。

今回の交流を通して得たことを今後の活動に反映するために、第一に全国サミットの反省点、第二に次回につなげる活動の必要性、第三に事前学習の重要性の3つの観点から振り返りたい。

まずはじめに、全国サミットの反省点についてだが、大きくまとめると4つある。時間が足りなかったこと、呼ぶ団体が多すぎたこと、大学生以外の団体をよんでしまったこと、前夜祭の内容を事前に提示すべきであったことである。改善点としては、まず、ユネスコ協会と自身の所属する団体との活動目標の違いを把握すること、ネットワーク作りは、まず、大学生の団体から広げてい

くようにするという提案がされた。私は今回の全国サミットには参加しなかったが、サミットにおいて活動をもにする団体名や活動目標などの基本的な情報はあらかじめ公開し、全体を把握可能な規模で実施するべきであると感じた。

二つ目の次回につなげる活動の必要性については、一つ一つの出会い・学びの機会を一度きりで終わらせずに建設的な活動に発展させていくことを意識して、一度目の活動から臨むべきだと思った。はじめてのプロジェクトを立ち上げるために必要なエネルギーに比べ、すでにあるプロジェクトを持続させていくためのエネルギーは、団体全体の意思次第で削減することができる。次につなげる活動の重要性には各回における反省と次回への目標に加え、人間同士の結びつきが欠かせない。「また、交流してあのメンバーに会いたい」、「もっと彼らと持っている情報を共有したい」と双方が感じるような交流が大切である。

三つ目の事前準備の重要性についてだが、共に活動する相手や活動目標、活動内容などの大まかな知識を予め収集しておくこと、余裕を持って活動に臨むことができる。余裕があると相手の立場に立った振る舞いや気配りができ、活動の質が上がり、お互い活動していて気持ちがよい。ユーモラスな発言も期待できる。特に、異なる団体同士の交流においてはゆとりある空間で和気あいあいと意見を交わすことができるの魅力である。

今回の活動全体からの学びに共通することは、学びの活動名前には十分な準備が必要であるということと、精神のゆとりによって生まれる相手を思い合う心の大切さである。言葉にして言うには安いことであるが、実行するとなるとなかなか難しい。今後の活動においては以上の事柄を意識してより実りのあるものにしていきたい。まずは、二月に玉川大学の方々をお世話になった感謝の念とともに十分な準備のもとで迎えたい。



玉川大学ユネスコクラブとの交流感想

社会科教育専修 1回生 仲 孝昌

1月18日(土)の午後から1月19日(日)の夜までの2日間、玉川大学ユネスコクラブとの交流会を行った。今回の交流を通じ、お互いのユネスコクラブの活動を知ることができた。そこから学べたことは何だったのかを振り返っていきたい。

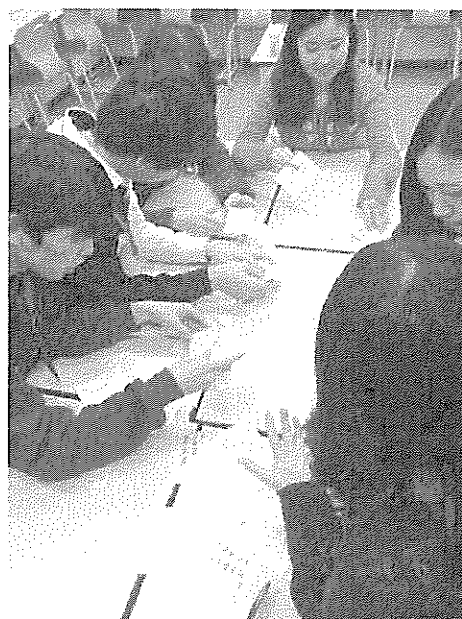
1日目の活動として、まずアイスブレイキングを行い場の雰囲気づくりを行った。その後で玉川大学ユネスコクラブと奈良教育大学ユネスコクラブの活動の内容紹介を行い、それぞれの活動の違いなどについて感じることができた。そして玉川大学ユネスコクラブが2月に企画している奈良スタディツアーの事前学習として、奈良の文化遺産などについて学習会を奈良教育大学側が行った。夜には懇親会を開き、食事をしながら個人的に仲を深めることができた。2日目は午前中には玉川大学ユネスコクラブの方の案内で、浅草周辺を散策した。午後からは国立科学博物館を見学したあと、夜には2月の奈良スタディツアーの予定の会議を行い、解散となった。

以上の活動への参加を通して感じたことが2つある。一つはユネスコクラブの活動の多様性、二つ目が準備の大切さである。

一つ目にユネスコ活動の多様さである。奈良教育大学のユネスコクラブはESDを基本としている。一方、玉川大学のユネスコクラブは国際交流を基本としていた。私はユネスコクラブはESDを学び、実践していくものだと思っていたが、大学ごとに違うということに驚いた。逆に玉川大学もESDについて知らない様子でお互いに新しい発見ができた。奈良教育大学のESDは奈良という土地がら、文化を学ぶことを基本としたESDだが、ESDには文化以外にも色々な切り口があるので、さらに多くの大学のユネスコクラブとの交流を行い、互いの特色を学び合えればと思う。

二つ目に、準備の大切さである。事前の綿密な計画、アイスブレイキングや事前学習などにはあらかじめの準備があつて初めて効果的な活動になりえる。今回の交流会では玉川大学スタディツアーの事前学習会を奈良教育大学が行い、その際にただの学習会とするのではなくパズルとクイズを組み合わせ教育大学らしい工夫を凝らした。ただ、私個人としては任せられたプレゼンテーションの準備が思うようにはかどらず、他のメンバーに迷惑をかけてしまったことが大きく反省として残った。

今回のこの交流会はお互いの活動のいい刺激になったと思う。玉川大学の国際交流やスタディツアーは留学生の多い奈良教育大学にも新しいヒントを与えてくれたし、異文化理解もESDの一環である。また、奈良教育大学のESDは玉川大学の活動に新しい視点を与えられたと思う。二日間という短い期間ではあつたが、今回の交流を通じて個々にSNSを用いた交流が行われるまでに仲も深まり、今後の活動の連携や協力の第一歩になった。今後も交流を続け、より密接な関係を作り上げていきたい。



玉川大学との交流を振り返って

社会科教育専修 3回生 二階堂 泰樹

1月18・19日にかけ、玉川大学ユネスコクラブの方々との交流を行なった。今回の交流は、玉川大学のユネスコクラブの活動などを知ることを通して、ユネスコクラブの活動の幅の広さを考えさせられただけでなく、自分たちのユネスコクラブについても改めて考える良い機会となった。それら今回の交流を通して学んだことを今後の活動に活かせるように、第一に本学と玉川大学とのユネスコクラブの活動の違い、第二に楽しい交流の作り方、そして第三に学生間の交流の大切さの三つの観点から振り返っていききたい。

まず初めに、本学と玉川大学とのユネスコクラブの活動の違いについてであるが、私は今回が初めての他大学のユネスコクラブとの交流であったため、ユネスコクラブといえども活動内容や掲げるテーマなどに違いがあることを知り驚いた。勉強不足であったため、私の中ではユネスコとESDとが繋がっていることが当たり前であると思込んでいた。しかし、玉川大学の方々のESDへの反応を見ると、目新しそうにしており、自分の中での先入観が払拭された。その逆もまた然りで、玉川大学ユネスコクラブの国際交流やスタディツアーは非常に計画的かつ活動範囲が広く、その活動に驚かされた。双方の違いを認識することで、改めて自分たちのユネスコクラブを見つめ直すことができた。



意見交換後、玉川大学にて集合写真

二つ目の、楽しい交流の作り方については、技術的な部分で学ぶことが多かった。奈良へのスタディツアー事前学習のためのパズルゲームや玉川大学の方々が用意してくださったアイスブレイキングなど、交流を実のあるものにするための準備や工夫の大切さを痛感した。相手のことをいかに考えて、交流に臨むか、ただ会いにゆくだけではないことを強く感じた。

そして最後に学生間の交流の大切さについてであるが、この点に関しては今回の交流会を通して一番学ぶことができたと感じている。交流二日目では、浅草・上野を玉川大学の方々に案内をしてもらいながら見学をしたが、たった一日であるにもかかわらず、強固な個人と個人の繋がりを確立することができており、出会った当初の不安感などの壁はなくなっていた。やはり、学生のうちにできるだけ多くの人と出会うということは大事で、特に同世代から受ける刺激の強さは焦りと似た感覚で、すぐさま自分を動かし、何かに向かって行動させてくれることを、身をもって感じた。

二日間という短い間ではあったけれど、奈良教育大学と玉川大学の二つのユネスコクラブに大きな橋渡しをすることができたと感じている。いまはまだ、小さく何年もつかわからない橋ではあるけれど、今回のような交流を続けてゆくことでより磐石な強いものになると信じている。

1. 目的

2005 年から始められた国連持続可能な開発のための教育の 10 年（DESD）も最終段階にあり、来年度には世界各地の閣僚を集めて愛知県・名古屋市及び岡山市で最終年会合が開催される。今や、持続可能な社会づくりは喫緊の課題であり、子どもから大人まですべての人が自らの問題としてとらえ、ライフスタイルの変革や地域での活動など、持続可能な社会の実現に向けた行動の変革が求められていると言える。

地域社会における行動の変革の基盤は、地域を誇りに、地域を大切に思う心であり、そのためには、地域の魅力について体験を通して実感することが必要である。本事業は、奈良の魅力についての講演会とウォーキングをあわせて実施することで、教育と観光の融合による持続可能な社会づくりの担い手を育てることを目的に実施する。

2. 開催日時 平成 25 年 9 月 22 日（日）9 時 30 分～16 時 30 分

3. 参加者 27 名（教員・一般・学生・大学院生）

4. 内容

【講演会】（別添資料参照）

① ESD 講演会

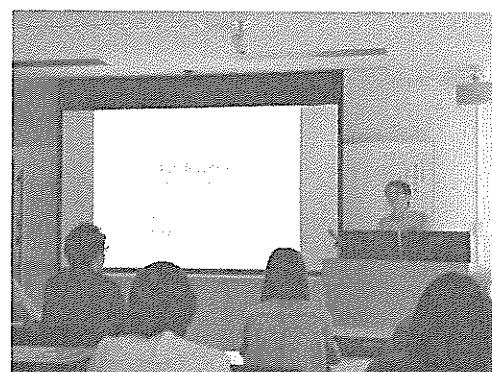
「文化遺産を通して、持続可能な地域社会の担い手を育てる」

講師：奈良教育大学 専任講師 中澤静男

② 文化遺産の魅力についての講演会

「東大寺の魅力 — 収斂し、拡張する —」

講師：奈良教育大学 教授 山岸公基



山岸教授の講演

【奈良の魅力発見ESDウォーキング】

「頭塔」



頭塔を望む

767 年に東大寺の実忠和尚が築いた。もとあった古墳を壊して、下層頭塔がつくられている。この場所は、東大寺の真南であるとともに、新薬師寺の西の野にあたり、平城京からは一段高い場所である。平城京から見える位置とすることを意識したのかもしれない。頭塔に配置される石仏は、760 年～767 年に制作されたものと見られる。石仏に見られるほおなどが豊かな様式を唐から伝えたのは 753 年に来日した鑑真であろうと思われる。ところが 752 年の大仏開眼時に造られた東大寺八角灯笼火袋の音声菩薩像もこの様式に近く、不思議である。

「南大門：金剛力士像」

金剛力士像は、慶派によって、たった 69 日間で作成された。しかし、彼らはそれ以前に大仏殿の四天王像など、この金剛力士像よりも大きな像をすでに造っており、大きな仏像を作成するスキルがあったものと思われる。一度据え付けてから、下から見上げたときにどう見えるかを考え、修正している。おへその位置や右手をふりあげているところなど、見事である。

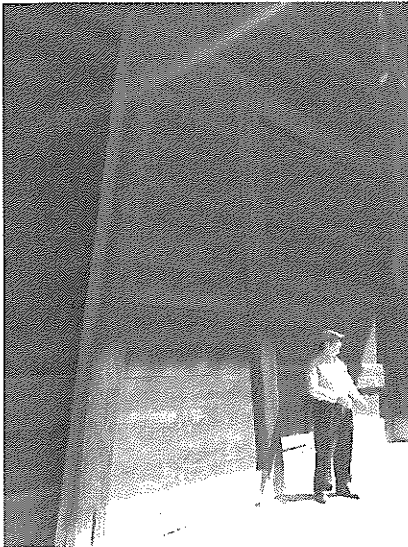


東大寺南大門

南大門の西の壁に沿って、木造の構築物があることを教えていただく。

「さあ、これは何でしょうか？」(山岸)

フィールドワークの後半で、転害門を見学したとき、構築物が何のためにあるのか、いやあったのかがわかった。かつて南大門につづいて土塀が築かれており、当時は版築(はんちく)といって土をつきかためて壁を造っていた。これはその土をかこむ桢板である。明治時代になって、大仏殿で県議会が開催されたりしたが、馬車が入らないという理由で、壊されて、今はこれしか残っていない。



南大門に残る桢板

「東大寺ミュージアム見学」

伝日光立像・伝月光立像の修理された指先をみる。月光立像の指先は銅芯が使われているため、奈良時代そのまま残っている。日光立像は奈良時代以降に修理されているが、銅芯ではなく鉄芯を使ったため、錆びて膨張し、像を壊してしまっている。奈良時代に守られていた芯には銅を使うと言うことが、すでに伝わっていなかったものと思われる。その他、講演会で教えていただいた陰剣・陽剣を見る。



東大寺西塔跡(七重塔)



東大寺西大門跡(ここが奈良時代の正門)



転害門（両袖に土塀がある）法華寺から伸びる一条通りの突き当たりに位置しているので、光明皇后はここから東大寺に入ったと想像できる。

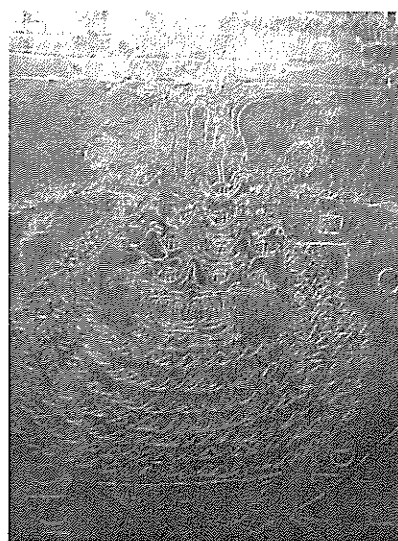


修復工事中の正倉院の前で

「大仏殿」



盧舎那仏坐像



連弁線刻蓮華蔵世界図のうちの須弥山世界（レプリカ）

大仏殿は、江戸時代に再建されたが、創建当時は現在よりも1.5倍ほど横に広がった。大仏様も大理石でできた白石の座の上にあった金色の蓮台の上に安置されており、今よりも1メートルほど高かった。また後背は円形で高さが29メートルもあった。台座には須弥山世界が描かれている。

大仏様は確かに大きいですが、宇宙のスケールは計り知れない。台座に描かれた宇宙に比べれば、この日本もちっぽけなもの。

巨大な宇宙と小さな人間を感じさせるねらいがあるのではないかと。



三月堂と二月堂



二月堂から見た夕焼け

1. 目的

2005 年から始められた国連持続可能な開発のための教育の 10 年（D E S D）も最終段階にあり、来年度には世界各地の閣僚を集めて愛知県・名古屋市及び岡山市で最終年會合が開催される。今や、持続可能な社会づくりは喫緊の課題であり、子どもから大人まですべての人が自らの問題としてとらえ、ライフスタイルの変革や地域での活動など、持続可能な社会の実現に向けた行動の変革が求められていると言える。

地域社会における行動の変革の基盤は、地域を誇りに、地域を大切に思う心であり、そのためには、地域の魅力について体験を通して実感することが必要である。本事業は、奈良の魅力についての講演会とウォーキングをあわせて実施することで、教育と観光の融合による持続可能な社会づくりの担い手を育てることを目的に実施する。

2. 開催日時 平成 25 年 10 月 27 日（日）9 時 30 分～16 時 30 分

3. 会場 斑鳩町中央公民館

4. 参加者 32 名（教員・一般・学生）

5. 内容

参加者の自己紹介

【講演会】（別添資料参照）

① E S D 講演会

「文化遺産を通して、
持続可能な地域社会の担い手を育てる」

講師：奈良教育大学 専任講師 中澤静男

② 文化遺産の魅力についての講演会

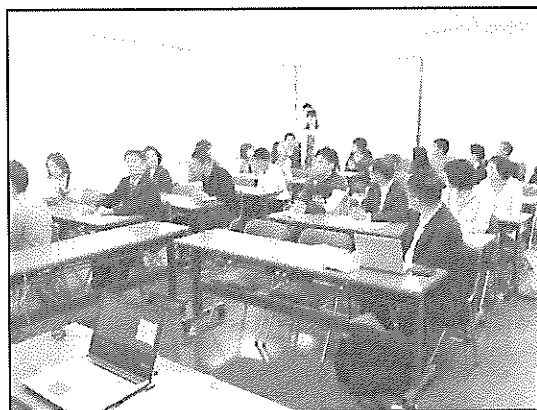
「斑鳩の魅力 — 法隆寺釈迦三尊像、救世観音像、伝百濟観音像の宇宙 —」

講師：奈良教育大学 教授 山岸公基

- ・ 斑鳩は、7 世紀から現在までの様々な文化財が濃密にある地域だ。
- ・ 法隆寺を代表する三体の仏像を取り上げ、宇宙をキーワードにお話する。
- ・ 釈迦三尊像、救世観音像は飛鳥時代前期、伝百濟観音像は飛鳥時代後期の作と考えられており、その時間差は 640 年頃から 660 年頃とわずか 20 年ほどだが、その間には何か違ったものを感じさせるものがある。仏像に込められたコンセプト・宇宙観に違いを感じる。
- ・ 7 世紀初めに法隆寺が建てられたが、5 世紀からの古墳があることから明らかなように、その前の時代にももちろん人が住んでいた。（藤ノ木古墳：6 世紀後半、大塚古墳：5 世紀）

【藤ノ木古墳】

- ・ 藤ノ木古墳の石棺には 2 体の男性の人骨が納められていた。587 年にあった崇仏・排仏戦争で、穴穂部皇子（あなほべのみこ）と宅部皇子（やかべのみこ）が蘇我氏の軍勢に殺されており、この二人ではないかと考えられている。



参加者の自己紹介



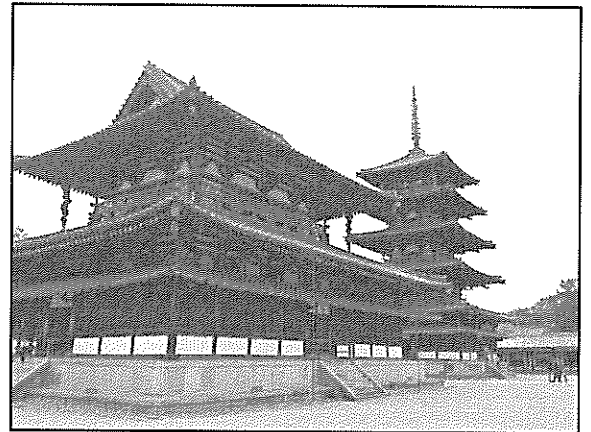
藤ノ木古墳

は半パルメットであり、パルメットや半パルメットは地中海発祥で 5 世紀頃に中国に到達したものである。主に仏教関連のものに見られるものだが、馬具に使われている例は、中国にはなく、朝鮮半島でも 1~2 例しかない。しかし日本では数十例ある。日本では馬がステイタスのシンボルであったということもあわせると、国産品であるということも十分に考えられる。

- ・ 馬具につける飾りである杏葉（きょうよう）にもパルメットがほどこされている。釈迦三尊像の作者が司馬鞍作首止利（しばのくらくりのおびととり）であることから、馬具を作る一団がいたとも考えられ、崇仏・排仏戦争で亡くなった方への鎮魂の意味で作られたものであるかもしれない。

【法隆寺】

- ・ 創建法隆寺（若草伽藍）は五重塔と金堂が南北に配された四天王寺式であったが、670 年に焼失した。現在のものは西院伽藍といい白鳳建築である。
- ・ 東院は 643 年に焼失した後、奈良時代に再建された。
- ・ 西院伽藍の釈迦三尊像（飛鳥前期）と百済観音像（飛鳥後期）、東院の救世観音像（飛鳥前期）は、いずれも再建後にどこかから持って来られたと考えられる。



法隆寺金堂と五重塔

- ・ 釈迦三尊像は銅造に鍍金されており、その光背に刻まれた文言から 621 年に聖徳太子の母が亡くなり、聖徳太子とお后も亡くなった後の 623 年に作ったことがわかる。
- ・ 文化遺産を見るときには、作られたときのままなのかを考えて見るのが大切。
- ・ 光背が法隆寺献納宝物 196 号類似していることから、それをお手本にしたのかもしれない。
- ・ お手本の製作地について

中国説 成都万仏寺出土 仏七尊像（南朝期）

龍門石窟 仏五尊像（北朝期）

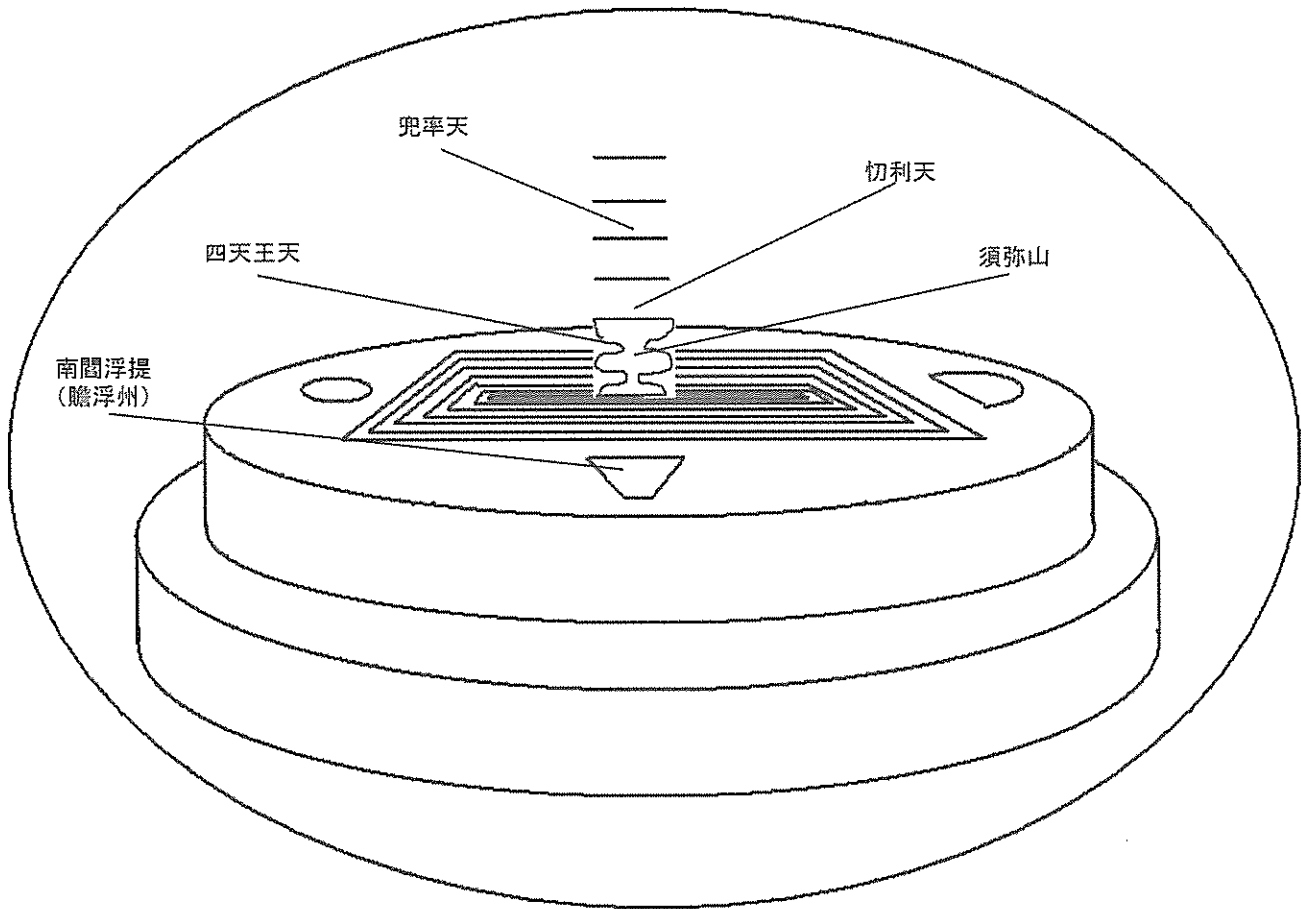
日本は南朝との交流があったため、南朝の影響が考えられるが、100 年の開きがある。

韓国説 百済の益山蓮洞画 仏坐像の光背細部「火炎」との類似

長野県観松院菩薩半跏像は火炎から百済の作と推定されるが、これが右脇侍菩薩立像と似ている。また、年代的にも近い。

【須弥山世界：インドの宇宙像】

- ・ 像形は仏教の宇宙像を表現している。



- ・ 南閻浮提（瞻浮州）が人の住むところ
- ・ 中腹に四天王の住むところ
- ・ 切利天は平らになっており、そこでは釈迦が亡くなった母・摩耶夫人に説法を行った。法隆寺釈迦三尊像は、切利天に位置づく釈迦を表現したもの。
- ・ 大阪の野中寺弥勒菩薩半跏像、法隆寺献納宝物 159 号にも山の文様がある。
- ・ 弥勒は釈迦の弟子で早世した弟子マイトレーヤを原型としており、兜率天に住み、生きとし生けるものを氣遣っているとされ、56 億 7 千万年後、人々を救うために南閻浮提に再生すると考えられた。
- ・ 須弥山石 石神遺跡出土（飛鳥資料館）
- ・ 日本人は、7 世紀に仏教の宇宙像を驚きと共に受け入れた。
- ・ 伝百済観音 木造（楠） 随との関連が考えられる。
円通寺旧蔵（堺市博物館）の観音菩薩立像との類似
像高 210.9 cm と見上げる高さである。

釈迦や弥勒が実在の人物をモデルとしているのに対して、観音は万物の救済神であり、創造物。須弥山世界が魚卵のように横にたくさんつながっており、その西のはてに浄土があり、そこは安樂世界で阿弥陀仏がいるというのがインドの宇宙観。そして阿弥陀仏は、『観無量寿経』に仏身の高さは六十万億那由他恒河沙由旬（那由他：無限、恒河沙：ガンジス川の砂、由旬：約 10 km？）と、想像できない身長が記されている。

また、同経には、観音には宝冠に小さな仏がついているとされる。伝百済観音の宝冠の全面中央に

も仏が見える。

光背を支える支柱(竹のように彫られているが、かやの木)の根元に5cmほどの山が彫られており、それが須弥山を表現していると考えられる。

さらに同経に、観音菩薩の身長が八十万億那由他由旬とあり、こちらも想像を絶する高さ。

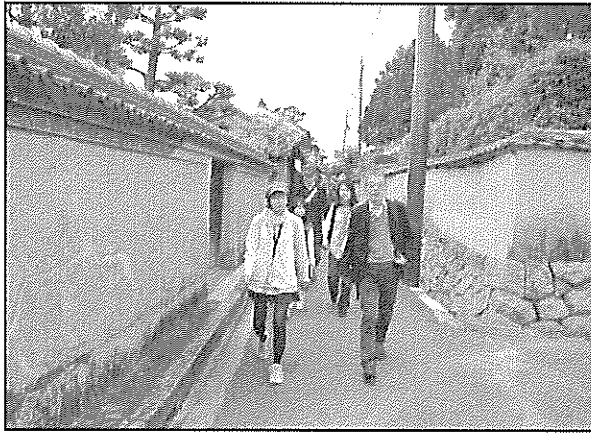
※ 広大な宇宙観への驚き

世界の中心と考えていた須弥山をわずか5cmに表している。 ← 見上げる高さ

この宇宙観を表現しているのが、この仏像である。

・ 中宮寺の半跏思惟像(白鳳時代)

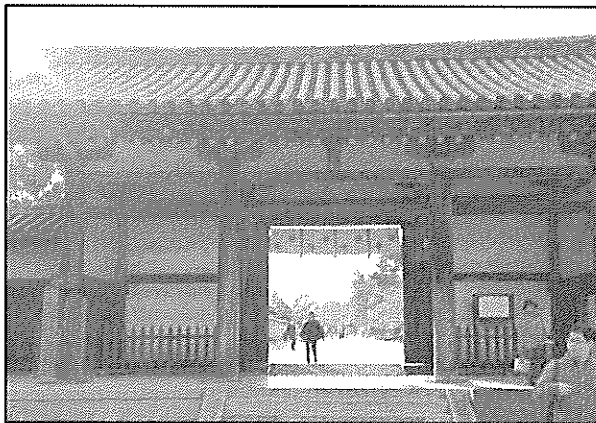
【フィールドワーク】



法隆寺への道



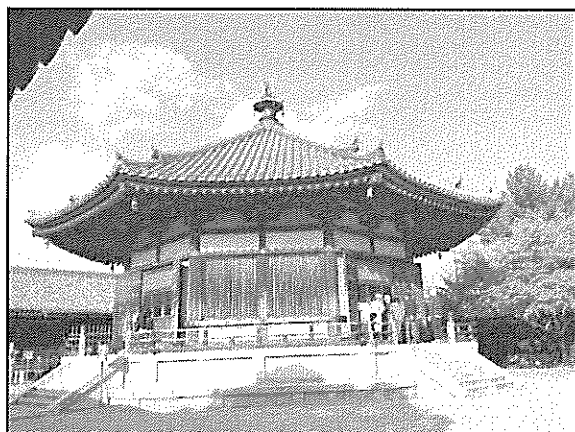
法隆寺西院伽藍



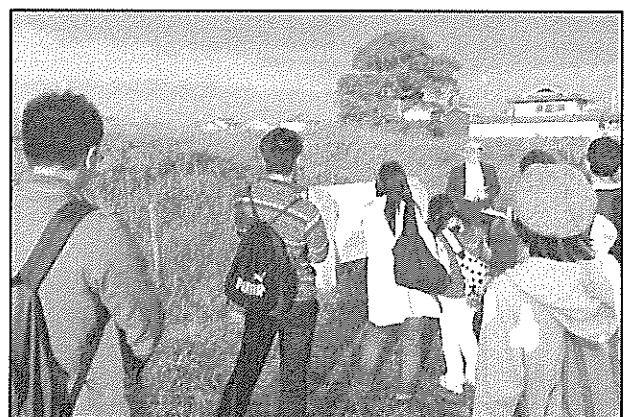
奈良時代の法隆寺東門(国宝)



法隆寺東院



法隆寺東院



中宮寺跡

1. 目的

2005 年から始められた国連持続可能な開発のための教育の 10 年（DESD）も最終段階にあり、来年度には世界各地の閣僚を集めて愛知県・名古屋市及び岡山市で最終年會合が開催される。今や、持続可能な社会づくりは喫緊の課題であり、子どもから大人まですべての人が自らの問題としてとらえ、ライフスタイルの変革や地域での活動など、持続可能な社会の実現に向けた行動の変革が求められていると言える。

地域社会における行動の変革の基盤は、地域を誇りに、地域を大切に思う心であり、そのためには、地域の魅力について体験を通して実感することが必要である。本事業は、奈良の魅力についての講演会とウォーキングをあわせて実施することで、教育と観光の融合による持続可能な社会づくりの担い手を育てることを目的に実施する。

2. 開催日時 平成 25 年 11 月 24 日（日）9 時 30 分～16 時 30 分

3. 会場 奈良県立万葉文化館

4. 参加者 28 名（教員・一般・学生）

5. 内容

参加者の自己紹介

【講演会】

① ESD 講演会（別添資料参照）

「文化遺産を通して、持続可能な地域社会の担い手を育てる」

講師：奈良教育大学 専任講師 中澤静男

② 文化遺産の魅力についての講演会

「万葉集でめぐる明日香の魅力」

講師：奈良県立万葉文化館 主任研究員 井上さやか氏

・【あをによし 奈良の都は 咲く花の
にほふがごとく 今盛りなり】

この歌は、奈良で歌ったものだと思われているがそうではない。太宰府に派遣された役人が、故郷を出てはじめて知った奈良のよさを歌ったものだ。故郷をはなれたからこそ、そのよさがわかるということが多い。こういった感覚は、1300 年前の人も現代の人も同じだと思う。

・よく「飛鳥」と「明日香」、どちらが本当なのかと聞かれる。どちらも昔から使われていた。



井上さやか氏の講演

・万葉仮名クイズ

【寒過、暖来良思 朝鳥指 滓鹿能山尔 霞軽引】(作者不詳 10 一八四四)

「ふゆすぎて はるきたるらし あさひさす かすがのやまに かすみたなびく」

寒：冬、暖：春とよむ。当時はまだ、漢字が固定化されていない。

朝鳥：カラスは太陽の使い（中国思想）

中国の文字を使って日本の言葉を書き表そうとアクロバチックなことをしていた時代が明日香。

- ・滓鹿：かすが 滓という漢字は明らかに良い意味ではない。漢字の持つ意味をあまり重視せずに使っていたものと思われる。

- ・土地をほめたたえる枕詞がある。

飛鳥：飛ぶ+鳥 とぶとりのあすか

春日：春+日 はるひの春日

長谷：長い+谷 ながたにの長谷

奈良には、枕詞がそのまま地名になっているところがある。

- ・【若草乃 新手枕乎 卷始而 夜哉将間 二八十一不在国】(作者不詳 11 二五四二)

「わかくさの にひたまくらを まきそめて よをやへだてむ にくくあらなくに」

二八十一：2+九九(81)：にくく 当時は九九も中国より伝わっていた。漢字の使い方が自由な時代だった。(他に16：猪(シシ))

- ・【…毎見 恋者雖益 色二山上複有山者 一可知美…】(笠朝臣金村之歌中 9 一七八七)

「みるごとに こひはまされど いろにでれば ひとしりぬべみ」

山上複有山：山の上にまた山：出る

中国にも戯書(ぎしよ)というたわむれがあるが、それを取り入れようとしている。中国文化をなんとか取り入れようとしていた時代が明日香。

- ・歌垣

【紫は灰指すものそ海石榴市(つばいち)の八十(やそ)の衢(ちまた)に逢える児や誰
たらちねの母が呼ぶ名を申さめど路行く人を誰と知りてか】

古代の男女の恋愛・結婚は現代とはずいぶん違う。まず、戸籍がなかった。一夫多妻が当たり前、別居婚(通い婚)が普通の形態だった。

まず、実績としての通い婚を経て、ある程度してから結婚するのが当時の風習だった。

現代の風習を当たり前のものとせず、海外や過去の日本の風習を知ること、複眼的な見方ができるようになる。

歌垣：古代の恋愛の形態。歌で相手を見つける。歌を掛け合うのが本来の意味。

紫：染めるのが難しい色から、「高貴な色」：内面から美しい女性の意味も。椿の灰を指すと、もっと美しく発色することから、灰(私)を受け入れるともっと美しくなれますよ、の意味。

児：かわいらしいもの、愛しい者、女性に使う言葉。

誰：名前を教えてください：プロポーズ

たらちねの母が：万葉時代は、社会が女性中心から男性中心への過渡期だった。

名前は魂そのものと考えられており、簡単に明かすものではなかった。名前を伝えること、住所を伝えることは、受け入れるということの意味。

- ・宮処としてのアスカ

【采女の袖吹き返す明日香風都を遠みいたづらに吹く】(1 五一)

宮処：天皇の宮があったところ

采女：天皇の身の回りのお世話をする女性（貴族出身・才女・美女）

「明日香から藤原へ、都が遠くなってしまったので風がむだに吹いている」と歌っているが、実は、明日香と藤原は目と鼻の先の距離。前の都をなつかしむだけの歌ではない。明日香から藤原へのこの時代は、中央集権化が強まり、律令制へと移り変わる時代であった。社会の大きな変革を背景に歌われた歌だ。

【大君は神にし坐せば赤駒の匍匐（はらば）ふ田居を都となしつ】（19 四二六〇）

【大君は神にし坐せば水鳥のすだく水沼を都となしつ】（19 四二六一）

考古学者：壬申の乱以前から明日香はあるから、赤駒の～ということはありません

文学者：752年になってからわざわざ記載していることから、史実や現実をとらえたものではない。できそうもないことをした人だからすごいという意味で、天皇を称えた歌だ。

【わが里に大雪降り大原の古りにし里に落ちまくは後】（2 一〇三）

【わが岡の籠（おかみ）に言ひて落らしめし雪の摧（くだ）けし其処に散りけむ（2 一〇四）

雪：めでたいもの

大原：現在の小原。万葉文化館の南。

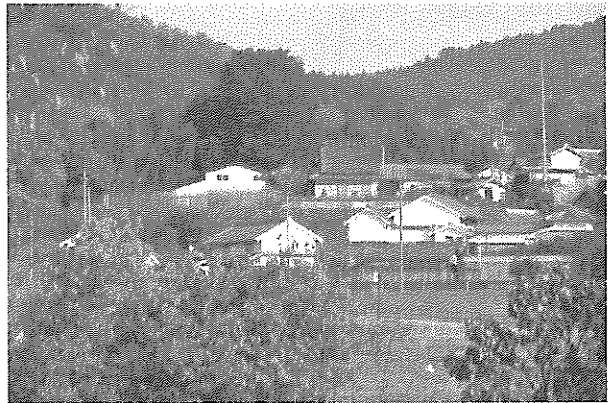
すごく近いところ。

「おかみ（竜神）に言って降らせた

雪のおこぼれがあなたのところに降ったので

すよ」

古りにし里：古びた里



今の小原

・故郷としてのアスカ

【神岳に登りて山部宿祢赤人の作れる歌一首 併せて短歌】（3 三二四）

神岳（かむをか）：神聖な山

三諸：三輪山

漢籍においては、地をほめたたえる歌がある。その素養を身に付けた山部赤人があってほしい理想の景色をよんだ歌。

【明日香河川淀さらず立つ霧の念ひ過ぐべき恋にあらなくに】（3 三二五）

明日香への思いは、立ち去らない霧と同じだ。

【故郷の明日香はあれどあをによし平城の明日香を見らくし良しも】

故郷：なつかしい

元興寺（法興寺：今の飛鳥寺）：飛鳥寺が明日香の象徴だった。

・明日香川の歌枕化

【世中はなにかつねなるあすかゞはきのふのふちぞけふはせになる】（古今和歌集）

世の中には安定したものなどない

平安時代の歌人：平安時代の歌人は現地に行かずに歌をつくるようになった。言葉遊び化。

・終わりに

例えば「山」という言葉からイメージするものは人によって違う。言葉に込める意味は、実は人それぞれ少しずつ違っている。人は言葉を通じて意思の疎通や外界の把握を行っている。

土地には記憶が重なり、それがその土地の文化になっていく。

文学を通して、土地の文化を知る、過去の時代の文化を知る等、多様な価値観を知ることができる。

文学を通して、違う土地の文化を知る、違う時代の文化を知る。人と人のつながりを意識できる。

6. フィールドワーク



飛鳥池工房遺跡

富本銭の鑄造が行われていた。富本銭はまじらないように使われていた銭ではなく、貨幣経済への導入を意図するものであった。



飛鳥寺

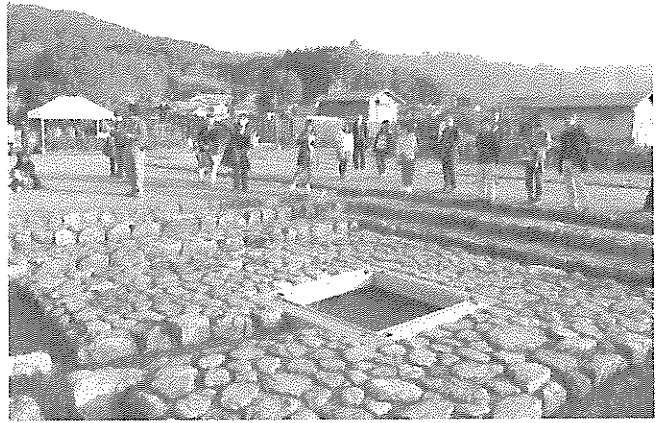
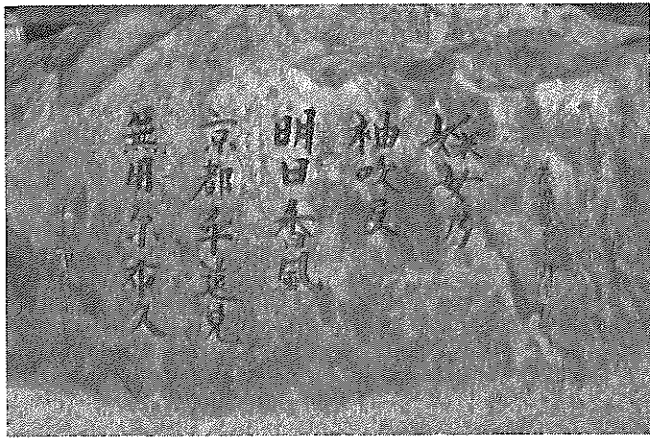
当時は瓦ぶきは寺だけだった。瓦ぶきの寺が立ち並び、塔がそびえるなど、明日香は最先端の国際都市であった。



飛鳥京跡苑池

発掘調査の説明会があった。ここには明日香川の水を引いて池のある庭園が造られていた。海外からの来賓などをもてなすことを目的としていたのであろう。底には石が敷き詰められ、水深は浅く、底の石のきらめきなども楽しめたことだろう。

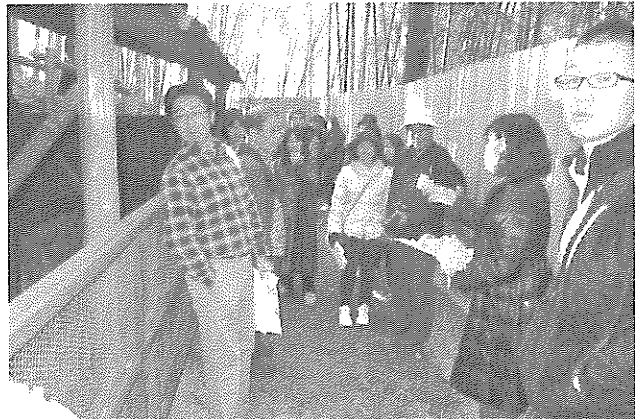
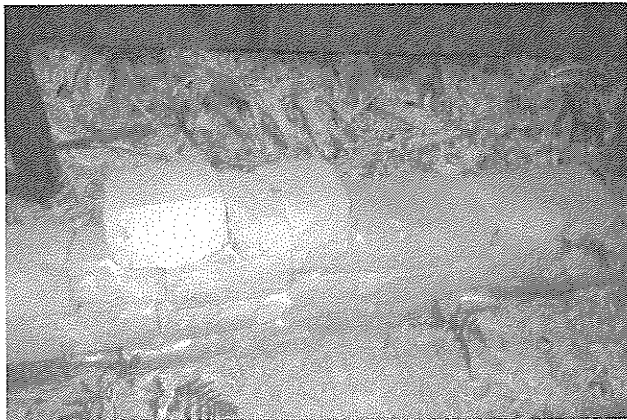




この歌碑は、実はもう一か所ある。

昭和 30 年代に甘樫の丘にホテルを建設するという問題があった。景観保全運動の始まりだった。ホテル建設を阻止する意味で、犬養孝さんが揮毫した歌碑が建設された。

しかし、この歌の本来の意味を踏まえ、三期にわたって宮が営まれたこの地に改めて歌碑が造られている。



石垣状遺構

斉明天皇の頃、天理の石上から石を切り出して、宮の東の丘を取り囲むように造ったという記事があるが、それではないかと言われている。

日本／ユネスコパートナーシップ事業

平成 25 年度 奈良教育大学 第 1 回世界遺産教育講演会（ユネスコスクール研修会）

1. 目的

平成 23 年 6 月 3 日付で「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」関係省庁連絡会議において「我が国における『国連持続可能な開発のための教育の 10 年』実施計画（ESD 実施計画）」が改訂され、ESD の普及、特に教育機関における推進が求められている。

本学においては、文化遺産を切り口とした ESD である「世界遺産教育」の実践的研究に取り組み、地域の ESD センター校としての自覚のもとに、ユネスコスクール研修会として、世界遺産教育講演会を開催する。

2. 開催日時 平成 25 年 11 月 29 日（金）14 時～17 時

3. 会場 奈良教育大学大会議室

4. 参加者数 36 名

5. 講演テーマ「観光は大人の ESD」

【講演（1）「ESD テーマ別ワークショップ報告」】

講師 「ESD の 10 年・世界の祭典」推進フォーラム理事兼事務局長 福井 昌平 氏

- ・ ESD はわかりにくいという声がよく聞かれる。日本では、ESD の理論に関する議論が多いが、私たちは実際に活動をしている現場に光を当てたいと考えている。
- ・ 世界から期待されている日本の ESD は 5 つある。
 - (1) 防災教育と気候変動教育
 - (2) 生物の多様性と ESD
 - (3) 持続可能な生産と消費
 - (4) 歴史文化遺産と人材育成→奈良が中心に
 - (5) 貧困撲滅と社会的公正のための教育
- ・ 奈良モデルをベースに色々と議論をした。東京都の八名川小学校によるユネスコスクールの取組、大田市、平泉町、大牟田市、奈良モデルを紹介しながら議論し、歴史文化遺産の ESD 推進における有効性を確認した。課題としては、地域の歴史文化遺産を説明できる指導者の育成と継続的な活動の場の創出である。また、地域の歴史文化遺産を ESD の側面から捉え、授業化できる教員の育成、子ども心に火をつける教員の育成が重要である。
- ・ 今後の方法には 2 つある。学校教育においてはユネスコスクールを中心に、歴史文化遺産を通じた ESD の推進、もう一つは観光の ESD 化。観光とは地域の光を見えると言うことで、物見遊山ではない。地域の光を見る、体験することが観光だ。観光を ESD のひとつの入り口にする。社会人の ESD である。これが全国の場で議論された結論だ。

【講演（2）「歴史文化遺産と人材育成」】

講師 奈良教育大学持続発展・文化遺産教育研究センター 専任講師 中澤 静男

- ・ 高度経済成長期、先人は死に物狂いで働いて、豊かな社会を築いた。その象徴が、1964 年の新

幹線の開通であり、同じ年の東京オリンピック開催、1970年の大阪万博だった。そして今、問われているのは、現在の私たちがどのような未来を子どもたちに残そうとしているのかということだ。

- ・ 現在、人間社会の持続に関わって2つの大きな課題がある。一つは環境という人と環境との関わりに関する問題であり、もう一つは平和という、人と人との関わりに関する問題だ。
- ・ 環境問題には3つある。二酸化炭素濃度の上昇に伴う地球温暖化、エネルギーなどの資源の枯渇、生物多様性の減少による生態系の危機である。
- ・ 人と人との関わりに関する問題は、人権や多様な文化を尊重しない傾向と、世代内の他者や先人の苦勞、未来の人への無関心という問題だ。
- ・ 私たちには持続可能な社会を形成し、未来の子どもたちに残していく責任がある。そのためには、環境に配慮できることと、人権や文化等に配慮できる人を育てていかねばならない。そうすることが当たり前だという文化を教育を通して作っていくのがESDの役割だ。
- ・ 10月19日に岡山で開催されたESDテーマ別会議では、持続可能な社会をつくっていこうという市民のやる気をいかにして引き出すのがテーマとなった。やる気というのは換言すれば「当事者意識」である。
- ・ これまでは、ESDの講演会などを開催して、市民啓発につとめてきたが、参加者が限られることと、「勉強」のイメージが強すぎるのが問題だった。そこで、奈良教育大学では、観光をおとなのESDとしてとらえ、観光によって地域への関心を高め、持続可能な地域社会の形成者の育成を提案している。
- ・ ESDとしての観光を推進する上で、多様なステークホルダーが集うプラットフォームは有効である。プラットフォームにおいて、新しいプログラムの開発が期待できる。
- ・ 活動を継続するためには、「面白さ」がキーワードとなる。面白いから続けられる、面白いから人を巻き込める、巻き込まれた人が次の人材へと育てていく。

日本／ユネスコパートナーシップ事業

平成 25 年度 奈良教育大学 第 2 回世界遺産教育講演会（ユネスコスクール研修会）

1. 目的

平成 23 年 6 月 3 日付で「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」関係省庁連絡会議において「我が国における『国連持続可能な開発のための教育の 10 年』実施計画（ESD 実施計画）」が改訂され、ESD の普及、特に教育機関における推進が求められている。

本学においては、文化遺産を切り口とした ESD である「世界遺産教育」の実践的研究に取り組み、地域の ESD センター校としての自覚のもとに、ユネスコスクール研修会として、世界遺産教育講演会を開催する。

2. 開催日時 平成 25 年 12 月 21 日（土）14 時～17 時

3. 会場 奈良教育大学大会議室

4. 参加者数 30 名

5. 演題 「ESD と防災教育のシナジー その接続と融合」

講師 気仙沼市教育委員会副参事兼指導主事 及川 幸彦氏

6. 内容

ESD をベースとした防災教育 シナジー…噛みあって、新たな価値が生まれていく

(1) ESD における防災教育と気候変動教育

- ・ ユネスコがかかげる 3 つのテーマ

① 気候変動

② 生物多様性

③ 防災・減災 ①②③はつながっており、①も②も③に影響を与える

- ・ 昨今、地球上では、東日本大震災以上の災害が頻発している。東日本大震災では、行方不明者を含め、2 万人程が亡くなっている。これほどの災害は 1000 年に一度と言われているが、冷静に考えると大震災以上の災害が地球上ではたくさん起きていることに気付かされる。

- ・ 自然災害と気候変動の影響を関連付けて考えると、4 つに分類できる。①気候変動が原因であり、スピーディーに災害が発生するもの（大型台風、竜巻）、②気候変動が原因であり、ゆっくり災害が進行するもの（海水面の上昇、種の絶滅）、③気候変動以外の原因でスピーディーに発生するもの（地震、火山噴火）、④気候変動以外が原因でゆっくり進行するもの（地盤沈下、隆起）。4 つに分類して、メカニズムを理解することが大切だ。

- ・ ESD 的な防災教育では、次の 4 つ順番で学ぶことが求められる。

① 災害発生メカニズムの理解（知識・理解）

② 我々の生活への影響（つながり・因果関係の認識）

③ 災害への対応と準備・減災（理解と実践）

④ 復興・まちづくり（思考）

このプロセスをきちんと踏まえることが ESD 的な防災教育だ。

(2) 3.11 からの教訓と ESD の効果

- ・ 街全体として大きな打撃を受けた。その一つが、失業率の高さ（80 パーセント）だ。
- ・ 持続不可能な場面には大きく 2 つあると思う。①災害（人災・天災）、②紛争・戦争だ。この世の中がいつまでも続くと思っているところに落とし穴があると思う。3.11 を体験して、持続不可能な社会を実感した。日常生活のありがたさがわかった。そういう持続不可能な場面をどう乗り越えていくかが ESD の大きなミッションだ。
- ・ 東日本大震災で感じたこれまでの ESD の効果として、避難所での子どもの活躍を挙げることができる。子どもは指示されるのを待つのではなく、自分で考えて行動していた。すべての学校で子どもたちが立ち上がった。これまでの ESD が無駄ではなかったと実感した。
- ・ 持続不可能な状況に対応する 4 つの力を養う ESD
 - ①自助（判断力）自分で自分を守る。
 - ②共助（協働）コミュニティで支え合う。孤立した中で持ちこたえた。
 - ③公助（組織力）行政の役割。
 - ④N助（外からの支援：NPO.NGO、Network）（公助が機能しなかったときに力を発揮した）
- ・ 危機的場面で生きてくる ESD の力
 - ①デマに流されずに客観的に判断する力（クリティカルシンキング、）
瞬時に色んなことを判断しなければならない。
 - ②体系的に考える（システムズシンキング）
 - ③全体的に考える（ホリスティックシンキング）
 - ④保護者とのコミュニケーション力
 - ⑤様々な情報を集め、分析する力
 - ⑥意思決定力

災害時・非常時にはこれらが一気に求められる。ESD で育てる力は危機的状況におけるリーダーシップにもつながる。普段からやっておくことが大切だと実感した。
- ・ 共助の部分では、地域との連携がうまくいっていた学校は、避難所運営にも効果があった。普段から連携するシステムを作り上げておく。ESD はそういう教育だ。顔の見える関係を作っておくことが大切だ。
- ・ 行政との連携（公助） ESD を通じて連携しておく。
- ・ N助 ESD で結びついてきたことが色々な支援に結びついた。

【多様な主体の参画と協働こそが、日本型 ESD だ。（Japan レポートのタイトル）これが危機的場面に効果的に機能する。】

学びを豊かにするという連携と実際に危機的状況になったときに共に問題解決していくという連携、奈良のように今あるいいものをもっと育てていくという場面でも協働・参画は重要だ。

(3) ESD からの防災教育の改善

- ・ つながりキーワードとした防災教育の改善
 - ① 階上中学校の防災学習：自助・共助・公助に関連した学習を 3 年かけてサイクルする取組を実践していた。しかし、3 時 15 分頃に想定を上回る津波があり、避難所ごと飲み込まれたところもあったことから、3 人の生徒を失った。今までの防災教育ではダメだ、地域ぐるみで取り組まなければだめだと、改善に取り組む。

自治会に働きかけて、中学生が中心になって仮設住宅・地域を巻き込んだ合同訓練、避難所設営に取り組む。去年の12月7日に実際に津波警報が発令された時、中学生が避難所を設営し、避難者を受け入れ（300名、教員は2〜3人）、対応した。

学校を拠点としたネットワークづくり、地域防災を推進している。

② 小原木中学校の海拔表示プロジェクト

東日本大震災では、23メートルの津波におそわれた。20メートルまでは危険（赤）、海拔35メートル以上ならば安全（緑）だ。地域の人みんなに意識してもらうために、すべての電柱に海拔を表示したプレートを取り付けた。メンテナンスもしている。

(4) ESDのカリキュラム手法を生かした防災教育の改善（コンテンツ・プログラム）

- ・ 国立教育政策研究所で開発されたESDで重視する能力態度を防災教育に落とし込み、実際の場面を想定しながら作成した。（目的に即して落とし込む、読み替えていくことが大切）
- ・ 学年ごとのカリキュラムの中に防災に関連するものを抽出して重点的に取り組むようにした。これは「あるものを活用」しただけで、体系立っていない。入口に過ぎない。教科には教科の目的がある。
- ・ 新たなコンテンツを作っていくために、マトリックス・防災シートを作成した。縦軸に教科領域・特別活動など、横軸は低・中・高と中学校といった発達段階を入れて、教科領域と発達段階でできる防災教育のコンテンツを約60〜70つくって、はめ込んでいった。それを総合でやる部分、教科でやる部分、その他でやる部分というのを入れ込んでつくったのが防災学習シート。（対象学年や指導案例、ワンポイントアドバイスなどが付けられている）さっき言った一つ一つの枠組みが1シートになっている。このシートを100近く作っていく。1〜2時間でできるやつ、いわゆるエッセンスだ。それを縦横にはめ込んで、さらにそれに自助公助などを入れ、知識理解から復興にいたるまでのプロセスも入れ、ESDの7つの能力態度の何がリンクするのかを意識しながらやっていく。
- ・ テーマをつけて、防災シートを組み合わせることでストーリー化・体系化ができ、防災教育の深化発展につながる。
- ・ 作成したコンテンツに優先順位をつけ、高いものにはワークシートや実践事例や資料集もつける。
- ・ この手法は、ESDのカリキュラム開発の手法「メビウスのプログラムチャート」と同じである。
- ・ 一つ一つの活動に魂というか、内容・コンテンツを入れてつなげていくこと。
- ・ しかし、それぞれは地域の実態に合わせて展開する必要があり、それをするのが教員の役割。

(5) ESDからの復興：復興に向けた重要なポイント

- ① ESDが基本理念として生きている。ESDはキーコンセプト。危機対応を高める上で重要な視点だ。危機的場面を広域に想定できる力をつける。
- ② 自然との共生だ。自然の脅威や人間の力の有限性を自覚する意味でも、自然と共生した暮らし、地域と一緒にあったコミュニティを大事にした教育は重要になる。
- ③ ESDが地域復興の担い手を育てる。ベースとして地域を誇りに思う、地域に愛着を持つ、地域を知る、アイデンティティを育成する上で重要だ。地域を大切にしつつ、グローバルな視野で互いの文化を尊重する、という教育が重要だ。これは文化遺産を通したESDとの共通点だ。
- ④ 自分たちの未来像を描くことができる子どもを育てる。

キーになる4項目

1. 防災・減災のためのネットワーク構築に ESD はどう貢献するのか。
2. コミュニティとのリンケージが重要。
3. 縦割りでやっていたのではダメ。様々な教育を俯瞰する視点が必要。
4. 未来を担う子どもたちの能力を育成する。

質疑

① 一教員として地域との連携するには

つながって何をすることが大切。目的を持ってつながること。それを自分のものとせずに学校のものとする。管理職にも伝える。管理職がオーガナイズする。他の先生がつくったものも受け継ぐ。一教員のものが学校の連携のベースになる。子どものためになる連携をする。

② シナジーと相乗効果

英語独特のニュアンスがある。どうしても日本語ではしっくりこない。レジリエンスもそうだ。竹のようにしなやかな強さみたいなもの。苦難にも負けないしなやかな強さかな。

③ 世界を視野に入れて発信・貢献するために大事なこと

言葉はツール。大切なのはコンテンツ・マインド・主張・中身。伝えようという心が大切。それこそが日本人があたりあう力だ。いいことはいいと言ってくれるし、大事なことは大事という。中身を磨くことが大切。

④ 中・高で防災教育をやるには。

気仙沼の先進事例は中学校なので、やろうと思えばできる。高校は一概には言えないが、やれるところを見つけることが重要。普通の学校でできる防災教育を考えていきたい。

⑤ 3年前に人権防災教育に取り組んだ。これから持続していくにはどうしたらいいのか。

はじめるのは簡単だが、持続するのが難しい。学校は教員が変わるのでなおさらだ。3+1が大切だ。

- ・ プログラム・カリキュラムをきちんと作ることで、変わっても見通しを持ってやれる。かたくなに守るのではなく、改善していく。それには基がある。
- ・ 教員は新しいことに取り組むのにネガティブな人種。まわりのサポートがいる。システム（校内体制と地域連携）が重要。
- ・ ガバナンス（どういうふうにそれを管理運営していくか）、校長や教育委員会の役割かもしれない。いい学校をハイライトすることも大切。
- ・ 先生のパッション、教員研修や学びの機会を用意して、パッションを消さないようにする。

⑥ 若手教員へのアドバイス

- ・ 課題に対して柔軟かつ積極的に取り組んでいくこと（アイデア、集中力、瞬発力）
- ・ 教員の世界は狭い。人は経験をもとに考えがち。豊かな発想、アイデアが出てこない。外へ目を向けて、外の人とつながる。アイデアをもらいながら、自分のやっていることを外からの目でクリティカルに見直す。目的を持って自分から外につながっていく。

あとがき

今年度も「学ぶ喜び」プロジェクトの報告書を作成することができました。今年度の報告書も昨年に引き続き「とても分厚い」そして「プログラムに参加した学生の報告が多い」ものになりました。本報告書がそのような性格のものになったのは偶然ではなく必然だったように思っています。というのも、プログラムに参加した学生が参加しっぱなしではなく、自らの活動を振り返りながら報告書を書くというプロセスそのものが「学ぶ喜び」を見つめ直す機会になっていると考えるからです。

学校において「教え」から「学び」へということが言われて久しくなりますが、この「学ぶ喜び」プロジェクトの目指す方向には、大学生に様々な「学び」の機会を保障することがあります。ですが、「学び」の機会を保障することは、この「学ぶ喜び」プロジェクトの手段であって、目的ではありません。あくまで、学生に「学び」の機会を保障するということの先にあるもの、つまり、学生ひとりひとりがまさに「学ぶ喜び」を見出せること、そして、自発的に学び続ける姿勢を身につけられることを目指しています。このことがひいては、教員養成課程に所属する学生を、自らの意欲と資質向上を目指して学び続ける教員として養成するという本プロジェクトの目的につながると考えています。

「学ぶことに喜びを見出しなさい」、「学び続けることは素晴らしいことだ」と教えてもそれは学生にはその真意どおりにはなかなか理解されません。まさに「教えたことは教えてはならない」という教授学の原則に立ち返って、「学ぶことに喜びを見出しなさい」、「学び続けることは素晴らしいことだ」ということを直接「教え」るのではなく、学生自身にそうしたことを実感させ「学ば」せるように、取り組んでまいりました。そのことが多岐にわたる「学ぶ喜び」プロジェクトのプログラムの多く、多くの学生の参加とその報告書作成への積極的な参加という形で表れています。

学生が「学ぶ喜び」を見出せたかという視点で、いま一度この報告書を見ていただくと、学生の報告のひとつひとつから、自らの教師としての成長についてきちんと客観的に省察していること、今後の教師としての学びに向けた意欲的な言葉が込められていることを感じていただけるのではないのでしょうか。

最後になりましたが、本プロジェクトを支えてくださった多くの方々にお礼申し上げます。特に、奈良市教育委員会の先生方、小学校、中学校の先生方、附属校園の先生方、陸前高田市、天川村立洞川中学校、東吉野のみなさま、韓国の先生方にお礼を申し上げます。そして、何よりこのプロジェクトに参加してくださった学生のみなさんにお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

なお、本プロジェクトは、次年度平成 26 年度も継続的に実施されます。他の関連機関やテーマとの関係についても一層の探究や発展が必要だと考えております。本報告書を含め、様々な情報が「学ぶ喜び」プロジェクトの HP (<http://mailsrv.nara-edu.ac.jp/~katohs/manabu2013.htm>) にアップしてありますのでご覧いただければ幸いです。今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

平成 25 年度 奈良教育大学

地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト 報告書

平成 26 年 3 月

国立大学法人奈良教育大学

〒 630-8528 奈良市高畑町

持続発展・文化遺産教育研究センター

TEL・FAX 0742-27-9269

